東奈良

（大阪府茨木市）

発掘調査概報　Ⅱ

1981年2月

東奈良遺跡調査会

東奈良

（大阪府茨木市）

発掘調査概報　Ⅱ

1981年2月

東奈良遺跡調査会

第1図　朱塗り板

はしがき

大阪平野の東北部を形成する三島平野の一角にある茨木市は、人口23万を擁する文化都市で、古代より気候、風土に恵まれ、また京阪神を結ぶ交通の要所として多くの人々の生活が営なまれてきました。それは尚現代にも受け継がれ今では大都市大阪のベッドタウンとして高層住宅等の開発が進み、着々と都市化傾向の道を歩んできております。

しかし、こうした開発が進む一方で、古代の人々が残してくれた貴重な埋蔵文化財が破壊の危機にさらされているのが現状であり、現代に生きる我々としては、だまって見過ごす訳にはいかず、先ずその保存保護を急務と考えるものであります。こうした開発は、特に東奈良遺跡周辺において著しい感があり、此々10年間位の変貌は驚くべきものであります。これらの開発に対応するため結成された東奈良遺跡調査会も早や10年の年輪を刻もうとしております。その間遺跡は開発の波に押されながらも数多くの貴重な事実を提供し、その資料は厖大な量として残されております。この資料の蓄積に、発掘調査に従事された方々や、地元の皆様の多大なる御協力をいただきました事は申すまでもありません。

今回東奈良遺跡内に国鉄貨物引き込み線が設置される事になり、関係機関との事前協議の結果、敷地内全面の発掘調査を行いました。限られた期間ではありましたが、最大限遺跡の記録保存に努力致しました。その一部を報告として、ここに若干の資料を提供し現代に生きる我々の生活の中に前人が残した文化財が生かされることを望むとともに、今後より一層多くの方々の文化財に対する認識及び理解の高揚に役立てば幸と存じます。

最後に御助力いただいた調査関係者、関係機関、発掘調査に従事された方々に深く感謝申し上げます。

茨木市教育委員会教育長

桑　田　栝　身

例　　言

Ⅰ　本概報Ⅱは、国鉄貨物引き込み線敷地内で、昭和52年７月から、同53年11月までに実施した発掘調査の概要をまとめたものである。

Ⅱ　今回は、全調査区のうち、弥生時代前期に相当する溝－３・25・26・27・28の各溝についてのみ、その詳細をまとめた。

Ⅲ　調査地区名については、従来の区名を使用すると複雑化するため、それぞれⅠ－A、Ⅰ－B、Ⅱ－A、Ⅱ－B、Ⅲ－A、Ⅲ－B区とした。

Ⅳ　発掘調査にあたり、日本国有鉄道、鉄建建設株式会社各位の御協力と、地元の方々の御理解に感謝の意を表します。

Ⅴ　本文の執筆は、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ章を奥井哲秀、各遺構は、Ⅰ－A・Ⅰ－B・Ⅱ－A・Ⅲ－B区を井上直樹、Ⅱ－B・Ⅲ－A区を宮脇薫、遺物は、土器を大野恵三子、石器を石田治雄、木製品を高田敬子が行い、実測図の作成は各々の担当者の他、調査会メンバーが行った。尚、岩鼻圭子が補助を行い、追手門学院大学の松田光代・中谷芳子・菅原淳子・森田綾子が復元作業を行った。他、谷本喜代子・森木芳子の協力を得た。

Ⅵ　遺構・遺物の写真撮影は、井上直樹が行った。

Ⅶ　木器の樹種鑑定・顕微鏡写真は、奈良元興寺文化財研究所に依頼し、その結果を掲載した。尚、朱の鑑定には、奈良国立文化財研究所の沢田正昭氏・秋山隆保氏の両氏に多大なる御教示を得た。

Ⅷ　獣骨鑑定については、大阪市立大学医学部第２解剖学教室の阿部みき子氏に依頼し、その結果を掲載した。

Ⅸ　本概報作成に関し、田代克己・原口正三・泉拓良・家根祥多・井藤暁子・岡崎正雄・深井明比古・種定孝次郎・秋枝芳・田辺昭三・中村友博・菅原正明の諸氏他、多くの方々の助言と御協力を得ましたことを感謝いたします。

Ⅹ　本書の編集は、田代克己氏の助言を得て奥井哲秀が担当した。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査に至る迄の経過……1
第1節　国鉄貨物線調査経過……4
第2節　地区割りの設定……4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……6

第Ⅲ章　調査概要……10
第1節　Ⅰ－A区
1　調査経過……10
2　層位……11
3　遺構……12
第2節　Ⅰ－B区
1　調査経過……18
2　層位……19
3　遺構……19
第3節　Ⅱ－A区
1　調査経過……24
2　層位……24
3　遺構……25
第4節　Ⅱ－B区
1　調査経過……26
2　層位……29
3　遺構……29
第5節　Ⅲ－A区
1　調査経過……30
2　層位……31
3　遺構……31
第6節　Ⅲ－B区
1　調査経過……35
2　層位……36
3　遺構……37

第Ⅳ章　遺構及び遺物……39
第1節　溝－3
1　遺構……39
＜別項＞　各溝出土土器の器種区分…40
2　土器……41
3　石器……62
4　木製品……65
第2節　溝－25
1　遺構……65
2　土器……67
3　石器……77
4　木製品……77
第3節　溝－26
1　遺構……84
2　土器……84
3　石器……89
4　木製品……89
第4節　溝－27
1　遺構……89
2　土器……91
3　石器……101
4　木製品……102
第5節　溝－28
1　遺構……109
2　土器……109
3　石器……119
4　木製品……120

第Ⅴ章　東奈良遺跡出土の動物遺体……121

第Ⅵ章　まとめ……124

図　版　目　次

Ⅰ－A_1 区
図版1（上）　東より（第Ⅱ遺構面）
（下）　西端　（第Ⅰ遺構面）
2（上）　掘立柱建物跡－1
（下）　掘立柱建物跡－2
Ⅰ－A_2 区
3（上）　西より（第Ⅱ遺構面）
（下）　西より（第Ⅲ遺構面）
Ⅰ－B区
4（上）　西より
（下）　西半
5（上）　東半　（第Ⅰ遺構面）
（下）　溝－3
6（上）　東より（第Ⅰ遺構面）
（下）　東端　（第Ⅰ遺構面）
Ⅱ－A区
7（上）　北半
（下）　南半　（第Ⅰ遺構面）
8（上）　南半　（第Ⅱ遺構面）
（下）　溝－28
9（上）　溝－25・溝－26
（下）　溝－27
10　溝－25b 竪杵出土状況
Ⅱ－B区
11（上）　北より
（下）　北端
12（上）　南より
（下）　南端
Ⅲ－A_1 区
13（上）　近・現代の溝
（下）　南より
Ⅲ－A_2 区
図版14（上）　北より
（下）　南より
Ⅲ－B区
15（上）　Ⅲ－B_1 区北より
（下）　Ⅲ－B_2 区南より
各溝出土の土器
16～27　溝－3出土の土器
28～31　溝－25出土の土器
32～33　溝－26出土の土器
34～37　溝－27出土の土器
38～43　溝－28出土の土器
各溝出土の石器
44　溝－3出土の石器
45　溝－26・溝－27・溝－28出土の石器
各溝出土の木製品
46　溝－25b・溝－27出土の木製品
47　溝－25・溝－27出土の木製品
48　溝－28出土の木製品
49　溝－25・溝－27・溝－28出土の木製品
各溝出土の動物遺体
50　シカ頭骨
51　シカ下顎骨・その他
52　シカ四肢骨
53　イノシシ頭骨・下顎骨・その他
54　イノシシ四肢骨・イヌ下顎骨
各溝出土の土器
55～58　溝－3上層出土の土器
59～64　溝－3中層出土の土器
65～67　溝－3下層出土の土器
68・69　溝－25上層出土の土器
70　溝－25中層出土の土器
71　溝－26出土の土器
72・73　溝－27上層出土の土器
73・74　溝－27中層出土の土器
75～78　溝－28出土の土器

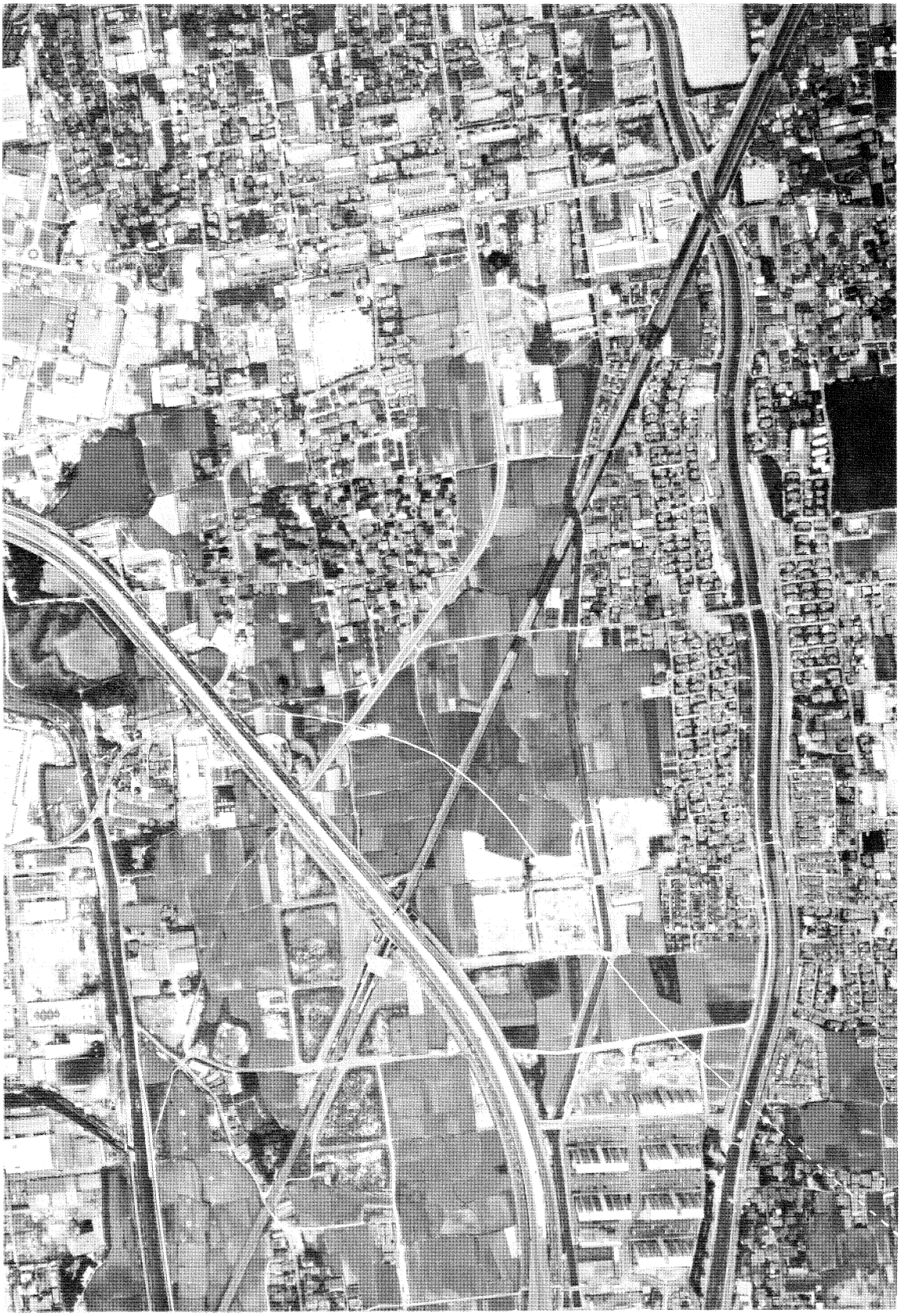
挿図目次

第１図　朱塗り板
第２図　東奈良遺跡の航空写真
第３図　東奈良遺跡の地区割り及び調査地域図……2
第４図　地区割り細分図……5
第５図　東奈良遺跡の近況……8
第６図　東奈良遺跡の周辺……9
第７図　Ⅰ－A$_1$ 区北壁面土層図……11
第８図　Ⅰ－A$_2$ 区南壁面土層図……12
第９図　Ⅰ－A$_1$ 区遺構実測図……13・14
第10図　Ⅰ－A$_2$ 区遺構実測図……15・16
第11図　Ⅰ－A$_1$ 区第Ⅲ遺構実測図……17
第12図　Ⅰ－A$_2$ 区第Ⅰ遺構実測図……18
第13図　南壁面土層図……19
第14図　Ⅰ－B区遺構実測図……21・22
第15図　西壁面土層図……25
第16図　Ⅱ－A・Ⅱ－B区遺構実測図……27・28
第17図　東壁面土層図……29
第18図　Ⅲ－A$_1$ 区北壁面土層図……31
第19図　近・現代の溝……32
第20図　Ⅲ－A$_{1・2}$ 区遺構実測図……33・34
第21図　Ⅲ－B$_1$ 区西壁面土層図……36
第22図　Ⅲ－B$_2$ 区東壁面土層図……37
第23図　Ⅲ－B$_1$ 区遺構実測図……37
第24図　Ⅲ－B$_2$ 区遺構実測図……38
溝－３
第25図　遺構実測図……39
第26図　北壁面土層図……40
第27図　壺形土器の文様……42
第28図　甕形土器の文様……44
第29図　小型品……45
第30図　円板形土製品……46
第31図　溝－３出土の石器……63
第32図　溝－３出土の石器……64
溝－25
第33図　溝－25・25ｂ、溝－26遺構実測図……65
第34図　溝－25、溝－26東壁面土層図……66
第35図　溝－25ｂ・竪杵出土状況……67
第36図　甕形土器……67
第37図　壺形土器の文様……68
第38図　甕形土器の文様……69
第39図　小型品……69
第40図　紡錘車……70
第41図　円板形土製品……70
第42図　竪杵、搗部先端・握部……78
第43図　樹種鑑定……79
第44図　樹種鑑定……80
第45図　溝－25出土の木製品……81・82
第46図　溝－25出土の木製品……83
溝－26
第47図　壺形土器の文様……85
第48図　小型品……85
第49図　溝－26出土の石器……89
溝－27
第50図　遺構実測図……90
第51図　西壁面土層図……91
第52図　壺形土器の文様……92
第53図　小型品……93
第54図　杓子形土製品……94
第55図　溝－27出土の石器……101
第56図　鍬……102
第57図　臼……102
第58図　溝－27出土の木製品……103
第59図　樹種鑑定……105
第60図　樹種鑑定……106
溝－28
第61図　遺構実測図及び土層図……107・108
第62図　縄文式土器……110
第63図　甕・鉢形土器の文様……110
第64図　壺形土器の文様……111
第65図　小型品……112
第66図　円板形土製品……113
第67図　溝－28出土の石器……119
第68図　腕輪……120

表　目　次

第１表　Ｓ、46年～Ｓ、52年までの
調査経過……3
第２表　国鉄貨物線地区割り表……5
第３表　各器種と各施文の構成と
その割り合い……47
第４表　各器種と各施文の構成と
その割り合い……71
第５表　各器種と各施文の構成と
その割り合い……86
第６表　各器種と各施文の構成と
その割り合い……95
第７表　各器種と各施文の構成と
その割り合い……113
第８表　動物遺体の出現頻度……122
第９表　イヌの下顎骨の計測値……123

別表
溝－３出土土器観察表……48
溝－25出土土器観察表……72
溝－26出土土器観察表……87
溝－27出土土器観察表……96
溝－28出土土器観察表……114



第2図　東奈良遺跡の航空写真（昭和47年5月）
白実線部分は国鉄貨物線発掘調査地区

第Ⅰ章　調査に至る迄の経過

昭和45年から同47年にかけて、茨木市の土木事業の一環として行なわれた市街地を縦断する小川水路の改修工事が、同46年３月に東奈良二丁目にさしかかった際、掘り上げられた土中に、土器・石器等の遺物が多量に混入しているのが、付近の中学生等の手によって見い出されたのが第一の発見であり、その地名から『東奈良遺跡』と称したのである。

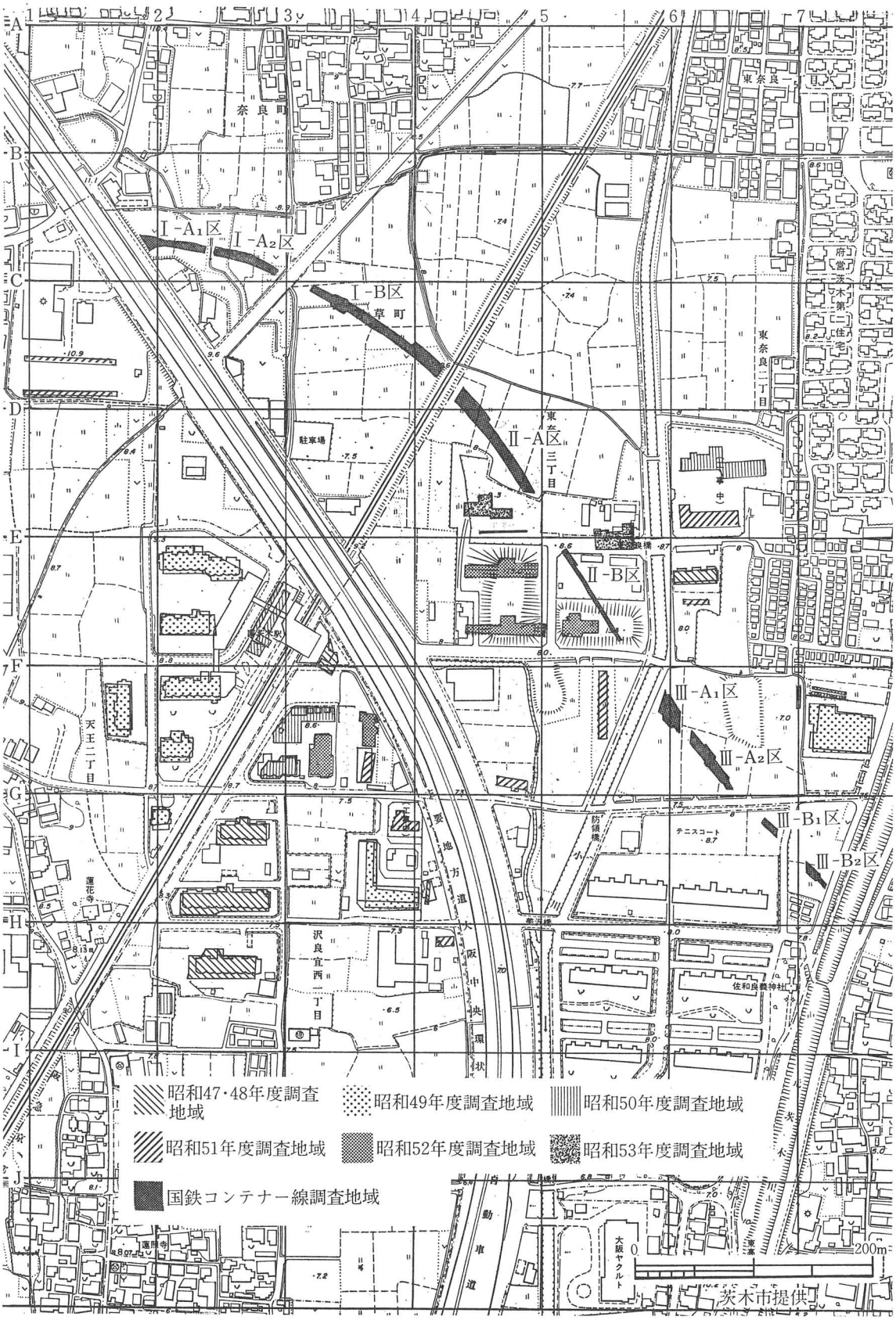
当時は長閑な田園地帯であったこの周辺も、昭和45年に開かれた日本万国博覧会や、宅地造成ブームにのり、交通網の整備がなされていくなかで、阪急電鉄株式会社は、同電鉄南茨木駅周辺に大規模なマンション群の建設を計画した。この計画はすべて遺跡の範囲内であるため、長期にわたる発掘調査が必要となり、同社と大阪府教育委員会・茨木市教育委員会の三者協議の上で、同46年７月に『東奈良遺跡調査会』が結成された。ここに本格的な発掘調査が始まったのである。

今回の調査迄に検出された遺構や出土遺物の主だったものは第１表で示すものであるが、なかでも昭和48年には、Ｆ－４－Ｎ地区、Ａ－６地区から弥生時代中期の方形周溝墓６基以上を検出した。同年から49年にかけて調査したＨ－３地区、Ｇ－２・３地区では古墳時代前期の大溝・竪穴住居跡４基・土坑墓群を検出。特に大溝出土の土器は多量であり、弥生時代後期から古墳時代前期への過渡期の貴重な資料となった。またＧ－８地区では、全国的に注目を受けた銅鐸・銅戈・勾玉の鎔笵と鞴口・叩き板等の貴重な遺物とともに、弥生時代後期の方形周溝墓・木棺墓が検出され、東奈良遺跡において銅鐸・銅戈・勾玉等が製造されていた事が判明した。同年、Ｈ－４地区では、堰をもつ溝から丸木舟を検出した。同50年から52年にかけて、Ｇ－３・４地区では、全国で最も古いと考えられる弥生時代前期の方形周溝墓５基以上、弥生時代中期の竪穴住居跡３基以上、弥生時代中期から後期の大溝を検出した。また、Ｇ－６地区より弥生時代前期の溝、Ｅ－７地区では弥生時代前期の方形周溝墓２基等が検出された。

以上のように当遺跡からは多くの遺構が検出され遺物の量もきわめて多い。時期的には、弥生時代前期から近世までのものを含んでいるが、この他に極く少量であるが、Ｇ－８－Ｅ・Ｆ地区から縄文時代前期の爪形文土器の破片、Ｆ－３－Ｐ地区では縄文時代中期の石棒が出土している。

遺跡の範囲は不確定ながらも北は奈良町、南は沢良宜西、東は元茨木川、西は大正川までの南北約1.4Km、東西約１Kmに広がると推定される。

尚、第１表については、調査開始の年・月、主な調査地区名、調査面積は10㎡単位で記したが、主な遺構・遺物の時期については、さらに検討を要するもので後にゆだねることにした。



第3図　東奈良遺跡の地区割り及び調査地域図

調査年月	調査地区	調査面積(㎡)	主な遺構・遺物	時期
S.46.7	F—7—E・F	500	溝・袋状土坑	弥生中期～平安
12	H—5—I・M	50	壺棺	弥生中期～平安
S.47.11	H—3—J・K・M・N・O	1,270	竪穴住居跡、掘立柱建物跡	古墳前期～平安
S.48.1	H—3—B・C・F・G・H	940	大溝・竪穴住居跡	弥生中期～古墳前期
1	I—3—B・C・F・G・H	1,050		
3	F—4—N、G—4—B	260	方形周溝墓	弥生中期～後期
3	A—6—F・G・I・J・K	1,600	方形周溝墓	弥生前期～古墳後期
7	A—6—F	200		
7	G—3—A・B・E・F	1,200	竪穴住居跡・大溝	弥生中期～平安
8	G—3—I	600	竪穴住居跡・井戸	古墳前期～平安
9	H—2—P、H—3—A	150	土坑墓	弥生中期～古墳前期
12	G—2—C・P・G・H	1,000	土坑墓・方形周溝墓	弥生中期～古墳前期
S.49.3	F—3—I・J・M・N	1,100	溝・井戸	弥生中期～室町
4	G—8—E・F・I・J	1,500	銅鐸等の鎔范・方形周溝墓	弥生中期～古墳前期
5	H—4—G・K・O・P	1,070	土坑墓・溝・石戈	弥生中期～古墳前期
7	F—3—A・B・C・E・F・G	1,300	方形周溝墓・溝	弥生中期～古墳前期
11	G—3—L・P、G—4—I・M	400	方形周溝墓・掘立柱建物跡	弥生中期～平安
S.50.2	G—4—E・F・I	700	溝	古墳前期～平安
2	G—8—A・H	250	銅鐸の鎔范	弥生中期～古墳後期
3	I—3—I	200	溝	古墳前期～平安
3	M—1—G・H	800	井戸・掘立柱建物跡	奈良～鎌倉
7	D—4—A	40	方形周溝墓	弥生中期
S.50.10	F—3—D・H・L	470	壺棺・溝	弥生中期～古墳前期
10	F—3—P	300	壺棺	弥生中期～古墳前期
11	E—7—E・F・G・H・J・K・L	1,350	方形周溝墓・井戸・溝	弥生前期～平安
S.51.1	G—4—K・O	220	方形周溝墓	弥生中期～古墳前期
1	H—1—G	140		古墳前期
2	F—7—E・F	100	貯蔵穴	弥生後期～古墳前期
2	E—7—I・M・N・O	800	溝・ピット群	弥生中期～平安
3	I—4—D・H	100	土坑・ピット	弥生中期～古墳前期
5	G—5—O	120	竪穴住居跡・井戸	古墳前期～古墳後期
6	I—5—A	150	溝・土坑	弥生中期～平安
7	H—4—I・M	230	溝	弥生中期～古墳後期
8	D—2—I・J・K・M・N・O・P	500	溝	弥生中期～古墳前期
9	H—1—J	150		弥生中期～古墳後期
10	M—1—F・G	140	溝	古墳後期～平安
10	G—8—A・B	70		弥生中期～古墳後期
10	G—6—B・F・J	420	方形周溝墓・溝	弥生前期～古墳前期
S.52.1	G—4—G・K	300	方形周溝墓・溝	弥生前期～古墳前期
5	G—4—I・J・M・N	650	溝・ピット	弥生前期～平安
9	F—5—N・O・P、F—6—N	1,800	方形周溝墓・溝	弥生前期～古墳前期
10	F—5—B・C・D・F・G・H	760	貯蔵穴・溝	弥生中期～古墳前期
10	F—3—I・M	50		弥生中期～古墳前期
10	F—3—M	60	方形周溝墓	弥生中期～古墳前期

第1表　S 46 年 ～ S 52 年 ま で の 調 査 経 過

第１節　国鉄貨物線調査経過

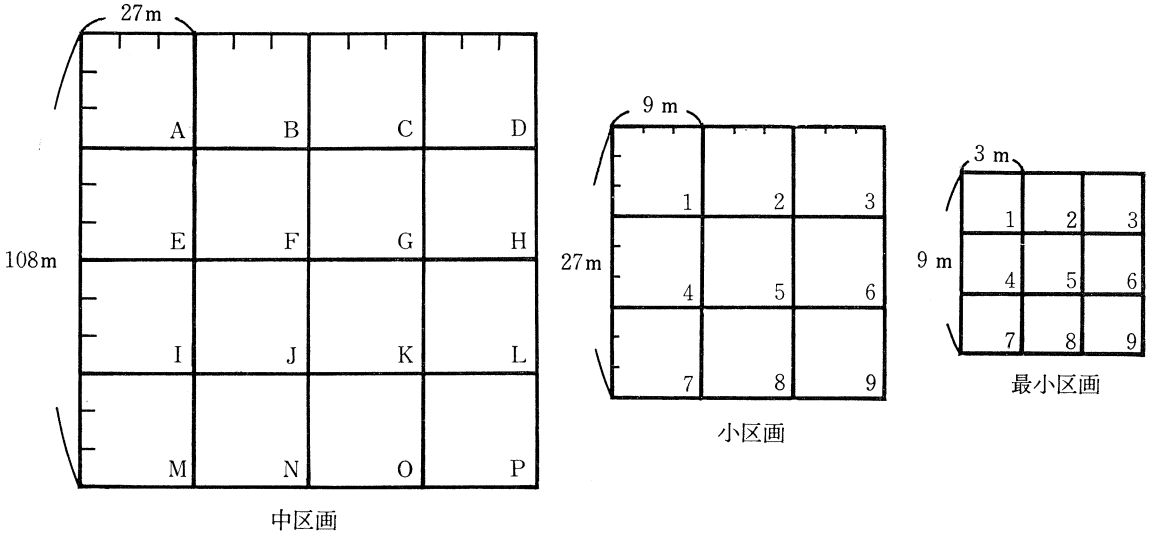
今回報告する国鉄貨物線建設に伴う発掘調査の原因となった工事計画自体は、東奈良遺跡発見当初頃より、国鉄吹田操車場から摂津市鳥飼の大阪府流通センターへ、新しい貨物専用鉄道を建設する計画のあることが知られていたが、騒音・振動公害問題等により計画路線周辺住民の反対もあって、着工が延び〳〵になっていたものである。しかし、昭和49年頃から国鉄側は、吹田操車場付近から高架工事を開始し、同51年には周辺住民との話し合いもつき、東奈良遺跡範囲内の路線決定、用地買収も終了し、同56年開通を目指し、全線高架による工事が本格的に開始された。同52年大阪府教育委員会文化財保護課から茨木市教育委員会に発掘調査の依頼がよせられた。計画では遺跡内を国鉄貨物線が、北西から南東へ斜めに縦走し、特に路線予定地では阪急京都線付近が、現地表面の標高7.5m前後と今までの発掘調査地区より0.5～１ｍ高く、かつ表面採集により土器・石器が多く発見されていることから、東奈良遺跡の一つの中心地と推測されていた。また、今までの発掘調査は面積的に広い所もあるが各々が離れており、遺構のつながりを見出せるものが少なかったが、今回の調査区は幅が狭いものの、遺跡内に長いトレンチを入れて遺構のつながりと広がりを把握する絶好の機会となった。これらの点から、大阪府教育委員会文化財保護課・茨木市教育委員会・東奈良遺跡調査会は、国鉄側から要請のあった橋脚部のみの調査でなく、路線全域の調査を要望した。数度の会合の結果調査地区は、既成建築物のない中央環状線東側から元茨木川西側までの約 800mの間内で、府道太中線・阪急京都線・小川水路・その他農業水路・道路を除いた現在、水田地あるいは造成地となっている所については全面調査を実施することが決定した。昭和52年６月、調査は東奈良遺跡調査会に委託され、作業員、機械等を出し協力する業者が入札により鉄建建設株式会社に決定し、同年７月より調査を開始することになった。

第２節　地区割りの設定

東奈良遺跡地区割りは、昭和47年11月地図上より条里地割りの畦畔を拾い、磁北よりＮ—6°28′—Ｅに振った基準軸を設け、最大区画 108m～最小区画３ｍの単位で地区割りを実施した。昭和52年当時では、最大区画が南北Ａ～Ｎ・東西１～10まで設けており、各々の区画の基準点は東南隅である。今回記載の標高は、茨木市沢良宜西、蓮照寺境内の三角点（Ｏ.Ｐ.8.129m）を基準高としている。（第３図）

今回報告する国鉄貨物線の調査地区は、茨木市若草町・東奈良二・三丁目・美沢町に位置し、地区割りがＣ—２～Ｈ—８地区の10最大区画にまたがり、かつ狭長（幅４～14m、長15～120m）な調査区であり、さらに路線は条里にそった地区割りを斜めに縦断するため、従来の地区割りで記述すると複雑化する。この点から、今回の報告においては、西より調査順に全域を６区画に分け、Ⅰ—Ａ・Ⅰ—Ｂ・Ⅱ—Ａ・Ⅱ—Ｂ・Ⅲ—Ａ・Ⅲ—Ｂ区と称して遺構・遺物を

記述する。また遺構図に記載の地区割りラインは、H—3地区南東隅の基準点を0として、東西南北の各方向への距離をメートル表示したものである。（例—N531とは北へ531mの位置を示す。）なお、各々区画の地区割りを第2表にまとめて記載しておく。



第4図 地 区 割 り 細 分 図

区	地 区 割 り
Ⅰ—A_1	C—2—L・P地区、C—3—I・J・M・N地区
Ⅰ—A_2	C—3—J・N・O・P地区
Ⅰ—B	D—4—A・B・C・G・H・L地区、D—5—E・I地区
Ⅱ—A	D—5—N・O地区、E—5—B・C・G・H・L地区
Ⅱ—B	F—6—A・B・E・F・J・K・O地区
Ⅲ—A_1	G—6—H地区、G—7—B地区
Ⅲ—A_2	G—7—I・J・N地区
Ⅲ—B_1	H—7—C・D・H地区
Ⅲ—B_2	H—8—H地区

第2表 国鉄貨物線地区割り表

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

茨木市の地形は、南北約17.3㎞、東西約 8.7㎞の南北に長く東西に短い長方形であり、北部は古生層で形成される標高 300m前後の老ノ坂山地が連なり、西方はなだらかな千里丘陵が続く。南は東奈良遺跡の位置する低地の平野部が続き、東の隣接市である高槻市の平野部とともに大阪平野の一部を形成する三島平野となっている。市内を流れる河川は、安威川・佐保川・勝尾寺川さらに現在廃川となった元茨木川等があり、いずれもその源を北部の山間に発し屈曲しながらも南へと流れている。なかでも安威川は本市最大の河川であり、水の利用度は、古代より並々ならぬものであったろうし、その利権をめぐっての争いは幾度かくり返され、このことは後の世にも語り継がれるものであろう。

この様な地理的自然環境に恵まれた古代の人々は、自分達の生活の跡を数多く残していく結果となったのである。

三島平野に人類が最初に足跡を残したのは旧石器時代からで、茨木市太田で国府型ナイフ型石器、上穂積の郡遺跡からも国府型ナイフ型石器が発見されており、さらに安威川の東の高槻市郡家今城遺跡や塚原遺跡でも旧石器が発見されていることから、数万年前よりこの地に人々の往来のあったことをうらづけるものである。

縄文時代の遺跡は、三島地方における発見例は少ないが、昭和54年夏に茨木市耳原で発掘調査された耳原遺跡から、遺構とともに縄文時代晩期の甕棺墓16基が検出され確実な例として三島地方における新たな１ページをつけ加えた。また断片的な遺物の発見では、初田遺跡・高槻市の柱本遺跡と塚原遺跡・吹田市岸部・箕面市奥などがあり、さらに東奈良遺跡においても、北白川下層式に比定される爪形文の小さな土器片、中期の石棒２点など極くわずかではあるが遺物が出土していることは、東奈良遺跡にも今後縄文時代の生活跡が検出される可能性も否定できない。

弥生時代に入ると全国的に遺跡の数が増えるが、三島地方においても急激的にその数が増え、前期のものとしては、前代より続く耳原遺跡・東奈良遺跡・目垣遺跡・高槻市の柱本遺跡・安満遺跡等、平野部にその存在をみることができる。しかしながら奈良県唐古遺跡の出土土器で編年されたところの弥生時代前期の中でも最も古い時期のものが三島地域で出土していないことは、今後の研究課題となるものである。

中期になると前期より続く各集落の大型化の他、新たに郡遺跡・宿久庄遺跡・高槻市の郡家川西遺跡・天神山遺跡等が増え続け平野部一帯に人々が住み始める。また北部の山間部においても、北摂最高峰である標高約 600mの石堂ケ丘山頂・佐保庄ノ本・大岩国見などからも石鏃や石斧が発見されており、さらに高槻市の芝谷遺跡の様な丘陵上の遺跡なども存在する。中期の段階になると、それぞれの集落のもつ性格の違い等も含め、かなり広範囲に人々が住みはじ

めたことが判るのである。

東奈良遺跡でも中期になるとその大集落化が目立ち始める。さらに明治初年西方約 2.3Kmの千里丘陵上の吹田市別所から出土した銅鐸についても、東奈良遺跡と関連づけて考えれば、ひとつの重要な意味をもつものとなってくる。

後期から古墳時代に入ると、東奈良遺跡周辺の遺跡の数は増大し、中条小学校遺跡・駅前遺跡・上中条遺跡・郡児童公園遺跡・上穂積遺跡・倍賀遺跡・太田遺跡・総持寺遺跡・安威遺跡の他、遺物の散布地等を含めるとその遺跡数はかなりの数にのぼる。これらの遺跡は、小規模化の傾向を示しており、いずれもが前期より続く大集落の周辺に位置し、お互いの利害関係や依存関係を保ちながら独自の方向へと進んでいったのであろう。

さらに古墳時代前期には、各地に封土をもつ古墳が出現するが、茨木市における前期古墳としては、宿久庄（現在の大阪府警察病院裏）に位置する前方後円墳の紫金山古墳や安威の将軍山古墳、安威１号墳等がある。紫金山古墳は、全長 100mで竪穴式石室をもち、その出土遺物は石室内部の副葬品だけでも、鏡・鍬形石・車輪石・貝輪・筒形銅製品・短甲・鉄刀・鉄剣・鉄鏃・鉄斧・鉄鎌・鉄鍬・鉄鉇等他多数の出土品があり全国有数の前期古墳としてよく知られている。将軍山古墳も同様で全長約110mの前方後円墳で竪穴式石室をもち、その出土遺物は、玉類・鉄剣・鉄刀・埴輪等がある。 また高槻市の弁天山C_1号墳など、平地を見おろす山間部にその分布をみることができる。

中期に入ると茨木市東太田の洪積台地上に位置する全長 226mの規模をもつ前方後円墳の茶臼山古墳が存在し、宮内庁は継体天皇陵としている。さらにこの古墳の東方約 1.2Kmの高槻市側にほぼ同規模の前方後円墳である今城塚古墳があり、両者の古墳の形態の新旧などから、こちらを真の継体陵とする説が有力である。

後期に入ると、群集墳が多くなるが茨木市においても、安威古墳群・福井新屋古墳群・将軍山古墳群などがあり、高槻市では塚原古墳群・塚脇古墳群等が山間部に群集して存在している。また南塚古墳・青松塚古墳・海北塚古墳・耳原古墳・鼻摺古墳等も存在し、南塚古墳は三島地方では数少ない横穴式石室をもつ全長50mの前方後円墳であり、凝灰岩製組合式石棺とともに、玉類・金銅製品・三輪玉・鉄矛・馬具・鉄鏃・挂甲・馬鈴・形象埴輪・須恵器等が出土している。この他、海北塚古墳では、環刀柄頭・鏡・金環・銅環・玉類・馬具等が出土している。耳原古墳は、凝灰岩製組合式家形石棺とくり抜式石棺をそれぞれ一基づつ配した巨石古墳であり、鼻摺古墳は、周濠をもった方墳であるなど三島地方において例の少ないものもある。

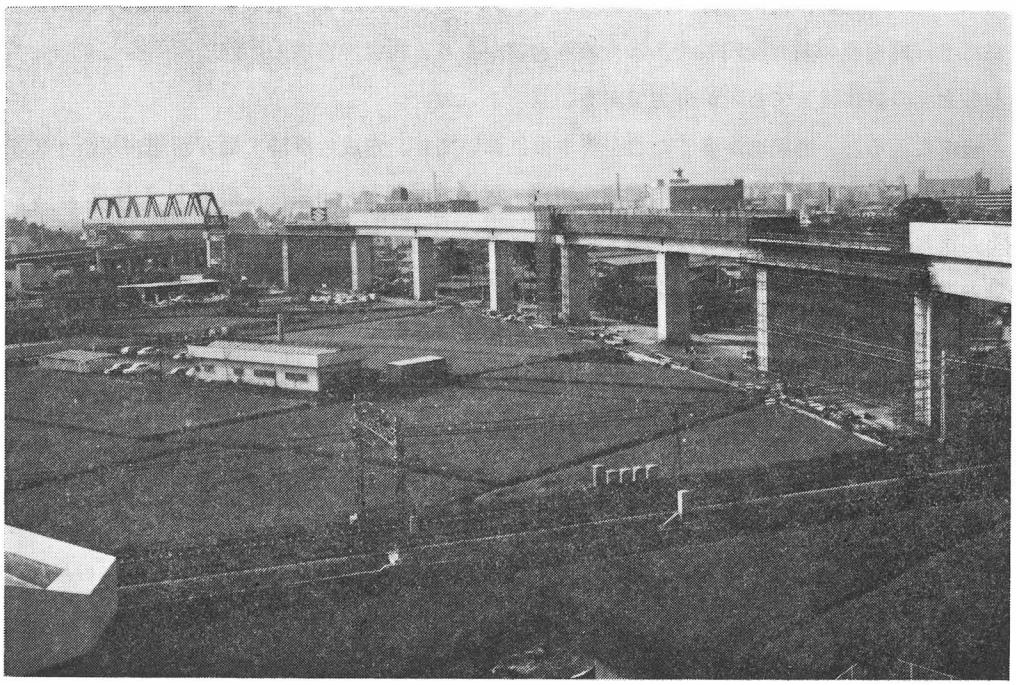
さらに「大化の薄葬令」施行以後、古墳の築造は減少していくが、わずかに初田１号墳・高槻市の阿武山古墳などがこれらの終末期のものである。次に仏教による火葬がこれらの墓制と変っていくものとされるが、その間には空白の期間があり、いまだそれを埋める資料は見つかっていない。火葬の始まりについての資料は茨木市安威大織冠山出土と伝えられる三彩釉陶藏骨器がよく知られるものである。

律令制の時代に入ると、現在でも残っている地名がより良い資料となり得るが、茨木市を含めた摂津職には、管内に12の郡があり、このうち茨木市は島下郡に属している。島下郡には新野・宿人（久）・安威・穂積の四つの郷があった。島下郡衙の所在地は、名神高速道路・茨木インターチェンジ付近に大字郡という地名が残っており、この近くと推定されているが、高槻市郡家の嶋上郡衙跡の発掘調査により発見された土器の中に「上郡」の墨書がみられたような明確に決するものは発見されていない。また大化の改新以後、氏族寺院の建立が盛んとなったが茨木市においても、穂積廃寺・太田廃寺・三宅廃寺などが存在する。

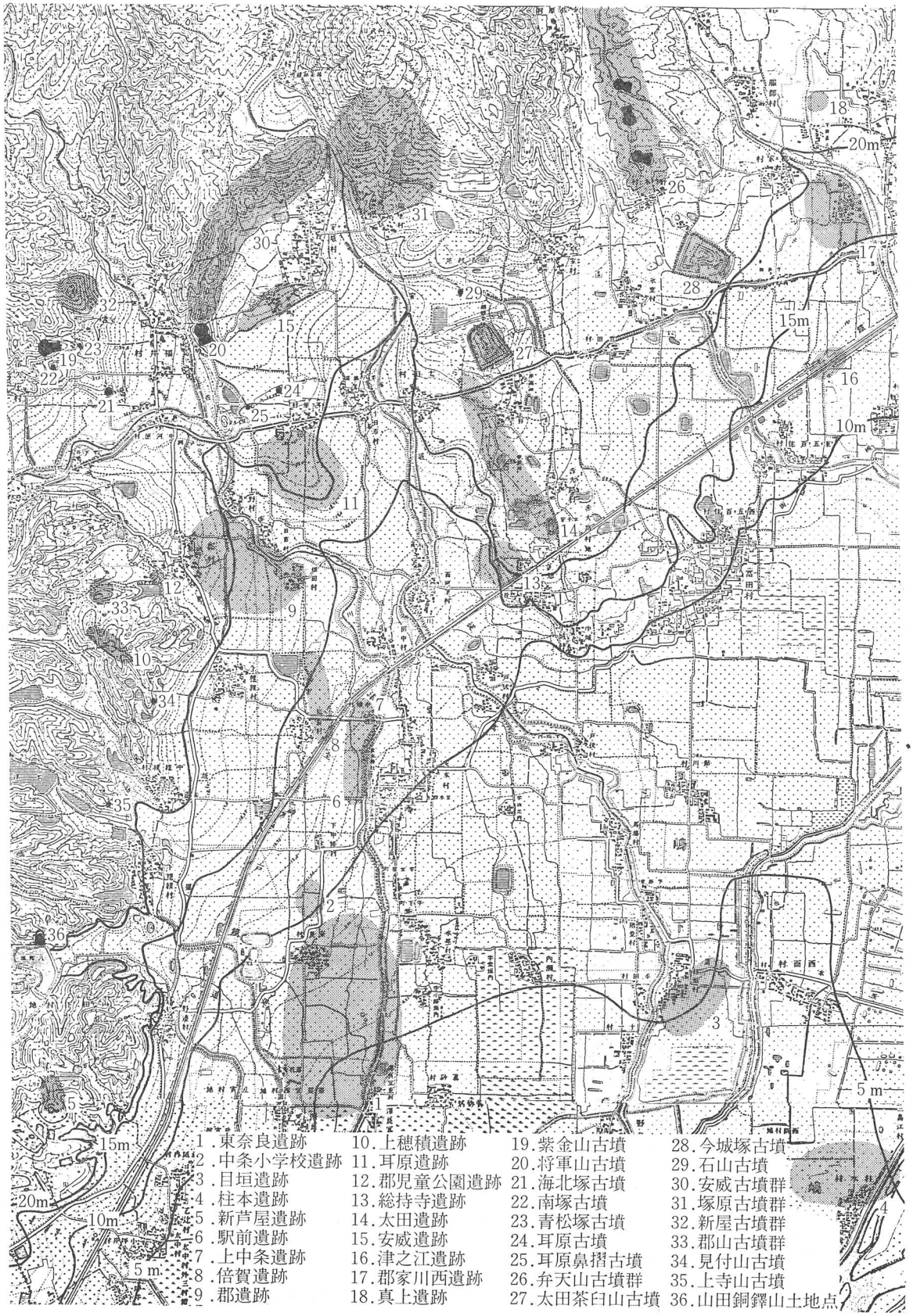
東奈良遺跡では、弥生時代から古墳時代前期にかけての遺構や遺物は多量に出土するが、5世紀以降の遺構・遺物はほとんどなく、その後の奈良～平安時代にかけても掘立柱建物跡がわずかに検出されるのみであり、このことは外部からの影響をかなり受けたものと推定される。

しかしながら集落の規模や出土遺物の多さ・多様さは、三島地域の基礎的集落と言えるものであり、さらに畿内地方においても重要な遺跡のひとつと言ってもよいであろう。

参考文献　茨木市役所『茨木市史』　昭和43年3月
高槻市役所『高槻市史』第六巻考古編　昭和48年6月



第5図　東奈良遺跡の近況



第6図　東奈良遺跡の周辺

第Ⅲ章　調　査　概　要

今回の国鉄貨物線発掘調査の報告では、弥生時代前期の遺構・遺物に限って記述することにした。他の時期の遺構・遺物等の詳細は、後にゆだねるとして、以下各調査区別に調査経過・層位・遺構の概要を記述する。

本格的発掘調査に先だち、昭和51年12月７日、周辺の発掘調査を実施していない中央環状線から阪急京都線のⅠ－A・Ⅰ－B区に限って、５ヶ所の試掘確認調査を実施した結果、その内３ヶ所より遺物包含層を確認した。特に阪急京都線一帯は、耕土下 0.2mの黒色土層中より、弥生式土器・須恵器・土師器が多量に出土し、柱穴跡らしき遺構も検出された。他のⅡ－A区以南の試掘確認調査は、路線周辺において、すでに多くの箇所で発掘調査を実施し、種々の遺構・遺物が検出されていることから、充分遺跡の存在が予想されているため行っていない。

なお、国鉄は路線用地として、18～19mの幅で買収を行っており、発掘調査はその間で行なうことになったが、予定地周辺には水田・畑地とマンション等がある関係上、それらに必要な農業用排水路や通路を用地の２方向あるいは４方向に設けねばならず、さらに発掘作業の排土の関係からダンプ等の進入路を片面に約７mの幅で設置したために、実質調査幅は７m前後と狭くなった。また、阪急電鉄株式会社所有地の東奈良三丁目・美沢町では、約 1.5～２mの造成土が盛られており、遺構面は現地表面下約３～５mに位置し、土砂崩壊を防ぐためにさらに調査幅が制約され４m前後に余儀なくされた。

第１節　Ⅰ－A区

１　調査経過

Ⅰ－A区は、中央を走る農業水路で二分されており、西のⅠ－A_1 区が調査幅約７～10m・長さ約50m、東のⅠ－A_2 区が同幅約７m・長さ約55m、総面積約 850㎡の発掘調査区を設定した。昭和52年７月16日、Ⅰ－A_1 区西端より北側進入道路の造成土と耕土・床土の0.4～0.6mを重機によって除去作業開始。22日より、茶褐色・淡灰褐色粘土層の掘り下げを実施、黄褐色粘土層・淡茶褐色砂質層を追跡する。23日から８月９日まで遺構検出作業。８月10日、写真撮影・図面作成実施。17日より、W—105Line 以東の淡茶褐色砂質層の掘り下げ、第Ⅱ遺構面検出。19日から９月５日にかけて遺構検出作業。９月７日、第Ⅱ遺構面の写真撮影・図面作成実施。12日、遺構の重複箇所の修正、13日、最終面の写真撮影・図面作成を実施し、17日、Ⅰ－A_1 区での全作業を終了した。

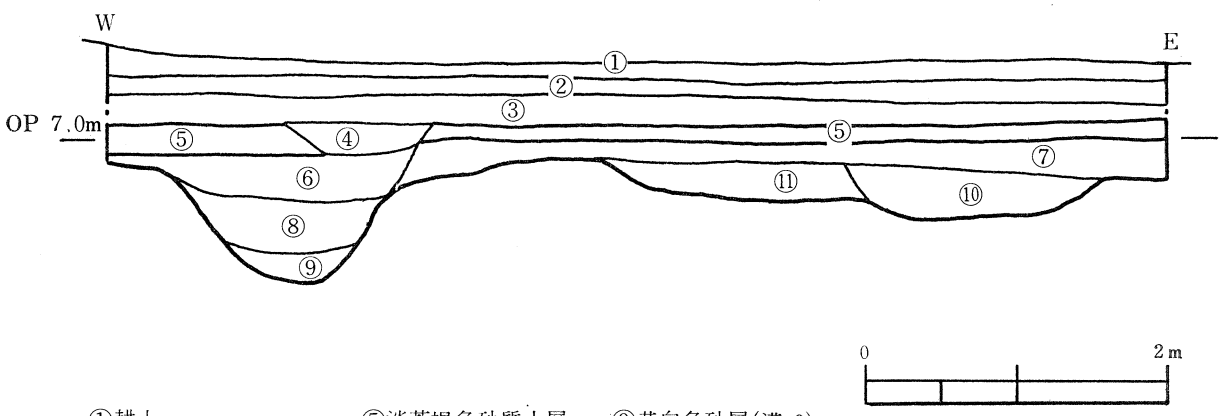
Ⅰ－A_2 区は、７月26日、茶褐色粘土層・同砂質土層の掘り下げ、第Ⅰ遺構面の検出作業開始。作業員の人数の関係上８月下旬まで費やす。９月３日から13日まで遺構検出作業、W—33 Line 以東には遺構がなく14日、第Ⅰ遺構面の写真撮影・図面作成実施。17日よりさらに0.4～

0.5m掘り下げ第Ⅱ遺構面の検出作業を実施。20日から28日にかけて遺構の検出を実施。30日、第Ⅱ遺構面の写真撮影・図面作成実施。10月4日、第Ⅱ遺構面たち割りの結果、さらに下層0.4mに遺構面を確認、全面にわたって掘り下げを実施。5日から12日、遺構検出作業。13日、第Ⅲ遺構面の写真撮影・図面作成を実施し、19日Ⅰ—A_2区の全作業を終了した。

2　層位

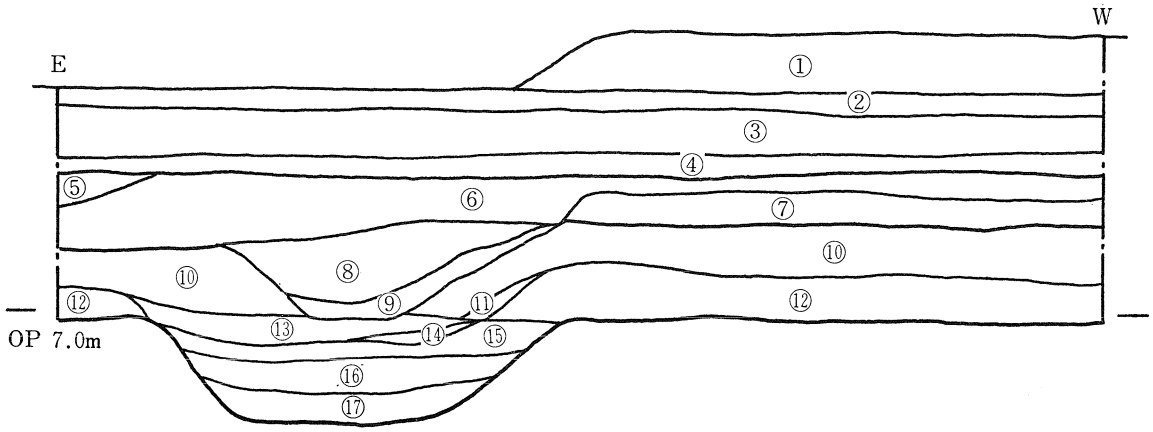
Ⅰ—A_1とⅠ—A_2区との層位は大きく異なるが、中央で約8m途切れるために、その関連は不明である。

Ⅰ—A_1区の弥生時代中期（一部平安時代まで）の最終生活面は、西端で高く標高約7.2mからW—114Lineを界に徐々に下がり、東端では標高約6.6mになる黄褐色粘土層である。Ⅰ—A_2区の弥生時代中期以前の最終遺構面は、西端で検出された谷状遺構を界に小礫を含む淡灰白色砂質層（標高約7m）である。これより上層へ、Ⅰ—A_1区では低い所に弥生時代中期の遺物を包含する黄褐色砂層・茶褐色砂質土層（0.2～0.4m）が堆積し、第Ⅱ遺構面・弥生時代中期～後期の生活面となる。Ⅰ—A_2区では、灰褐色砂層・緑灰色砂質層の2層（0.4m）が堆積し、第Ⅱ遺構面・弥生時代中期の生活面となる。さらにⅠ—A_1区では、弥生時代中期～古墳時代の遺物を包含する淡茶褐色砂質層・茶褐色砂質粘土層（0.2m）が堆積し、第Ⅰ遺構面・奈良～平安時代頃の生活面となる。Ⅰ—A_2区では、緑灰色・灰褐色・黄褐色粘土層（0.4～0.5m）が堆積し、第Ⅰ遺構面・古墳時代の生活面となる。またⅠ—A_1区では、W—114Line以西に平安時代の遺物を包含する暗茶褐色粘土層が薄く堆積し、床土・耕土へ続くが、床土中間層には近世の溝が存在した。Ⅰ—A_2区では、弥生時代中期～平安時代の遺物を少量包含する茶褐色粘土層（0.2～0.3m）が堆積し、床土・耕土へ続く層位がみられた。（第7図・第8図）



①耕土
②淡赤黄色砂層
③淡灰色粘質土層
④茶褐色砂質土層(溝-8)
⑤淡茶褐色砂質土層
⑥茶褐色砂質土層
⑦黄褐色砂質土層
⑧淡黄灰色砂層(溝-9)
⑨黄白色砂層(溝-9)
⑩茶褐色砂質土層(溝-13)
⑪茶褐色粘質土層(溝-12)

第7図　Ⅰ—A_1区北壁面土層図



①黄灰白色砂層
②灰白色粘土層
③淡灰色粘質土層
④茶褐色粘質土層
⑤灰色粘土層(砂礫を含む)
⑥緑灰色粘土層
⑦灰褐色粘土層
⑧灰色粘土層 } 溝-28
⑨灰色砂層 }

⑩緑灰色砂質層
⑪灰色砂層
⑫灰褐色砂層
⑬灰色砂質層
⑭灰白色砂層
⑮黒灰色粘土層
⑯暗灰色粘土層
⑰暗灰色粘土層と青灰色粗砂層の互層 } 溝-28

第8図　Ⅰ—A₂区南壁面土層図

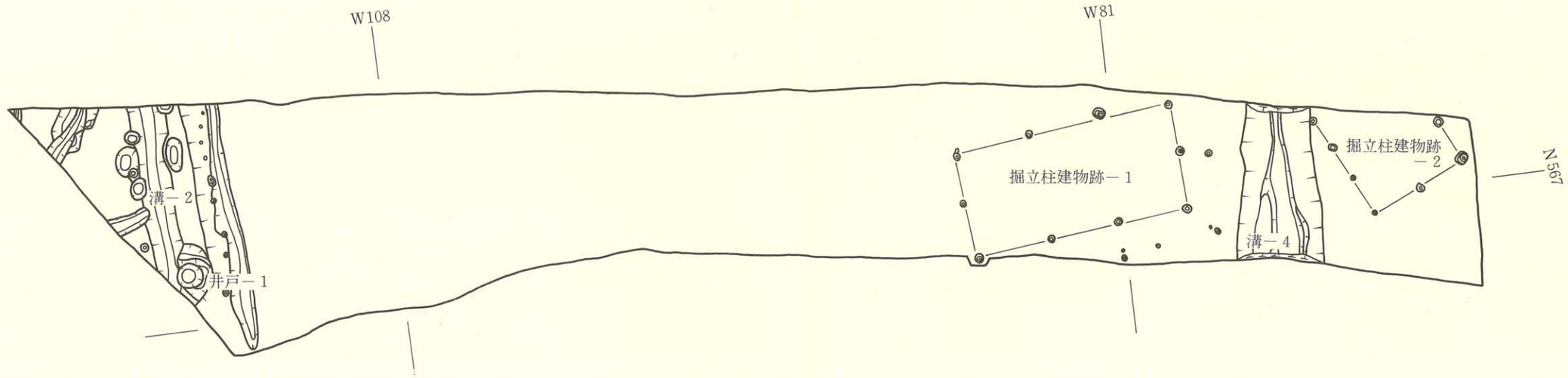
3　遺構

Ⅰ—A₁、A₂区よりは、弥生時代中期より近世までの溝22条・土坑10基・平安時代頃の掘立柱建物跡2棟・井戸1基が検出された。その内、主だった遺構について検出順に概略を記述する。（第9図・第10図）

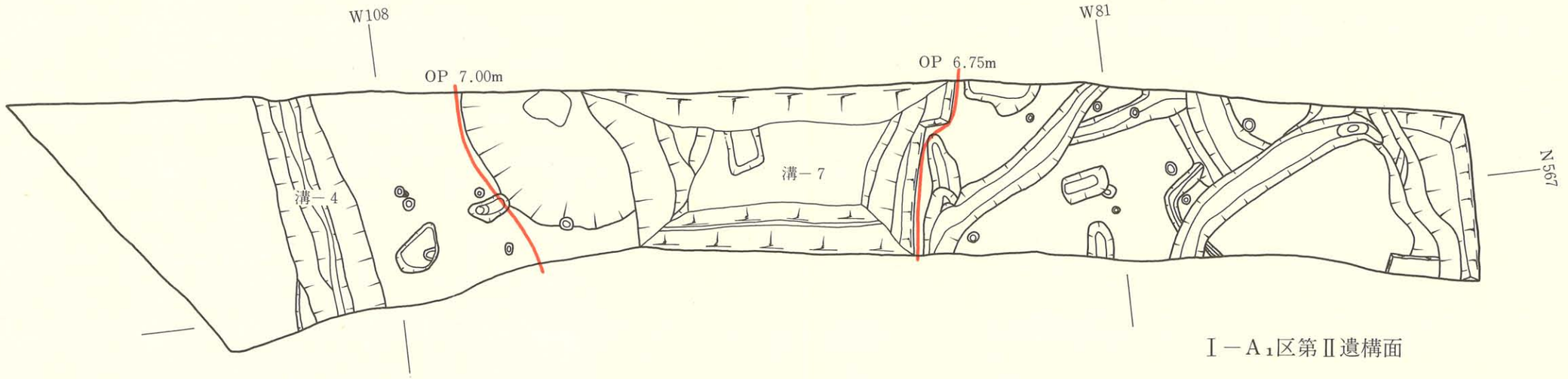
溝—2は、幅1.2～1.4m・深さ 0.4mのU字形溝、ほぼ南北に走り、後述する井戸—1付近よりやや西へ向きを変える。溝内には、平安時代（11C）頃の須恵器・土師器片を包含する暗茶褐色粘土層が堆積しており、井戸—1と共存する。

溝—4は、幅 2.5～3m・深さ0.8～1.2mのV字形溝、黄褐色粘土層がなだらかに落ち込んだ所に位置し、南北に縦走する。溝内には、8層の堆積層がみられ、最下層より弥生時代中期（唐古第Ⅲ～Ⅳ様式）の土器片が出土、また溝底部は北より南へ0.4m低くなっている。

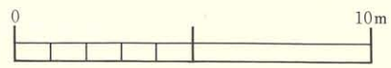
溝—7は、幅13～15m・深さ2.8mの規模を測り、調査地区内では南北に縦走する大型の溝。掘り方は、西肩よりなだらかな傾斜で落ち込み、東肩は急傾斜で約 1.2m落ち込み、幅 0.9～1.5mの段をもって底部へ続き、底は幅6mのフラットな面をもつ。溝内には、細別すると40層の堆積がみられたが、大きくは2層に分かれる。上層には、よく締った砂質層が厚く堆積し、遺物は少なく弥生時代後期の甕形土器が1点出土した。下層は、植物遺体を含む砂層、小



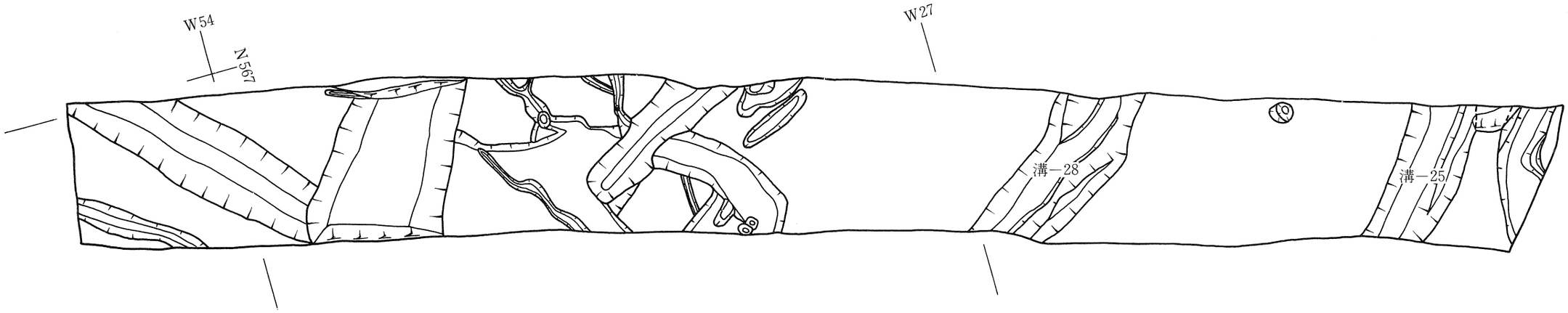
Ⅰ－A₁区第Ⅰ遺構面



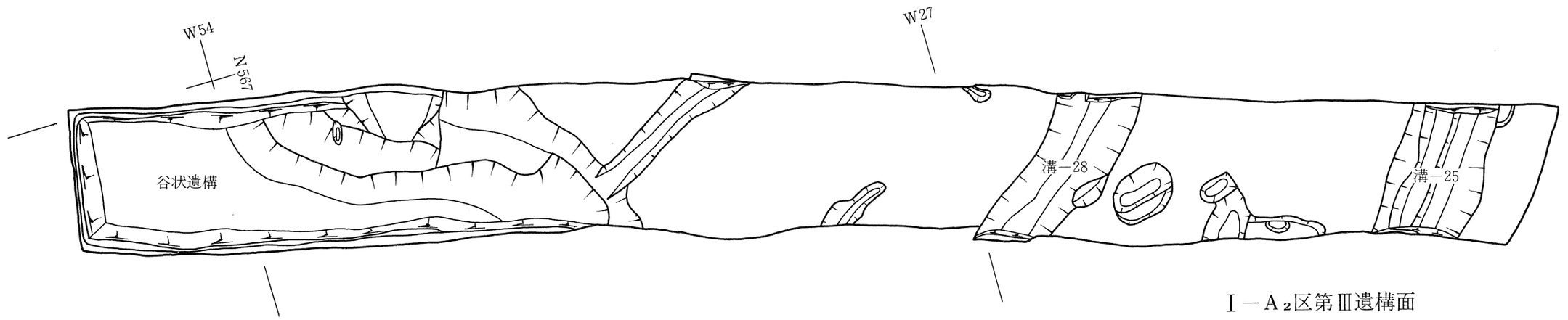
Ⅰ－A₁区第Ⅱ遺構面



第9図　Ⅰ—A₁区遺構実測図



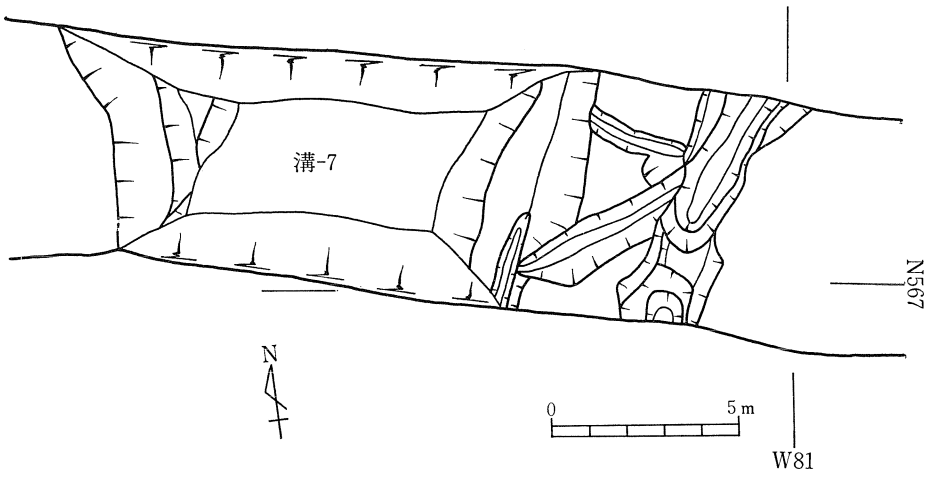
Ⅰ－A₂区第Ⅱ遺構面



Ⅰ－A₂区第Ⅲ遺構面

0 10m

第10図　Ⅰ－A₂区遺構実測図



第11図　Ⅰ—A₁ 区第Ⅲ遺構実測図

礫を含む粗砂層、黒色粘土層が入り乱れて堆積し、遺物はいずれの層も皆無に近く、溝底部より弥生時代中期（唐古第Ⅲ～Ⅳ様式）の土器片が出土したのみである。（第11図）

溝—20は、幅１ｍ・深さ 0.4mのU字形溝、北北東から南南西に走る。溝内には３層の堆積がみられ、最上層より６Ｃ後半の須恵器（長頸壺・平瓶・高杯・杯）、土師器（高杯）等が出土した。（第12図）

溝—25は、北北東から南南西に連なり、三時期にわたって存在する。上溝は、幅 2.5m・深さ 0.7mのU字形溝。溝内には、５層の堆積層がみられ、上層より弥生時代中期（唐古第Ⅳ様式）の土器と石器が出土。下層面では、一度溝西肩を拡張しており、拡張後の規模は断面より幅２ｍ・深さ 0.6mを測り、最も古い時期の溝は幅2.5m・深さ1.2mを測る。下層面二時期の溝からは、いずれも遺物の出土量は少ないが、最も古い溝上層より弥生時代中期（唐古第Ⅱ～Ⅲ様式）の土器が出土した。

溝—28は、北東から南西に連なり、二時期にわたって存在する。上溝は、幅３ｍ・深さ 0.7mのU字形溝。溝内より、弥生時代中期（唐古第Ⅳ様式）の土器が多量に出土。下溝は、上層より0.4m下層の淡灰白色砂層を肩とする幅３ｍ・深さ0.7mのU字形溝。溝内からの出土遺物は皆無に近かった。

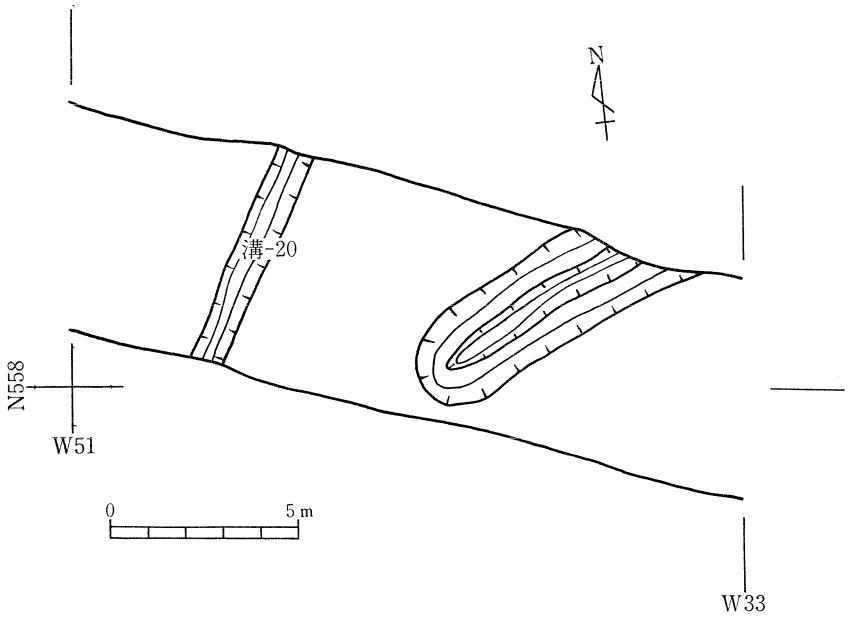
掘立柱建物跡—１は、東西３間×南北２間の規模をもち、軸をやや南へ振る。柱間は、梁行2.7m、桁行２ｍの等間隔になっている。柱穴掘り方は、径0.3m前後・深さ0.5m前後を測る。時期は、層位等から平安時代頃と考えられる。

掘立柱建物跡—２は、東西２間×南北３間以上の規模をもち、軸をやや西に振る。柱間は、梁行1.6m、桁行２ｍの間隔を測る。柱穴掘り方は、径0.2～0.4m・深さ0.4m前後を測る。時期は、層位より平安時代頃と考えられる。

井戸—１は、前述の溝—２と共存する径1.3m・深さ0.8mの小型の井戸。井戸上層より平安

時代中頃（11C）の灯明皿が出土している。

谷状遺構は、最終面の淡灰白色砂質層を肩として、南西に向って約 1.6～2 mなだらかに落ち込み、底はフラットに広がる。内部の堆積土の状態は、下層が黒色粘土層・灰色粘土層・灰色砂質層が肩から底部にそって堆積し、上層に弥生時代中期（唐古第Ⅳ様式）の土器を包含する砂質層が、フラットに堆積している。この状態から、大型の溝といったものではなく、自然地形の谷のようなものであったと考えられる。



第12図　Ⅰ—A₂ 区第Ⅰ遺構実測図

第2節　Ⅰ—B区

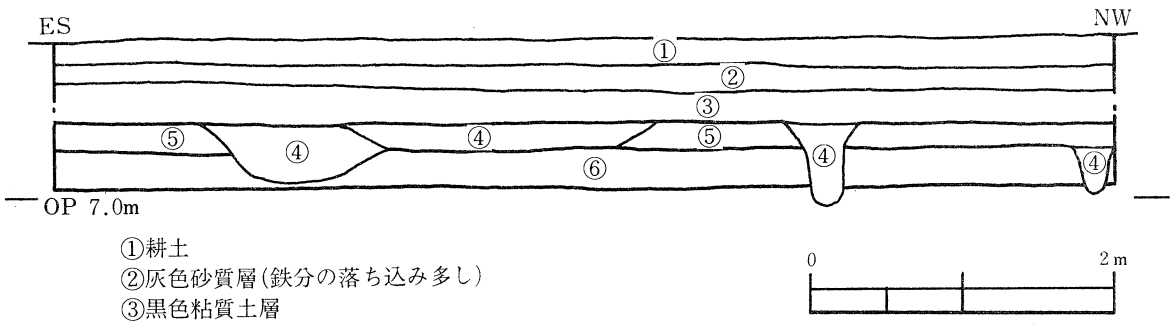
1　調査経過

Ⅰ—B区は、幅8～13m、長さ約120mで面積1,200㎡である。狭長であるため、中央部で二分して調査を行うものとした。昭和52年10月24日、東端より約30mの、南北側進入道路造成土、それより以西は南側を重機によって全面除去する作業を開始。並行して包含層が浅い東端より約60m付近までは、耕土面より手掘りによる掘り下げを開始。29日重機による西半の耕土、床土、造成土除去の作業終了。東半の包含層の掘り下げは、あまりにも土器・石器等の出土量が多く、3×3 mの範囲にコンテナバット約40箱も出土する所があり、非常に手間取り終了したのは11月16日であった。21日より遺構検出作業を開始する。しかし非常に多数の柱穴・土坑・溝等が重複して検出され、作業が遅れた。12月23日東半第Ⅰ遺構面の写真撮影、次いで昭和53年1月10日にかけて図面作成を実施する。西半の包含層の掘り下げは、同52年11月22日より開始し、E—66 Line 以西の遺物の出土量は非常に少なく12月6日に終了する。この後、

作業員全員が、東半の遺構検出作業に入ったため、西半の遺構検出は同53年1月6日より開始する。西半は比較的大型の遺構が多く、28日写真撮影・図面作成を実施し2月3日に終了。東半の最終遺構面検出作業は、1月30日より開始した。2月20日写真撮影・図面作成を実施し、25日Ⅰ—B区の全作業を終了した。

2　層位

Ⅰ—B区の土層調査は、南壁面の約128mで行なう。当地区の現在の水田面は、N—474Lineより西北部は標高8.2m、南東部は標高7.6mと低くなっている。弥生時代前期～中期の遺構面である黄褐色粘土層、赤黄色粘土層は、西（標高 7.5m）より徐々に東（標高 7.1m）へ下がる。これより上層の堆積は、N—505Line 付近の南北で変わり、南では茶褐色土層のブロックを含む黄褐色粘質土層（0.2～0.4m）が堆積し、弥生時代中期から古墳時代前期の遺構面がある。さらに弥生時代中期の土器片を多量に包含する黒褐色粘質土層（0.3～0.4m）が堆積しており、土層断面からプランでは検出できなかったが、この包含層上面からの遺構の掘り方が不明瞭ながら観察できた。さらにN—474Line 以北西には弥生時代中期～平安時代の土器を包含する黒色粘質土層（0.3～0.4m）が堆積する。しかし、この2層の包含層は、明確に区別されるものでない。またこの2層の包含層は、N—506Line より北西部で完全に消え、この上層に堆積する状態で、包含遺物が非常に少ない茶褐色砂質土層（0.4m）に変わる。さらに上層に、N—489Line 付近以西に磨滅した土師器、須恵器を含む淡灰色砂質土層（0.1～0.3m）が堆積し、さらに床土・耕土へと堆積する。（第13図）



①耕土
②灰色砂質層（鉄分の落ち込み多し）
③黒色粘質土層
④黒色粘質土層
⑤黒褐色粘質土層
⑥黄褐色砂質土層（茶褐色土層と黒色粘質土層のブロックを含む）

第13図　南　壁　面　土　層　図

3　遺構

Ⅰ—B区で検出された遺構は、弥生時代前期～古墳時代前期の溝12条、土坑約60基、弥生時代中期～近世の井戸8基、弥生時代前期～鎌倉時代頃の柱穴跡2500穴以上、弥生時代前期～中期の方形周溝墓2基以上がある。また遺物は土器・石器・獣骨等が、包含層出土のものも含みコンテナバットに約 600箱出土している。以下、弥生時代前期の溝—3以外の主だった遺構の

概略を検出順に記述する。（第14図）

溝—10は、幅約４ｍ・深さ 1.3ｍで調査区内を北東より南西に連なる大型のＵ字形溝。溝内には、６層に分けられる暗褐色粘土層・砂質層が堆積し、全層にわたって弥生時代中期（唐古第Ⅱ～Ⅳ様式）の土器・石器が多量に出土した。

溝—15は、幅３ｍ・深さ１ｍの底部の狭い大型のＵ字形溝。さきの溝—10の約10m西に位置し、同一方向で連なる。溝内には、５層に分けられる暗灰色・黒色粘土層が堆積し、弥生時代中期（唐古第Ⅱ～Ⅳ様式）の土器が出土した。溝—10よりも土器はやや新しい時期のものが多い。

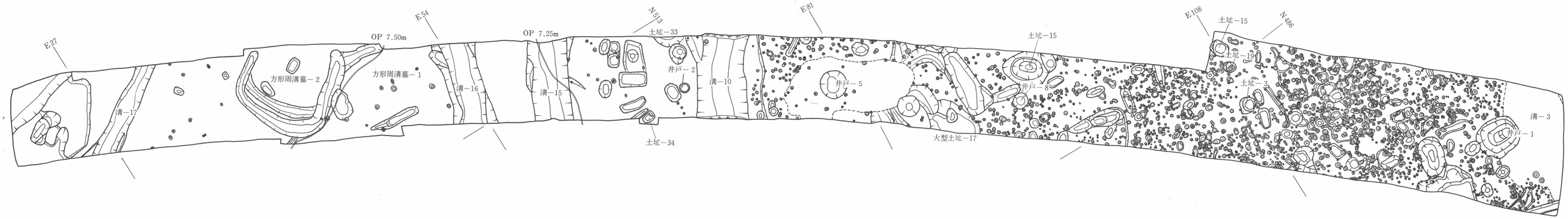
溝—16は、幅３ｍ・深さ１ｍの大型のＵ字形溝。溝—15の西約４ｍに位置し、調査区内をほぼ南北に連なる。溝内には、５層に分けられる粘土層と砂層が堆積し、中・下層より弥生時代後期の土器が多量に出土した。

溝—17は、幅1.5m・深さ0.5m・底部幅１ｍの東西に連なる凵形溝。溝内には、７層に分けられる砂質土層が堆積し、弥生時代中期（唐古第Ⅲ～Ⅳ様式）の土器が出土した。

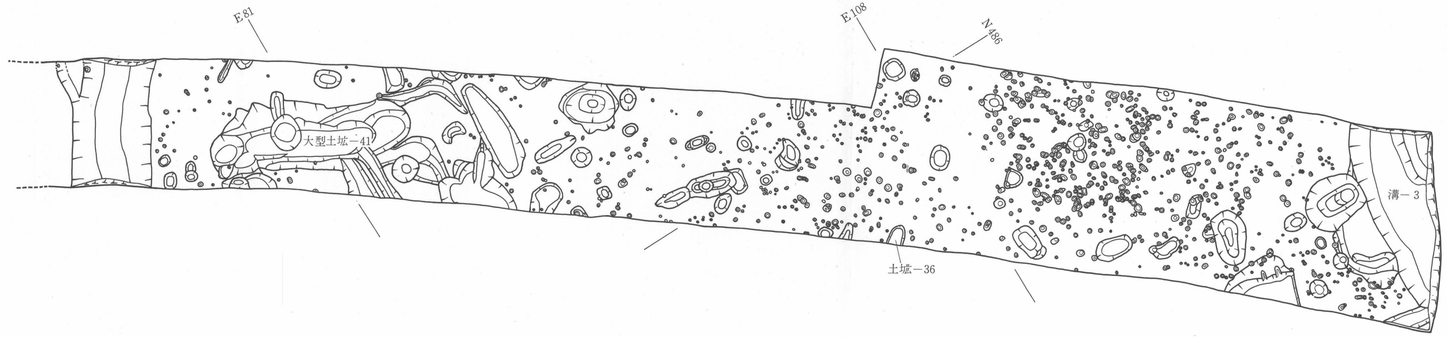
方形周溝墓—１は、溝—16の西側に位置し、周溝の残存状態は非常に悪い。周溝は全周せず途切れ〳〵に掘られており、南溝が検出長4.5m・幅約0.7m・深さ0.3m、西溝が同長2.3m・幅1.2m・深さ0.4m（方形周溝墓—２の周溝と共有あるいは削平されている可能性もある）、北溝が同長3.5m・幅１ｍ・深さ0.3mを測るが、東溝は全く残存していない。周溝はほぼ方位にのっており、台状部推定規模約 5.2m四方のものと考えられる。周溝内、台状部からは、主体部や土器等は検出されなかった。

方形周溝墓—２は、方形周溝墓—１の西に接し、北東部の周溝は調査地区外にのび、かつ途切れている。周溝の規模は、幅0.7～1.2m・深さ0.3～0.5mを測り、台状部は長軸 6.5m（推定）、短軸６ｍを測る。また南西部のみの周溝の内側に古い時期の周溝（幅0.8m・深さ0.2m）が検出され、周溝墓が一度拡張されたと考えられる。マウンドは残っていないが、台状部には、主体部と考えられる２基の土坑が検出された。いずれも各周溝に平行して位置し、土坑—１は長軸1.3m・短軸0.8m・深さ0.15mで隅丸方形をなし、底部はフラットに近い。土坑—２は長軸 1.4m・短軸0.75m・深さ0.25mの楕円形すりばち状の形態をなす。周溝墓の時期の指標となる土器が、南西溝から、溝底より浮いた状態で１点、南西と南東の溝のコーナーから底部に接して２点出土、いずれも弥生時代中期（唐古第Ⅳ様式）のものである。他に南東の周溝より、底部に接して弥生時代前期の小型の壺形土器１点が出土した。

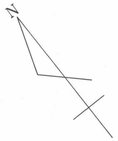
井戸—１は、隅丸長方形の形態をもち、上口長軸3.8m・短軸3.6m・深さ約３ｍを測る。上口より約 1.2mまではゆるやかな傾斜で落ち込み、以下底部まで急傾斜で落ち込む。井戸内には３層に分けられる堆積がみられ、上層は灰色砂質層でたたきしめられ、以下弥生時代中期の土器片を少量含むヘドロ状の黒色粘土層・青灰褐色砂質層が続く。また井戸は、ベースの黄褐色粘土層、青灰色砂質層、同小礫層を掘りぬき、底部は礫を含む黄褐色粘質土層まで掘られて



Ⅰ－B区第Ⅰ遺構面



Ⅰ－B区第Ⅱ遺構面



第14図　Ⅰ－B区遺構実測図

いる。

井戸—２は、直径0.8m・検出時の深さ2.6mの掘り方に、残存径0.65m・高さ1.05mの桶を３段積み重ねた井戸枠を検出した。井戸枠は、残存木片よりさらに１段積まれており、当初は４段の、深さ 3.4m以上あったものと考えられる。井戸枠に使用している桶は、細い板17～20枚を竹釘でつなぎ、内外より４段の竹枠で巻き締めたものである。井戸内には、灰色砂質層、小礫を含む黄灰色砂層が堆積していたが、遺物は皆無であった。層位的には、床土面下より掘られていることから、近世頃のものと考えられる。

井戸—５は、径2.1m・深さ1.5mのすりばち状を成し、大型土坑—41埋没後掘られている。内部には黒色粘土層が堆積し、多量の弥生時代中期（唐古第Ⅳ様式）の土器が出土した。

井戸—８は、径１m・深さ 1.2mを測り、内部には黒色粘土層が堆積し、鎌倉時代（13C中頃）の羽釜・瓦器椀・須恵器片が出土した。

土坑—３は、長軸1.3m・短軸１m・深さ0.7mの隅丸方形の土坑。土坑内には、上層に黒色粘土層と黄褐色土層の互層で固められ、下層には黒色粘土層が堆積し、底部より弥生時代中期（唐古第Ⅱ様式）の壺形土器１点が出土した。

土坑—15は、長軸約４m・短軸３m・深さ 0.7mの楕円形すりばち状の土坑。土坑内には、黒色粘土層が堆積し、弥生時代中期（唐古第Ⅲ～Ⅳ様式）の土器が多量に出土した。

土坑—19は、径0.8m・深さ0.4mの小型の土坑。土坑内には、黒色砂質土層が堆積し、底部より古墳時代前期の甕形土器が出土した。

土坑—17は、１辺４m以上・深さ 0.6mを測り、底部はフラットであるが、土坑の一部が調査地区外に広がり規模は定かでない。土坑内には、黒色粘質土層が堆積し、弥生時代中期（唐古第Ⅱ～Ⅳ様式）の土器が多量に出土した。

土坑—33は、土坑の大部分が調査地区外に広がり規模は定かでないが、一辺２m以上・深さ0.4m以上のものと考えられる。 土坑内には、灰褐色砂質土層が堆積し、弥生時代前期の土器が出土した。

土坑—34は、長軸 1.1m・短軸0.75m・深さ0.17mの隅丸方形を成す。土坑内には、暗灰褐色砂質土が堆積し、弥生時代前期のほぼ完形の壺形土器２点が底部より浮いた状態で出土した。その内の１点は、口縁部は土坑内に入っているが、胴部以下は、他の１点とともに完全に浮き、包含層の茶褐色砂質土層中に含まれる可能性がある。このことは、土坑周囲の同包含層より、ほぼ完形の弥生時代前期の大型の壺形土器と小型の壺形土器の胴部各々１点が出土していることから、出土土器は土坑—34に含まれないとも考えられる。

土坑—36は、土坑の一部が調査地区外にあり、規模は定かでないが、検出長軸 1.1m・同短軸 0.8m・深さ0.17mを測る。土層断面より黄褐色粘質土層からの掘り方がみられたが、明確には、最下層面の黄褐色粘土層からである。土坑内には、暗褐色砂質層が堆積し、弥生時代前期の完形の壺形土器１点が土坑底部に接した状態で出土した。

大型土坑—41は、長軸約11m・短軸約3.5m・深さ0.9mを測る大型長楕円形の土坑。掘り方は、2段の肩をもち、底部は比較的広い。土坑内には大別すると3層の堆積層がみられ、上・中層よりコンテナバット約50箱の弥生時代中期（唐古第Ⅱ～Ⅳ様式）の土器・石器が出土した。土坑の肩縁は、東・南・北より同時期あるいはやや新しい時期の5条の溝と切り合っており、複雑な形を成すが、土坑との関連は定かでない。

柱穴跡は、さきの溝—10より東側において、2層の面から約2500穴以上が検出された。柱穴の規模・形態は円形が多くほとんどが径0.1～0.5m・深さ0.1～0.7mを測る。時期は、層位や出土土器からみて弥生時代前期～平安・鎌倉時代と幅広い。現在の所、各々の関連を整理していないが、柱穴跡と共に同時代の土坑（炉跡らしきものを含み）・貯蔵穴が検出されているところから、ここで長期間の定住が考えられ、竪穴住居跡・掘立柱建物跡の重複と考えられる。

第3節　Ⅱ—A区

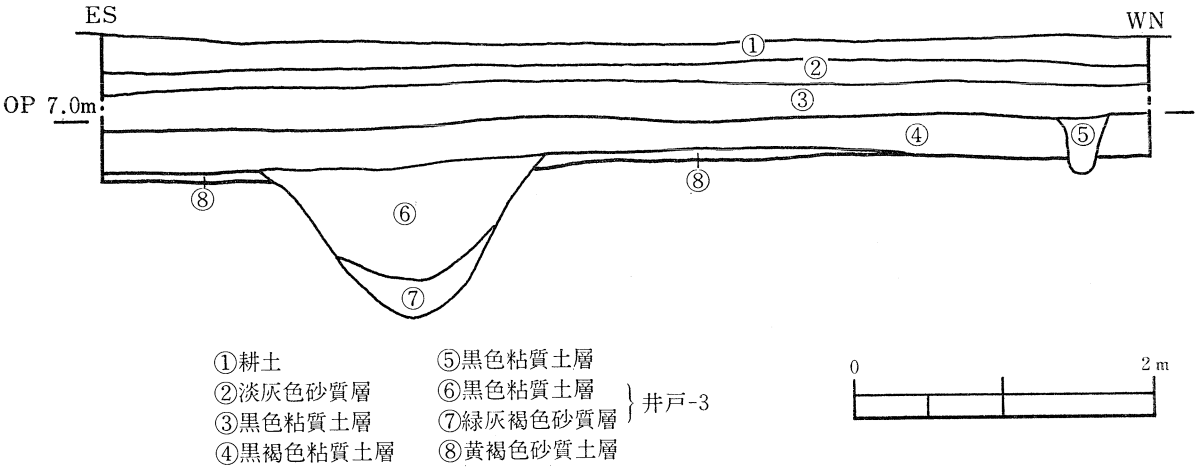
1　調査経過

Ⅱ—A区は、阪急京都線から東側に設定した幅8～12m、長さ約110m、調査面積約950m²の調査区である。他の区と同じく狭長な調査区のため北端より約55mの地点で二分して調査を実施した。昭和53年3月30日、北端より、東西側進入道路造成土と耕土の除去を重機によって開始した。北端から約30mより以南は西側の進入道路の除去を行い、4月3日機械掘削を終了した。4日、北端より床土の一部と包含層の掘り下げを開始。包含層中の土器量が多く20日に北半の遺構面を検出した。24日より5月24日まで遺構検出作業を実施。遺構の量は、Ⅰ—B区ほど多くないが、同様に重複し合い複雑な遺構が多い。また周囲の水田の苗代、田植えなどの時期と重なり、調査地区内が涌き水により連日冠水し、非常に手間取る。5月25日北半の写真撮影・図面作成を実施し6月5日北半の作業を終了した。南半は、5月8日より床土の一部と2層の包含層（0.6～0.8m）の掘り下げを開始した。包含層が厚くまた出土土器も多く手間取り6月6日に遺構面を検出。8日より29日まで遺構検出作業を実施した。北半に比べ、溝・土坑等大型の遺構が多いが、特に弥生時代前期の遺構が多く検出された。7月3日、南半の写真撮影・図面作成、10日、遺構重複部分の修正、14日、最終面の写真撮影・図面作成を実施し、7月20日、全作業を終了した。

2　層位

Ⅱ—A区の土層調査は、南壁面の約96mを利用して実施した。なお、当地区の現在の水田面は標高7.6m前後に位置する。層位を下層からみると、弥生時代前期から古墳時代（一部平安・鎌倉時代）の最終遺構面の黄褐色粘土層（一部砂質層）は、北（標高7.1m）から南（5.8m）へ低くなり、溝—10・25を界に特に変化がみられる。この上層に、標高6m前後の低い地区では黄褐色砂質層（一部灰褐色砂質層）が堆積し、一部弥生時代中期の遺構が存在する。次に、

弥生時代前期～中期の遺物を包含する黒褐色粘質土層（0.2～0.4m）が、溝－8の南側に堆積し、古墳時代以降の遺構が一部存在する。さらに弥生時代中期～平安・鎌倉時代の遺物を包含する黒色粘質土層、茶褐色粘質土層（0.2～0.5m）が堆積する。この2層の包含層は、Ⅰ－B区と同じく明確に区別されるものではない。次に、磨滅した須恵器・土師器を少量包含する淡灰色砂質層（床土）と耕土が堆積している。（第15図）



第15図　西　壁　面　土　層　図

3　遺構

Ⅱ－A区から検出された遺構は、弥生時代前期～古墳時代の溝状遺構約30条、弥生時代前期～平安時代の土坑約45基、同柱穴跡800穴以上、弥生時代中期～古墳時代の井戸3基である。出土遺物の量は、包含層中のものを含み、土器・石器・木製品・獣骨等がコンテナバットに約430箱出土した。以下、弥生時代前期の溝（溝－25～28）以外の主だった遺構を検出順に、概略を記述する。（第16図）

溝－8は、幅0.8m・深さ0.8mを測り、幅に比較して深いU字形溝である。溝内には、黒色粘質土層が堆積し、弥生時代中期～古墳時代の土器が出土した。

溝－10は、幅1.5m・深さ0.4～0.6mの底部幅のあるU字形溝。調査地区内を南北に縦走し、底部は南へ向って低くなる。溝内には、黒色粘質土層・同砂質層が堆積し、弥生時代中期（唐古第Ⅲ～Ⅳ様式）の土器・石器（石剣1点を含む）が出土した。

溝－14は、幅1.2m・深さ0.2～0.3mの浅いU字形溝。さきの溝－10とほぼ並行して南北に縦走し、途中より溝－10に合流する。プランでは、溝－10との前後関係は定かでなかったが、出土遺物から溝－14がやや新しいと考えられる。溝内には、黒色粘質土層が堆積し、弥生時代中期（唐古第Ⅳ様式）～後期の土器・石器（扁平石斧1点を含む）が出土した。

土坑－16は、長軸3.4m・短軸2m・深さ0.5mを測り、底部が広く平坦な大型の土坑。土坑内には、黒色粘質土層が堆積し、弥生時代中期（唐古第Ⅲ～Ⅳ様式）の土器が出土した。

土坑—17は、長軸3.4m・短軸2.2m・深さ0.5m、底部が広く平坦な隅丸方形の大型土坑。土坑内には、黒色粘質土層が堆積し、弥生時代中期（唐古第Ⅲ～Ⅳ様式）の土器が少量出土した。他に1基の同規模の土坑を含み、土坑—16・17が南北に連なっており、また同時代の円形・楕円形の大型の土坑が多数検出されたが、どのような性格をもつものか定かでない。

土坑—39は、長軸2.75m・短軸1.6m・深さ0.6mの長軸をほぼ南北にとる隅丸方形の土坑。掘り方は、上口よりほぼ垂直に掘り込み、底部は広く平坦である。土坑内には、黒色粘質土層と同砂質土層の2層の堆積層がみられ、弥生時代中期（唐古第Ⅲ様式）の土器が出土した。また土坑底部より、完成品に近いものを含む鋤4点・未完成品の丸鍬3点・用材1点が出土した。

土坑—40は、土坑の一部が調査地区外に広がり規模は定かでないが、径2m以上・深さ1m以上のすりばち状の円形土坑と考えられる。土坑—40は、層位から後述する大型落ち込み—2が埋った後に造られた土坑である。土坑内には、ヘドロ状の黒色粘質土層が堆積し、弥生時代中期（唐古第Ⅲ～Ⅳ様式）の土器と共に、木製の簪と貝殻が出土した。

大型落ち込み—2は、長軸10m以上・短軸4m以上（調査地区外に広がる）・深さ0.5mを測る楕円形の落ち込み。形態が、周囲からなだらかに落ち込み、底部に起伏があることから自然地形とも考えられる。内部に黒色粘質土層が堆積し、弥生時代前期の土器が出土した。

井戸—1は、径1.1m・深さ0.9mの小型の井戸。井戸内には、黒色粘質土層・ヘドロ状の黒色粘土層が堆積し、古墳時代前期の土器が出土した。井戸上口には、2条の浅い溝が東西方向に走るが、弥生時代後期以前のものである。

井戸—2は、長軸1.5m・短軸1.2m・深さ1mの楕円形の井戸。井戸内には、ヘドロ状の黒色粘土層が堆積し、古墳時代前期の土器（小型壺・器台・高杯等）が多数出土した。

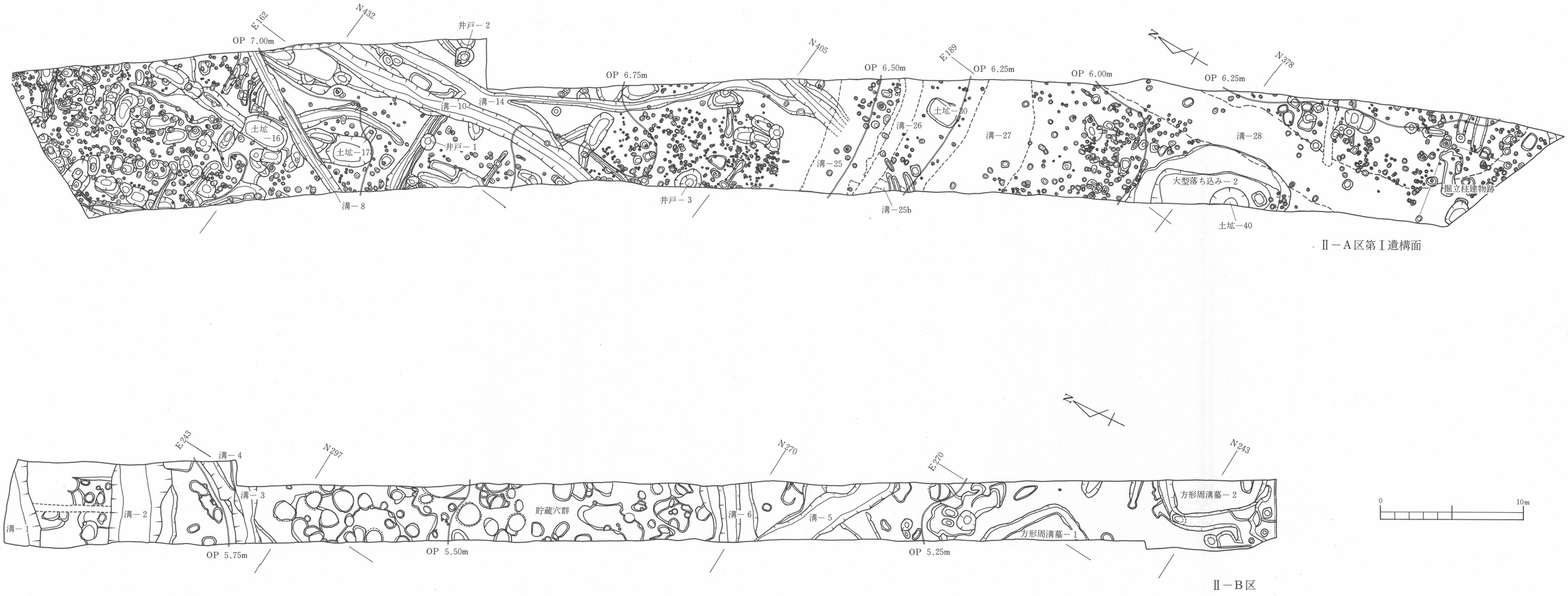
井戸—3は、径2m・深さ1mのやや大型の井戸。井戸内には、黒色粘質土層と緑灰色砂質層が堆積し、上層より弥生時代中期（唐古第Ⅳ様式）の土器と扁平石斧1点が出土した。

柱穴跡は、現在の所未整理のため定かでないが、調査地区全体に800穴以上検出されており、出土遺物から弥生時代前期～平安・鎌倉時代までの幅がある。形態・規模は、その大多数が円形をなし、径0.2～0.6m・深さ0.3～0.7mを測る。Ⅰ—B区同様、柱穴跡と共に多数の小型の土坑が検出されていることから、将来竪穴住居跡・掘立柱建物跡が多数復元できると考えられる。この中で、調査地区南端の、Pit 460・461は一辺0.6m・深さ0.7mの隅丸方形の掘り方をもち、残存径0.3mの柱痕が出土した。この柱穴跡と他の同規模の柱穴跡より、1間2.8mの3間以上×2間以上の掘立柱建物跡1棟が復元できた。

第4節　Ⅱ—B区

1　調査経過

Ⅱ—B区は、Ⅱ—A区と連接してはいるが、分譲住宅地内を横断することや、工事用道路等



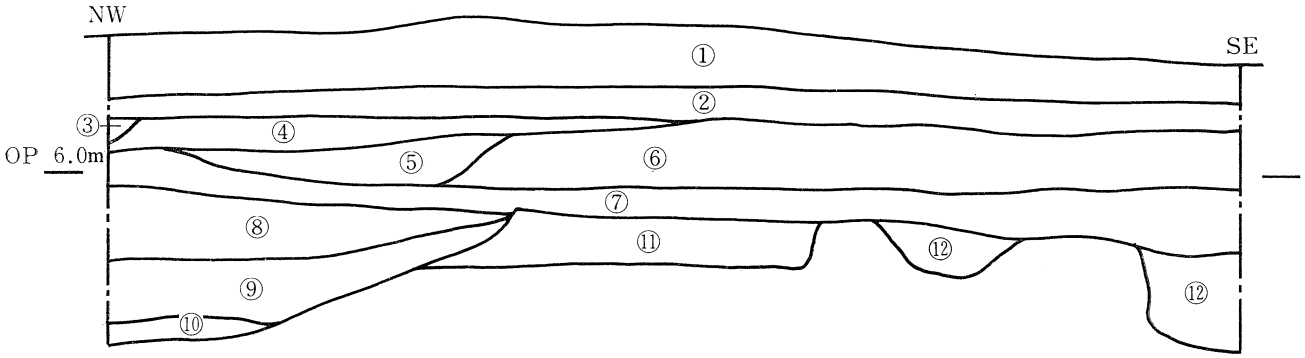
第16図　Ⅱ－A・Ⅱ－B区遺構実測図

の関係により、Ⅱ－A区より南東に約50m離れた地点から始まり、市道東奈良二丁目１号線を南端とする調査区である。

調査は、調査区の設定の後、昭和53年４月17日より、第１次掘削を行い、盛土（1.8～2m）・旧耕土（0.2～0.3m）・床土（0.2～0.4m）、さらに下層の無遺物層である堆積土の一部を、重機により除去した。並行して20日から、手掘りにより包含層までの約0.1～0.2mの堆積土の除去作業を行なった。第１次掘削を28日、第２次掘削を５月13日に終り、包含層より切り込まれている遺構の検出を行なったが、確認されなかった。26日から包含層の除去を行ないながら、６月14日より遺構検出にあたった。７月13日に遺構検出を終り、調査地区の全体および各遺構の清掃を行なった。16日に写真撮影を行ない、18日より調査区および各遺構の平面図・断面図を作成し、７月23日をもって全調査を終了した。

2　層位

Ⅱ－B区は、他の調査区とは異なり、旧地表面に1.8～2.0mの盛土がなされており、その下に耕土0.2～0.3m、床土 0.3m、その下層に無遺物層である淡褐色土層の堆積層がある。この堆積層は、北の高いところでは薄く、南へいくにしたがい厚く堆積し、遺構面が低くなっている。この堆積層とは逆に包含層（茶褐色土層）は、北では厚く、南では薄く堆積している。包含層には、弥生式土器・土師器・須恵器・瓦器等が含まれている。（第17図）



第17図　東　壁　面　土　層　図

3　遺構

Ⅱ－B区で検出した遺構は、溝６条・方形周溝墓２基・土坑約60基である。（第16図）

溝－１は、一部分しか検出できなかったが、現最大幅1.4m・現最深約0.7mを測り、上層には無遺物層の黄色砂層が堆積し、下層に弥生時代中期の土器を包含する暗黒色土層の堆積がみ

られた。

溝－２は、幅が約４ｍで、深さが約１ｍあり、溝内には３層の堆積がみられた。いずれの堆積土においても弥生時代後期の土器が含まれていた。

溝－３・４は、重複しており、溝－３は溝－４に切られており、溝－３が古く、溝－４が新しい。溝－４は幅約1.6m・深さ約1.1mである。溝－３は幅が不明であり、深さは検出されたところで約 0.8mである。溝－４は５層、溝－３は検出出来たところで３層の堆積がみられ、それぞれの堆積土層に弥生時代中期の土器が含まれていた。

溝－５は、幅約 2.5m・深さ約0.68mで、弥生時代中期の土器を包含している６層の堆積がみられた。

溝－６は、幅約 3.8m・深さ約0.78mで、黄濁色砂層の単一層であり、溝底ちかくで古墳時代前期の甕が１点出土している。

土坑は、約60基を数えるが、規模は長軸で約３mから約 0.6m、深さで約 0.6mから約0.15mの大小が認められ、形状も円形・楕円形・方形のものがあり、規格性を認めることは出来ない。一部に口径より、底径の大きい、いわゆる袋状の土坑がある。残りが良好な深い土坑は、木ノ葉の含まれている茶色の腐植土におおわれ、下層には黒色粘質土層が堆積している。浅い土坑は、黒色粘質土層だけの堆積がみられる。大部分の土坑は無遺物ではあるが、一部の土坑から、弥生時代前期と後期の土器を出土しているので、これらの土坑は弥生時代前期と後期の二時期に分かれる貯蔵穴群と考えられ、浅い土坑はなんらかの理由により削平されているものと思われる。

方形周溝墓－１は、一部しか検出していない。長軸５m以上・短軸 3.2m以上であり、周溝は幅約 0.7mで、深さ約0.68mである。周溝内より弥生時代中期の土器が溝底より浮いた状態で出土した。主体部は検出されなかった。

方形周溝墓－２は、約⅓近くを検出した。周溝の一辺が約８ｍで、幅約1.1m、深さ約0.2mで、周溝内より弥生時代中期の土器が溝底より浮いた状態で出土している。主体部は、一部のみの検出ではあるが短軸約0.85m・長軸約0.87m以上・深さ約0.12mの方形の土坑で、底はほぼ平らになっている。南側の周溝は落ち込みにより切られている。

第５節　Ⅲ－Ａ区

１　調査経過

Ⅲ－Ａ区は、小川水路左岸から、市道東奈良二丁目～三丁目線にはさまれた調査区である。調査区内に農業用水路が横断している関係で、この用水路で二分し、Ⅲ－A_1 区・Ⅲ－A_2 区として調査を行なった。

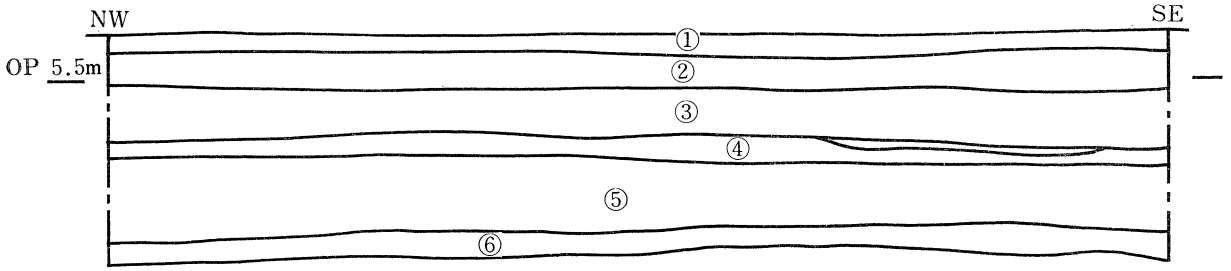
調査は、Ⅲ－A_2 区から行ない、７月25日より重機による耕土・床土および無遺物堆積土の一部の除去作業を行なった。ひき続き、これに並行して８月１日から包含層（褐色土層）上面

まで手掘りによる掘削を行なった。その結果調査地区の南⅔近くは包含層がなく、無遺物の堆積土が厚くなっており、地山が南の方向に低くなり、黄色粘土層から白陶色粘土層にかわる。調査は包含層のない地区は、地山の白陶色粘土層まで掘り下げ、また包含層のある地区においては、包含層の上面まで除去していった。ひき続き包含層を除去し、9月4日から遺構検出にあたった。30日に写真撮影を行ない、10月2日から調査区および各遺構の平面図・断面図の作成を行ない、10月8日をもって全調査を終了した。

Ⅲ—A_1 区の調査は、10月11日より重機による耕土・床土および無遺物堆積土の一部の除去作業を開始した。その作業時に調査区の西半において溝が検出されたので、15日よりこの溝の検出にあたり、その結果、溝は近代から現代の溝であることを確認した。18日に重機による堆積土の除去作業を再開して、21日に終了した。それに並行して手掘りによる包含層上面までの堆積土の除去を行ない10月25日に終了した。続いて26日より包含層の除去作業を行ない、11月10日から遺構検出を行なった。26日に写真撮影を行ない、27日から調査区ならびに各遺構の平面図および断面図の作成を行なった。12月3日をもって全調査を終了した。

2　層位

Ⅲ—A_1 区・Ⅲ—A_2 区の層位は基本的に変わりなく、耕土（0.2～0.3m）・床土（0.15～0.2m）があり、さらに無遺物層が堆積しており、その下層にⅢ—A_1 区およびⅢ—A_2 区の北の高いところでは、褐色土層の包含層がある。Ⅲ—A_2区の南半約⅔では包含層は認められず、無遺物層の堆積が厚く、複雑になる。（第18図）

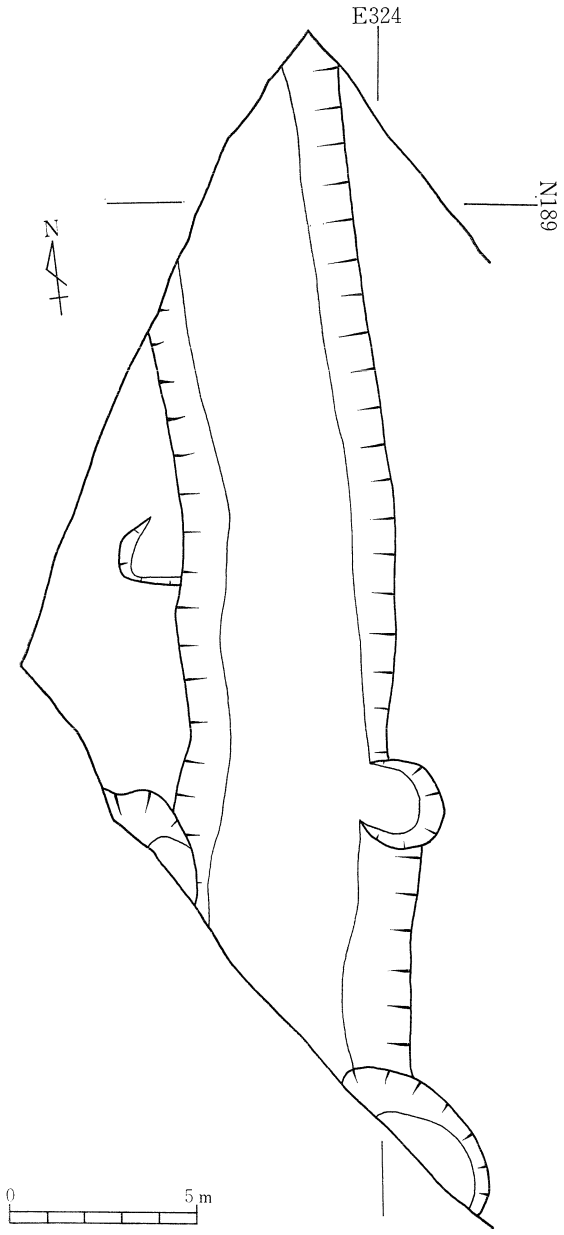


第18図　Ⅲ—A_1 区北壁面土層図

3　遺構

Ⅲ—A_1 区検出の遺構は、溝が3条と少数の柱穴跡である。（第20図）

近・現代の溝は、Ⅲ—A_1 区西半で第1次掘削において検出した。土層観察によると、耕土



第19図　近・現代の溝

および床土の下層から溝が切り込まれていた。溝内の堆積は、著しい砂の互層がみられ、遺物においても、土層に関係なく弥生式土器・土師器・須恵器から近・現代のいわゆる瀬戸物と呼ばれている陶器まで含まれている。このことにより、調査区の西に流路をもっている現小川水路の旧流路の可能性が大きいと思われる。（第19図）

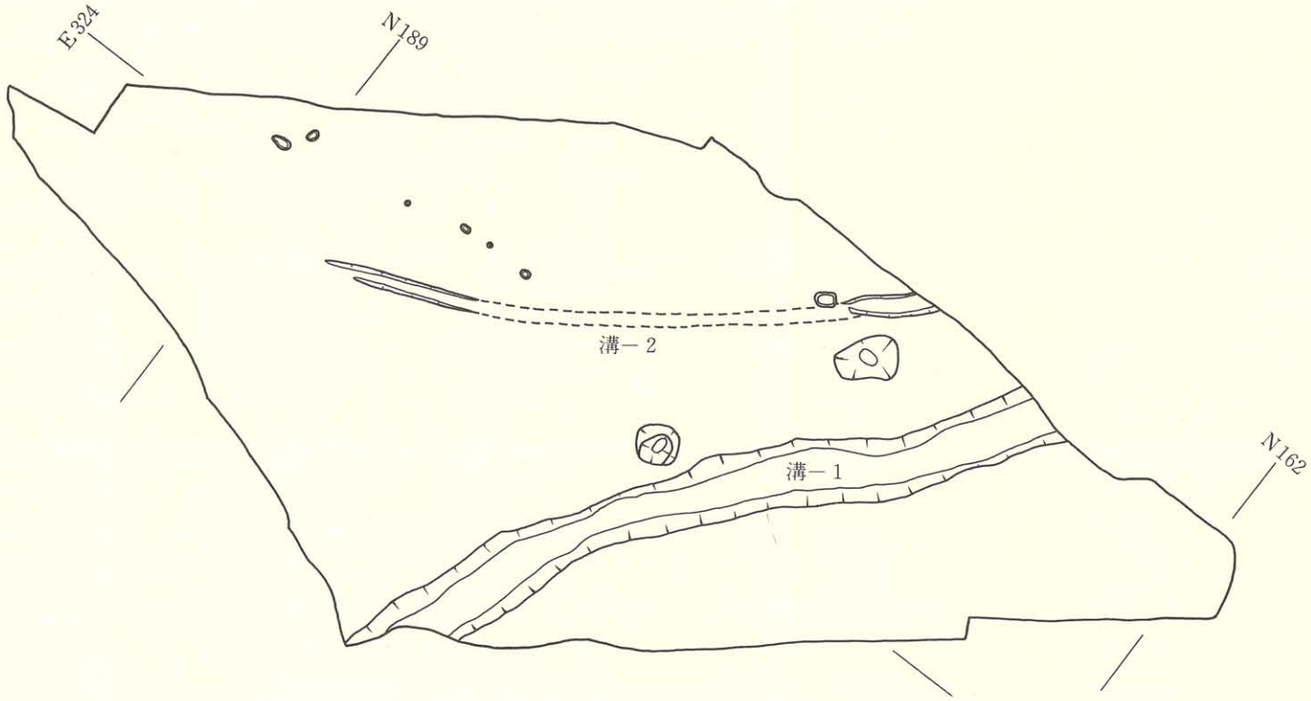
溝－1は、調査区を東西に横断する様に検出された。幅約2m・深さ約0.25～ 0.4mと多少の高低差が認められる。上層が暗褐色土層、下層に礫を含む黒色土層が堆積しており、両層とも弥生時代後期の土器が出土している。また上層の暗褐色土層で木棺と推定される小口板と底板もしくは蓋板と考えられる板材を検出した。

溝－2は、検出状態が不良で、処々分断されている。比較的良好なところで幅0.5m・深さ0.05～0.1mであり、茶褐色土層の単一層であり、細片であるが弥生時代中期の土器が出土している。

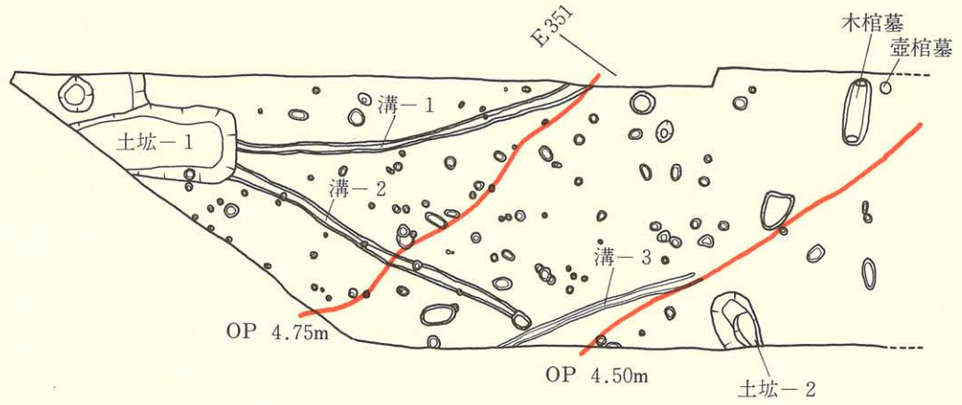
また、その他柱穴と考えられるピットが数穴検出されたが、いずれも時期、性格等は不明である。

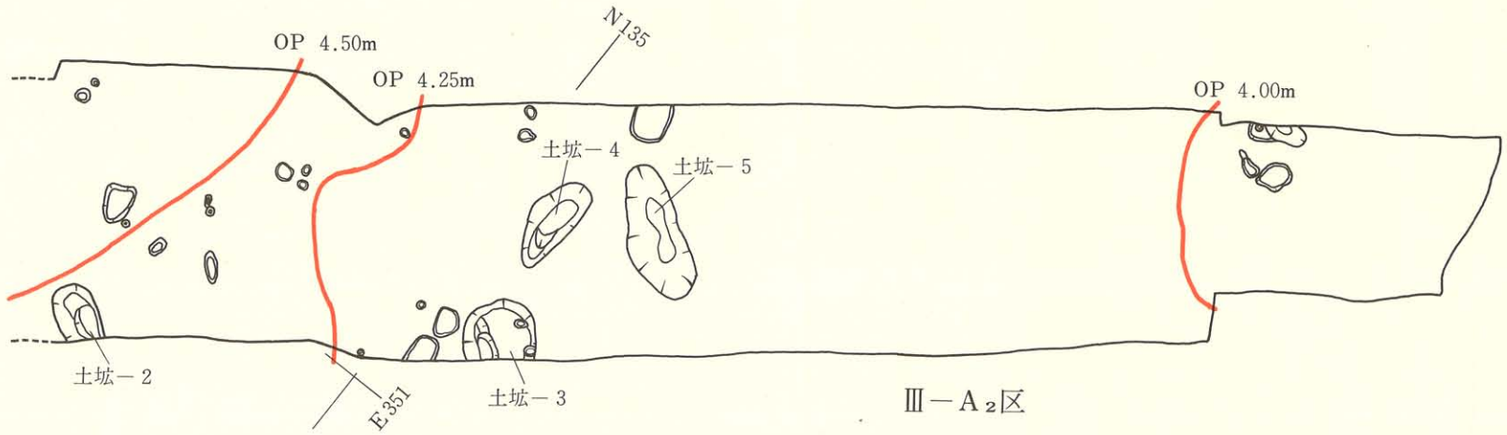
Ⅲ－A_2 区で検出した遺構は、溝が3条、土坑が5基、掘立柱建物跡1棟、その他柱穴であろうと考えられるピットや木棺墓・壺棺を各1基検出した。（第20図）

溝－1・2・3は、土坑－1から派生している状態で検出された。溝－1は調査区外へ、溝－2は溝－3に連接しており、溝－3は地山が低くなるところで消滅している。溝－1・2・3はいずれも、幅約0.2～0.3m・深さ約 0.1mの溝であり、暗褐色土層の単一層であり、弥生時代後期の土器が出土している。

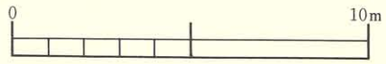


Ⅲ－A₁区





Ⅲ－A₂区



第20図　Ⅲ－A₁･₂区遺構実測図

土坑－１は、 短軸約2.4m・長軸3.8m以上・深さ約0.4mの隅丸の長方形の土坑である。内部は、暗褐色土層の単一層であり、弥生時代後期の土器が出土している。一応土坑としたが、Ⅲ－A_1 区の溝－１に続くものと考えられ、同一遺構の可能性をもっている。

土坑－２は、調査区の関係から約½を検出したのみである。短軸約１m・長軸 1.4m以上・深さ約 0.6mの楕円形の土坑で、明黒色土層の単一層であり、無遺物であった。

土坑－３も約½の検出である。短軸約２m・長軸1.6m以上・深さ約0.2mの土坑で、明黒色土層の単一層であり、無遺物であった。

土坑－４は、 短軸約1.4m・長軸約2.8m・深さ約0.5mの楕円形の土坑で、明黒色土層の単一層であり、無遺物であった。

土坑－５は、短軸約1.6m・長軸約3.9m・深さ約0.45mの楕円形の土坑で、明黒色土層の単一層であり、無遺物であった。

土坑－２・３は約½の検出であるが、土坑－４・５と共に土坑の形態が楕円形であり、また土坑内堆積においても、明黒色土層の単一層の無遺物であるということから、性格や時期が同一であると考えられる。

木棺墓は、短軸約1.4m・長軸約3.6mの隅丸の長方形の土坑内から、木棺の小口板・底板を検出したものである。木棺は、先ず土坑を掘り、両短辺の内に小口板のための掘り方を作り、小口板を立て、次に小口板と小口板の間に底板を入れている。さらに検出することは出来なかったが、側板を底板の両長辺に立て、最後に蓋板を被せたものである。土坑内・木棺内から遺物の出土が認められず、明確な時期は不明である。

壺棺は、弥生時代中期の壺形土器２個体を縦位置に合せ口にしたものである。壺棺の掘り方を検出することは出来なかった。

調査区の北辺の、比較的高いところに径0.1～0.4mの柱穴を検出した。その多くは径 0.2～0.3mのものであり、 出土遺物はほとんどみられないが一部に柱痕が残っていたものがある。掘立柱建物跡として認めることが出来たのは、２間×３間の建物跡である。しかしながら、前述のごとく遺物の出土をみないため、時期は不明である。

第６節　Ⅲ－B区

１　調査経過

Ⅲ－B区は、調査区内を幅 7.5mの道路が南北に縦走し、かつ遺構面が深いために約25mの間が途切れ、北側をⅢ－B_1 区、南側をⅢ－B_2 区と分けて調査を実施した。

Ⅲ－B_1 区は、現地表面で幅14m・長約30mとするが、最終的には幅５m・長15mで約75㎡の調査区となった。昭和53年８月25日、約 2.2mの造成土を重機によって除去を開始した。一部さらに掘り下げた結果、耕土面下約 0.5mより激しい涌き水が生じ、遺構面がさらに深いことから、土砂崩壊防止のためにレール打ちと矢板の設置が必要となる。９月２日、土留め作業

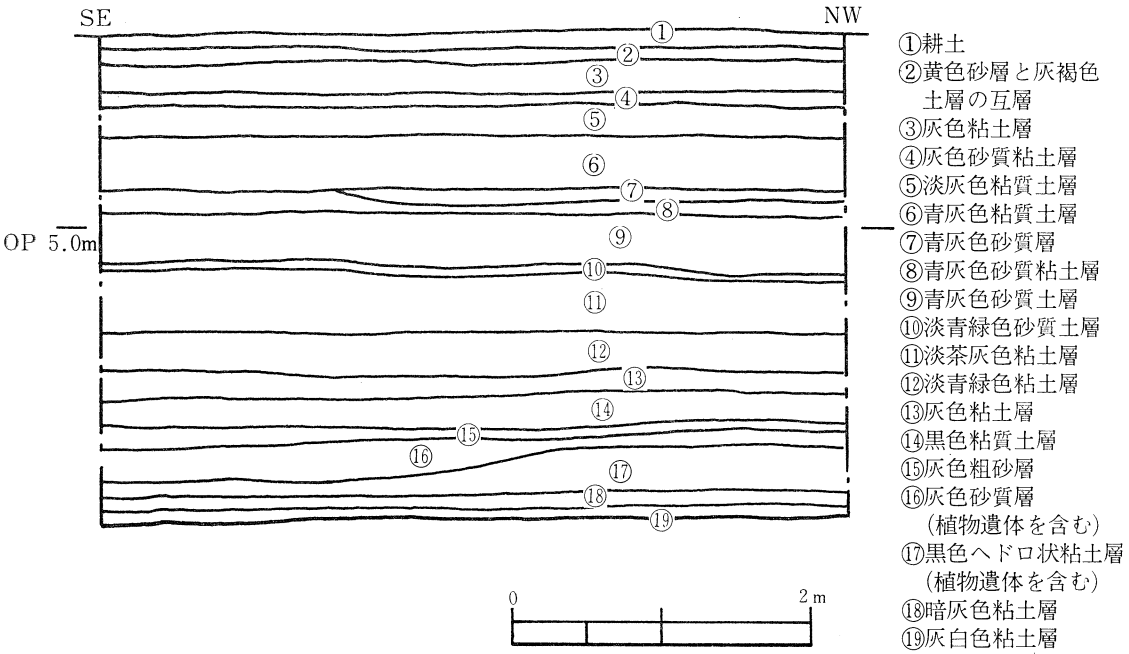
を実施しながら、幅1.2mの段を残し、さらに約1.5m掘り下げる。9日～14日まで手掘りによる掘り下げを実施し、最終面の淡灰白色粘土層を検出。18日、遺構・遺物とも全くなく写真撮影・図面作成を実施し9月20日に終了した。

Ⅲ－B_2 区は、現地表面で幅10～22m・長約28mとするが、最終的には幅5～7m・長約24mで約 160㎡の調査区となる。9月26日、耕土下の無遺物層の取り除きを重機によって開始。耕土下 1.5mの砂層より激しい湧き水が生じ、土留め作業が必要となる。10月3日、土留め作業中、大型溝状遺構の検出。9日、溝状遺構の写真撮影・図面作成を実施。17日、重機により土留め作業を行ないながら、さらに2m掘り下げる。24日～11月7日、手掘りによりさらに約1.2m掘り下げ、最終面の青白色砂質層を検出。11日、溝状遺構・土坑を検出し、写真撮影・図面作成を実施し、11月15日全作業を終了した。

2　層位

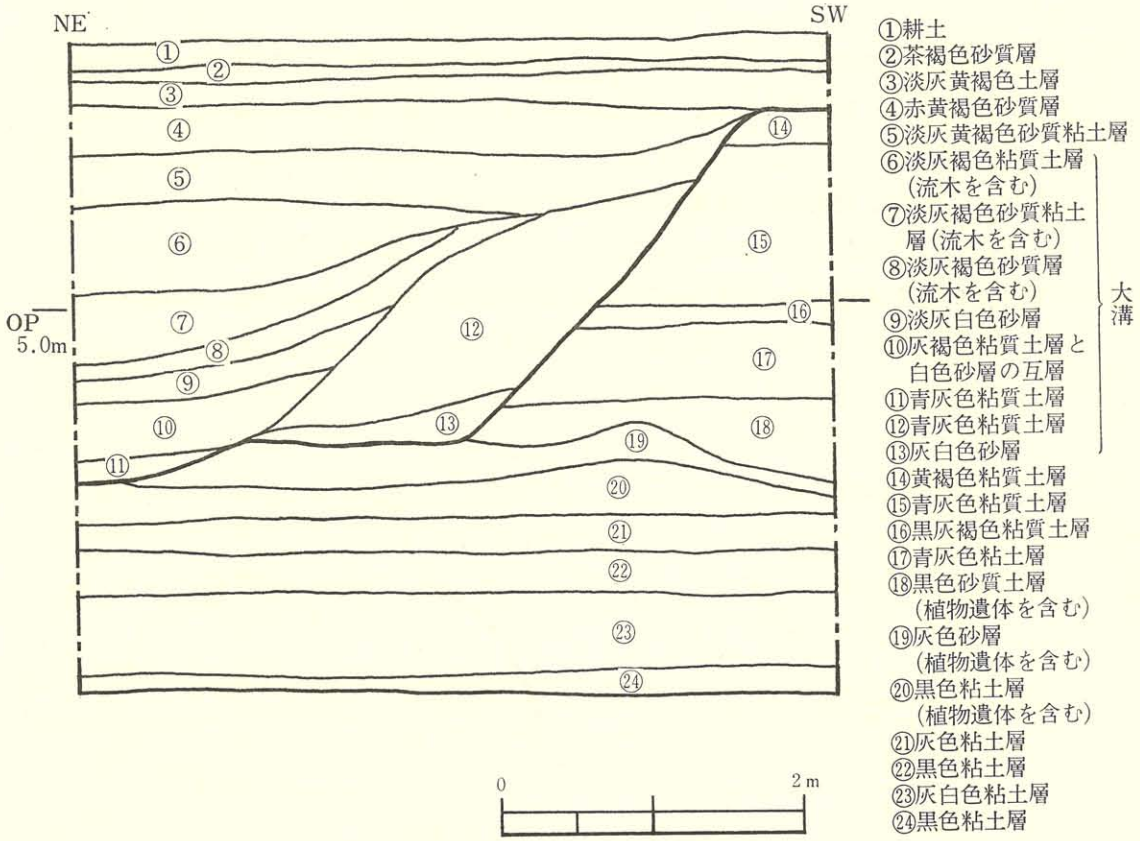
Ⅲ－B_1 区の土層調査は、南面約16mを使って実施した。耕土面は標高 6.3m前後に位置する。層位を下層からみると、最終面と考えられる灰白色粘土層は標高3.25mに位置し、北より南へ僅かに低くなる。上層に、全く遺物を含まない5層に分けられる黒色粘土層と灰色粗砂層（いずれにも木葉・植物繊維等を多量に含む）の互層が約 0.7m堆積する。さらに床土下層までの約 2.2mに、同じく全く遺物を含まない14層に分けられる青灰色粘土層・灰色粘質土層・灰色砂層がフラットに互層状態を成し、床土・耕土へと続く。（第21図）

Ⅲ－B_2 区の土層調査は、北面の約28mを使って実施した。当調査区は造成土がなく耕土面



第21図　Ⅲ－B_1 区西壁面土層図

の標高 6.6mに位置する。層位を下層からみると、弥生時代後期以前の最終生活面の青白色砂質層は、標高2.75mに位置する。上層は、弥生時代後期の土器を少量包含する黒色粘土層・灰色砂層・灰色粘土層（いずれも木葉・植物繊維等を含む）の互層が約 1.5～2ｍ堆積する。次に、青灰色粘土層・黒灰褐色粘土層が互層状態で約 1.8m続き、中世以降の生活面の黄褐色粘土層（0.2m）が堆積し、床土・耕土へと続く。（第22図）

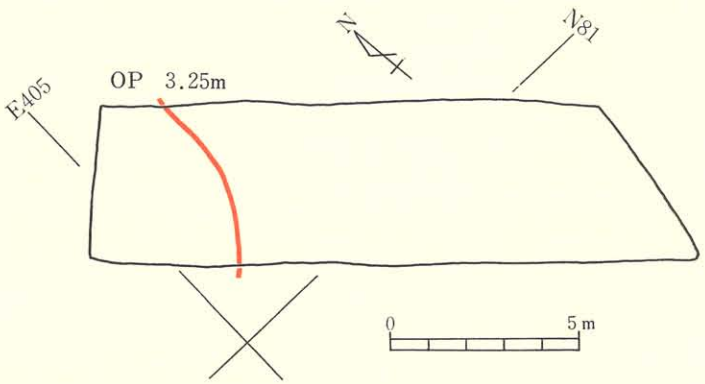


第22図　Ⅲ－Ｂ２区東壁面土層図

3　遺構

Ⅲ－Ｂ１区は、遺構・遺物は全く検出されなかった。Ⅲ－Ｂ２区も、中世頃の大型溝状遺構以外に、溝１条が検出されたのみである。（第23図・第24図）

大型溝状遺構は、Ⅲ

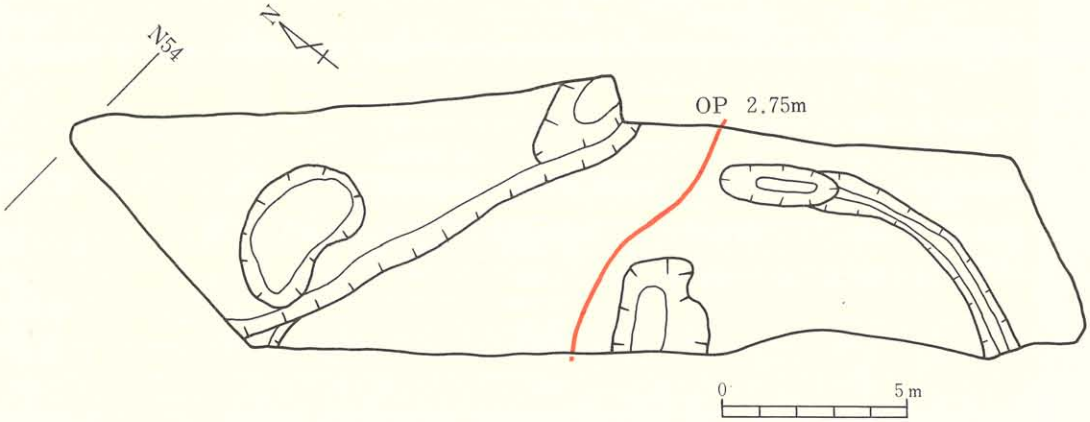


第23図　Ⅲ－Ｂ１区遺構実測図

—B$_2$ 区の北端で検出された。規模は、大部分が調査地区外に位置するため定かでないが、幅10m以上・深さ３m以上のほぼ南北に走る大型の溝である。溝東肩は、黄褐色粘土層よりなだらかに約２m落ち込み、１m前後の段（一部抉られている箇所もある）をもち、さらに底へ落ち込む。溝内には、11層に分けられる堆積層がみられ、淡灰褐色粘質土層より多量の流木が出土したが、他は無遺物層であり、僅かに溝肩段より鎌倉時代頃の瓦器椀が１点出土したのみである。

他のⅢ—B$_2$ 区の遺構は、最終面の青白色砂質層の面に、幅0.6m・深さ0.1mの浅い溝が、弓状に検出された。出土遺物はなく、時期は不明である。他は、自然地形の落ち込みが検出されたのみである。

Ⅲ—B$_{1\cdot2}$ 区は、層位からみて弥生時代後期以前には、さきのⅢ—A$_2$ 区よりなだらかに地形が下った標高３m以下の谷底のような所であった。そこに、黒色粘土層と砂層の互層状態が示すように、周囲から土砂が流れ込み沼地のような状態であったと考えられる。その後、中世の鎌倉時代頃までに、土砂が約２m堆積し、現地形近くまでになったと考えられる。



第24図　Ⅲ—B$_2$ 区遺構実測図

第Ⅳ章　遺構及び遺物

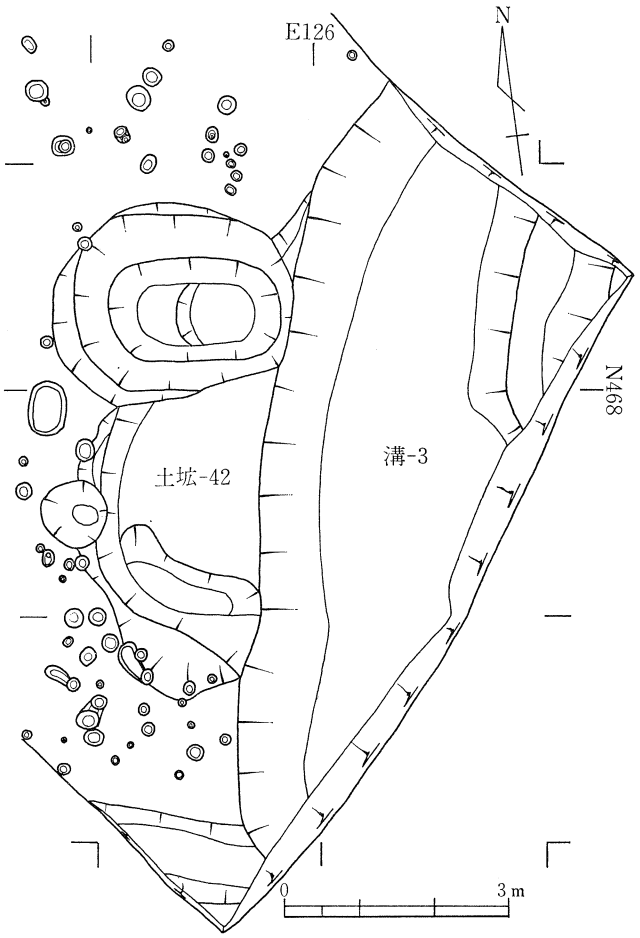
第1節　溝—3（Ⅰ—B区）

1　遺構

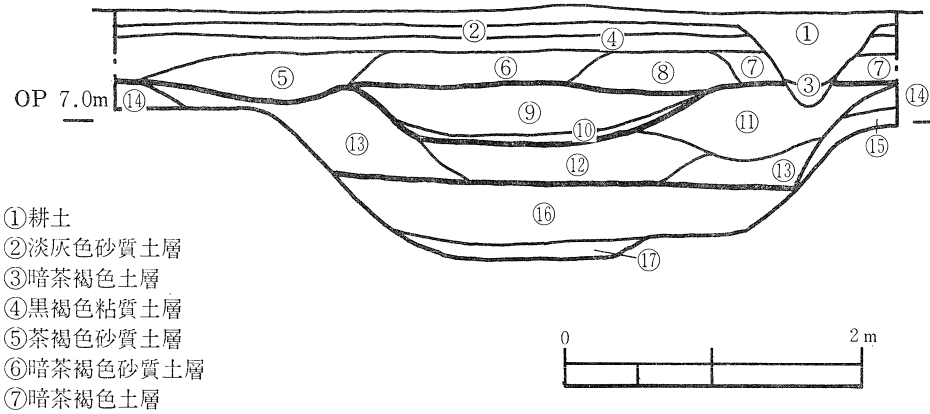
溝—3は、弥生時代前期から古墳時代前期にわたる多数の柱穴跡・土坑等がとぎれるⅠ—B区の東端に位置する。調査は、上記の遺構が溝の西肩と重複して検出されたために、遺構を残したままと、取り除いた後との2回に分けて行なった。

溝—3は、調査地区内をN—14°—Eの方向に縦走し、南端で方向をやや東に変える。上口の幅4.2m・深さ1.2m・底幅1.2m・底部の平均標高6.140mを測る大型のU字形溝である。また溝の底は、平坦であるが、僅かに北より南へ低くなっている。（第25図）

溝—3の堆積層は、自然堆積したヘドロ状の粘質土層と砂質層からなり、10層以上に細分できる。しかし、調査段階では、この層位を区別することが困難であったことから、上面より0.4～0.5m単位の深さで、上・中・下の3層に分けて調査を行なった。また、出土遺物の取り上げも、その層位に従って実施した。このために、出土遺物については、層位差が不明確で、一括の遺物としての性格が強い。出土遺物は、上・中・下の各層から弥生時代前期（唐古第Ⅰ様式）の土器が多量に出土した。（図版55～67）また上層からは、今回記載していないが、少量の弥生時代中期の土器が出土している。この土器は、溝—3埋没後に造られた溝に包含されていたものであったことが、後に層を詳細に検討した結果判明した。他に、各層から石器



第25図　遺構実測図



①耕土
②淡灰色砂質土層
③暗茶褐色土層
④黒褐色粘質土層
⑤茶褐色砂質土層
⑥暗茶褐色砂質土層
⑦暗茶褐色土層
⑧茶褐色土層
⑨黒色粘質土層
⑩茶褐色砂層
⑪灰黄褐色土層(ブロック)
⑫暗灰色粘質土層
⑬灰褐色砂質粘土層
⑭茶褐色土層と黄褐色土層の互層
⑮茶褐色土層と黄褐色粘質土層の互層
⑯暗青灰色砂質層
⑰黒色腐植粘土層

⑨⑩上層　⑪～⑬中層　⑯・⑰下層

第26図　北　壁　面　土　層　図

（第31・32図）と獣骨（鹿・猪）が出土した。（第26図）

溝－3の形成から廃絶の過程を、層位と出土土器から考えてみると、まず、弥生時代前期中段階後半から新段階に築造された。しかし、用排水の溝でなかったために、溜り水と周囲からの土砂の流入、さらに土器・獣骨等の廃棄が行なわれたことにより徐々に埋まっていった。その間に、溝の肩を修正し、溝内の土砂の取り除きを一度行なっていることが、溝の肩に盛土がみられることや堆積土の下層上面が不自然にフラットに切られている点から考えられる。しかし、その後は改修等が行なわれることもなく、弥生時代中期前半頃までには、同じく自然堆積と土器・獣骨等の廃棄が続き、溝の大部分は埋没した。弥生時代中期中葉になると溝－3は、後述する他の溝のように、溝の上面を埋め固めて生活面として利用することもなく、溝の上面に規模は小型ながら幅約2m・深さ約0.3mの溝が掘り込まれ、新たな溝として使用された。

別　　項

各溝出土土器の器種区分

出土土器について述べる前に、各器種における区分について記述しておきたい。

今回出土の前期弥生式土器は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、壺用・甕用蓋形土器によって構成されている。

壺形土器、甕形土器、鉢形土器は、有頸のものと無頸のものに分け、前者をA、後者をBとした。さらに細分することは、出土土器が多いにもかかわらず完形になるものが少ないため避け、一様式内の変化として大きく捕えることに終始したが、他器種を含めて今後検討してゆきたい。区分した形態については、以下の通りである。

壺形土器A$_1$　比較的短く開きの少ない口頸部、胴の張った体部をもつ古い様相を呈するもの。

A$_2$　さらに新しい様相を呈し、口頸部、体部ともに発達する過程のものや口縁部が長く大きく外反し胴の張りも大きく扁平になる体部をもつものを含む。

A$_3$　細長くなった頸部から大きく外反する口縁部、球形の体部をもち、第Ⅱ様式の壺形土器との接近が考えられるもの。

A$_4$　A$_1$ を著しく大形にした形態のもので、口径30cm内外と非常に広口で、くびれの曖昧な頸部から外上方へ開く口縁部をもつ。

B$_1$　内弯する口縁部、丸い体部をもつ無頸壺。

B$_2$　短く立ち上がる口頸部、丸い体部をもつ。

甕形土器A　外反する口縁部、倒鐘形の体部をもつもの。

B　直口で、倒鐘形の体部をもつもの。

C　口縁端部外面に貼り付け突帯を施す逆Ｌ字状の口縁部、倒鐘形の体部をもつもの。

鉢形土器A　外反する口縁部、倒鐘形及び丸い椀形の体部をもち、口径が器高を上まわるもの。

B　直口で、丸い椀形の体部をもつものと底部から外上方に開くもの。

なお、高杯形土器、壺用・甕用蓋形土器は、点数が少ないため区分しなかった。各器種ともに口径、器高が10cm前後のものは、小型品として取り扱い各器種構成表、壺形土器と甕形土器の施文類別点数表及び図[註1]は、各土器の項の後にまとめた。

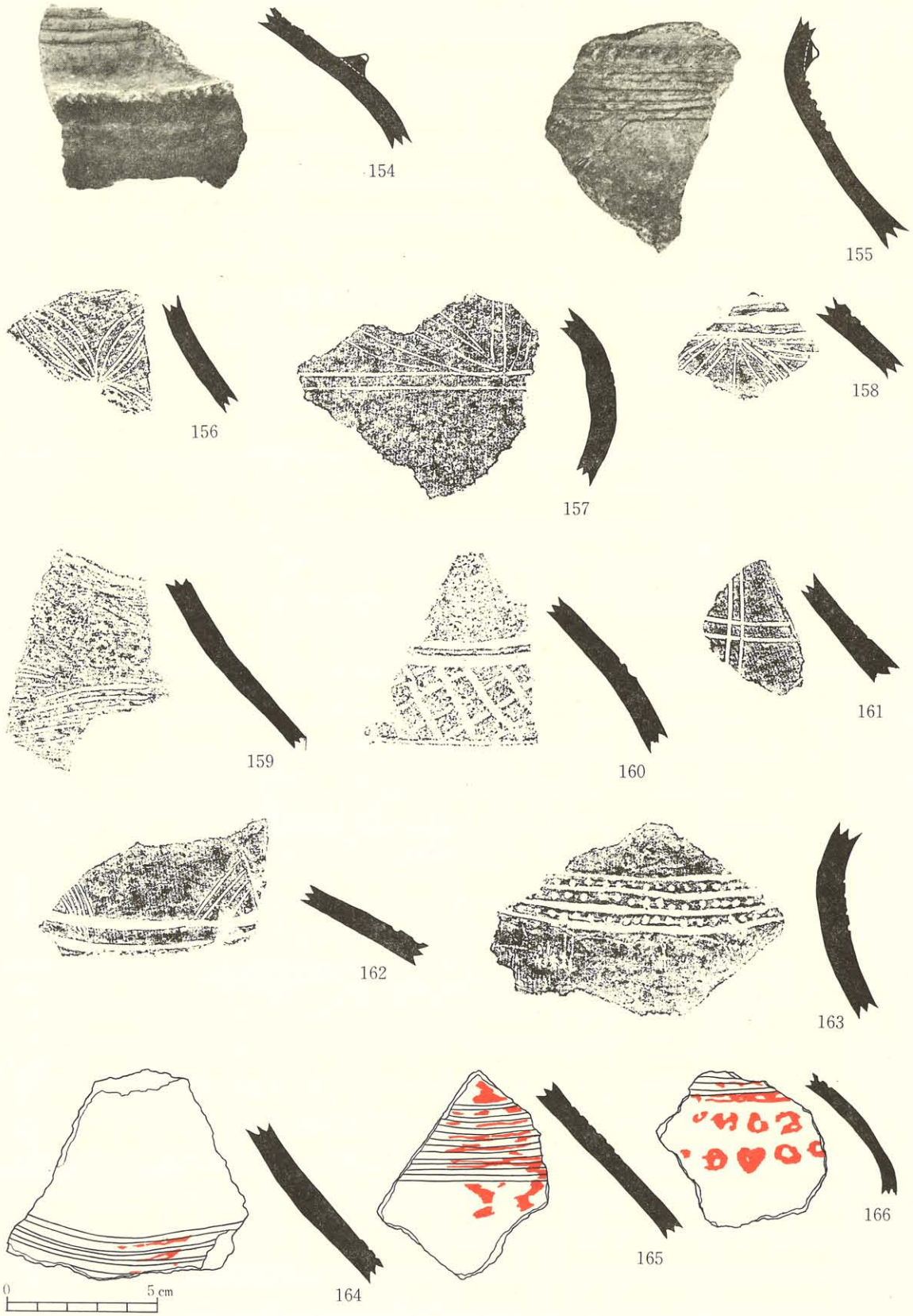
上記のことは、各節の土器の項に共通するものである。

註　1）　各器種の形態や製作技法なども考慮すべきであるが、出土土器量が多いにもかかわらず完形に復元できるものが少ないため、施文法を中心にまとめた。表、図の数値は、口縁部と頸部の施文が明確なものを１点とした。

2　土器

溝―３は、検出状態にもかかわらず、その遺物包含量は、他の溝に比べ群を抜いている。遺物数量は、およそコンテナバット（35×45cm）で約30箱である。破片数は非常に多いが、完形に復元しうるものは殆んどない。遺物は、上・中・下、３層に分けて取り上げており、図版も３層に分けて扱ったが、各層間に間層はなく、完全に分離した状態の層位関係ではないのと、各層の土器の混在等の状況から一括して述べることにした。最上層の中期の溝の混入遺物を除いて、すべて唐古第Ⅰ様式に帰属する。個々の土器に関しては、土器観察表を参照されたい。

壺形土器A$_1$　（図版55―１、８、図版65―112）



第27図　壺 形 土 器 の 文 様

口、頸部間に段をもつもの（1、112)、沈線文を施すものがある。この段は、沈線をめぐらし、その下側をヘラで押さえ成形するため頸部側が低くなるが（8）は、沈線の上側をヘラで押さえ成形するため口縁部側が低い。また、頸、胴部を区画する文様もなく、体部も球形を呈する特殊な形態である。

壺形土器A$_2$　（図版55—4、5、7、図版56—11、13、図版59—45、47～52、56、57、図版60—60～63、65～67、図版65—113～117、119、120、124、図版66—125～128、第27図—154、155）

削り出し突帯を施すもの（47)、削り出し突帯上に沈線文を施すもの（4、5、45、48～50、113～116）があり、沈線文間に刺突文を施すもの（116）もある。沈線文を施すもの（7、51、52、56、117、119）、貼り付け突帯を施すもの（11、57、62、63、65、124～126）、貼り付け突帯と沈線文を併用したもの（54、155）がある。（128）は、内部に土器の細片とベンガラの混ったものが遺存している。貼り付け突帯には、突帯付加前に沈線をめぐらし、その上に付加する場合と、沈線をはさんで複数の突帯を付加する場合（124）があり、沈線上に幅広い粘土紐を貼り付け、そこから2本の突帯を作り出すもの（126）もある。(66、120、126）は、口縁部内面にも突帯を付加する。この突帯は、一周せずその一方が開き、先端は渦文状になる。突帯上には、何も施さないもの（11、57）と、刻目（13、63、124)、布目圧痕（62、65、66）をもつものがあり、また棒状の施文具を横方向に押捺した稀なもの（67）もある。口縁端面に沈線文（47、113、115）、刻目（114）、短線と沈線文（120）を施すもの、口縁部に紐孔を穿つものもある。また、やや小型のもの（60、61）もみられ、（60）は、やや古相を呈すると思われる。

壺形土器A$_3$　（図版55—6、9、10、図版59—59）

沈線文を施すもの（9、10、59）ゆるい削り出し突帯上に沈線文を施すもの（6）もある。

壺形土器A$_4$　（図版59—53～55、図版65—118）

沈線文を施すもの（53～55、118）がある。（54）は、やや小型である。

これら壺形土器の頸胴部破片に木葉状文（第27図—156～158）、縒縄文（第27図—159)、斜格子文（第27図—160）、直線を縦横に組み合わせた文様（第27図—161）、鋸歯文（第27図—162）などのヘラ描き文様や、沈線間に刺突文を施すもの（第27図—163）があり、また削り出し突帯上の沈線文間（第27図—164、165)、円形文（第27図—166）を彩色するもの、体部中位の貼り付け刻目突帯を中心に、上下交互に縦位の貼り付け刻目突帯2本一組が施され、突帯間に2本一組の彩線を配し、突帯周辺を彩色するもの（図版56—14）。

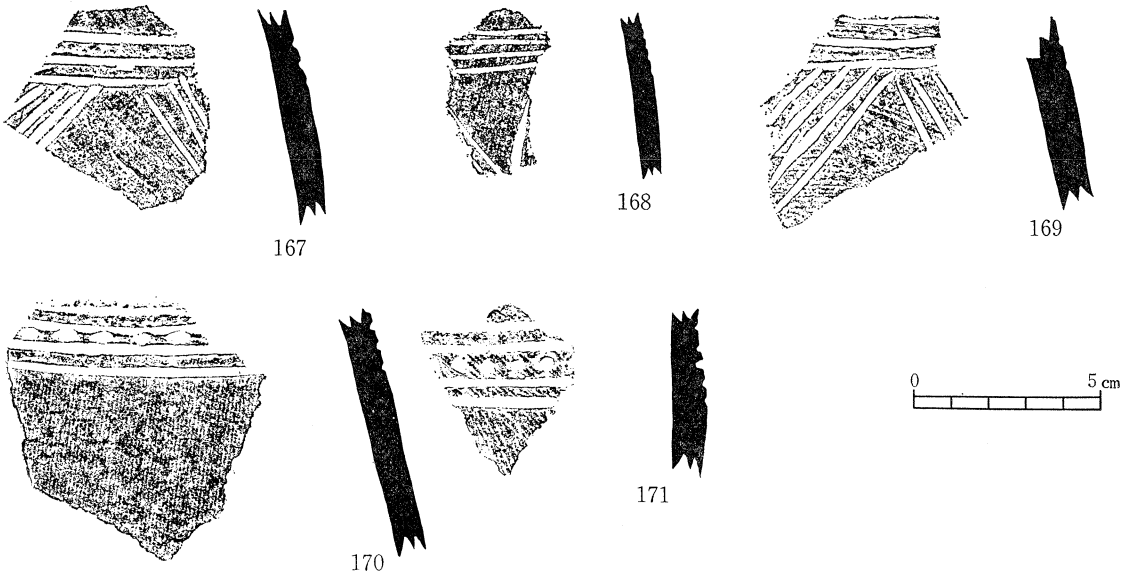
壺形土器B　（図版60—68、69、図版66—127）

無文で、口縁部に2個一組の紐孔を相対位置に穿つ。

甕形土器A　（図版56—15～26、図版57—27、28、30、31、図版60—71、図版61—73～82、図版62—86～92、94、図版63—95～97、図版66—129～139、図版67—140～142、第28図—167～

171）

口縁端部に刻目をもつものが大多数を占めるが、沈線文を施すもの（136）もある。頸部に施文されないもの（30、31、71、73～76）、中でも（75、76）は、古相を呈する。削り出し段、突帯上に沈線文を施すもの（26、30、135～137）で、頸部に円孔を穿つもの（136）もある。沈線文を施すもの（15～25、77～92、95、129～134）が殆んどである。沈線文は3～4条が最も多く、多条のものは、11条に達するものも認められる。また帯状沈線文を施すもの（94、138）、沈線文間に平行斜線文を施すもの（139、167～169）、刺突文を施すもの（170、171）、「V」字形を連ねた文様をもつもの（87）もある。底部に焼成後穿孔したもの（96、97、140～142）もある。



第28図　甕形土器の文様

甕形土器B　（図版60—71）

無文で、口縁部直下に横位の耳状把手を相対位置にもつ。

甕形土器C　（図版57—29、図版62—85、93）

口縁端面に刻目と沈線文を合わせもち頸部に沈線文を施すもの（29、85）と、帯状沈線文を施すもの（93）がある。これらは、兵庫県西南部に多く見られる、断面が三角形に突出する口縁部の形態とは、やや様相を異にする。[註1)]

鉢形土器A　（図版57—37、38、図版58—39～43、図版63—102、104～107、図版64—109～111、図版67—151～153）

頸部に施文しないものと、沈線文を施すもの（39～41、43）があり、沈線文4条を越えるものはない。頸部に横位の耳状把手を相対位置にもつもの（37、42、106、110、111）がある。（111）は、二対、（110）は、三対もつ。また（105）は、口縁部と頸部に縦位に円孔を穿つ。

鉢形土器B　（図版57—36、図版63—103、108、図版67—149、150）

施文しないものと曖昧な段に沈線文を施すもの（149）がある。

壺用蓋形土器（図版57—32、33、図版63—98、99、図版67—145～148）

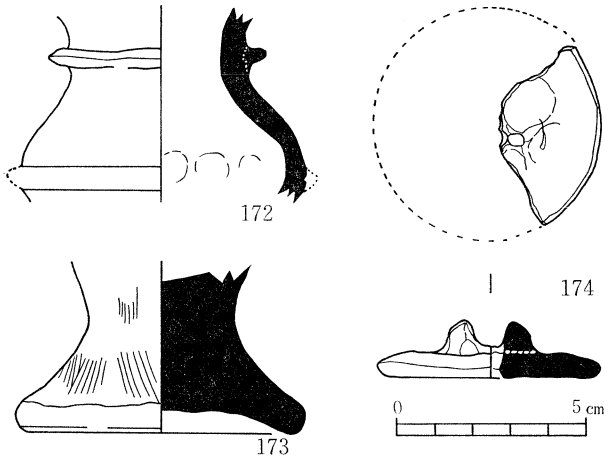
笠形と円盤形の二種がある。（32、33）は、四頭のつまみを、（98、99）は、環口状のつまみをもち、いずれも中心に円孔1個を穿つが、（33）は、中心に円孔を穿たず、口縁部に2個一組の紐孔をもつ。（147）は、口縁部に沈線文をめぐらし、（148）は、同重弧文を施す。（146）は、沈線文をめぐらした内に木葉状文を描き彩色される。（145）は、口縁部に2個一組の紐孔を穿つ。

甕用蓋形土器　（図版57—34、図版63—100、101、図版67—143、144）

外下方に大きく開く笠形を呈し、つまみ部上面が凹むものが多い。無文が通例であるが、つまみ部直下に沈線文を施すもの、つまみ部に円孔を穿つもの（100、143）もある。

小型品　（図版57—35、第29図—172～174）

通常の壺と変わりないつくりで、頸部、体部中位に貼り付け突帯を施すもの（172）と、粗雑なつくりの無頸壺形土器（35）やや上げ底で中実の脚台（173）、円盤形で複数の瘤状つまみをもつ蓋形土器（174）がある。



第29図　小　型　品

円板形土製品　（第30図—175～182）

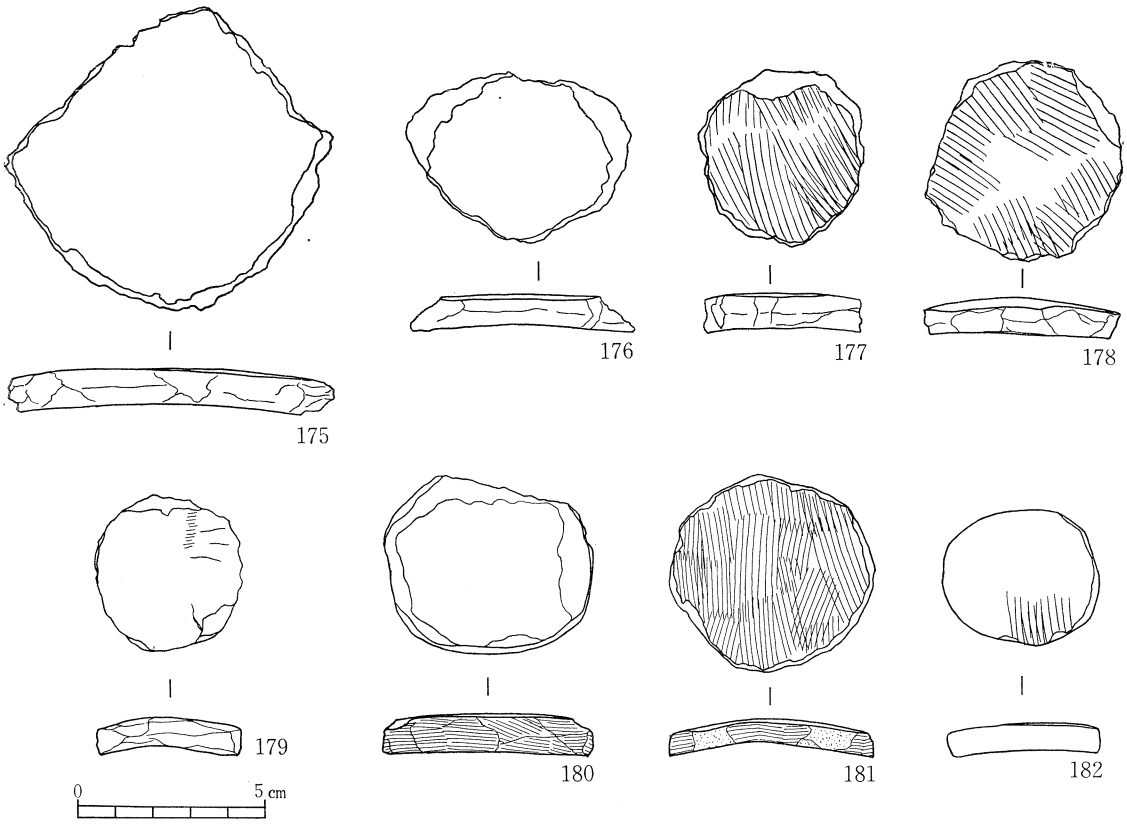
壺、甕、鉢形土器の破片を再利用したもので、荒く打ち欠き、不整円形のもの（175～178）、一部研磨したもの（180、181）、周縁を丁寧に研磨したもの（182）があり、土器片を再利用する紡錘車の製作過程を伺い知る事ができる。

註　1）　自見の結果、口縁端面に刻目をもつ近似したものはみられたが、幅広い口縁端面に沈線文と刻目を併用する例はなかった。

「千代田遺跡」　杉原荘介・小林三郎　『日本農耕文化の生成』　1961

「砂部遺跡」　加古川市教育委員会・加古川市文化財保護協会　昭和53年3月

岡崎正雄氏、秋枝芳氏、加古川市教育委員会の御協力によって数多くの発掘資料を拝見する機会を得、かつ御教示いただいた。



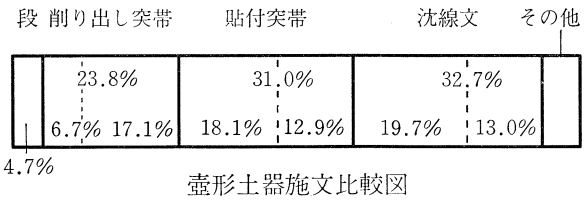
第30図　円　板　型　土　製　品

	遺構名 / 文様		溝 — 3
壺	沈線文	1条	3
		2条	9
		3条	13
		4条	12
		5条	9
		6条以上	17
	段＋沈線文	段のみ	6
		1条	0
		2条	1
		3条	2
	貼付突帯	刻目あり	21
		刻目なし	14
		布目圧痕	25
	貼付突帯＋沈線文	刻目あり	4
		刻目なし	1
		布目圧痕	1
	削り出し突帯段上沈線文	突帯のみ	11
		1条	7
		2条	7
		3条	8
		4条	3
		5条以上	10
	突帯上斜格子文		1
	木葉状文		5
	木葉状文＋沈線文＋平行斜線文		1
	沈線文間刺突文		2
	削り出し突帯＋段		0

壺形土器施文類別点数表

	刻目 / 文様		溝 — 3 有	溝 — 3 無
甕	沈線文	0条	43	24
		1条	16	2
		2条	17	2
		3条	45	2
		4条	38	1
		5条	13	1
		6条以上	13	1
	平行斜線文		3	
	沈線文＋段		3	
	沈線文間刺突文		0	
	段のみ		0	

甕形土器施文類別点数表



壺形土器施文比較図

壺形土器	甕形土器	鉢形土器	高杯形土器	壺用蓋形土器	甕用蓋形土器
219 33.9%	305 47.2%	83 12.9%	2 0.3%	28 4.3%	9点 1.4%

器種構成比率表

第3表　各器種と各施文の構成とその割り合い

土　器　観　察　表

（　）内は、現存値

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
55 — 21 1	14.1 — — (6.7)	口縁部は、短くゆるく外反する。狭い口端面をもち、端部は丸くおさめる。口頸部界に、削り出されたゆるい段をもつ。	口縁端部両面ともナデ。口縁部内面は、横方向のヘラミガキ、外面は、刷毛目後横方向のヘラミガキ。	黄褐色 粗砂含 良好、堅緻
55 — 21 2	13.5 — — (4.9)	口縁部は、短くゆるく外反する。狭い口端面をもち、端部は、丸味をもつ。	口縁端部両面ともナデ。口縁部内面は、横方向のヘラナデ、外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。口頸部界に、沈線文1条と口縁端部に、沈線文1条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好、堅緻
55 — 21 3	17.6 — — (3.9)	口縁部は、外方へ大きく開き、丸味をもった端面をもつ。	口縁端部両面ともナデ。口縁部内外面とも横方向のヘラミガキ。口縁端部に沈線文1条を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を内から外へと穿つ。口縁端部内外面に、彩色を施す。	黄褐色 粗砂含 良好、堅緻 内面に、黒褐色物質の塗布。
55 — 16 4	21.5 — — (13.2)	頸部よりゆるやかに大きく開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内面は、横方向の密なヘラミガキ外面は、縦方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ、上半はナデ。頸部内外面とも、粗い刷毛目及びナデ後横方向のヘラミガキ。頸部の削り出し突帯上に沈線文5条を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。(内から外)	茶褐色 粗砂含 良好、堅緻
55 — 16 5	21.5 — — (11.9)	頸部より外方へ開く口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面とも横方向のヘラミガキ、端部外上半はナデ。頸部内外面とも横方向のヘラミガキ。頸部に不完全な削り出し突帯上沈線文4条を施す。削り出し突帯下に一部赤色顔料の付着あり。口縁部に焼成前紐孔1個を内から外へと穿つ。	暗茶褐色 粗砂含 良好、堅緻 内外面に黒褐色物質の塗布。
55 — 21 6	22.4 — — (11.2)	頸部よりゆるく外反し、口縁上半でさらに弱く屈曲する口縁部。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、ナデアゲ後雑な横方向のヘラミガキ、外面は、やや密な横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文4条を施す。口縁部内面に焼成前の不貫通紐孔を穿つ。	暗灰褐色 粗砂含 良好、堅緻
55 — 16 7	21.4 — — (10.6)	筒状の頸部からゆるやかに外へ開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内面は、横方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ、外面は、上半横方向、下半縦方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ端部は内外面ともナデ。頸部内面は、ナデアゲ後横方向のヘラミガキ、外面は、縦方向の刷毛目後雑な横方向のヘラミガキ。頸部にゆるい削り出し突帯上沈線文3条を施す。	黄茶褐色 粗砂含 良好、堅緻
55 — 16 8	17.1 35.6 10.8 42.5	丸い体部からゆるやかにのびる頸部、体頸部界はない。ゆるい段を界に、短く外反する口縁部。狭い端面をもつ。底部は、大きくあげ底で、器壁は薄い。	口縁部内面は、横方向のハケ目後雑な横方向のヘラミガキ、外面は、縦方向の刷毛目後横方向の丁寧なヘラミガキ。ゆるい段は、沈線文上半をヘラで押さえ形成する。端部内外ともナデ。体部内面は、ナデアゲ、体部中央に指頭圧痕が残存する外面は、縦、斜方向の刷毛目後粗い横方向のヘラミガキ。底部内面は、指おさえされ、外面は、ヘラで軽く削り、上を粗くヘラミガキ。	淡黄茶褐色 粗砂含 良好、堅緻
55 — 17 9	20.2 23.7 — (24.8)	丸い体部で、頸部からゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもち端部は、丸くおさめる。	口縁部上半内面は密に、外面は、粗い横方向のヘラミガキ。頸、体部にかけて内面は、ナデ後やや雑な横方向のヘラミガキ、外面は、横方向のヘラミガキ。頸部に4条、体部に5条の沈線文を施す。	乳褐色 粗砂含 良好
55 — 17 10	— 24.3 8.2 17.5	丸い体部。	体部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ外面は、磨滅が著しく観察不可能。沈線文3条を施す。	淡赤褐色 粗砂含 良、やや軟質

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
56 — 21 11	— — — (9.3)	頸部からゆるやかに大きく開く口縁部。	口縁部内外面とも上半はナデ、内面下半は、ナデ後雑な横方向のヘラミガキ、外面下半は、縦方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ。頸部に貼付突帯2本を施す。突帯下は、ナデ後ヘラミガキ。口縁部に焼成前紐孔1個を内から外へと穿つ。	黄褐色 粗砂含 良好、堅緻
56 12	17.1 — — (6.8)	頸部からゆるやかに開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面とも横方向のヘラミガキ。	黄褐色 粗砂含 良好、堅緻 外面に煤付着。
56 — 21 13	— 35.0 — 8.5	胴の張った丸い体部と思われる。	内面は、ヘラナデ。指頭圧痕残存。外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、貼り付け刻目突帯3本を施す。	黄褐色 粗砂含 良好、堅緻
56 — 21 14	— — — (6.9)	胴部より、なだらかに伸びあがる頸部。	内面は、ナデアゲ後横方向のヘラミガキ外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。体部中央に刻目突帯1本を施し、その上下に刻目突帯2本1組を縦方向に4組施す突帯周辺と突帯間に2本1組の文様が赤色で描かれる。	黒褐色 粗砂含 良好 外面に黒褐色物質の塗布。
56 — 23 15	16.6 — — (10.1)	外反する口縁部。端部は丸くおさめる。倒鐘形の体部。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、横方向のヘラナデ、外面は、ナデ。口頸屈曲部に指頭圧痕残存。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	淡灰茶褐色 粗砂粒含 良好
56 — 23 16	16.4 — — (11.1)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。やや丸味のある倒鐘形の体部。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向にナデアゲ、外面は、縦方向のヘラナデ。口縁端部稜に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好、堅緻 口縁、体部外面に煤付着。
56 — 23 17	22.1 — — (6.0)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ナデ、外面は、ナデアゲ。口縁端部に刻目頸部に沈線文1条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
56 — 23 18	22.5 — — (3.9)	外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面はナデ、外面は、斜方向の刷毛目。口縁端部に刻目、頸部に沈線文1条を施す。	淡赤褐色 粗砂含 良、やや軟質 口縁部外面に煤付着。
56 — 23 19	19.4 — — (10.5)	「く」の字に外反する口縁部。内面にゆるい稜を有す。端部は、丸くおさめる。やや丸味のある倒鐘形の体部。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は横方向のヘラナデ、外面は、縦方向の刷毛目。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	黄褐色 粗砂含 良、やや軟質 口縁、体部外面に煤付着。
56 — 23 20	20.4 — — (8.6)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、やや丸味をもつ。	口縁部外面は、刷毛目後内面とともにナデ。体部内面は、ナデ。外面は、斜、縦方向の刷毛目。口縁端部に刻目、頸部に沈線文3条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
56 — 23 21	23.2 — — (6.9)	外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、丸味をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、横方向のヘラナデ、外面は、縦方向のヘラナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	淡黄茶褐色 粗砂含 良好 口縁、体部に煤付着。
56 — 23 22	20.4 — — (7.3)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向にナデアゲ、外面は、斜方向にナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文4条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
56 — 23 23	25.2 — — (8.3)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向にナデアゲ、外面は、斜方向にナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文4条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
56 — 23 24	21.5 — — (7.0)	ゆるく外反する口縁部。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、磨滅のため不明、外面は、縦方向の刷毛目口縁端部に刻目。頸部に沈線文5条を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良、やや軟質 口縁、体部外面に煤付着。
56 — 23 25	24.6 — — (6.9)	外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、横方向のナデ、外面は、斜方向の刷毛目。口頸屈曲部外面に指頭圧痕残存。口縁下端部に刻目。頸部に沈線文4条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好、堅緻 外面全体に煤付着。
56 — 23 26	24.6 — — 13.2	外反する口縁部。端部は丸くおさめる。倒鐘形の体部と思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、磨滅のため不明、中央部に指頭圧痕のみ残存。外面は、頸部から縦、斜方向の刷毛目、一部ナデ消す。口縁端部に刻目。頸部に、不完全な削り出し突帯上に沈線文3条を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
57 — 23 27	27.1 — — (8.1)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、やや丸味をもつと思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は斜方向のナデアゲ、外面は、斜方向のヘラナデ。口縁端面に刻目。頸部に沈線文4条を施す。	乳褐色 粗砂含 良好 体部外面に煤付着。
57 — 23 28	27.5 34.0 — (37.0)	ゆるく外反する口縁部。丸味のある狭い端面をもつ。最大腹径は、体部中位よりやや上にあり、丸味をもつ。	口縁部内外面ともナデ。頸部内面は、指おさえ後に横方向のナデ、外面は、斜方向の刷毛目。体部内面は、ナデアゲ、外面は、縦、斜方向の刷毛目。口縁端部に刻目、頸部に沈線文6条を施す。	黄褐色 粗砂含 良好、堅緻 煤の付着は、全く見られない。
57 — 23 29	16.0 — — (8.3)	内弯ぎみの口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は磨滅のため不明、外面は、刷毛目後ナデ口縁直下外面に貼り付け突帯をもつと思われる。頸部に沈線文8条を施す。	黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
57 — 23 30	18.4 — — (9.9)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。倒鐘形の体部と思われる。	口縁部内面は、横方向、外面は、斜方向の刷毛目後ナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ、外面は、斜方向の刷毛目。体部下半の器壁の一部が剝落している。口縁端部に刻目を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。体部内面に一部付着物。
57 — 23 31	21.6 — — 15.0	ゆるく外反する口縁部。狭い口端面をもち、下端部は、やや波状を呈し、いびつである。倒鐘形の体部。	口縁、頸部内面は、横、斜方向の刷毛目外面は、ナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、外面は、縦方向の刷毛目。	茶褐色 粗砂含 良好、堅緻 体部中位にうすく煤付着。
57 — 27 32	14.0 — — 4.3	笠形を呈し、四頭のつまみをもつ、つまみの中心に円孔を1個穿つ。(外→内)	口縁端部内外面ともナデ。つまみから口縁部にかけて外面は、横方向のヘラミガキ、内面も横方向のヘラミガキ。	淡灰褐色 細砂粒含 良好、堅緻
57 33	11.5 — — 3.0	笠形を呈し、四頭のつまみをもつ。	口縁端部内外面ともナデ。つまみから口縁部にかけて内外面とも、ナデ後横方向のヘラミガキ。口縁端部に焼成前紐孔2個1組を外から内へと穿つ。	乳褐色 粗砂含 良好
57 34	19.9 — — (5.7)	外下方へ大きく開く口縁部、端部は、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。体部内面は、横方向の刷毛目後ヘラミガキ、外面は、斜方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ。	暗茶褐色 粗砂含 良好 口縁部内面に煤付着。

図版番号 実測図一写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
57 35	5.8 10.0 5.8 9.5	丸い体部からつまみ上げられた口縁部。底部は、やや突出した平底。	口縁部内外面ともナデ。内面にしぼり目がみられる。体部内面は、横方向のヘラナデ、外面は、縦方向の刷毛目後粗にヘラミガキ。底部内面には、指頭圧痕残存外面は、ヘラナデ。体部内外面とも粘土紐の痕跡が顕著である。	淡赤茶色 細砂粒含 良好 体部内面に付着物。
57 — 18 36	12.5 — 7.0 8.8	直口で底部から外上方へやや開きぎみに口縁に至る。底部は、わずかに中央が凹む平底。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、横方向のナデ、外面は、横、縦方向の刷毛目後横方向の粗雑なヘラミガキ。底部内面は、指押さえ、外面は、ナデ。	茶褐色 粗砂含 良好、堅緻
57 — 19 37	23.0 — 6.2 14.7	ゆるやかに外反する口縁部。底部から外上方に開き口縁に至る体部底部は、平底で器壁がやや薄い。頸部に一対の横位の扁平な耳状把手をもつ。	口縁部外面は、ナデ。体部内面は、斜方向のヘラミガキ、口縁まで至る、外面は横方向のヘラミガキ。底部近くは、指押さえ。底面は、軽いヘラケズリ後、雑なヘラミガキ。	淡赤褐色 粗砂粒含 良好、堅緻
57 — 19 38	19.6 — 7.0 10.3	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。底部から外上方に開き、口縁に至る体部。突出した平底。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面はナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ。底面は、指押さえ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
58 — 26 39	37.0 — — (7.8)	外反する口縁部。狭い口端面をもつ。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は横方向のナデ、外面は、ナデアゲ。口縁端部に刻目、頸部に沈線文1条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 煤、付着物は、全くみられない
58 — 26 40	37.4 — — (6.1)	ゆるやかに外反する口縁部。狭い口端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内外面とも横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文2条を施す。	淡黄茶灰色 粗砂含 良好
58 — 19 41	38.2 — — (25.8)	外方へ屈曲する口縁部。内面にゆるい稜を有す。狭い口端面をもつ。体部は、倒鐘形を呈す。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は横方向のヘラミガキ、口縁部に至る。外面は、ナデアゲ。頸部に沈線文2条を施す。	赤褐色 粗砂含 良好
58 — 26 42	40.2 — — (6.8)	外反する口縁部。狭い口端面をもつ。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は斜方向にナデアゲ、外面は、斜方向のヘラナデ。口頸屈曲部外面に指頭圧痕残存頸部に沈線文4条を施す。	淡赤黄褐色 細砂粒含 良好
58 — 26 43	40.0 — — (13.8)	ゆるく外反する口縁部。狭い口端面をもつ。丸味のある体部。横位の耳状把手をもつ。	口縁部内外面とも斜方向の刷毛目後ナデ体部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ外面は、斜、横方向の刷毛目後雑なヘラミガキ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
59 — 21 44	13.2 — — (6.2)	頸部からゆるやかに短く外反する口縁部。端部は丸くおさめる。	口縁端部は、ナデ。口縁部内面は、頸部にかけてナデ後横方向の雑なヘラミガキ外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。頸部外面は、斜方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文2条を施す。	赤茶褐色 粗砂含 良好
59 — 16 45	15.3 — — (6.4)	筒状の頸部からゆるやかに外へ開く口縁部。狭い口端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面は横方向のヘラミガキ、外面は、横方向の雑なヘラミガキ。頸部内面は、斜方向のヘラナデ、外面は、横方向の雑なヘラミガキ。削り出し突帯面上に沈線文1条を施す。	茶褐色 粗砂含 良好
59 — 21 46	13.0 — — (8.1)	筒状の頸部から外上方に、のび開く口縁部。狭い口端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ、口縁部内面はナデ後横方向の雑なヘラミガキ、外面はナデ後斜方向のヘラミガキ。頸部内面はナデアゲ、外面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ。削り出し突帯上に沈線文1条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量 (cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
59 — 21 47	18.8 — — 11.3	頸部からやや立ち上り、ゆるく外反する口縁部。丸味のある口端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。内面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ、外面は、縦方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ、外面は、縦方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ。細い削り出し突帯をもつ	赤茶褐色 粗砂含 良好、堅緻
59 — 21 48	18.6 — — 7.3	頸部からゆるやかに外反する口縁部。丸味のある口端面をもつ。	口縁部内外面とも横方向の密なヘラミガキ。頸部外面は、横方向のヘラミガキ。削り出し突帯上に沈線文1条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
59 49	20.9 — — (6.9)	頸部から外反する口縁部。端部は丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に削り出し突帯上沈線文2条を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 二次的焼成による変色が一部にみられる。
59 — 21 50	15.2 — — (7.1)	頸部からゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ後横方向の密なヘラミガキ、頸部に至る。頸部外面に削り出し突帯上沈線文3条を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
59 51	21.4 — — (11.7)	頸部からやや立ち上り、さらにゆるく外反する口縁部。端部は、丸く外に曲がる。	口縁部上半内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。口縁部下半、頸部にかけての内面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ外面は、縦方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文2条を施す。	黄褐色 粗砂含 良好
59 — 21 52	14.9 — — (7.0)	頸部からゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面はヘラナデ後横方向のヘラミガキ、外面は横方向の丁寧なヘラミガキ。頸部内面は器表が粗れている。頸部に沈線文2条を施す。	茶褐色 粗砂含 良好
59 53	30.9 — — (7.6)	頸部からゆるやかに外反する口縁部。端部は、ややつまみ上げ、丸味のある狭い端面をもつ。	口縁部上半内外面ともナデ。下半から頸部にかけて内面は、横方向のヘラミガキ外面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ頸部に沈線文2条（十）を施す。口縁端部に沈線文1条を施す。	黄褐色 粗砂含 良好
59 — 21 54	19.3 — — (7.1)	頸部からゆるく外反する口縁部。狭い口端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁、頸部内面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ、外面は、縦、斜方向の刷毛目後横方向の雑なヘラミガキ。頸部に沈線文3条を施す。	淡黄茶褐色 細砂含 良好
59 — 21 55	28.4 — — (11.9)	頸部からゆるく外反する口縁部。狭い口端面をもつ。	口縁、頸部にかけて内外面とも横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文4条を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好、堅緻
59 — 21 56	21.4 — — 9.7	頸部から大きく外へ開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。口縁、頸部にかけて内面は、ナデ、ナデアゲ後横方向の雑なヘラミガキ、指頭圧痕残存。外面は、縦方向の刷毛目後雑な横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文6条を施す。	茶褐色 粗砂含 良好
59 57	19.5 — — (6.7)	頸部からゆるやかに外反する口縁部。丸味のある狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面とも横方向のヘラミガキ。頸部に貼り付け突帯を1本施す。	茶褐色 細砂粒含 良好
59 58	— 18.4 5.1 (9.6)	やや胴の張った丸い体部。平底を呈す。	体部内面は、斜方向のヘラナデ、外面はヘラナデ後横方向のヘラミガキ。底面は磨耗著しく不明。モミ痕残存。	赤褐色 粗砂含 良、やや軟質

図版番号 実測図一写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
59 — 17 59	— 21.6 8.7 (18.2)	最大腹径が体部中位にあり、胴の張った体部。底部は、ややあげ底ぎみの平底。	体部内面上半は、ナデ後粗な横方向のヘラミガキ。指頭圧痕残存。下半は、剝離が著しく不明。外面上半は、斜方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ、下半は、ナデアゲ後斜方向のヘラミガキ。底面は、ナデ。胴、頸部界に沈線文9条を施す。	淡黄灰色 粗砂含 良好 体部中央に煤付着。
60 — 20 60	8.4 13.2 5.9 15.6	細くくびれた頸部からゆるく外反する口縁部。胴頸部界にゆるい段をもち、頸部はゆるやかに、胴の張った丸い体部へと続く。底部は中央が少し凹む。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、軽くしぼり、ナデ。外面は、横方向のヘラミガキ。胴部内面は、横方向にヘラナデ、外面は、横方向のヘラミガキ。底面は、ヘラナデ。胴頸部界にら旋状に細い沈線文をめぐらす。	淡黄褐色 粗砂含 良
60 — 20 61	10.0 12.3 6.2 13.9	頸部からゆるやかに外反する口縁部。狭い口端面をもつ。頸部は、胴の張ったやや扁平な胴部へとなだらかに続く。底部は、突出し中央が凹む。	口縁部内外面ともナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。頸部内面は、ナデアゲ。外面は、横方向のヘラミガキ。胴部内面は横方向のヘラナデ後ナデ、外面は、横方向のヘラミガキ。底面は、指おさえし、中央のみわずかにヘラミガキする。	赤茶褐色 粗砂含 良好 底部は、粘土紐輪台に粘土板を充填。
60 — 21 62	15.4 — — (16.9)	なだらかな頸部からやや立ち上りさらに外反する口縁部。丸味のある口端面をもつ。	口縁部内面は、ナデ後横方向の粗なヘラミガキ、外面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。体部内面は、ナデ後横方向の粗なヘラミガキ、指頭圧痕がわずかに残存。外面は、横方向のヘラミガキ。頸部に貼り付け刻目突帯1本を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好
60 — 16 63	22.5 — — (12.5)	頸部からゆるやかに外に開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、ナデアゲ、外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に貼り付け刻目突帯2本を施す。胴頸部界に沈線文を施す。（条数不明）	淡黄褐色 粗砂含 良好
60 — 21 64	16.6 — — (10.3)	頸部からゆるやかにのび、外に開く口縁部。狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面は横方向のヘラミガキ、外面は、縦、斜方向の刷毛目。頸部内面は、横方向のヘラミガキ、外面は、ナデ、貼り付け刻目突帯1本を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を内から外へ穿つ。	淡赤褐色 粗砂含 良好
60 — 16 65	32.0 — — (14.2)	頸部からゆるやかに大きく外へ開く口縁部。丸みのある端面をもつ	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、横方向の密なヘラミガキ。貼り付け刻目突帯3本を施す。	赤茶褐色 粗砂含 良好
60 — 16 66	— — — (15.4)	頸部から外反する口縁部。	口縁部内面は、横、斜方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ。外面は、縦方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ。頸部内面はナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、縦方向の刷毛目後横方向の密なヘラミガキ頸部に貼り付け刻目突帯2本と口縁部内面に、貼り付け刻目突帯をめぐらす。突帯は、一周せずに一方があいており、その先端は、渦文状になると思われる。	赤茶褐色 粗砂含 良好
60 — 21 67	— 51.1 — 16.4	胴の張るやや扁平な丸い体部と思われる。	内面は、斜方向のヘラナデ後ナデ。外面は、斜方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ。貼り付け突帯4本（十）を施す。刻目は、棒状のもので横方向に押捺されたものである。	黒灰褐色 粗砂含 良好
60 68	11.6 — — 5.9	内弯する口縁部。狭い端面をもつ	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、斜方向の刷毛目後横方向の密なヘラミガキ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
60 69	15.6 — — 8.7	内弯する口縁部。狭い端面をもつ丸い体部。	口縁、体部内面は、横方向のヘラミガキ口縁部外面は、剝離のため不明。体部外面は、横方向のヘラミガキ。	黄褐色 粗砂含 良好
60 — 18 70	10.6 — 5.8 22.7	直口縁。端部は面をなす。倒鐘形の体部。底部は、平底。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ。外面は、縦方向のヘラナデ。底面は、ナデ。口縁部直下に横位の耳状把手を一対もつ。	淡灰褐色 粗砂含 良好

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
60 71	14.6 — 6.2 13.6	ゆるく外反する口縁部。狭い口端面をもつ。倒鐘形の体部。平底。	口縁部内外面とも横方向の刷毛目後ナデ体部内面は、不定方向のナデ、外面は、縦、斜方向の刷毛目後一部ナデ。底部内面は、指押さえ後ナデ。底面は、ナデ。	淡茶褐色 細砂粒含 良好 外面全体的に煤付着。
61 — 24 72	17.6 — — (9.2)	先端の粘土紐をわずかに折り曲げただけの口縁部。口頸部界のくびれはない。丸味のある体部と思われる。	口縁部内面は、横、斜方向の刷毛目後外面ともにナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、指頭圧痕残存。外面は、斜方向の荒い刷毛目。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
61 — 24 73	22.5 — — (10.8)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、丸味をもつと思われる。	口縁部内面は、斜方向の刷毛目後外面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ、外面は、縦方向の刷毛目。口縁端部に刻目を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好 口縁、体部外面に煤付着。
61 — 24 74	27.5 — — 19.5	外反する口縁部。狭い丸味のある端面をもつ。倒鐘形の体部。	口縁部内外面ともナデ。頸部内面に指頭圧痕残存。体部内面は、横方向のヘラナデ、外面は、縦方向の刷毛目。口縁端部に刻目を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 口縁、体部下半部外面に煤付着
61 75	19.4 — 8.0 20.1	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、倒鐘形を呈し、底部は、やや中央がくぼむ。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面はナデと思われるが、磨滅が著しい。外面は、縦方向のヘラナデ。底面は、ナデ。指紋残存。口縁端部に刻目を施す。	淡赤褐色 粗砂含 良好、堅緻 口縁、体部外面に煤付着。
61 — 18 76	22.6 — 8.6 24.4	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、倒鐘形を呈す。平底。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は斜方向のナデアゲ。下半部は、磨滅、剝離が著しい。外面は、縦、斜方向の刷毛目。底面はナデ。口縁端部に刻目を施す	赤褐色 粗砂含 良好 口縁、体部上半外面に煤、体部内面に付着物。
61 — 24 77	23.5 — — (8.2)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ナデ、外面もナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文1条を施す。	乳褐色 粗砂含 良好 外面全体に濃く煤付着。
61 — 24 78	21.4 — — (10.5)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部の内外面ともナデ。体部内面は、ナデアゲ、やや磨滅する。外面は、縦、斜方向の刷毛目後一部ナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文2条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
61 — 24 79	21.9 — — (10.9)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。倒鐘形の体部と思われる。	口縁部内面は、斜方向の刷毛目後外面ともにナデ。体部内面は、磨滅のため不明外面は、頸部より斜方向の刷毛目後、所々ヘラナデ。口縁端部に刻目、頸部に沈線文2条を施す。	乳茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
61 — 24 80	20.9 — — (18.3)	外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。体部は、倒鐘形と思われる。	口縁部内面は、横方向の刷毛目、外面は縦方向の刷毛目後両面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ、全体的に磨滅が著しい。外面は、頸部から斜方向の刷毛目。口縁端面に刻目、頸部に沈線文3条を施す。	淡赤茶褐色 細砂粒含 良好、堅緻 外面全体に煤付着、体部下半内面一部に付着物
61 81	21.3 — — (11.7)	外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。倒鐘形の体部と思われる	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は極めて薄く剝離しているため不明。外面は、縦方向のヘラナデ。口頸部界外面に指頭圧痕残存。口縁端部に刻目、頸部に沈線文3条を施す。	淡茶褐色 細砂粒含 良、やや軟質 外面全体的に煤付着。
61 — 24 82	25.8 — — (10.5)	ゆるやかに外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。丸味のある体部と思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は斜方向のナデアゲ。指頭圧痕残存。外面は、縦方向の粗い刷毛目後粗くナデアゲ口縁端部に刻目、頸部に沈線文3条を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 口縁、体部外面に煤付着。

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
62 — 18 83	26.4 29.5 — 29.5	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。丸味のある倒鐘形の体部	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、外面は、頸部から縦、斜方向の刷毛目。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に薄く煤付着。体部内面に付着物。
62 — 18 84	21.0 — — (15.0)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、倒鐘形と思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面はナデアゲ、外面は、縦、斜方向の刷毛目口縁端部に刻目。頸部に沈線文4条を施す。	茶褐色 粗砂含 良好 口縁部内面、外面全体に煤付着体部下半付着物
62 — 24 85	18.0 — — (11.7)	外方へ折れ曲がり上面を平坦にした逆L字状の口縁部。端部は、わずかに内弯し丸くおさめる。狭い端面をもつ。倒鐘形の体部と思われる。	口縁部上面は、刷毛目後ナデ、下面にヘラ状の原体痕残存。頸部内面は、指おさえされ、ナデ。体部内面はナデアゲ、外面は、頸部から縦方向の刷毛目。口縁端部に刻目後沈線文1条、頸部に沈線文4条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 口縁上面、外面全体に煤付着。内面に付着物。
62 — 24 86	19.7 — — (8.8)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ナデ、外面は、頸部から縦、斜方向の刷毛目。口縁端部に一部分空間のある刻目。頸部に沈線文5条を施す。	淡赤褐色 細砂粒含 良、やや軟質 外面全体に煤付着。
62 — 16 87	19.6 — — (12.2)	外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。倒鐘形の体部と思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は丁寧にナデアゲ、外面は、縦方向の刷毛目、磨滅が著しい。口縁端部に刻目。頸部に沈線文4条とV字を三重にしたヘラ描き文とを施す。	黄褐色 粗砂含 良好 口縁内面と外面全体に煤付着。
62 — 24 88	24.5 — — (6.4)	外反する口縁部。端部は、ややつまみ上げられ、狭い端面をもつ。	口縁部内面は、斜方向の刷毛目後外面ともにナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、外面は、頸部から縦、斜方向の刷毛目、口縁端部に刻目。頸部に沈線文4条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
62 89	23.2 — — (9.1)	外反する口縁部。狭い端面をもつ	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は磨滅が著しく不明、指頭圧痕残存。外面は、ナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文6条を施す。	乳褐色 粗砂含 良好 口縁部内面、外面全体に煤付着
62 — 24 90	21.4 — — 10.6	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。丸い体部と思われる。	口縁部外面は、縦方向の刷毛目後、内面ともにナデ。体部内面は、磨滅のため不明、外面は、頸部より斜方向の刷毛目。口縁端部に刻目。頸部に沈線文7条を施す。	乳褐色 粗砂含 良、やや軟質 外面全体に煤付着。
62 — 24 91	26.8 — — (7.2)	ゆるく外反する口縁部。端部は丸くおさめる。	口縁部外面は、斜方向の刷毛目後、内面ともにナデ。体部内面は、ナデ、外面は頸部から斜方向の刷毛目。口縁端部に刻目。頸部に沈線文5条を施す。	淡黄茶褐色 粗砂含 良好 口縁部内面一部と外面に薄く煤付着。
62 — 24 92	23.1 — — (17.3)	外反する口縁部。狭い丸味のある端面をもつ。倒鐘形の体部と思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ、外面は、頸部から斜方向の刷毛目後、雑にナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文6条を施す。	黄茶褐色 粗砂含 良好 口縁、体部外面煤付着。
62 — 24 93	20.6 — — (6.5)	口縁端部直下外面に貼り付けられた逆L字状の口縁部。端部は丸くおさめる。狭い端面をもつ。丸味のある体部をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ、外面は、斜方向の刷毛目後ナデ。口縁端部に刻目後沈線文1条と頸部に沈線文8条と4(+)条を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
62 — 24 94	25.6 — — (8.7)	ゆるやかに外反する口縁部。頸部やや直線的に外下方へ続く。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ。外面は、斜方向の刷毛目後わずかにナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文5条と6条を施す。	赤茶褐色 粗砂含 良好

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
63 95	34.3 38.3 — (15.5)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。丸味のある体部と思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、外面は、ナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文8条を施す。	黄褐色 粗砂含 良好
63 96	— — 8.4 (5.3)	平底。	内面は、ナデ。外面は、斜方向の刷毛目 底面は、ナデ。焼成後円孔を1個、内から外へ穿つ。	淡茶褐色 粗砂含 良好 底面孔周辺に煤付着。
63 — 24 97	— — 10.5 (10.8)	平底。	内面は、ナデ。外面は、斜方向の刷毛目後ナデ。底面は、指おさえ後ナデ。焼成後円孔を1個、両面から穿つ。	淡茶褐色 粗砂含 良好 内面に薄く付着物。
63 — 27 98	10.1 — — 3.3	笠形で、中くぼみの環口状のつまみをもつ。つまみの中心に円孔を1個穿つ。	口縁端部は、横方向のヘラミガキ。内面は、横方向のヘラミガキ。つまみ部から口縁部にかけ外面は、縦、斜方向のヘラミガキ。つまみ端部は、ナデ。器壁は、やや厚い。	淡茶褐色 粗砂含 良好 口縁内面に煤付着。
63 — 27 99	11.4 — — 3.3	笠形で、中くぼみの環口状のつまみをもつ。つまみの中心に円孔を1個穿つ。口縁部は、ややいびつである。	つまみ部は、ナデ。内面はナデ。外面はつまみ部から口縁部にかけて、斜方向のヘラミガキ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
63 — 27 100	— — — (6.4)	大きく外下方へ開き笠形を呈す。つまみ部は、外上方へ短く開く。つまみ端部は、平担につくる。	つまみ部内面は、横方向のヘラミガキ。体部内面は、横方向のヘラミガキ。外面は、つまみ部から横、斜方向のヘラミガキ。つまみ部下に沈線文5条を施す。つまみ部に焼成前紐孔を1個1対穿つ。	淡赤黄褐色 粗砂含 良好
63 — 27 101	— — — (6.4)	大きく外下方へ開き笠形を呈す。つまみ部は、外上方へ短く開く。つまみ端部は、平担につくる。	つまみ部内面は、ナデ。体部内面は、横方向のヘラミガキ。外面は、口縁にむかってヘラミガキ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 外面に煤付着。
63 — 19 102	14.3 — 5.2 7.4	口縁部は、体部からゆるやかに続き、外方へ開く。底部から外上方に開く体部。平底。	口縁端部内外面ともナデ。体部内面は、口縁部にかけて、横方向のヘラミガキ。外面は、ナデ後体部下半まで横方向のヘラミガキ。底面は、ナデ。	淡茶褐色 粗砂含 良好 内外面とも器壁が荒れている。
63 — 18 103	14.7 — 5.4 7.3	直口で狭い端面をもつ。底部から外上方に開く体部。平底。	口縁端部内外面ともナデ。体部内面は、横方向のヘラミガキ、外面は、横方向の雑なヘラミガキ、ヘラ痕が顕著。底部内面は、指押さえ、底面は、ヘラナデ。	赤褐色 粗砂含 良好 内外面とも器壁が荒れている。
63 — 26 104	20.6 — 7.2 12.2	口縁部は、体部からゆるやかに続き外反する。体部は、丸い倒鐘形。平底。	口縁部から体部にかけて内面は、横、斜方向のヘラミガキ。外面は、横方向の丁寧なヘラミガキ。底部外面は、斜方向の刷毛目後ナデ。底面は、軽いヘラケズリと思われる。	赤茶褐色 粗砂含 良好
63 — 26 105	24.8 — — (10.2)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、丸味をもつ。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。体部内外面とも横方向のヘラミガキ。口縁、体部に1個づつ縦位に紐孔が穿たれる。	淡黄茶褐色 粗砂含 良好 体部下半一部分に煤付着。
63 — 26 106	24.7 — — (7.2)	ゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。口縁、頸部界内面にゆるい稜をもつ。横位の耳状把手をもつ。(1個残存)	口縁部は、斜方向の刷毛目後横方向の雑なヘラミガキ。体部内面は、横方向のヘラミガキ、外面は、横、斜方向の刷毛目後横方向の雑なヘラミガキ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量 (cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
63 — 19 107	31.5 — 9.8 20.4	体部からゆるく開く短い口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、倒鐘形。底部は、平底。	口縁部外面は、斜方向の刷毛目後内面ともにナデ。体部内面は、横方向のヘラナデ、外面は、縦、斜方向の刷毛目。口縁頸部界と体部上半内面に指頭圧痕残存。底部内面は、指おさえ後ナデ。底面は、ヘラナデ。	淡茶褐色 粗砂含 良好 底部は、楕円形を呈す。
63 — 26 108	25.5 — — (24.3)	直口縁で外上方に開く体部。	口縁部は、内外面ともナデ。体部内面はヘラナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。外面は、斜方向の刷毛目後横方向の雑なヘラミガキ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
64 — 19 109	36.2 — 10.2 21.9	ゆるやかに短く外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、丸味をもつ。平底。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、横方向のヘラミガキ、外面は、斜方向の刷毛目後横方向の雑なヘラミガキ。底面はヘラケズリ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
64 — 19 110	39.6 — 9.6 23.2	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、倒鐘形を呈す。底部は、平底。頸部に横位の扁平な耳状把手3対をもつと思われる。	口縁部内面は、斜方向の刷毛目後内外面ともナデ。体部内面は、横方向に丁寧なヘラミガキ、外面は、斜方向の刷毛目後横方向の雑なヘラミガキ。口縁、頸部界外面に指頭圧痕残存。底面は、ナデ。	淡茶褐色 粗砂含 良好
64 — 19 111	33.1 — — 27.9	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、倒鐘形。頸部に横位の扁平な耳状把手2対を持つが、やや位置がずれる。	口縁部内面は、斜方向の刷毛目、外面はナデ。体部内面は、横方向のヘラミガキ外面は、斜方向の刷毛目。	淡黄褐色 粗砂含 良好
65 — 22 112	14.7 — — (4.5)	頸部からゆるやかに外反する短い口縁部。端部は、丸くおさめる。口縁、頸部界にゆるい段をもつ。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内外面とも横方向のヘラミガキ。	乳褐色 粗砂含 良好
65 — 22 113	18.3 — — (6.9)	口縁部は、やや立ち上がり、さらにゆるく外反する。狭い丸味のある端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。口端面に沈線1条と頸部に削り出し突帯上に沈線文1（＋）条を施す。	暗灰褐色 粗砂含 良好
65 — 22 114	18.8 — — 5.9	口縁部は、やや立ち上がり、さらにゆるく開く。狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。口縁端部に刻目。頸部は削り出し突帯上に沈線文1（＋）条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
65 — 22 115	17.5 — — 5.5	頸部からゆるく外反する口縁部。丸味のある狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、斜方向のヘラミガキ頸部に削り出し突帯上に沈線文5（＋）条を施す。口縁端部に沈線文2条を施す。口縁部に焼成前紐孔を1個穿つ。	暗褐色 粗砂含 良好
65 — 22 116	15.6 — — 11.2	筒状の頸部からゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部上半内外面ともナデ。下半部から頸部にかけて内外面とも剝離が著しく不明。頸部に削り出し突帯上に沈線文2条と、沈線文間に刺突文を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
65 — 22 117	16.4 — — (10.7)	頸部からゆるく外方へ開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面は頸部にかけてナデ後横方向のヘラミガキ外面も頸部にかけて横方向のヘラミガキ頸部に沈線文2条を施す。	乳褐色 粗砂含 良好
65 — 22 118	31.4 — — (6.4)	ゆるく外方へ開く口縁部。狭い端面をもつ。	口縁端部は、ナデ。口縁部内面は、頸部まで横方向のヘラミガキ、外面は、斜方向の刷毛目後横方向の雑なヘラミガキ。頸部に沈線文2条を施す。	乳灰褐色 粗砂含 良好

図版番号 実測図一写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
65 — 22 119	14.5 — — 4.9	口縁部は、ゆるく外反し、上半部でさらに外に開く。狭い端面をもつ。	口縁部上半は、内外面ともナデ。下半内面は、斜方向の刷毛目後丁寧にナデ、外面は、斜方向の刷毛目。頸部に沈線文2(+)条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
65 — 22 120	35.0 — — 5.7	外反する口縁部。幅のある端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面は横方向の丁寧なヘラミガキ、外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。口縁端部に沈線文2条の上に縦線文を施す。口縁内面は貼り付け突帯がめぐり、おそらく環状の一方があき、渦文状になると思われる。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
65 — 22 121	19.3 — — (3.9)	外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁部内外面ともにナデ後横方向のヘラミガキ。口縁端部に沈線文1条、口縁部内面に浅い沈線文1条を施し、焼成前紐孔1個を、内から外へ穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面に黒褐色物質の塗布。
65 — 22 122	30.0 — — (8.9)	ゆるやかに外方へ開く口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ後、内面は頸部にかけて横方向のヘラミガキ。頸部外面は横方向のヘラミガキ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
65 — 22 123	15.2 — — 7.2	頸部からゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。口頸部界はない。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、ナデアゲ、外面は、横方向のヘラミガキ。	淡灰黄褐色 粗砂含 良好、堅緻
65 — 17 124	— 4.9 — (34.1)	頸部から外上方へ開く口縁部。扁平で胴の張った体部をもつ。	口縁部内面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。外面は、斜方向のヘラミガキ。体部内面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、横方向の丁寧なヘラミガキ。口縁部内面に貼り付け突帯を施す。突帯は一周せず一方があいており、その両端は、渦文状におさめる。頸部に2本、肩部に1本、胴部に2本、刻目貼り付け突帯を施す。	淡茶褐色 粗砂含、金雲母を微量含。 良好 外面全体に薄く黒褐色物質の塗布。
66 — 17 125	— 26.5 — (27.1)	頸部からゆるやかに外反する口縁部と思われる。扁平で胴の張った体部をもつ。	内面全体、磨滅のため不明。外面は、口縁、胴部は、剝離のため不明。頸部は、横方向のヘラミガキ。頸部に2本、体部に2本、刻目貼り付け突帯を施す。頸部の上1本は、剝離のため刻目が欠損。	淡黄褐色 粗砂含 良、やや軟質 全体的に磨滅が著しい。
66 — 20 126	— 13.0 — (9.7)	頸部からゆるやかに外反する口縁部と思われる。扁平で胴の張った体部をもつ。	口縁部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、ナデアゲ。体部内面は斜方向のナデアゲ、外面は、頸、体部にかけて横方向の丁寧なヘラミガキ。頸部に刻目貼り付け突帯を2本、体部に貼り付け突帯2本を施す。体部突帯は、横方向のヘラミガキ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好、堅緻。 非常に丁寧なつくりである。
66 — 22 127	12.6 — — (7.9)	内弯する口縁部。狭い端面をもつ。丸い体部。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、横方向の雑なヘラミガキ、外面は、斜方向の刷毛目後、斜、横方向のヘラミガキ。口縁部に、焼成前紐孔2個1対を穿つ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
66 — 20 128	— 11.4 — 12.2	頸部からゆるやかに外上方に開く口縁部。胴の張った扁平な体部。小型。	口縁部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、縦方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ。体部内面は、ナデアゲ、頸部とのつぎ目部分に指頭圧痕が顕著に残存。外面は縦方向の刷毛目後横方向の丁寧なヘラミガキ。頸部に沈線文1条施す。	黄褐色 粗砂含 良好 内部に土器の細片と赤色顔料が混ってつまる。
66 — 25 129	18.7 — — (8.1)	ゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。倒鐘形の体部と思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ナデアゲ、外面は、斜方向のナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文1条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。体部内面一部に付着物。

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
66 — 25 130	17.1 — — (7.8)	外反する口縁部。狭い端面をもつ。倒鐘形の体部と思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は磨滅が著しく不明、外面は、縦方向の刷毛目。口縁端部に刷毛目原体を使用した刻目。頸部は最下条を削った不完全な削り出し突帯上に沈線文4条を施す。	乳褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。体部内面一部に付着物。
66 — 25 131	23.5 — — (9.2)	外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内面は、横、斜方向の刷毛目後外面ともにナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、外面は、縦、斜方向の刷毛目。口縁端部に刻目。頸部に沈線文2条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
66 — 25 132	21.8 — — (16.1)	ゆるく外反する口縁部。丸味のある狭い端面をもつ。倒鐘形の体部と思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は斜方向のヘラナデ、外面は、縦、斜方向の刷毛目後一部ナデ。口縁端部に刻目、頸部に沈線文3条を施す。体部下半一部は、剝離する。	赤褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。体部下半内面に付着物。
66 — 25 133	25.7 — — (7.6)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、外面は、ナデアゲ。口縁端部に断続的な刻目。頸部に沈線文3条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に濃く煤付着。
66 — 25 134	22.6 — — (5.9)	ゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、丸味をもつと思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内外面ともヘラナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文4条を施す。	黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に薄く煤付着。
66 — 25 135	25.5 — — (8.1)	ゆるく外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁部は、内外面ともナデ。体部内面はナデ、外面は、斜方向のヘラナデ。口縁端部上下に刻目。頸部は削り出し突帯上に沈線文2条を施す。	乳黄褐色 粗砂含 良好 体部内面一部に付着物。
66 — 25 136	27.8 — — (6.4)	ゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ後横方向の雑なヘラミガキ、外面は、斜方向の刷毛目後頸部付近は、ナデ。口縁端部に沈線文1条、頸部は削り出し突帯上に沈線文1条を施す。頸部沈線文下に焼成前紐孔1個を穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好 鉢の可能性もある。
66 — 25 137	26.1 — — 10.3	外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。やや丸味のある体部と思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面はナデアゲ、外面は、縦方向の刷毛目後斜方向のヘラナデ。口縁端部に刷毛目原体を使った刻目。頸部に最下条を削った不完全な削り出し突帯上に沈線文4条を施す。	暗茶褐色 粗砂含 良好 口縁内外面全体に煤、体部内面に付着物。
66 — 25 138	26.1 — — (7.4)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、外面は、ナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文5条とその下に1（＋）条が施される。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
66 — 25 139	22.8 — — (10.5)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。倒鐘形の体部と思われる。	口縁部内外面ともナデ。頸部外面もナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、外面はナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文5条と4条を、沈線文間に平行斜線文を施す。	淡茶灰褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
67 — 25 140	— — 7.6 (8.2)	平底。	内面は、横方向のヘラナデ後ナデアゲ、わずかに縦方向のヘラミガキ。外面は、縦方向の刷毛目後丁寧にナデアゲ。底面は、ナデ後一部雑なヘラミガキ、焼成後円孔1個を両面より穿つ。	淡黄灰色 粗砂含 良好
67 — 25 141	— — 7.2 (3.9)	平底。	内面は、ナデアゲ、わずかに指頭圧痕残存。外面は、縦方向の刷毛目後ナデアゲ。底面はヘラナデ、焼成後円孔1個を両面より穿つ。	黄褐色 粗砂含 良好 外面一部煤付着。

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
67 — 25 142	— — 6.7 (4.3)	平底。	内面は、ナデ、わずかに指頭圧痕残存。外面は、斜方向の刷毛目後一部ナデ。底面は、ナデ。焼成後円孔1個を穿つ。（打ち欠きでなく両面から工具を回転させて穿孔か。）	淡黄褐色 粗砂含 良好
67 — 27 143	— — — (4.9)	外下方へ開き笠形を呈す。つまみ部は、やや中くぼみである。	つまみ部は、指おさえ後ナデ。内面は、斜方向のヘラナデ、外面は、軽く斜方向にヘラミガキ。つまみ、体部界に沈線文3条を施す。	乳褐色 粗砂含 良好
67 — 27 144	— — — (6.1)	外下方へ開き笠形を呈す。つまみ部は、外上方へ短く開く。つまみ端部は平担と思われる。	つまみ部は、指おさえ。内面は、指おさえ後縦方向のヘラナデ。外面は、指おさえ後ヘラナデし、軽く横方向のヘラミガキ。	暗茶褐色 粗砂含 良好 河内系の胎土か
67 145	11.0 — — 1.1	口縁部がやや反り、体部中央が少しもり上がる円板形と思われる。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ。内面は、やや器壁が荒れているがヘラミガキであろう。外面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ焼成前円孔を2個穿つ。	乳灰褐色 粗砂含 良好
67 — 27 146	12.4 — — 3.2	笠形を呈し、狭い端面をもつ。	内面は、横方向にヘラナデ。口縁部付近に指頭圧痕残存。外面は、縦、横方向のヘラミガキ、口縁端部に到る。ヘラ描きの木の葉状文とそのまわりに沈線文2条を施し、沈線文間は、彩色される。中央に焼成前円孔1個を穿つ。	乳褐色 粗砂含 良好 外面に薄く黒褐色物質の塗布。
67 — 27 147	14.3 — — (2.1)	外下方に広がる口縁部。狭い端面をもつ。	内面は、ナデ後縦方向の雑なヘラミガキ外面は、横方向のヘラミガキ。外周に沈線文3条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好
67 — 27 148	12.5 — — (1.2)	外下方に広がる口縁部。端部は、丸くおさめる。	内外面とも横方向のヘラミガキ。ヘラ描きの重弧文を施す。	淡灰褐色 粗砂含 良好
67 149	19.6 — — (7.4)	外上方にのびる口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。体部内面は、ナデ、外面は、斜方向のナデアゲ。口縁端部下に沈線文4条を施し、さらに最下条をナデ消す。	乳褐色 粗砂含 良好 体部内外面一部分に付着物。
67 150	20.2 — — 11.3	直口で、底部から外上方に広がり口縁部にいたる。端部は、平坦におさめる。平底。	口縁内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。体部内外面もナデ後横方向のヘラミガキ。底部付近外面は、ナデアゲ。底面は、ヘラナデ。	暗灰褐色 粗砂含 良好 口縁部外面は、わずかに剝離する。
67 151	31.0 — — 12.6	ゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、倒鐘形と思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ後非常に雑な横方向のヘラミガキ、外面は、斜方向のヘラナデ。口縁端部は、ややくぼみをもつ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
67 — 19 152	32.1 — — 15.6	外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、倒鐘形。	口縁部内面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ。外面は、斜方向の刷毛目後部分的にナデ。体部内面は、横、斜方向のヘラナデ後横方向の雑なヘラミガキ。外面は、斜方向の刷毛目後横方向の雑なヘラミガキ。	淡茶褐色 粗砂含 良好
67 — 26 153	30.5 — — 11.5	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、丸味をもつ。	口縁端部はナデ。口縁部内面は、横方向のヘラミガキ。外面は、指おさえ後、斜方向の刷毛目。体部内面は、斜方向のヘラミガキ、外面は、斜方向の刷毛目後横方向の雑なヘラミガキ。	淡茶褐色 粗砂含 良好 体部下半内面がやや荒れている。

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
第29図—20 172	7.6 — — 5.0	外反する口縁部、やや胴の張った扁平な体部をもつと思われる。	頸部内面は、ナデアゲ。外面は、ナデ。体部内面は、指おさえ後ナデ。外面は、横方向の丁寧なヘラミガキ。頸部、体部中位に貼り付け突帯を1本づつ施す。突帯付加前に沈線文をめぐらしている。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に黒褐色物質の塗布。
第29図 173	— — 7.8 4.5	短い中実の脚台。脚台端部は、丸くおさめる。底面は、わずかに凹む。	外面は、斜方向の刷毛目後ナデ。底面は指おさえ後ナデ。	淡黄褐色 粗砂含 良好 台付鉢形土器の脚台と思われる。
第29図—20 174	6.0 — 0.8 —	円盤形を呈し、複数の瘤状つまみをもつと思われる。中心に円孔を穿つ。	上面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。下面は、一方向のヘラミガキ。つまみ部周囲に指頭圧痕残存。	淡茶褐色 粗砂含 良好

	径(cm) 厚さ(cm) 重量(g)	特徴	備考
第30図—27 175	8.5 0.8 76.0	扇形に近い不整形な形状を呈する。周縁は、半円状部分のみ細かく打ち欠きが施される。側面の破面は、未調整である。円形状に加工される中途段階のものであると思われる。表面は、ヘラミガキ。裏面は、ヘラナデ後ヘラミガキ。	淡灰褐色 粗砂含 良好 壺形土器の体部破片を再利用
第30図—27 176	6.0 0.8 22.0	楕円に近い不整形な形状を呈する。表面の周縁のみに細かい打ち欠きを施す。側面は、未調整である。表面は、ヘラミガキ。裏面は、ナデ。	淡赤茶褐色 細砂粒含 良好 壺形土器の体部破片を再利用
第30図—27 177	4.3 0.9 28.0	不正円形を呈する。周縁は、細かい打ち欠きを施す。側面の破面は、未調整。表面は、刷毛目。裏面は、ヘラミガキ。	茶褐色 細砂含 良好 壺形土器の体部破片を再利用
第30図—27 178	4.9 0.6 26.0	不正円形を呈する。周縁は、粗い打ち欠きを施し、一部分のみ軽く打ち欠く。側面の破面は、未調整。表面は、刷毛目後ヘラミガキ。裏面は、ナデ後粗いヘラミガキ。	赤茶褐色 粗砂含 良好 壺か鉢形土器の体部破片を再利用
第30図—27 179	3.9 0.8 19.0	不正円形を呈する。周縁は、粗い打ち欠きを施し、一部分のみ細かく打ち欠く。側面の破面は、突出した部分のみに軽い研磨を施す。	茶褐色 細砂含 良好 壺形土器の体部破片を再利用
第30図—27 180	5.5 0.9 32.0	長方形に近い不正円形を呈する。周縁は、打ち欠きを施す。側面の破面は、丁寧に研磨する。一部の深い割れが凹みとして残る。表面は、ヘラミガキ。裏面は、ナデ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 壺形土器の体部破片を再利用
第30図—27 181	5.6 0.6 21.5	不正円形を呈する。周縁は、粗い打ち欠き後細かく打ち欠く。側面は、破面の突出部のみ軽く研磨する。表面は、刷毛目、煤付着。裏面は、ナデ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 甕形土器の体部破片を再利用
第30図—27 182	4.2 0.7 17.0	楕円形に近い形状を呈する。周縁は、細かい打ち欠きを施す。側面の破面は、全周にわたって、丁寧に研磨する。表面は、刷毛目後ナデ、煤付着。裏面は、ナデ。	淡黄茶褐色 細砂含 良好 甕形土器の体部破片を再利用

3　石器

本溝から出土した石器は、土器の量に比べて少なく８点（出土時の層位による、上層２、中層２、下層４）である。その他フレークが数点出土している。

太型蛤刃石斧　（第31図、図版44—１・２・３）

(1)は基部中央で横方向に破損し、刃部が残存したものである。全面に研磨が施されており、基部は縦横方向に、刃部は縦方向に研磨されている。刃先にはかなりの研磨痕が認められるが、一ケ所大きな打撃による凹みが認められ磨滅により丸くなっている。さらに刃部付近の両側面には、二次的な打撃による凹みが密集しており、破損後叩き石に転用されたものと思われる。断面は楕円形で、現存長6.58cm、幅7.5cm、厚さ4.6cm、重量 344g である。石材は閃緑岩である。中層出土である。

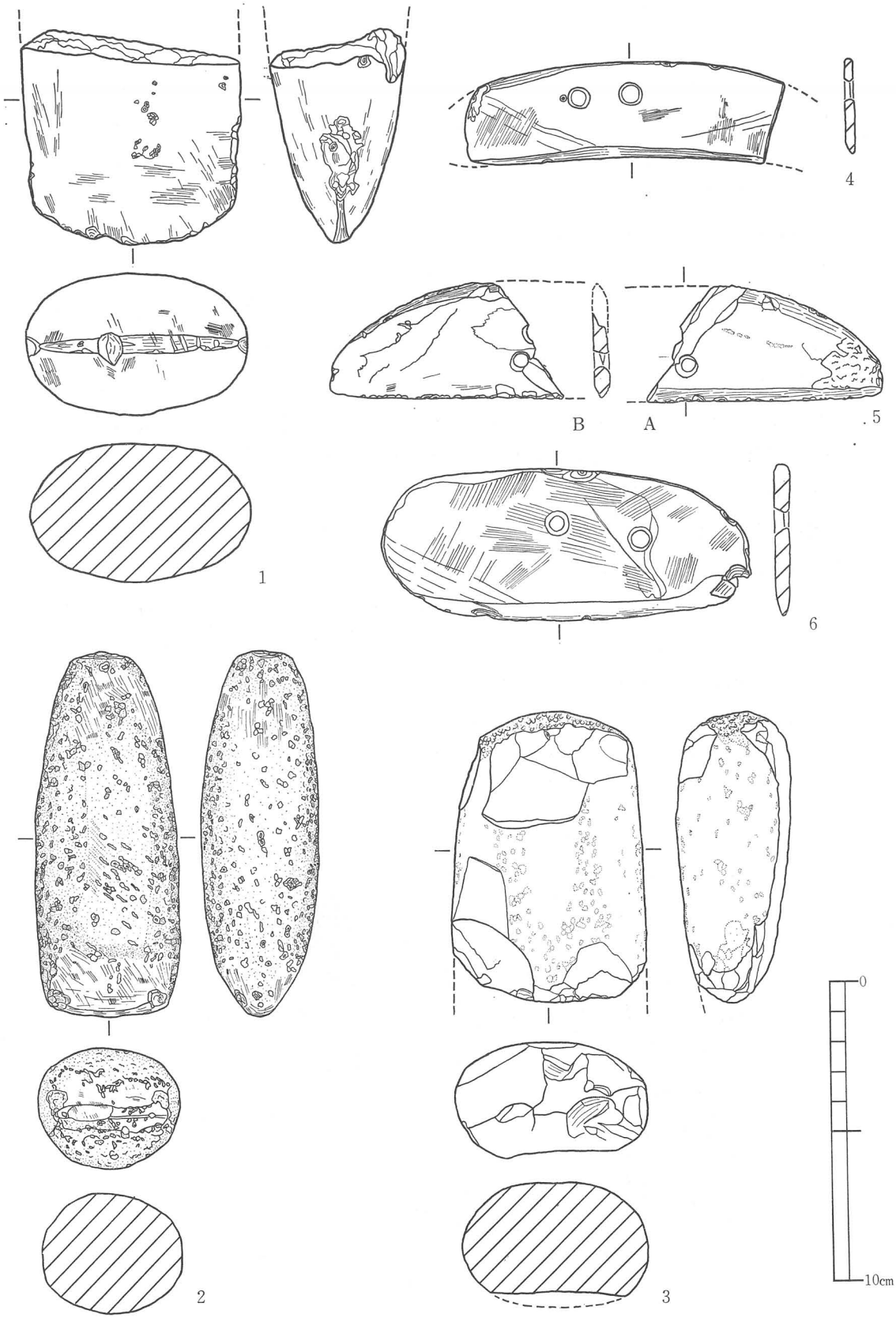
(2)は小型の完形品で、刃先の幅（4.1cm）が基端の幅（2.0cm）より大きく、基部中央に最大幅があり、やや両側面にふくらみをもつ形態である。基部は敲打整形痕を残して研磨が施されていたが、使用の研磨痕は大部分磨滅しており、基端付近にわずかに認められるだけである。刃部もわずかに敲打整形痕を残して基部までよく研磨されているが、Ｂ面では基部と同様研磨痕は磨滅している。基部は縦方向、刃部は横方向と斜方向に研磨が施されている。また刃部両端に２ケ所打撃による剝離があり、刃先は使用による磨滅によりやや丸くなっている。断面は丸味をもち、現存長12.2cm、最大幅4.85cm、厚さ4.0cm、重量380.7g である。石材は閃緑岩である。下層出土である。

(3)は基部中央で横方向に破損し、刃部が欠損した半欠品である。ほぼ全面に研磨が施されていたと思われるが、剝離が著しく基部の一部に縦方向の研磨が認められるだけである。下端破損面付近は打撃による剝離、欠損が著しく基部も同様である。特に基部Ｂ面にはかなり大きな力が加わったため、下端から基端に至るまで一気に大きく凹み状に剝離している。このように剝離、欠損が著しいのは破損後叩き石として転用され使用頻度が高かったためではないだろうか。上部左側側辺に打撃による凹みがある。断面は楕円形で、現存長 9.7cm、最大幅6.35cm、厚さ3.7cm、重量392.3g である。石材は閃緑岩で下層出土である。下層出土である。

石包丁　（第31図、図版44—４・５・６）

(4)は細長い内弯刃形態で、両側辺が欠損し身幅が狭く背部、刃部がほぼ平行して弯曲しているものである。両面とも全面に研磨が施されており、体部では主に縦方向、刃部では横方向に研磨され、刃部は片刃で研ぎだされている。刃部には明確な稜がある。紐孔は二つ穿たれており、左の孔の横には回転穿孔痕が認められる。体部は非常にうすいので石鎌としての用途も考えられる。現存長10.5cm、幅3.15cm、厚さ 0.3cm、重量21.2g である。石材は粘板岩である。上層出土である。

(5)は直線刃半月形の身幅の狭い形態の半欠品で両刃のものである。Ａ面刃部には稜があり、また使用頻度が高いためか刃こぼれが著しい。背部にも刃を研ぎだして、外弯刃半月形態のよ



第31図　溝 — 3 出 土 の 石 器

うにしており、同一品を二度加工して使用している。この刃部にはB面に稜がみられる。体部中央には最初の紐孔痕が認められ、さらに下方には背部を使用したときの紐孔が認められる。両面とも全面に研磨が施されており、A面刃部、B面背部の刃部には刃先に平行する研磨痕が認められる。現存長7.9cm、幅3.85cm、厚さ0.55cm、重量24.5gである。石材は粘板岩である。上層出土である。

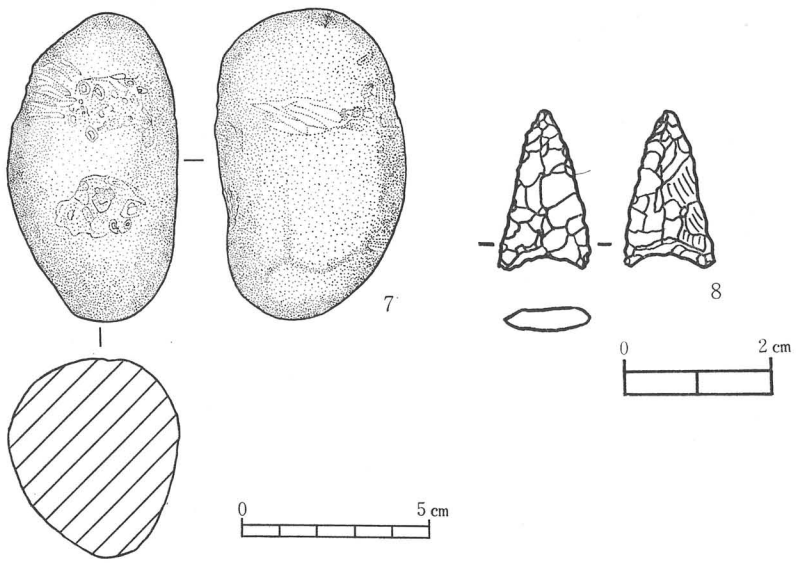
(6)は背部、刃部ともゆるやかなカーブで外弯し、両側辺が丸味をもつ楕円形態で、両刃のものである。両面とも丁寧に研磨されており、A面体部は長軸方向に、一部製作過程での剝離のためか縦横方向に細かく研磨されている。刃部は一部長軸方向に研磨痕が認められ、稜は不明確である。B面体部は一部自然面が残されており研磨は右上から左下にかけて施され、刃部は長軸方向に丁寧に研磨が施されている。双孔で、A面からみて中央やや右寄りに穿孔されており、B面には孔より背部にかけて紐ずれ痕が認められる。現存長12.4cm、幅 5.1cm、厚さ 0.5cm、重量59.3gである。石材は片岩系の石である。下層出土である。

叩き石　（第32図、図版44—7）

(7)は卵形の不整形な石を叩き石として使用したと思われるものである。長軸両端には使用痕は認められず、A面には2ヶ所、B・C・D面には1ヶ所打撃による凹みが密集し、その打撃痕、打撃の位置、重量、大きさ等から、小さな物体を打ち欠いたものであると思われる。現存長8.2cm、最大幅5.0cm、重量284.3gである。石材は閃緑岩である。下層出土である。

石鏃　（第32図、図版44—8）

(8)は凹基無茎式の完形品で、細身で断面は扁平な菱形である。現存長2.5cm、幅1.2cm、厚さ0.28cm、重量0.55gである。石材はサヌカイトである。中層出土である。



第32図　溝 — 3 出土の石器

4　木製品

本溝では、木製品は全く出土していない。

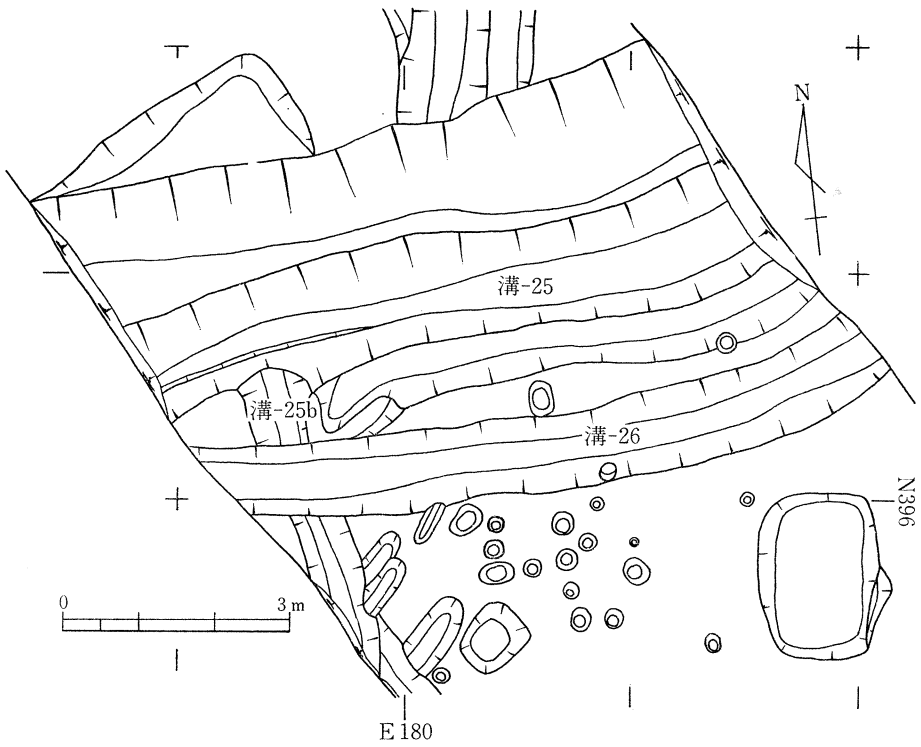
第2節　溝—25（Ⅱ—A区）

1　遺構

溝—25は、地形が標高6.750mから6.500mに緩やかに下ったⅡ—A区中央付近に位置し、南肩より分岐する支流の溝—25bを伴う。溝—25の調査は、他の溝と同じく、多数の弥生時代中期以降の遺構が溝と重複して検出されたために、まずこれらの遺構を残して調査し、さらに取り除いた後2回目の調査を行なった。

溝—25は、調査地区内をやや弯曲しながらN—84°—Eの方向に横断し、溝の南肩には幅0.3～0.6mの段をもつ、上口が大きく開くV字形溝である。規模は、溝上口の幅4.2m・深さ1.0～1.2m・底部の平均標高5.420mを測る。また溝の底は、東より西へ0.2m低くなっている。溝—25bは、溝—25の南肩の段の上部より、N—11°—Wの方向で派生する幅0.6m・深さ0.6m・底部の平均標高5.800mを測るU字形溝である。底は、北より南へ僅かに低くなっている。（第33図）

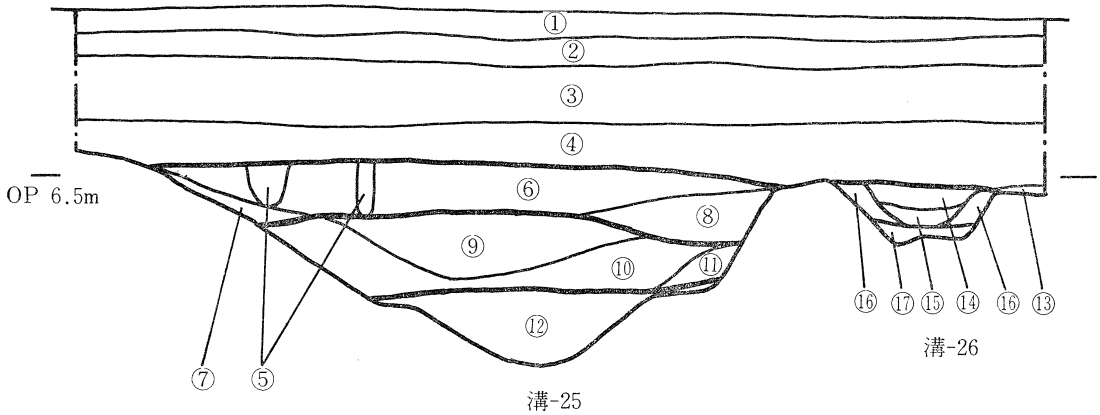
溝—25の堆積層は、8層以上に細分できるが、大きくは上・中・下の3層に分けられる。調



第33図　溝—25・25b、溝—26　遺構実測図

査は、この層位に従って掘り下げを行ない、また遺物の取り上げも層位別に行なった。中・下層には、ヘドロ状の粘質土層が厚く自然堆積している。上層は、暗茶褐色粘土（一部黒色粘質土）に黄褐色粘土がブロック状に多量に混じりあっていることから、意図的に埋められたものと考えられる。出土遺物としては、上・中層から弥生時代前期（唐古第Ⅰ様式）の土器が出土した。特に上層出土の土器は、細片化したものが多かった。（図版68～70）また、上層からは、重複する遺構からの混入と考えられる少量の弥生時代中期の土器が出土した。他に、上層から木製品（第44・46図）、上・中層からは獣骨（鹿・猪）が出土した。溝—25bには、灰褐色粘質土層の一層が堆積し、少量の弥生時代前期の土器と共に、完形の竪杵（第35・44図）が出土した。（第34図）

溝—25の形成から廃絶の過程を、層位と出土土器から考えてみると、溝—25は、弥生時代前期中段階後半から新段階頃に、地形が北から南へ緩やかに約 0.3m下った所に築造された。しかし、排水機能がほとんどなかったことと、立地条件の関係から、溜り水と周囲からの土砂の流入によって短期間に約 0.5mの下層が堆積した。この段階で、溝幅を広げる改修を一度行なったことが、溝の南肩に段をもつ点や北肩の傾斜がV字形溝としてはあまりにも緩やかなことなどから考えられ、また層位的にみても、堆積土の下層上面が不自然にフラットに切られている点から考えられる。しかし、その後は改修等を行なうこともなく、弥生時代前期末頃には、同じく自然堆積と土器・獣骨等の廃棄が続き、溝の大部分が埋没した。溝としての機能を失っ



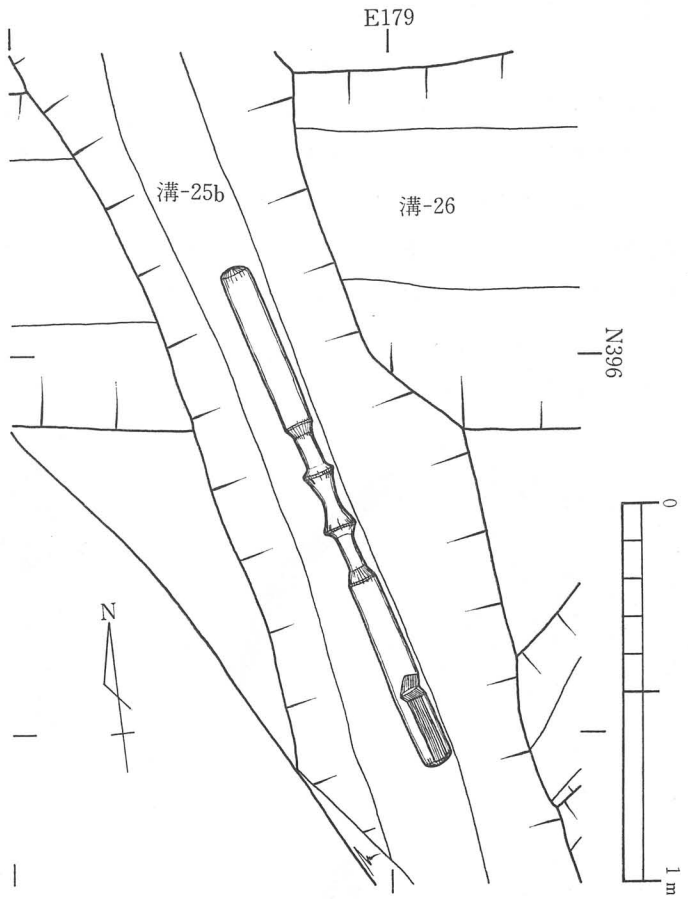
①耕土
②淡灰色砂質層
③黒色粘質土層
④黒褐色粘質土層
⑤黒色粘質土層（柱穴跡）
⑥暗茶褐色粘質土層と黄褐色粘土層の互層
⑦暗茶褐色砂質粘土層
⑧暗茶褐色砂質土層
⑨青灰色粘質土層
⑩暗青灰色粘質土層
⑪淡青灰色粘質土層
⑫暗灰色粘質土層
⑬黄色砂質土層と茶褐色砂質土層の互層
⑭黒色粘質土層
⑮暗灰色粘土層
⑯暗灰色砂質土層
⑰灰色砂層

⑥～⑧上層　⑨～⑪中層　⑫下層

第34図　溝—25、溝—26　東壁面土層図

た溝—25は、生活圏が広がった弥生時代中期になると、溝の上面をも生活面として利用するために、中期の遺構築造時の残土等によって埋め固められ、完全に廃絶された。

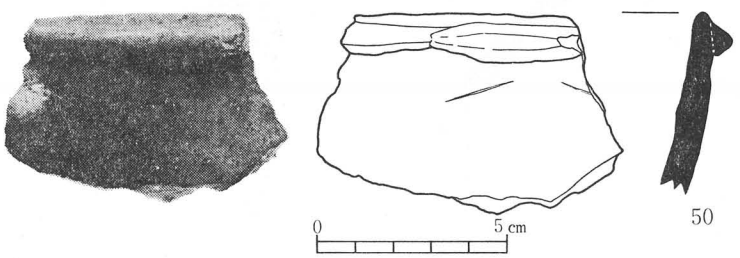
溝—25bは、出土土器が少ないために不明確であるが、後述する溝—26との層位関係からみれば、弥生時代前期中段階後半から新段階頃に、溝—25の用排水の支流として築造された。しかし、溝—25の改修が行なわれた頃には、その必要性がなくなり、合流箇所は埋め固められて廃絶した。



第35図　溝—25b・堅杵出土状況

2　土器

溝—25の遺物数量は、コンテナバット（35×45cm）で、約7箱である。破片数は多いが、完形に復元しうるものは殆んどない。遺物は、上・中・下層のうち、上・中層から出土しており、2層に分けて取り上げられている。図版は、2層に分けて扱ったが各層間に間層はなく、完全に分離した状態の層位関係ではないのと、各層の土器の混在から一括して述べることにした。土器はすべて唐古第Ⅰ様式に帰属するが、口縁端部外面に、いびつな貼り付け突帯を施すものが一片ある。（第36図—50）は他の出土土器には類を見ないもので、なお注意を要するものである[註1)]。個々の土器に関しては、土器観察表を参照されたい。



第36図　甕　形　土　器

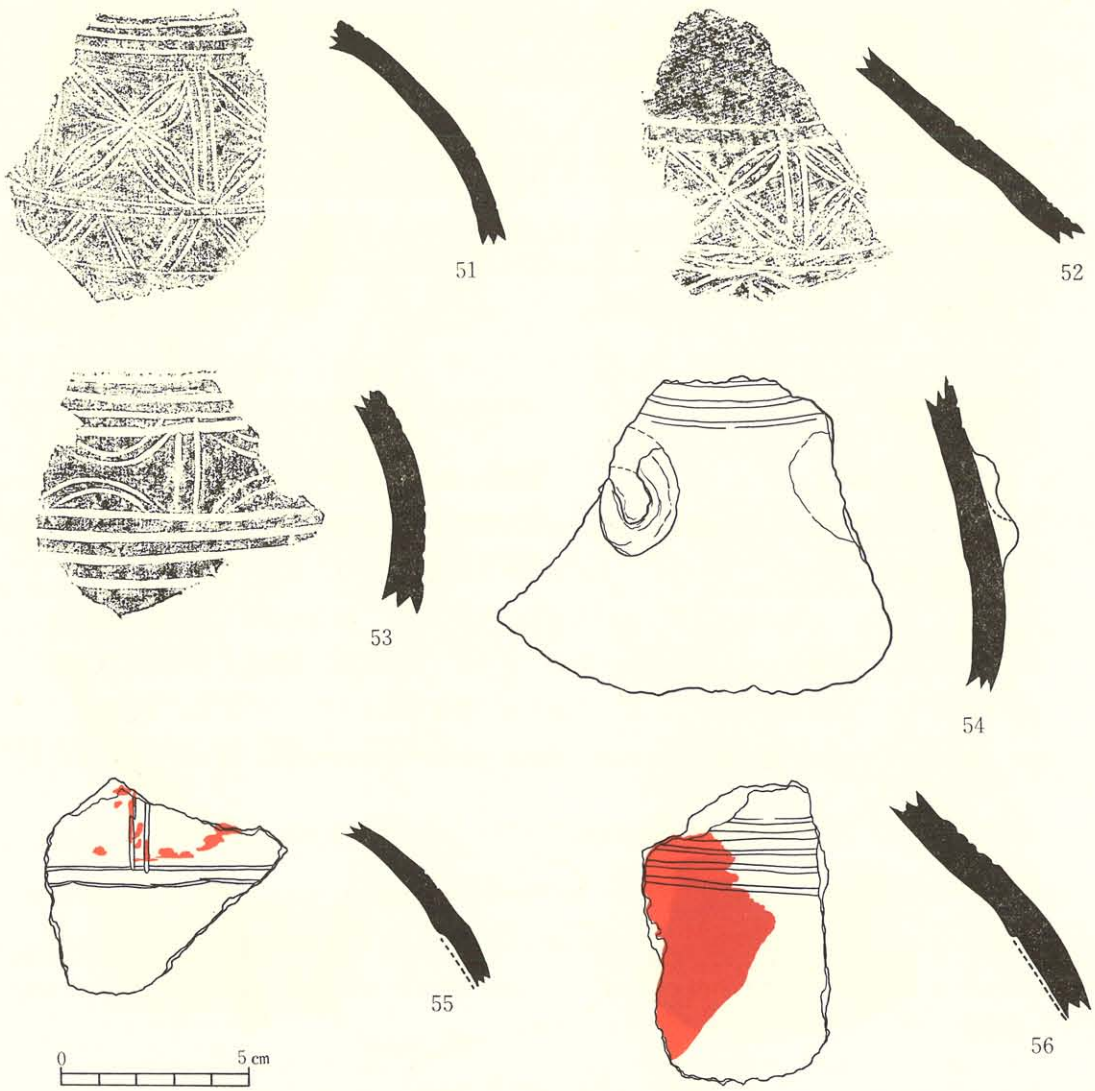
壺形土器A1　（図版70—34、35、39、40）

沈線文を施すもの（34、35、39）と、削り出し段上に沈線文を施すもの（40）がある。口縁部に紐孔を穿つもの、口縁端面に沈線文をめぐらすものもある。

壺形土器A2　（図版68—1～4、7～10、図版70—37、38）

削り出し突帯を施すもの（1、2、4）、削り出し突帯上に沈線文を施すもの（3、7、8、37、38）があり、（7、8）は、口縁上半内外面と突帯上を彩色し、（37）は、口縁端部と上面に沈線文を施し、内面に貼り付け突帯をめぐらす。沈線文を施すもの（9、10）もある。口縁部に紐孔を穿つものもある。

壺形土器A4　（図版68—13）



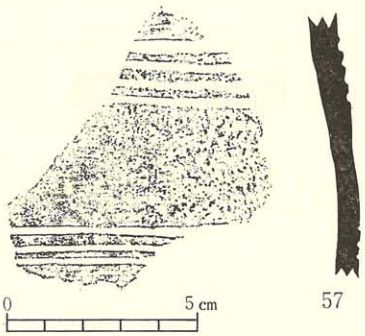
第37図　壺　形　土　器　の　文　様

削り出し段上に沈線文を施す。

これら壺形土器の頸胴部破片に木葉状文と平行斜線文（第37図—51、52）、重弧文（第37図—53）などのヘラ描き文様や、詳細は不明確ではあるが一部彩色したもの（第37図—55、56）、口縁上面に短い彩線を施すもの（図版70—42）もある。また、わらび手状の浮文を貼り付けたもの（第37図—54）もある。

甕形土器A　（図版69—18～27、図版70—43、44、第38図—57）

口縁端部に刻目をもつものが多い。頸部段上に沈線文を施すもの（43）と、沈線文を施すもの（18～27、44）があり、条数は4条を越えるものは少ない。帯状沈線文を施すもの（57）平行斜線文を施すもの（23）もある。底部に焼成後穿孔したもの（28、29）もある。



第38図　甕形土器の文様

鉢形土器A　（図版69—31～33、図版70—47～49）

頸部に施文しないものと沈線文を施すもの（47）がある。（33）は、瘤状の把手を相対位置にもつ。（31）は、底部に円孔を穿ち、やや鉢とは用途を異にするものと思われる。

鉢形土器B　（図版69—30、図版70—46）

無文のものと沈線文を施すもの（30）がある。

壺用蓋形土器

笠形のものと思われる細片が出土している。

甕用蓋形土器　（図版68—16、17、図版70—45）

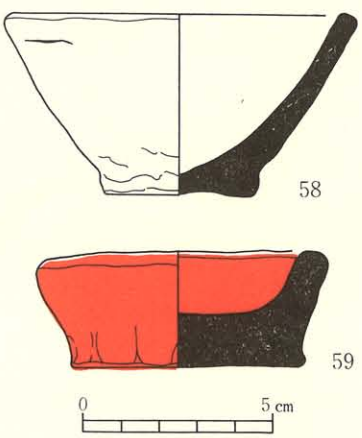
外下方へ大きく開く笠形を呈する。（16、17）は、つまみ部上面がわずかに凹む。

高杯形土器　（図版68—15）

外下方に開く短い脚部、やや屈曲しながら外上方に開く杯部をもつ。直口の台付鉢形土器に近いものと思われる。[註2)]

小型品　（第39図—58、59）

小さな底から外上方へ開く直口の鉢形土器（58）と、粘土板上に粘土紐一本を積み上げる粗製の杯状のもの（59）がある。[註3)]（59）は、内外面にベンガラが付着している。



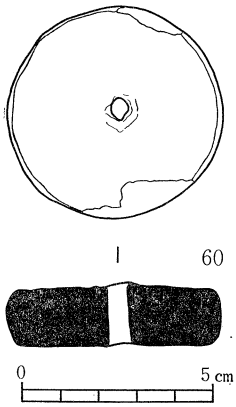
第39図　小　型　品

紡錘車　（第40図—60）

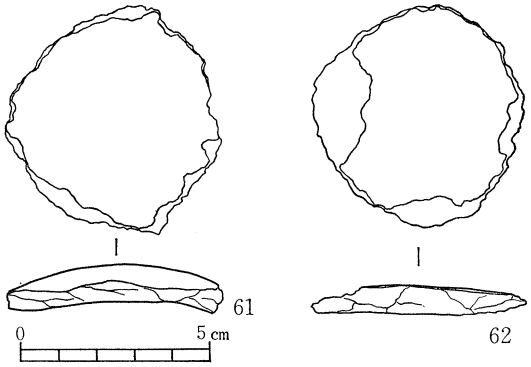
円形粘土板の中心に焼成前の円孔が穿たれている厚手のものである。

円板形土製品　（第41図—61、62）

外縁を不整円形に打ち欠いたもので、いずれも壺形土器の破片を再利用している。



第40図　紡錘車



第41図　円板形土製品

註　1）　縄文晩期の突帯文土器の系譜上にあるものとも思われるが、今後の資料増加と分析が必要であろう。

泉　拓良氏、家根祥多氏、中村友博氏に御教示をえた。

註　2）　末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古彌生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告　第16冊　1943　第25図—155、157、158　に類するものと思われる。

註　3）　末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古彌生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告　第16冊　1943　第25図—146

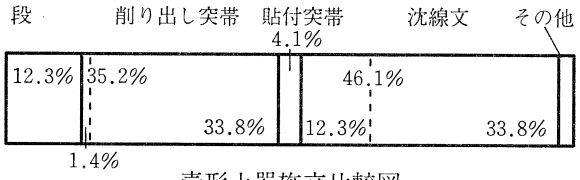
高槻市役所『高槻市史』　昭和48年6月1日　第六巻考古編　ＰＬ.30—25に類例がみられる。

	遺構名 / 文様		溝 － 25
壺	沈線文	1条	9
		2条	10
		3条	6
		4条	7
		5条	1
		6条以上	1
	段＋沈線文	段のみ	7
		1条	1
		2条	0
		3条	1
	貼付突帯	刻目あり	3
		刻目なし	0
		布目圧痕	0
	貼付突帯＋沈線文	刻目あり	0
		刻目なし	0
		布目圧痕	0
	削り出し突帯段上沈線文	突帯のみ	6
		1条	4
		2条	10
		3条	5
		4条	1
		5条以上	0
	突帯上斜格子文		0
	木葉状文		2
	木葉状文＋沈線文＋平行斜線文		0
	沈線文間刺突文		0
	削り出し突帯＋段		0

壺形土器施文類別点数表

	文様 / 刻目		溝 － 25 有	溝 － 25 無
甕	沈線文	0条	2	7
		1条	2	0
		2条	11	0
		3条	14	0
		4条	5	0
		5条	0	0
		6条以上	1(帯状)	0
	平行斜線文		1	
	沈線文＋段		0	
	沈線文間刺突文		0	
	段のみ		0	

甕形土器施文類別点数表



壺形土器施文比較図

壺形土器	甕形土器	鉢形土器	高杯形土器	壺用蓋形土器	甕用蓋形土器
44 31.9%	52 37.7%	31 22.4%	1 0.7%	3 2.2%	7点 5.0%

器種構成比率表

第4表　各器種と各施文の構成とその割り合い

土　器　観　察　表

（　）内は、現存値

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 腹径	法量 (cm) 底径	法量 (cm) 器高	形態	技法	備考
68 — 28 1	13.8	—	—	(5.5)	頸部からゆるく外反する口縁部。狭い端面をもち端部は、ややもち上がる。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に削り出し突帯1本を施す。口縁部に焼成前紐孔2個1組を相対位置に穿つ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
68 2	17.3	—	—	(4.3)	ゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に削り出し突帯1本を施す。	淡赤褐色 粗砂含 良好
68 — 30 3	14.0	—	—	(5.6)	筒状の頸部から外反する口縁部。丸味のある狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に削り出し突帯上沈線文2（＋）条を施す。	暗灰褐色 粗砂含 良、やや軟質。
68 — 28 4	18.9	—	—	(7.2)	頸部からゆるやかに外方へ開く口縁部。端部は丸くおさめる。	口縁部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、頸部にいたる。外面は、斜方向の刷毛目後横方向のヘラミガキ。頸部に削り出し突帯を1本施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	淡黄灰褐色 粗砂含 良好
68 5	13.7	—	—	(4.9)	筒状の頸部から外反する口縁部。丸味のある狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、横方向のヘラナデ。外面は、横方向のヘラミガキ。沈線文2条を施す。	暗茶褐色 粗砂含 良好
68 6	14.4	—	—	(6.7)	頸部からゆるく外方に開く口縁部。狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面とも横方向の丁寧なヘラミガキ。口縁端部に浅い沈線文1条を施す。	淡赤褐色 粗砂含 良好
68 — 30 7	21.7	—	—	8.4	頸部からゆるやかに外方へ開く口縁部。狭い端面をもつ。	口縁、頸部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に削り出し突帯上沈線文2条を施す。口縁端部は、中くぼみである。口縁部内面上半、外面口縁端部付近と突帯上に彩色を施す。口縁部に焼成前紐孔2個1組を、相対位置に穿つ。	黒褐色 粗砂含 良好 表面全体に黒褐色物質の塗布。
68 — 30 8	19.1	—	—	(8.6)	頸部からゆるやかに外方へ開く口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内面、外面上半は、ナデ後横方向のヘラミガキ。外面下半は、ナデアゲ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、斜方向のヘラナデ後横方向のヘラミガキ。外面は、ナデ。頸部に削り出し突帯上沈線文2条を施す。口縁端部は、中くぼみである。口縁部内面上半、外面口縁部付近と突帯上に彩色が施され、頸部にも変形木葉状文と思われるものが、描かれる。	乳褐色 粗砂含 良好
68 — 28 9	15.4	—	—	(10.1)	内傾する頸部からゆるやかに外反する口縁部。端部は丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面は、頸部にかけてナデアゲ後ナデ、外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文2条を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良、やや軟質
68 — 30 10	19.3	—	—	(18.1)	頸部から外反する口縁部。丸い体部をもつと思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、横方向のヘラナデ、外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文3条を施す。	淡赤褐色 粗砂含 良好

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
68 — 30 11	19.9 — — (8.2)	頸部からゆるやかに外方へ開く口縁部。狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面はナデアゲ後横方向のヘラミガキ、外面は横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文4（十）条を施す。	灰褐色 粗砂含 良好
68 — 28 12	10.1 22.6 — 14.2	短く立ち上がる口縁部。端部は、丸くおさめる。丸い体部をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ヘラナデ後斜方向のヘラミガキ、外面は、斜方向の刷毛目後横方向の丁寧なヘラミガキ、口縁部にいたる。体部に沈線文5条づつ、三段に施す。	淡茶褐色 粗砂、微量の金雲母を含。 良好、堅緻
68 — 30 13	34.7 — — (6.3)	頸部からゆるく外方に開く口縁部狭い端面をもつ。	口縁部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、ナデ。頸部は、削り出した段と沈線文1条を含む。	乳灰色 粗砂含 良好
68 — 28 14	— 12.1 6.5 (8.9)	小型。胴の張った丸い体部。平底。	体部内面は、斜方向の刷毛目。つぎ目部に指頭圧痕残存。外面は、縦、斜方向の刷毛目後斜方向のヘラミガキ。外底面はナデ。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面一部、二次的焼成による変色。
68 — 29 15	— — 11.0 (10.1)	外下方に開く短い脚部、そこから外上方に開く杯部をもつ。	杯部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。外面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ。脚部内面は、指おさえ後ナデ、外面は、ナデ後ヘラミガキ。	淡黄褐色 粗砂含 良好、堅緻
68 — 29 16	24.4 — — 9.1	大きく外下方へ開き笠形を呈す。口縁部付近は、外方へ広がる。端部は、丸くおさめる。つまみ部は中くぼみで、端部は平坦である。	つまみ部内外面ともヘラナデ。体部内面は、斜方向のヘラミガキ、外面は、ヘラナデ後斜方向のヘラミガキ。口縁部は、内外面ともナデ。	乳褐色 粗砂含 良好 口縁部内面に煤付着。体部内外面器壁が荒れる。
68 — 29 17	— — — (9.6)	大きく外下方へ開き笠形を呈す。つまみ部は、やや中くぼみで、端部は丸い。	つまみ部は、指おさえ。体部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、縦、斜方向のヘラナデ。	淡黄褐色 粗砂、クサレ含良、やや軟質 つまみ部外面、口縁部付近内外面に煤付着。
69 — 31 18	18.8 — — (9.1)	ゆるく外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、磨滅のため不明、外面は、斜方向の刷毛目後ナデ。口縁端部に刷毛目原体による刻目。頸部は、沈線文1条を施す。	茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤、体部内面下半に付着物。
69 — 31 19	24.5 — — (6.0)	短く外反する口縁部。端部は、やや丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内外面とも横方向のヘラナデ。口縁端部に刻目、頸部に沈線文1条を施す。	乳褐色 粗砂含 良好
69 — 31 20	19.3 — — (3.5)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ。頸部内面は、斜方向のナデアゲ、外面は、ナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文2条を施す。	赤茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
69 — 31 21	28.0 — — (8.4)	外反する口縁部。狭い端面をもつ体部は、やや丸味をもつと思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ、外面は、斜方向の刷毛目後斜方向のヘラナデ。口縁端部に二段の刻目。頸部に沈線文2条を施す。	乳褐色 粗砂含 良好 口縁、体部外面に煤付着。
69 — 31 22	21.9 — — (5.2)	外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内外面とも横方向のヘラナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	乳白色 粗砂含 良好

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径	腹径	底径	器高	形態	技法	備考
69 — 31 23	26.6	—	—	(8.5)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内外面ともナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条と、沈線文下にヘラ描き平行斜線文を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好
69 — 31 24	23.3	—	—	(11.0)	外反する口縁部。端部は丸くおさめる。体部は、丸味のある倒鐘形と思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、磨滅のため不明、外面は、斜方向のナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	茶褐色 粗砂含 良好 口縁内面、外面全体に煤付着 体部内面付着物
69 — 31 25	25.0	—	—	(6.8)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面とも斜方向の刷毛目後ナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ、外面は縦、斜方向の刷毛目。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	乳白色 粗砂含 良好
69 — 31 26	21.4	—	—	(13.6)	外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、丸味のある倒鐘形。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ、外面は、斜方向のナデアゲ。	乳黄褐色 粗砂含 体部外面に薄く煤付着。
69 — 31 27	22.8	—	—	(9.5)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、丸味をもつと思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ、外面は、斜方向のナデアゲ。	乳褐色 粗砂含 良、やや軟質 外面全体煤付着 体部外面一部剝離する。
69 28	—	—	8.2	(9.9)	平底。	内面は、ナデアゲ後縦方向の雑な軽いヘラミガキ、外面は、斜方向のナデアゲ後斜方向の雑な軽いヘラミガキ。焼成後円孔1個を両面から穿つ。底面はナデ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
69 29	—	—	8.2	(6.1)	平底。	内面は、指おさえ後ナデアゲ。外面は、ヘラナデ後斜方向のヘラミガキ。底面はナデ後雑なヘラミガキ。焼成後円孔1個を両面から穿つ。	黄褐色 粗砂含 良好 外面に薄く煤付着。
69 — 30 30	16.4	—	—	(7.7)	外上方に開く体部は、口縁部にいたる。狭い端面をもち、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。体部内面は、ナデ後縦方向のヘラミガキ、外面は、斜方向のヘラミガキ。口縁部下に沈線文3条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好、堅緻
69 — 29 31	21.1	—	—	12.7	ゆるく外反する口縁部。底部から外上方に開く体部。平底。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ、外面は、縦方向の刷毛目後横方向の雑なヘラミガキ。底面は、ナデ。焼成後円孔1個を内から外へと穿つ。	淡茶褐色 粗砂含、雲母を含。 良好 体部内面下半はやや荒れている。
69 — 30 32	25.5	—	—	(7.2)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。頸部に指頭圧痕残存。体部内面は、横方向の丁寧なヘラミガキ、外面は、斜方向の刷毛目後一部ナデ。	茶褐色 粗砂含 良好
69 — 30 33	27.8	—	—	11.8	ゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、倒鐘形と思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ナデアゲ後上半のみ横方向のヘラナデ、外面は、斜方向の刷毛目後一部ナデ。瘤状把手をもつ。(1個残存。)	乳黄褐色 粗砂含 良好、堅緻。 体部内面は、付着物、外面下半に煤付着。
70 — 30 34	13.9	—	—	7.0	頸部からゆるやかに開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面とも頸部にかけて横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文1条を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	茶褐色 粗砂含 良好 口縁端部、頸部内面一部に煤付着。

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
70 35	12.5 — — 5.8	頸部からゆるやかに開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面は、頸部にかけて横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文2条を施す。	乳褐色 粗砂、金雲母を微量含 良好
70 — 30 36	16.8 — — (7.3)	頸部からゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面とも頸部にかけて横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文2条を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	淡灰褐色 粗砂含 良好
70 — 30 37	23.4 — — (6.1)	ゆるく外反する口縁部。丸味のある狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面はナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、ヘラナデ後横方向の雑なヘラミガキ。口縁部内面に貼り付け突帯をめぐらす。口縁端部に沈線文1条、頸部に削り出し突帯上沈線文1（+）条を施す。	茶褐色 粗砂含 良好
70 — 28 38	20.8 — — (8.6)	頸部からやや立ち上がり、大きく外方へ開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に削り出し突帯上沈線文1（+）条を施す。	乳褐色 粗砂含 良、やや軟質。
70 — 28 39	17.7 — — (7.7)	頸部からゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面とも頸部にかけて横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文2条を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	暗灰褐色 粗砂含 良好
70 — 30 40	15.6 — — (8.1)	頸部からゆるやかに外反する口縁部。丸味のある狭い端面をもつ。	口縁部内面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。外面上半は雑に、下半は丁寧にヘラミガキ。頸部内面は、ナデ後雑なヘラミガキ。口縁端部に沈線文1条、頸部に不完全な削り出し突帯上に沈線文1条を施す。	淡黄褐色 粗砂、クサレ含 良好 口縁端部一部に煤付着。
70 — 30 41	26.1 — — (8.6)	頸部からゆるやかに外方へ開く口縁部。狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面は頸部にかけてヘラナデ後横方向のヘラミガキ、外面も頸部にかけてヘラナデ後横方向の雑なヘラミガキ。頸部に沈線文2条を施す。	淡灰褐色 粗砂含 良好
70 — 30 42	22.4 — — (5.3)	外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面はナデ後横方向の雑なヘラミガキ、外面はヘラナデ後横方向の雑なヘラミガキ。口縁端部に沈線文2条を施す。沈線文間と口縁端部内面に彩色を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	淡茶褐色 粗砂含 良好
70 — 31 43	20.9 18.6 — (6.3)	外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は磨滅が著しく不明、外面は、斜方向のヘラナデ。口縁端部に刻目。頸部に不完全な削り出し突帯上沈線文2条を施す。	淡茶褐色 粗砂、クサレ含 良好 外面全体に煤付着。
70—31 44	26.1 27.3 — (10.1)	外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、やや丸味をもつと思われる。	口縁部内面は、ナデ、外面は、斜方向の刷毛目後ナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、外面は、斜方向の刷毛目。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
70 — 29 45	— — — (11.7)	大きく外下方に開く笠形を呈す。つまみ部は、平坦である。	体部内面は、斜方向のヘラナデ、口縁部付近は、ナデ。外面は、軽いヘラケズリ後ナデ。つまみ部は、指おさえ。上面はナデ後一方向のヘラミガキ。	淡黄褐色 粗砂含 良好 口縁部付近内面と外面全体に煤付着。
70 — 29 46	10.9 — — (10.8)	弯曲しながら外上方にのび、口縁部にいたる。丸い体部。狭い口端面をもつ。	口縁部内面は、指おさえ後体部にかけて斜方向のヘラミガキ、外面は、横方向の丁寧なヘラミガキ。	乳灰色 粗砂含 良、やや軟質。

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
70 — 30 47	27.2 26.5 — (7.2)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、横方向のヘラミガキ、口縁部にいたる。外面は、ナデ後斜方向のヘラミガキ。頸部に沈線文3条を施す。	淡黄灰褐色 粗砂含 良、やや軟質。
70 — 28 48	26.9 24.6 — 23.4	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、丸い。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ヘラナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ、口縁にいたる。外面上半は、横方向、下半は、斜方向の丁寧なヘラミガキ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
70 49	30.3 — — 10.0	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、倒鐘形を呈すと思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、口縁部にいたる。外面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ。粘土紐のつぎ目が顕著である。	黄褐色 粗砂含 良好
第39図—29 58	8.6 — 6.0 4.8	小さな底部から外上方に開き口縁部にいたる直口のもので、狭い端面をもつ。	内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。底部外面に指頭圧痕残存。底面は、指おさえ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
第39図—29 59	7.2 — 6.0 3.1	厚い底部から短く立ち上がった浅い杯状のもの。口縁端部は、丸くおさめる。	内外面とも指おさえ後ナデ。指頭圧痕残存。底面は、指おさえ。	淡黄褐色 砂粒含 良好 内外面にベンガラが付着。

	径(cm) 厚さ(cm) 孔径(cm) 重量(g)	特徴	備考
第40図 60	5.6×5.7 1.5〜1.7 (0.6×0.45 0.6×0.6 63.0	完形品。断面は、扁平な長方形を呈し、中央部と周縁部の厚さはほぼ一定である。側面は、丸味をもつ。平面、側面ともにナデ後軽いヘラミガキ。円孔は、平面のほぼ中央に一方から真直ぐに穿ち、他面に穿孔時の粘土の盛り上がりがみられる。	淡黄褐色 粗砂含 良好
第41図—31 61	5.6 0.8 — 31.0	不正円形を呈する。周縁は、粗い打ち欠きを施す。側面の破面は、未調整表面は、剝離が著しい。裏面は、付着物が著しい。	淡黄茶褐色 粗砂含 良好 甕形土器の体部破片を再利用
第41図—31 62	5.4 0.6 — 21.0	不正円形を呈する。周縁は、粗い打ち欠き後細かい打ち欠きを施す。側面の破面は、未調整。表、裏面ともナデ後ヘラミガキ。	茶褐色 粗砂含 良好 壺か鉢形土器の体部破片を再利用

3　石器

本溝からは石器は全く出土せず、フレークが数点出土しているのみである。

4　木製品

本溝出土の木製品は、未製品が多く、舟型突起を有し、平面形が長方形を呈すると思われる鍬が4点（うち3点は未製品）、丸鍬であろうと推定されるものが2点（どちらも未製品）。竪杵、板状木製品が、各1点づつ、合計8点である。

鍬1　（第46図—1、図版49—1）

頭部の舟型突起部約半分のみ残存し、身の全長10.4cm、頭部幅 9.8cm、頭部厚 3.7cmである（いずれも残存値）。舟型突起は、紡錘型を呈すと思われ突起中央部に円孔が穿たれている。突起周辺は平坦である。表、裏面とも、使用による磨滅のためか、加工痕は見られない。着柄角度は約80度。用材はカシである。

鍬2　（第46図—2、図版49—2）

未製品である。頭部の舟型突起部約⅔のみ残存。身の全長12.2cm、頭部幅11.2cm、頭部厚3.9cmである（いずれも残存値）。突起は細身で、そのやや中央に穿孔しかけた跡が見られる。突起部の側面に削り痕が見られるが、表、裏面には磨耗のため加工痕は見られない。用材はカシである。

鍬3　（第46図—3、図版47—3）

未製品である。頭部先端、刃縁、側縁の形状は不明。突起の横断面は、台形を呈し、全長28.5cm、頭部幅14.3cm、刃縁幅14.7cm、頭部厚3.6cm、刃縁厚1.4cmである（いずれも残存値）。腐蝕、磨耗が激しく、加工痕は見られない。用材はカシである。

鍬4　（第46図—4、図版47—4）

未製品である。厚い板材で、上下両端とも原材から切断されたままで、整形されていない。突起部を作り出す前段階であるらしく、片面が、ゆるやかに隆起し、かすかに形をなしている。全長19.6cm、厚さ4.4cm～5.2cmである。加工痕は見られない。用材はカシである。

今回の調査地区の出土遺物だけでは断定できないが、これまでに、昭和53年9月調査のE—5—P地区より、鍬の柄が着柄されたままの状態で出土しており、その例と柄孔の角度から、本遺跡出土の鍬について言えば、舟型突起を作り出さない面の方に、柄が伸びると考えられる。

丸鍬1　（第45図—5、図版48—5）

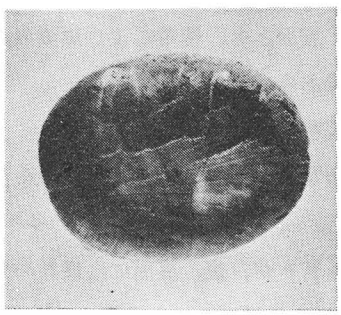
何枚か連なっていたのか、切り離した様子が伺われ、全体の形状からみて、丸鍬の未製品と思われる。全体的に厚手であり、平面形は、丸味をもった台形を呈する。全体を笠状に仕上げるように、中央を隆起させ、裏面のその部分は、削り込まれている。全長26.9m、幅31cm、中央部の厚さ6.3cm、端部の厚さ2.9cmである。表、裏面とも、加工痕が著しく残存し、工具幅は約2.5cm位と思われる。用材はクスノキである。

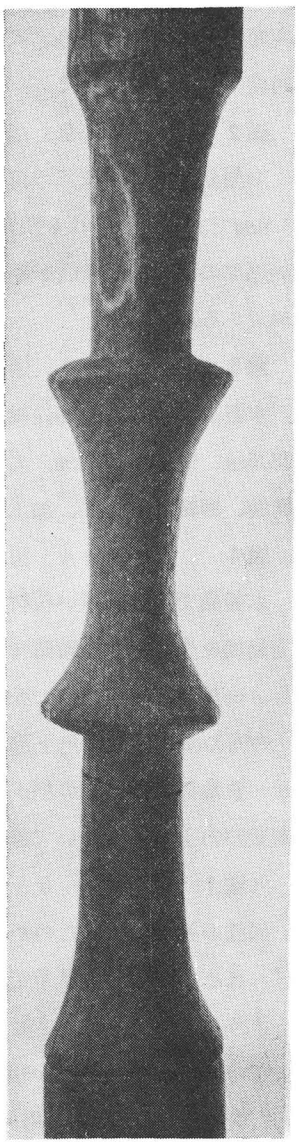
丸鍬2　（第45図—6、図版48—6）

未製品である。全体の約半分を欠損しており、頭部、刃部の別は、はっきりしていない。平面形は台形を呈する。全長27.9cm、幅17.4cm、突起部厚4.8cm、刃部厚0.5cmである（いずれも残存値）。全体を笠状に仕上げようとする意図が伺われ、表面中央に平面扁平な多角形の突起部があり、比較的、緩い傾斜をもって、端部に到る。突起部の上面は、平坦に削られており裏面は、表面の突起部と呼応して、緩やかにくぼんでいる。磨耗が著しく、加工痕は、突起部の平坦面と隆起面の一部分だけにしか見られず、その形状も不明確である。用材はクスノキである。

竪杵　（第45図—7、図版46—7）

片方の搗部先端を欠損しているが、完形品である。全長143.8cm、握部長43cm、搗部径8.3cm×6.6cm、8cm×6.9cmである。搗部の断面は、楕円形で、先に向ってやや太くする。握部には、中央に間隔をあけて2個の節状突起帯を作り出し、断面は、いずれも楕円形である。磨耗が著しいため、加工痕は、突起周辺にかすかに見られる位である。一方の搗部付け根付近に、削り込んだ凹線を一条めぐらす。この方の搗部先端は半欠ではあるが、使用痕が認められ、もう一方の搗部先端も磨滅が著しく、中くぼみになっていることから、双方とも、かなり使用されていたものと思われる。木目と同一方向に非常に丁寧な加工を施しており、凹線がめぐっていない搗部の方が、加工痕の残りがよく、断面形も比較すると小さいので、ある程度使用されてから、削りなおされているという事も考えられる。木心をはずした木取りで、用材はクヌギである。





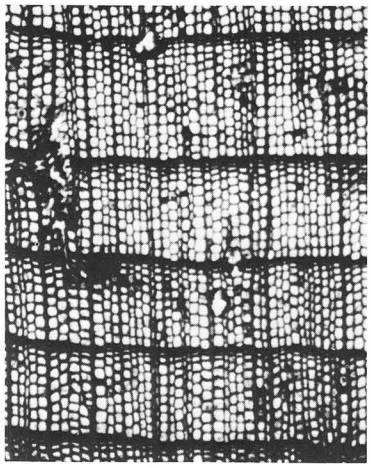
第42図　竪杵、搗部先端・握部

板材　（第45図—8、図版48—8）

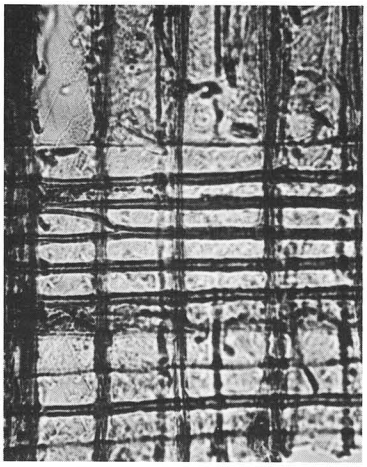
平坦で長方形を呈しており、鋤、又は鍬を作るための用材であろうと考えられる。全長27cm、幅17.5cm、厚さ3cmである。上下両端とも、両面より切断されたものと思われる。原材より剝ぎ割られたものであろうか、表、裏面とも未調整で、加工痕など、一切見られない。用材はヒノキの柾目板である。

〔参考〕

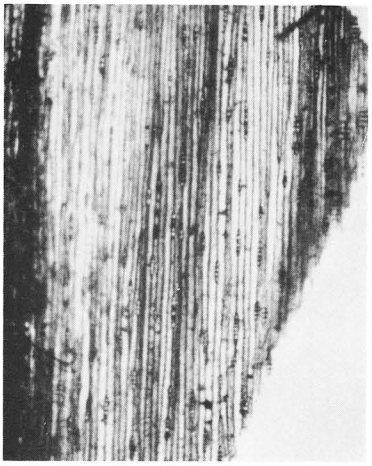
本溝出土の搗部付け根付近に施文される竪杵の類例として、安満遺跡[註1)]、唐古遺跡[註2)]より出土の竪杵が挙げられる。



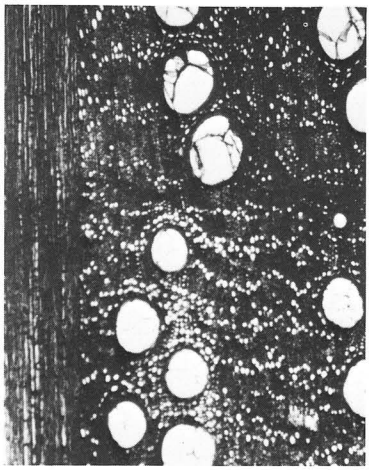
1．ヒノキ（木口）



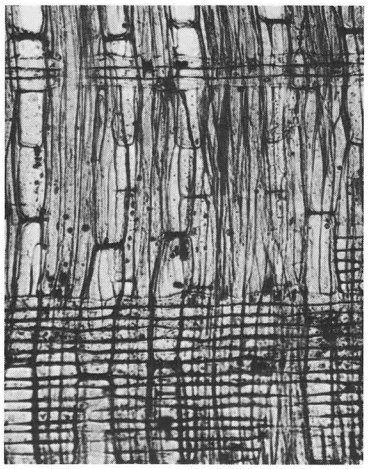
同左（柾目）



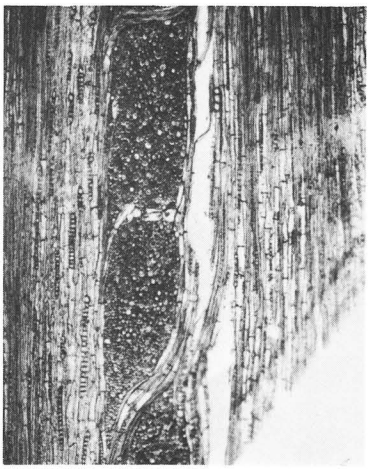
同左（板目）



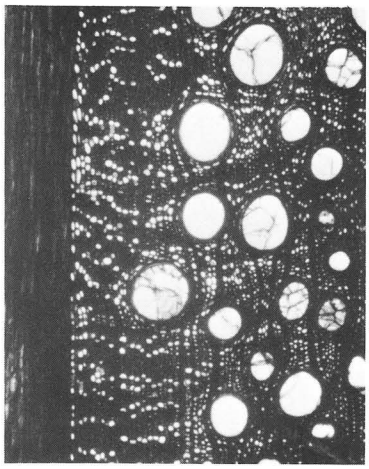
2．カシ（木口）



同左（柾目）

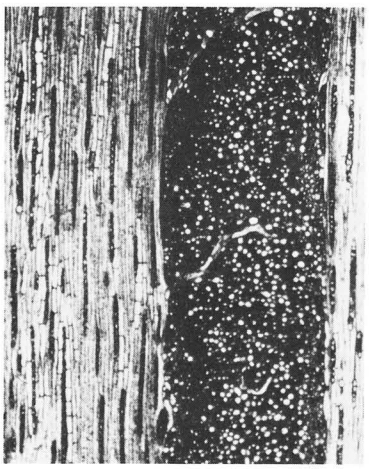


同左（板目）



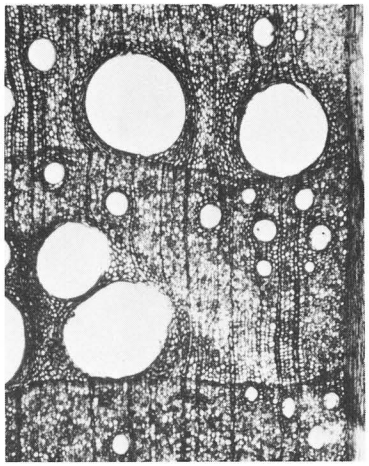
3．カシ（木口）

同左（柾目）

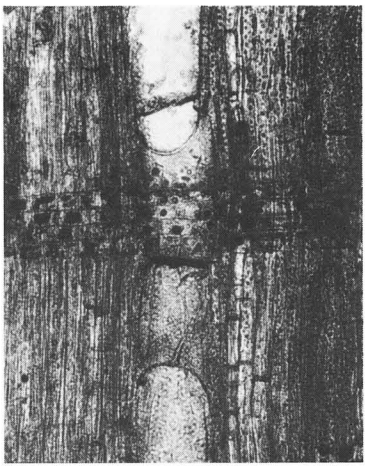


同左（板目）

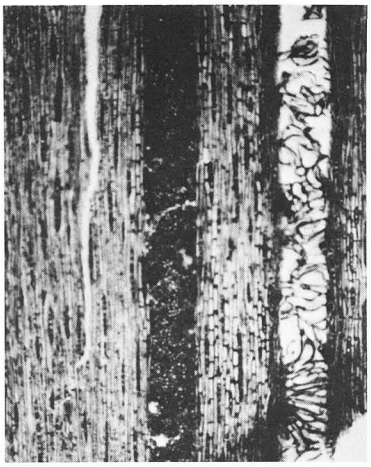
第43図　1．板材　2．鍬1　3．鍬2（溝－25）



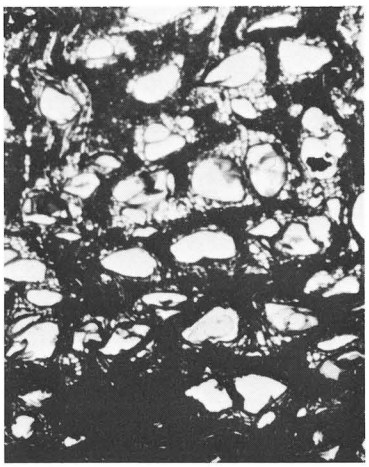
4．クヌギ（木口）



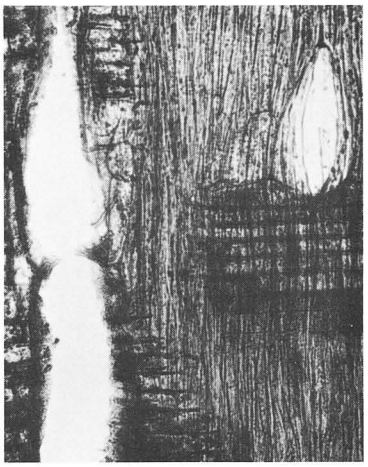
同左（柾目）



同左（板目）

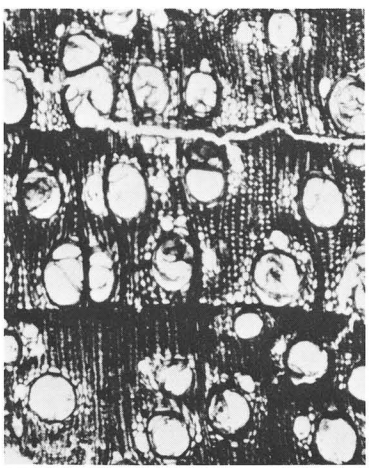


5．クスノキ（木口）

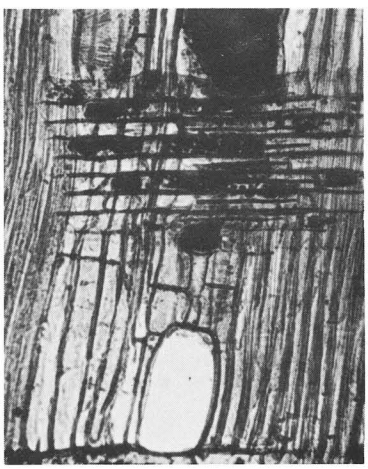


同左（柾目）

同左（板目）



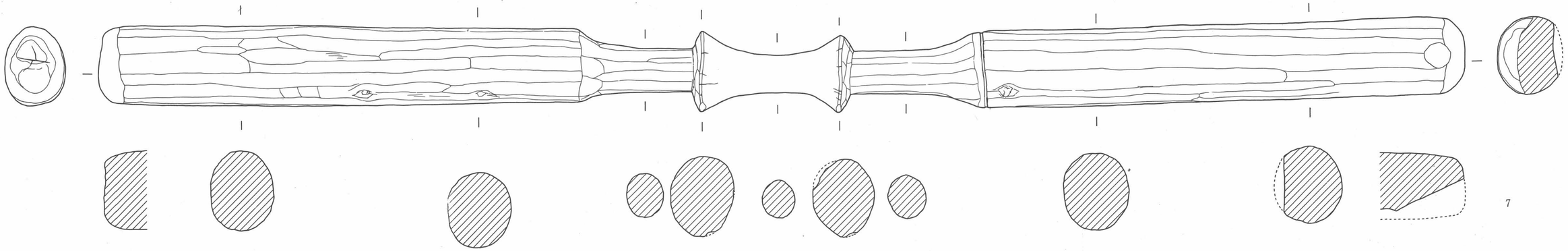
6．クスノキ（木口）

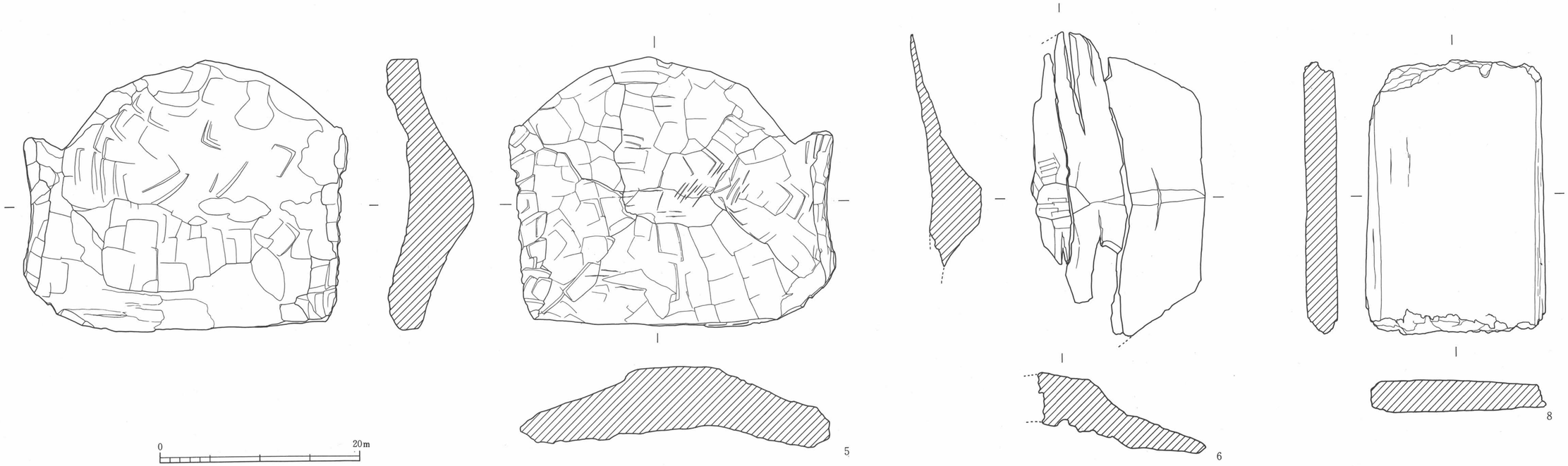


同左（柾目）

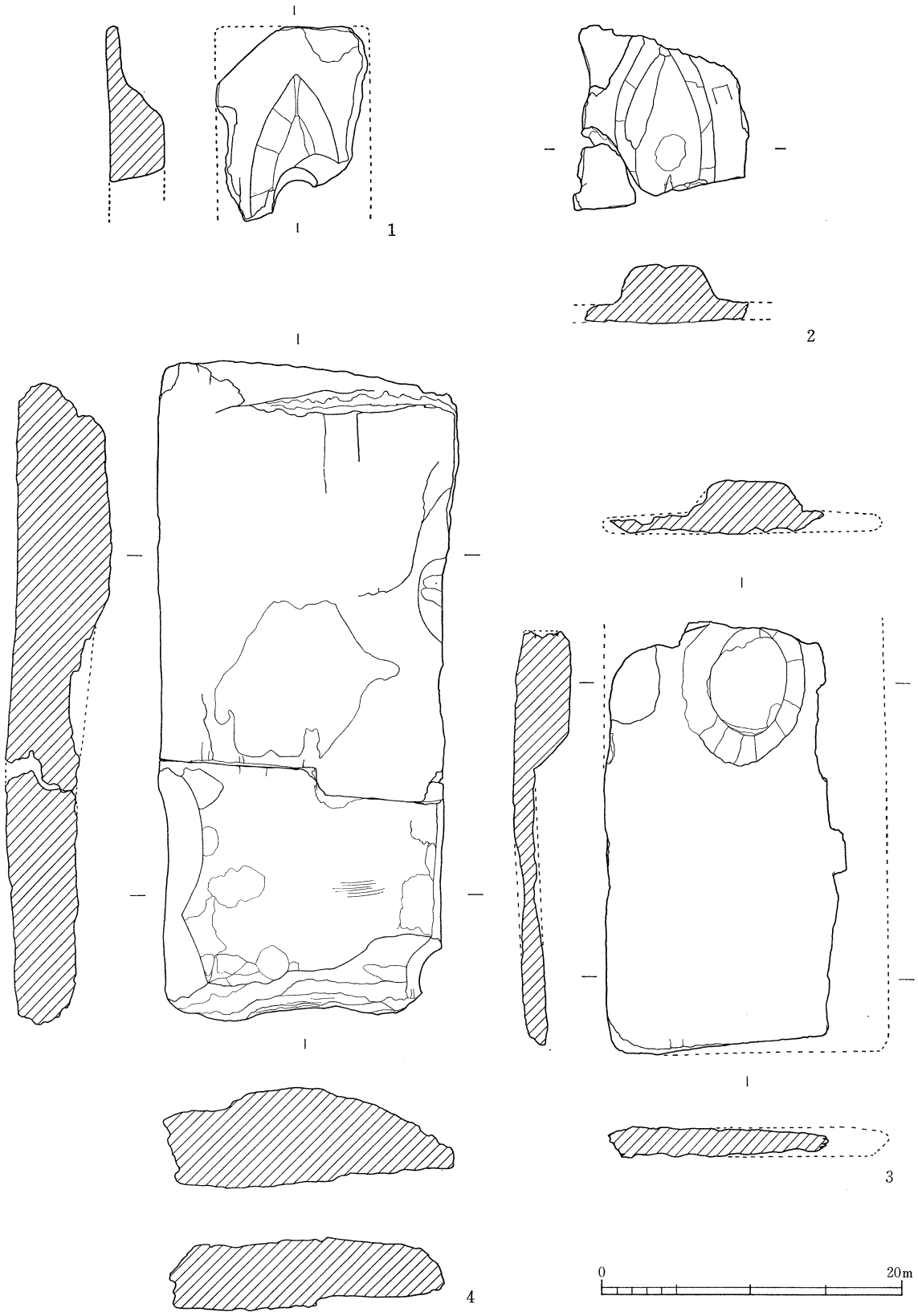
同左（板目）

第44図　4．竪杵　5．丸鍬1　6．丸鍬2（溝－25）





第45図　溝－25出土の木製品



第46図　溝 — 25 出 土 の 木 製 品

註　1）　高槻市役所『高槻市史』　1973
註　2）　小林行雄、末永雅雄、藤岡謙二郎『大和唐古彌生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告　第16冊　1943

第3節　溝—26（Ⅱ—B区）

1　遺構

溝—26は、前述の溝—25の南に0.4～0.5mの間隔をもって連なる溝である。

溝—26は、調査地区内をN—88°—Eの方向に横断し、上口の幅1.0～1.2m・深さ0.3～0.5m・底幅0.5m・底部の平均標高5.950mを測る小型のU字形溝である。また溝の底は、起伏があり、僅かに東より西へ低くなっている。（第33図）

溝—26の堆積層は、最下層のみに砂層が堆積し、他は3層に分けられる粘質土層と粘土層が自然堆積している。出土した遺物としては、上層の2層から、少量の弥生時代前期（唐古第Ⅰ様式）の土器（図版71）と石斧1点（第49図）が出土したのみである。（第34図）

溝—26の形成から廃絶の過程を、層位と出土土器から考えてみると、前述の溝—25b埋没後の弥生時代前期中段階後半から新段階頃に築造されたと考えられる。当初は、最下層の砂層から、水の流れがあったことが考えられるが、弥生時代前期末には、規模が小型であったために、周囲からの土砂の流入により埋没した。また溝—26は、他の大型の溝とは用途も異なり、用排水の小型の溝と考えられる。

2　土器

溝—26の遺物数量は、コンテナバット（35×45cm）で約2箱と非常に少なく、溝の規模も小さい。土器はすべて、唐古第Ⅰ様式に帰属する。個々の土器に関しては、土器観察表を参照されたい。

壺型土器A$_1$　（図版71—1、2）

頸部に段をもつもの（1）と、沈線文を施すもの（2）がある。（1）の段は、粘土紐を口縁部外面に貼り肥厚させ、ヘラ状のもので押さえ成形し、頸部側を低くしたもので、非常に丁寧なつくりである。

壺形土器A$_2$　（図版71—3）

削り出し突帯上に沈線文を施す。

壺形土器A$_4$　（図版71—4）

口縁端面に沈線文を施し、頸部に段をもつ。段下には、沈線文と竹管文を施す。[註1)]

これら壺形土器の頸胴部破片に木葉状文（図版71—5）、重弧文（第47図—19、20）、などヘラ描き文様や一部彩色を施したもの（第47図—21）もある。

甕形土器A　（図版71—8～15）

口縁端部に刻目をもつものが多く、頸部に施文されないもの（8、9）、段をもつもの（13）、

沈線文を施すもの（10、15）がある。また、沈線文間に刺突文（11）、刻目文（12）を施すものもある。

鉢形土器A　（図版71—17、18）

施文しないもの（17）と、口縁端面、頸部に沈線文を施すもの（18）がある。

鉢形土器B　（図版71—16）

無文のものである。

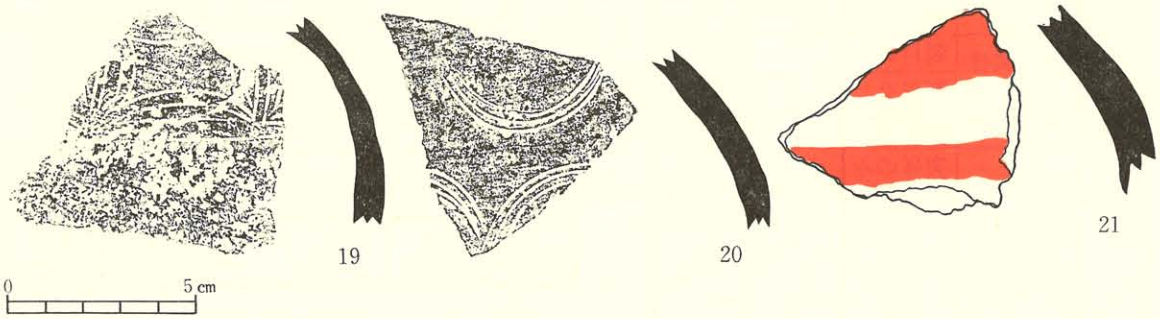
甕用蓋形土器　（図版71—7）

外下方に開く笠形のもの。

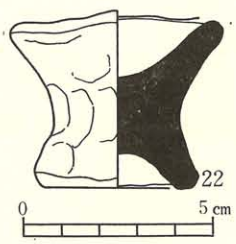
小型品　（第48図—22）

中実の短い柱部から上下方へ開く粗製の高杯形土器がある。

註　1）　本書　壺形土器（図版71—1）と同手法で、段が作り出されている。



第47図　壺　形　土　器　の　文　様



第48図　小　型　品

	遺構名 / 文様		溝 — 26
壺	沈線文	1条	1
		2条	4
		3条	1
		4条	0
		5条	0
		6条以上	0
	段＋沈線文	段のみ	0
		1条	0
		2条	0
		3条	0
	貼付突帯	刻目あり	0
		刻目なし	0
		布目圧痕	0
	貼付突帯＋沈線文	刻目あり	0
		刻目なし	0
		布目圧痕	0
	削り出し突帯段上沈線文	突帯のみ	0
		1条	0
		2条	2
		3条	0
		4条	0
		5条以上	0
	突帯上斜格子文		0
	木葉状文		1
	木葉状文＋沈線文＋平行斜線文		0
	沈線文間刺突文		0
	削り出し突帯＋段		0

壺形土器施文類別点数表

	文様 / 刻目		溝 — 26 有	溝 — 26 無
甕	沈線文	0条	3	3
		1条	0	0
		2条	3	1
		3条	3	0
		4条	0	0
		5条	0	0
		6条以上	0	0
	平行斜線文		0	0
	沈線文＋段		0	0
	沈線文間刺突文		1	0
	段のみ		1	0

甕形土器施文類別点数表

壺形土器	甕形土器	鉢形土器	高杯形土器	壺用蓋形土器	甕用蓋形土器
17 38.6%	15 34.0%	8 18.2%	1 2.3%	1 2.3%	2点 4.6%

器種構成比率表

第5表　各器種と各施文の構成とその割り合い

土　器　観　察　表

（　）内は、現存値

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
71 — 32 1	13.7 — — (6.4)	頸部から短くゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。口縁頸部界にゆるい段をもつ。	口縁部内外面ともナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。頸部内面は、ナデアゲ後横方向のヘラミガキ。外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。	淡赤茶褐色 砂粒含 良好
71 — 32 2	13.5 — — (8.2)	頸部から短く外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ後横方向の粗なヘラミガキ。頸部内面は、斜方向のナデアゲ後横方向の雑なヘラミガキ、外面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。頸部に沈線文2条、体部に1（＋）条を施す。	赤茶褐色 砂粒含 良好
71 — 33 3	19.1 — — (6.3)	筒状の頸部から外方へ開く口縁部狭い端面をもつ。	口縁部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、外面上半は、ナデ、下半は、ナデアゲ後横方向の粗なヘラミガキ。頸部に、削り出し突帯上沈線文3（＋）条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面に黒褐色物質の塗布。
71 — 33 4	33.7 — — (5.4)	頸部からゆるやかに短く外反する口縁部。丸味のある狭い端面をもつ。口縁、頸部界にゆるい段をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面は横方向のヘラミガキ、外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。頸部は、沈線文1条と段間に竹管文を二段に施す。口縁端部に沈線文1条を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
71 — 32 5	— 22.7 5.4 (12.6)	丸い体部。平底。	体部内面は、ナデ。やや磨滅する。外面は、横方向の丁寧なヘラミガキ。胴中位に沈線文1条とその上側にヘラ描き木葉状文を施す。（斜め中心線に対し、2条、3条又は、3条、3条と描かれる）	淡茶褐色 粗砂含 良
71 — 32 6	— 10.5 5.1 (7.9)	胴の張ったやや扁平な体部。底部は、やや中凹みである。	内面は、ナデ。頸部付近のみヘラナデ後横方向のヘラミガキ。外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。底面は、ナデ。	赤茶褐色 粗砂含 良好
71 — 33 7	— — — (5.6)	外下方に開き笠形を呈す。つまみ部は、平坦である。	内外面ともナデ。つまみ部は、指おさえ平坦面は、ナデ後所々ヘラミガキ。	淡黄褐色 粗砂含 良、やや軟質
71 — 32 8	15.7 15.2 7.8 17.0	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。倒鐘形の体部。平底。	口縁部内外面ともナデ。体部内外面とも上半は、斜方向、下半は、縦方向にナデ底面は、ナデ。口縁端部に刻目を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 外面全体的に煤付着。
71 — 33 9	15.9 — — (10.3)	外反する口縁部。狭い端面をもつ体部は倒鐘形を呈す。	口縁部内外面ともナデ。体部内面上半は横方向、下半は、斜方向のナデ、外面はナデアゲ。	淡黄褐色 粗砂含 良好 体部内面に付着物、外面全体に煤付着。
71 — 33 10	20.7 — — (9.5)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、倒鐘形と思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内外面ともナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文2条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 口縁部内面、外面全体に薄く煤付着。
71 — 33 11	18.9 — — (10.8)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、倒鐘形と思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は磨滅により不明、外面は、斜方向のナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条と、沈線文間に刺突文を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 口縁部内面、外面全体に煤付着。

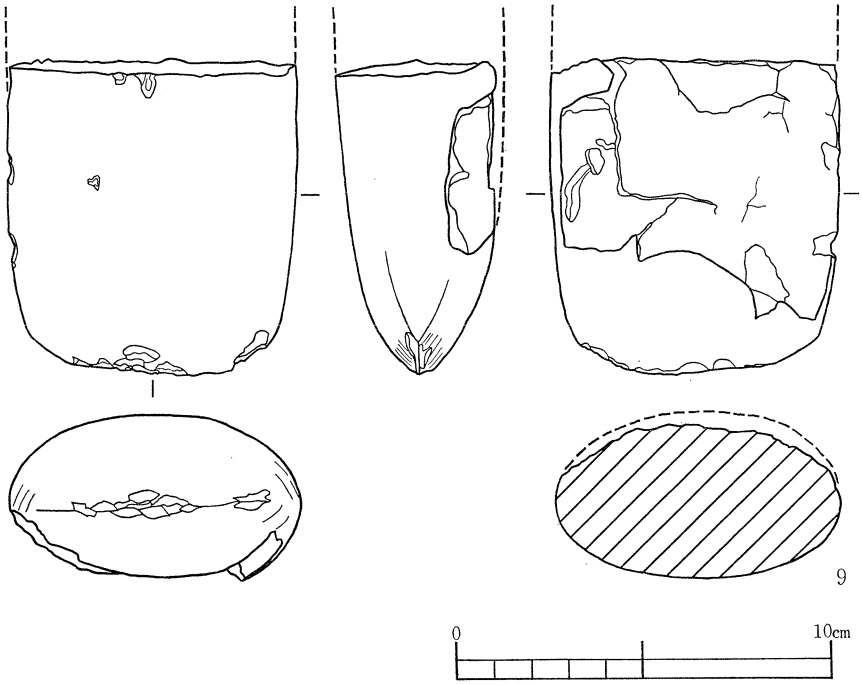
図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
71 — 33 12	21.2 — — (12.0)	ゆるく外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。体部は、倒鐘形と思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は磨滅のため不明、外面は、ナデアゲ。口縁端部に沈線文1条とその下に刻目。頸部は沈線文2条と条間に刻目を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
71 — 33 13	22.7 — — (8.5)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。頸部に段をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ヘラナデ、やや磨滅する。外面はナデ。頸部の段は、ヘラで削り出す。口縁端部に刻目を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 口縁、体部に薄く煤付着。
71 — 33 14	22.5 — — (8.6)	外反する口縁部。狭い端面をもつ	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は斜方向のナデアゲ。外面は、縦方向のヘラナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文2条を施す。	淡黄褐色 砂粒含 良好 口縁、体部に薄く煤付着。体部内面に付着物
71 — 32 15	21.6 — — (13.5)	外反する口縁部。狭い端面をもつ体部は、丸味のある倒鐘形と思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ、外面は、横、斜方向のヘラナデ。口縁端部下稜に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
71 — 32 16	11.6 — 6.5 7.5	底部から外上方に開く体部で、口縁にいたる。狭い上端面をもつ。底部は、中央が凹む。	口縁端部内外面ともナデ。体部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。底面はナデ。	乳茶褐色 砂粒含 良好 口縁部一部分に煤付着。
71 — 33 17	25.7 — — (13.0)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、丸味のある倒鐘形を呈す。	口縁端部内外面ともナデ。口縁、体部内外面ともナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。	淡赤茶褐色 砂粒含 良好
71 — 33 18	31.3 — — (10.1)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、丸味をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ、口縁にいたる。外面は、ナデ後斜方向の丁寧なヘラミガキ。口縁端部に沈線文1条、頸部に沈線文2条を施す。	赤褐色 砂粒含 良好
第48図—33 22	5.1 — 4.0 4.5	短い柱部から外上方に開く杯部、外下方に短く開く脚部をもつ。一塊の粘土から作り出された手づくねである。	杯部内面は、ナデ後横方向の粗いヘラミガキ。外面、脚部内面は、ナデ。外面に指頭圧痕残存。	淡灰褐色 砂粒含 良好

3　石器

本溝は他の４本の溝に比べて規模が小さいためか、太型蛤刃石斧が１点出土しているのみである。

太型蛤刃石斧　（第49図、図版45—９）

(9)は基部で真横に破損した半欠品である。全面に丁寧に研磨が施されており、刃先は直線状で鋭く中央には、打撃による剝離が認められる。Ｂ面は基部の破損面より刃部中央にかけて表面が大きく剝離している。左側辺には打撃による凹みがある。断面は楕円形で、現存長8.2cm、最大幅6.2cm、厚さ4.1cm、重量448ｇである。石材は不明である。暗灰色粘土層出土である。



第49図　溝 — 26 出 土 の 石 器

4　木製品

本溝では、木製品は全く出土していない。

第４節　溝—27（Ⅱ—Ｂ区）

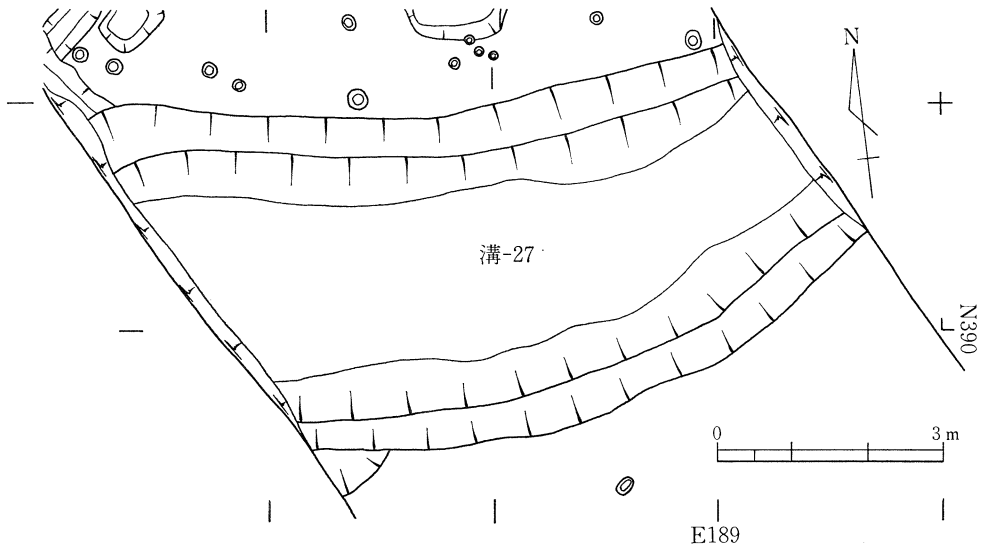
1　遺構

溝—27は、前述の溝—25・26から南へ約３ｍ離れた標高 6.250mに位置する。調査は、他の溝と同じく、弥生時代中期以降の遺構が重複して検出されたために、これらの重複する遺構を残して調査し、さらに２次調査として遺構を取り除いた後にも掘り下げを行ない、全容を把握した。

溝—27は、調査地区内を僅かに弯曲しながら、また西へ向って溝幅を広げながら、N—81°—Eの方向で調査地区内を横断しており、さきの溝—25・26とほぼ並行している。上口の幅4.0～4.5m・深さ0.8～1.0m・底幅1.2～1.5m・底部の平均標高 5.470mを測る大型のU字形溝である。また溝底は、平坦であるが、僅かに東から西へ低くなっている。（第50図）

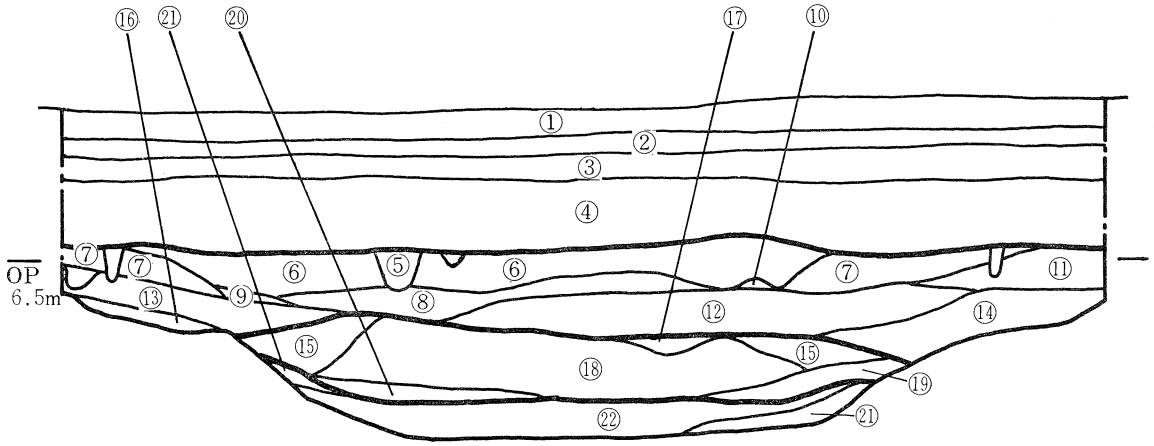
溝—27の堆積層は、約20層に細分されるが、他の溝と同じく大きくは上・中・下の3層に分けられる。調査は、この層位に従って掘り下げを行ない、また遺物の取り上げも層位別に行なった。下層には、他の溝にみられない砂層が底に沿って薄く堆積していた。中層には、他の溝と同じくヘドロ状の粘質土層が厚く自然堆積している。上層は、さきの溝—25と同じく、暗茶褐色粘土に黄褐色粘土がブロック状に多量に混じりあっていることから、意図的に埋められたと考えられる。出土遺物としては、上・中層から弥生時代前期（唐古第Ⅰ様式）の土器が多量に出土し、特に中層から出土した小型土器の多くはほぼ完形品であった。（図版72～74）また上層からは、重複する遺構からの混入と考えられる少量の弥生時代中期の土器が出土した。他に中層から、朱塗り板・臼・容器等（第56～58図）と石器（第55図）・獣骨（鹿・猪）が出土し、上層からも石器（第55図）・獣骨が出土した。（第51図）

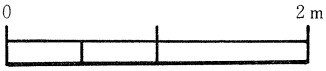
溝—27の形成から廃絶の過程を、層位と出土土器から考えてみると、弥生時代前期中段階後半から新段階頃に、さきの溝—25に隣接して新たに築造された。築造当初は、水が流れていたことが、下層に堆積した砂層から考えられる。また、下層には遺物等も含まないことから、溝の清掃が行なわれた可能性もある。しかし、その後は他の溝と同じく、排水機能が失なわれ、周囲からの土砂の流入による自然堆積と土器・木製品・獣骨等の廃棄が続き、弥生時代中期前半には埋没した。溝としての機能を失った溝—27も、生活圏がより広がった弥生時代中期になると、溝上面を生活面として利用するために埋め固められ、完全に廃絶された。



第50図　遺　構　実　測　図

溝—27と隣接して連なる溝—25との関係は、築造時期と埋没時期は溝—25がやや古いと考えられるが、一時期共存しており、かつ各々の溝の方向から先で合流していた可能性もある。これらの点から、ほぼ同規模の溝を一時期ではあるが2条必要としたものと考えられるが、その理由については、現段階では明らかにし得ない。





①耕土
②淡灰色砂質層
③黒色粘質土層
④黒褐色粘質土層
⑤暗茶褐色砂質土層
⑥暗茶褐色粘質土層と黄褐色粘土層の互層
⑦黄色砂質土層
⑧茶灰褐色砂質土層と黄褐色粘土層の互層
⑨茶褐色砂質土層
⑩黄色砂質土層のブロック
⑪黄色砂質土層と茶褐色砂質土層の互層
⑫茶褐色砂質土層
⑬淡茶灰褐色砂質土層
⑭暗青灰褐色粘質土層
⑮暗灰色砂質粘土層
⑯暗茶褐色砂層
⑰暗灰色粘土層
⑱暗青灰色粘土層
⑲暗灰色砂質粘土層
⑳暗青灰色粘土層
㉑淡灰色砂質粘土層
㉒灰色微砂層

⑥～⑭上層　⑮⑰～⑳中層　㉑～㉒下層

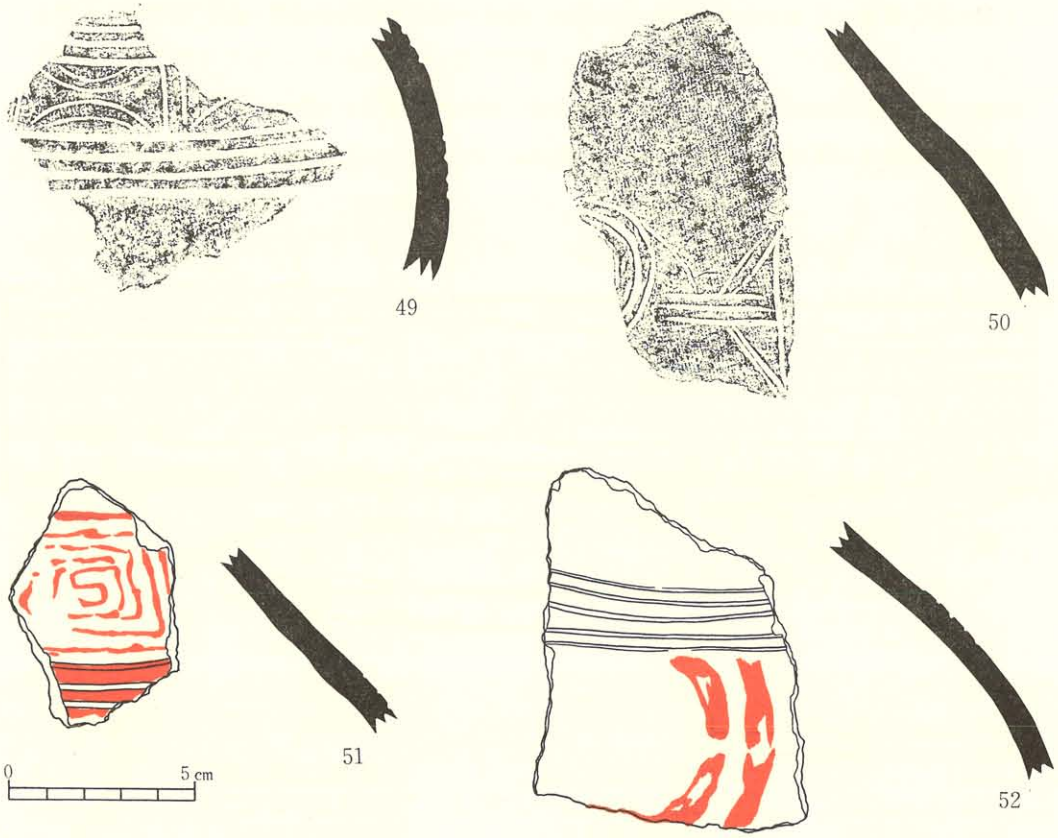
第51図　西　壁　面　土　層　図

2　土器

溝—27の遺物数量は、コンテナバット（35×45cm）で約12箱である。破片数は、多いが復元しうるものは、ほとんどない。遺物は、上・中・下層のうち、上・中層から出土しており、2層に分けて取り上げられている。図版は、2層に分け扱ったが、各層間に間層はなく、完全に分離した状態の層位関係ではないのと、各層の土器の混在から一括して述べることにした。土器は、すべて唐古第Ⅰ様式に帰属する。個々の土器に関しては、土器観察表を参照されたい。

壺形土器A$_1$　（図版72—3、4、図版73—20、31）

頸部に段をもつもの（4、20）と沈線文を施すもの（3）がある。（4）は、体部中位にも段をもち、段直下に沈線文と無軸の羽状文を施す[註1)]。（20）は、段上に沈線文を施し、頸肩部に



第52図　壺形土器の文様

沈線文で文様帯を区画し木葉状文と思われるヘラ描き文様で飾る。（31）は、球形の体部をもち頸部、体部中位にも何も施さない稀な形態である。

壺形土器A$_2$　（図版72—1、図版73—21～25、27～29）

削り出し突帯を施すもの（1、21）削り出し突帯上に沈線文を施すもの（22、24、27、29）、沈線文を施すもの（23、25）がある。沈線文4条以上のものは、ほとんどない。細片ではあるが貼り付け突帯を施すものも認められる。口縁部に紐孔を穿つものもある。

壺形土器A$_4$　（図版73—30）

沈線文を施すものがある。

これら壺形土器の頸胴部破片に変形木葉状文（図版72—5）、重弧文（第52図—49）、円、直線を組み合わせた文様（第52図—50）などヘラ描き文様や彩色を施したもの（図版72—7、第52図—51、52）もある。（第52図—51）は、沈線文帯を平塗りし、その上側に細線で雷文を、（第52図—52）は、重弧を描く。

甕形土器A　（図版72—8～16、図版74—35～42）

口縁端部に刻目をもつものが多く、頸部に施文しないもの（12、35）、沈線文を施すもの（8～11、13～16、36～42）がある。沈線文4条以上のものはほとんどない。沈線文間に竹管

文（9）、平行斜線文（16、42）を施すものがある。底部に焼成後穿孔したもの（43、44）もある。

鉢形土器A　（図版73—19、図版74—47）

無文のもの（47）と口縁端面と上面に沈線文を施すもの（19）がある。段をもつものも認められる。

鉢形土器B　（図版73—18、図版74—46）

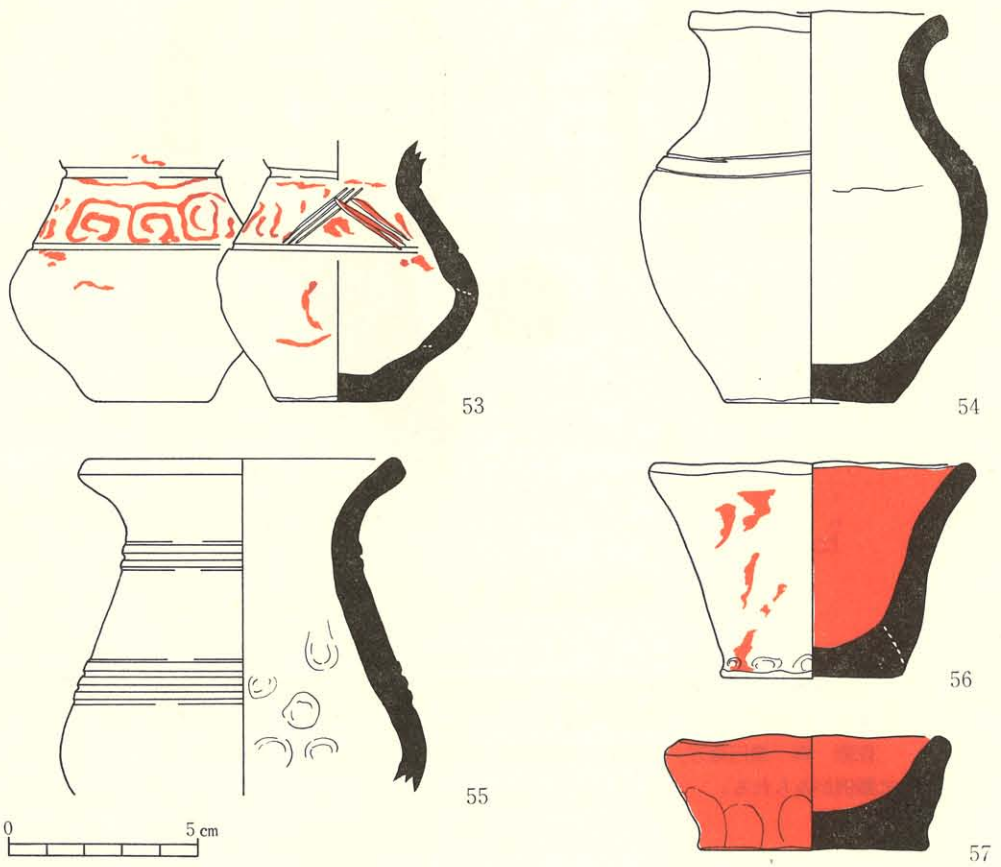
無文のものである。（46）は、比較的浅く、口縁部に円孔を穿つ。

壺用蓋形土器　（図版73—17、32～34）

笠形を呈し、中心に円孔を穿つ無文のもの（17）と口縁部に粒状浮文を連ね、瘤状のつまみをもち中心に円孔を穿つもの（32）、口縁部に沈線文を施し、削り出した低いつまみをもつもの（33）、つまみ部周辺に貼り付け刻目突帯を施すもの（34）がある。

甕用蓋形土器　（図版74—45）

外下方に大きく開く笠形を呈し、つまみ部上面は、中凹みである。



第53図　小　　型　　品

高杯形土器　（図版74—48）

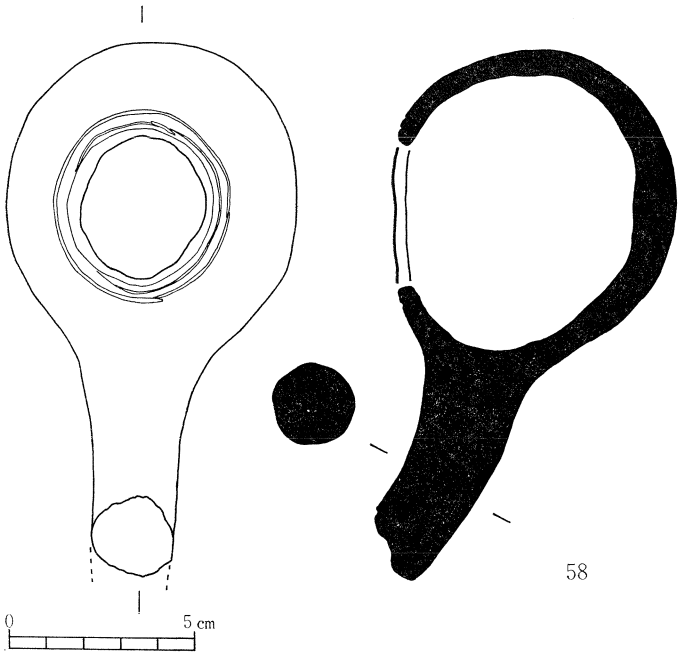
外下方へ開く杯部をもち、脚部は、外下方へわずかに屈曲し開く。柱部に貼り付け突帯を施す。

小型品　（第53図—53～57）

通常の壺形土器と変りないつくりのもので、頸部の段と体部中位の沈線文間にヘラ描き文様を施し彩色する。その反対側にも雷文を細線で描くもの（53）、沈線文を施すもの（54）、削り出し突帯上に沈線文を施すもの（55）がある。小さな底部からわずかに屈曲しながら開く直口の鉢形土器（56）と、溝—25出土のもの（第39図—59）と同形の粗製杯状のもの（57）は、いずれも内外面にベンガラが付着している。

杓子形土製品　（第54図—58）

球形の杓部に中実の弯曲した柄が着くもので、非常に丁寧につくられている。口縁部の周囲に細くいびつな沈線文が施されている。祭器的な用途をもつものと思われる。



第54図　杓　子　形　土　製　品

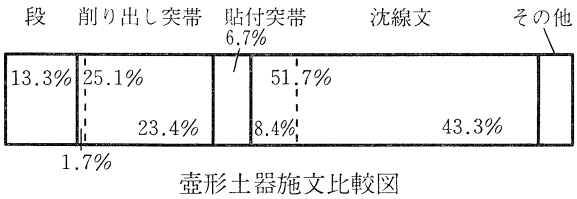
註　1）　末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古彌生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告　第16冊　1943　第57図—16
佐原　真「畿内地方」『弥生式土器集成　本編2』1968　PL. 39—1
に類例がみられる。

	文様＼遺構名		溝 — 27
壺	沈線文	1条	4
		2条	11
		3条	11
		4条	4
		5条	0
		6条以上	1
	段＋沈線文	段のみ	8
		1条	0
		2条	0
		3条	0
	貼付突帯	刻目あり	2
		刻目なし	1
		布目圧痕	0
	貼付突帯＋沈線文	刻目あり	0
		刻目なし	1
		布目圧痕	0
	削り出し突帯段上沈線文	突帯のみ	4
		1条	3
		2条	4
		3条	3
		4条	1
		5条以上	0
	突帯上斜格子文		0
	木葉状文		1
	木葉状文+沈線文+平行斜線文		0
	沈線文間刺突文		0
	削り出し突帯＋段		1

壺形土器施文類別点数表

	文様＼刻目		溝 — 27 有	溝 — 27 無
甕	沈線文	0条	14	9
		1条	1	1
		2条	5	1
		3条	15	0
		4条	10	0
		5条	1	0
		6条以上	0	0
	平行斜線文		2	0
	沈線文＋段		0	0
	沈線文間刺突文		1	0
	段のみ		0	0

甕形土器施文類別点数表



壺形土器施文比較図

壺形土器	甕形土器	鉢形土器	高杯形土器	壺用蓋形土器	甕用蓋形土器
69 40.6%	70 41.2%	21 12.4%	1 0.6%	6 3.5%	3点 1.7%

器種構成比率表

第6表　各器種と各施文の構成とその割り合い

土　器　観　察　表

（　）内は、現存値

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量 (cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
72 — 34 1	14.8 — — (8.6)	頸部からゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ。外面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。口縁端部に沈線文1条を施すがその上をなでられ不明瞭である。頸部に削り出し突帯1本を施す。	乳赤褐色 粗砂、クサレ含 良好
72 — 36 2	12.3 — — (5.5)	頸部からゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ後横方向の細かいヘラミガキ、頸部にいたる。口縁端部に沈線文1条、頸部に沈線文2条を施す。	淡茶褐色 砂粒含 良好
72 — 36 3	11.8 — — (6.6)	頸部からゆるく外反する口縁部。端部は丸くおさめる。	口縁、頸部内外面ともナデ後、横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文3条を施す。口縁部に焼成前紐孔2個1組を相対位置に穿つ。	淡赤茶褐色 砂粒含 良好
72 — 36 4	16.9 — — (19.2)	胴、頸部界に段をなし、内傾する頸部。頸部からゆるい段をもち、短くゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内面は、ナデ後横方向に丁寧に、外面は、ナデ後横方向の粗なヘラミガキ。頸部内面は、ナデ後横方向に粗く、外面は、ナデ後横方向に丁寧なヘラミガキ。胴部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。口縁のゆるい段は、沈線文の下半をヘラで削り出す。胴、頸部界の段は、粘土ひものつぎ目を利用したものと思われる段上に沈線文3条とその下にヘラ描きの綾杉文を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面に黒褐色物質の塗布。
72 — 36 5	— 31.1 — (15.7)	頸部から胴の張った体部へつづく。	内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。外面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ頸部と胴部に沈線文3条を施し、その間にヘラ描き木葉状文と連弧文を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面に黒褐色物質の塗布。
72 — 36 6	— 27.5 — (14.8)	胴の張ったやや扁平な体部。	内面は、横方向のヘラナデ。外面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ。沈線文3条を施す。	茶褐色 粗砂含 良好
72 7	— — 8.5 (4.7)	平底。	内面は、ナデ。外面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。底面は、ナデ。底面近くにいびつな沈線文2条を施す。外面の一部分、彩色が施される。	黒褐色 粗砂含 良好 内外面とも黒褐色物質の塗布。
72 — 37 8	19.6 — — (5.7)	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は磨滅が著しく不明、外面は、ナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文2条を施す。	灰褐色 粗砂含 良好
72 — 37 9	24.4 — — (4.2)	ゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ。頸部内面は、斜方向のナデアゲ。外面は、ナデ。口端面に刻目。頸部に沈線文2条と、その条間に竹管文を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
72 — 37 10	26.0 — — (7.5)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、やや丸味をもつと思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は磨滅が著しく不明、外面は、斜方向のナデアゲ。口縁端部に刻目、頸部にら旋状に沈線文2条をめぐらす。	淡黄褐色 粗砂含 良好 口縁、体部外面に煤付着。

図版番号 実測図一写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
72 — 37 11	23.1 — — 9.4	ゆるやかに外反する口縁部。狭い口端面をもつ。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は斜方向のナデアゲ、外面は、横、斜方向のナデアゲ。口端面に刻目、頸部に沈線文3条を施す。	乳褐色 粗砂含 良好 体部外面に薄く煤付着。
72 — 37 12	25.5 — — (6.4)	短く外反する口縁部。丸味のある狭い端面をもつ。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は斜方向にナデアゲ、外面は、斜方向の刷毛目。口縁端部に刻目を施す。	黄褐色 粗砂含 良好 体部外面、わずかに煤付着。
72 13	27.9 — — (5.0)	短く外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁、頸部内外面ともナデ。口縁端部に刻目、頸部に沈線文4条を施す。	暗灰褐色 粗砂含 良好 口縁端部と外面全体に煤付着。
72 — 37 14	27.8 — — (8.4)	短く外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。体部は、丸味をもつと思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内外面とも斜方向にナデアゲ。口縁端部に刻目、頸部に沈線文3条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
72 — 37 15	31.6 — — (12.5)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、丸味をもつと思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は斜方向のナデアゲ、外面は、斜方向の刷毛目。口縁端部に刻目、頸部に沈線文4条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
72 — 37 16	31.4 — — (10.7)	ゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は、丸味をもつと思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は指おさえ後ナデ、外面は、斜方向のヘラナデ。口縁端部に刻目、頸部に3条、体部に3条、沈線文を施す。その間にヘラ描き平行斜線文を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に薄く煤付着
73 17	20.0 — — 2.1	笠形を呈し、丸味のある狭い端面をもつ。	内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。中心に焼成前の円孔1個を穿つ。	黒褐色 粗砂含 良好
73 — 36 18	30.4 — — 11.1	外上方に開き、口縁部にいたる。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ。外面は、縦方向の刷毛目後ナデ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
73 — 36 19	33.5 — — (5.1)	ゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁、体部内面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ。口縁端部に沈線文1条をめぐらすが、なでられ不明瞭である。口縁上面に沈線文3条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好
73 — 36 20	12.4 — — (5.5)	頸部からゆるやかに短く外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。口縁、頸部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。外面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に削り出した段上に沈線文1条を、段下に細い沈線文1条とその下に、ヘラ描き木葉状文を施す。	淡赤褐色 細砂含 良好 口縁部内面一部に煤付着。
73 — 34 21	17.0 — — (9.1)	頸部からゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁、頸部内面は、ナデ。口縁部下半は剝離が著しい。外面は、ナデ後軽い横方向のヘラミガキ。頸部に削り出し突帯1本を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	乳白色 粗砂、クサレ含 良好 外面に黒褐色物質の塗布。
73 — 36 22	17.5 — — (9.1)	頸部からゆるやかに外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面はナデ、外面はナデ後横方向のヘラミガキ。口縁端部に沈線文1条、頸部に削り出し突帯上沈線文2条を施す。口縁部に焼成前紐孔2個1組を相対位置に穿つ。	黒褐色 粗砂含 良好 外面全体に黒褐色物質の塗布。

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量 (cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
73 — 36 23	14.4 — — 7.7	頸部からゆるく外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ、外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文1条を施す。	淡赤褐色 粗砂含 良好
73 — 34 24	19.4 — — (9.7)	頸部からゆるやかに外方へ開く口縁部。狭い端面をもつ。	口縁、頸部内面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ、外面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ。頸部に削り出し突帯上沈線文2条を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好、堅緻。
73 — 36 25	16.4 — — (6.9)	頸部からゆるやかに外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、ナデ。頸部内面は、ナデ後所々横方向のヘラミガキ、外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文2条を施す。	黒褐色 粗砂含 良好
73 — 36 26	18.3 — — (6.1)	頸部からゆるやかに外方へ開く口縁部。狭い端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面はナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ。口縁端部に沈線文1条、口縁部内面に沈線文1条、頸部外面に沈線文3条を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
73 27	18.2 — — (5.3)	頸部から外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面は横方向のヘラミガキ、外面は、ナデ。頸部に沈線文3条を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	淡褐色 粗砂含 良好 外面全体に黒褐色物質の塗布。
73 — 36 28	16.0 — — 8.4	頸部からやや立ち上がり、さらにゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、ナデ後横方向の雑なヘラミガキ。頸部内面は、指おさえ、ナデ。頸部に沈線文3条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
73 — 36 29	21.6 — — 12.6	頸部からゆるやかに外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。丸い体部と思われる。	口縁部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、ナデ。体部内面は、ナデ、外面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ頸部に削り出し突帯上沈線文1条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好
73 — 36 30	31.3 — — 14.2	頸部からゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部上半内外面ともナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。口縁部内面下半から頸部にかけてナデ後横方向のヘラミガキ、外面下半は、ナデアゲ、頸部は、ナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文3条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好
73 — 34 31	8.6 13.7 6.2 15.1	頸部からゆるやかに短く外方へ開く口縁部。丸味のある端面をもつ球形に近い体部。底部は、剝落のためやや凹むが平底である。	口縁部内外面ともナデ。頸部内面は、指おさえ後ナデアゲ、外面は、斜方向のヘラミガキ。胴部内面は、指おさえ後丁寧にナデ、外面は、斜方向の雑なヘラミガキ。底面は、ナデ。	淡黄褐色 粗砂含 良好 体部内外面一部分煤付着。
73 — 34 32	13.6 — — 1.9	笠形を呈し、端部は、丸くおさめる。中央に焼成前円孔1個を穿ちその周囲に突起状のつまみがつく（残存1個。）	内外面とも横方向のヘラミガキ。口縁近くの周囲にヘラで中央を刺突された粒状浮文を施す。	淡黒灰色 粗砂含 良好
73 — 34 33	10.3 — — 3.1	笠形を呈し、端部は、丸くおさめる。中央に丸いつまみ部をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。体部内面は、縦方向のナデ、外面は、刷毛目後縦方向のヘラミガキ。つまみ部は、削り出し、口縁近くに沈線文2条を施す。	淡褐色 細砂粒、金雲母を含。 良好 外面全体に黒褐色物質塗布。
73 — 34 34	12.0 — — (3.5)	笠形を呈し、丸味のある端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。体部内面は、ヘラナデ、外面は、ナデ。貼り付け刻目突帯を施す。	淡黄褐色 細砂粒含 良好

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
74 — 37 35	19.8 — — (6.2)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、磨滅のため不明、外面は、斜方向のヘラナデ。口縁端部に刻目を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着。
74 — 37 36	18.4 — — (10.1)	ゆるやかに外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。体部は倒鐘形	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、磨滅のため不明、外面は、ナデアゲ。口縁端部稜に刻目、頸部に沈線文1条を施す。	淡赤褐色 粗砂含 良好 外面全体に濃く煤付着。
74 — 37 37	22.0 — — 11.2	ゆるく外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、丸味のある倒鐘形。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は斜方向のナデアゲ、外面は、ナデアゲ。口縁端部に刻目、頸部に沈線文1条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着、体部内面下半に付着物。
74 — 37 38	21.0 — — (11.3)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、丸味のある倒鐘形と思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内外面とも斜方向のナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文2条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好 体部外面の一部に煤付着、体部内面下半付着物。
74 — 37 39	20.7 — — (7.2)	ゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面、頸部外面は、ナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、外面は、刷毛目後、軽くナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文4条を施す。	乳白色 粗砂含 良好
74 — 37 40	21.0 — — (18.5)	外反する口縁部。狭い端面をもつ体部は、倒鐘形。	口縁内外面、頸部外面は、ナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、外面は、ナデアゲ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着、内面全体に付着物。
74 — 34 41	24.3 — — (20.1)	ゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。体部は倒鐘形。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は斜方向のナデアゲ、外面は、斜方向の刷毛目。	乳褐色 粗砂含 良好
74 — 37 42	24.1 — — (7.4)	ゆるやかに外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のナデアゲ、指頭圧痕残存、外面は横、斜方向のナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条、沈線文下にヘラ描き平行斜線文を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
74 — 37 43	— — 6.0 (3.6)	平底。	内面は、指おさえ、ナデ。外面は、縦方向の刷毛目後ヘラナデ。底面は、ヘラナデ。底面に焼成後円孔1個を両面から穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
74 — 37 44	— — 7.2 (5.9)	平底。	内面は、ナデ後、斜方向のヘラナデ、外面は、斜方向のヘラナデ。底面は、ナデ、底面に焼成後円孔1個を両面から穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面に煤付着。
74 45	22.0 — — (7.5)	大きく外下方に開く笠形を呈す。端部は、丸くおさめる。つまみ部は、中凹みで上面は、平担につくる。	口縁端部は、ナデ。体部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ。つまみ部内面はヘラナデ、外面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ。	乳黄褐色 粗砂含 良好
74 — 36 46	29.3 — — (7.5)	外上方に浅く開き、口縁部にいたる。丸味のある端面をもつ。	内外面ともナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	淡黄褐色 砂粒含 良好

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
74 — 36 47	33.5 — — (13.4)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、倒鐘形。	口縁、体部内外面ともナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。	乳褐色 粗砂含 良好
74 — 34 48	— — — (11.4)	くびれ部を中心に、杯部は、外上方に開き、脚部は、わずかに屈曲し、外下方へ開く。	杯部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ外面は、横方向のヘラミガキ。脚部内面上部は、指おさえ、以下は、内外面とも磨滅が著しく不明。くびれ部に貼り付け突帯1本を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良、やや軟質。
第53図 53	4.2 6.9 2.9 6.9	短い口頸部、胴の張った体部をもつ。底部は、平底。	頸部内外面ともナデ。体部内面は、指おさえ後ナデ、粘土紐のつぎ目残存。外面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。頸部に削り出しの段、体部中位に沈線文1条を施す。頸部にヘラ描き文様を施し彩色し、反対側に細線で雷文を描く。体部下半にも彩色の痕跡がある。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体と口頸部内面に黒褐色物質の塗布
第53図—35 54	6.6 9.1 4.5 13.5	外上方に短く開く口縁部、狭い端面をもつ。丸味のある体部をもつ底部は、平底。	口縁部内外面ともナデ後粗い横方向のヘラミガキ。体部内面は、ナデ。外面は、ナデ後丁寧な横方向のヘラミガキ。体部中位に沈線文2条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 口縁部内外面、体部外面に黒褐色物質の塗布
第53図—35 55	8.1 — — 8.9	ゆるく外反する口縁部、狭い端面をもつ。やや胴の張った体部をもつと思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、指おさえ後ナデアゲ。外面は、ナデ。頸部の削り出し突帯上に沈線文1条、体部中位の削り出し突帯上に沈線文2条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
第53図—35 56	6.8 — 4.6 5.7	小さな底部から外上方へ屈曲しながら開き口縁部にいたる直口のもの。端部は、丸くおさめる。	内外面ともナデ後軽い横方向のヘラミガキ。底部外面に指頭圧痕残存。底面は、ナデ。内外面ともにベンガラが付着。	淡黄褐色 粗砂含 良好
第53図—35 57	6.8 — 5.0 3.0	厚い底部から短く立ち上がった浅い杯状のもの。口縁端部は、丸くおさめる。	内外面とも指おさえ後ナデ。指頭圧痕残存。底面は、指おさえ。内外面にベンガラが付着している。	淡黄褐色 粗砂含 良好
第54図—35 58	口径 3.8×3.4 器高 7.6 全長14.1 杓部径7.8 柄部径2.2	球形の杓部に上方に弯曲した中実の棒状の柄が付く。口縁部は、平面正円形をなし、端部に狭い面をもつ。柄部断面は、正円形。	杓部内面は、指おさえ後ナデ。外面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。柄部は、ナデ後丁寧なヘラミガキ。口縁部にいびつな細い沈線文2条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に黒褐色物質の塗布。

3　石器

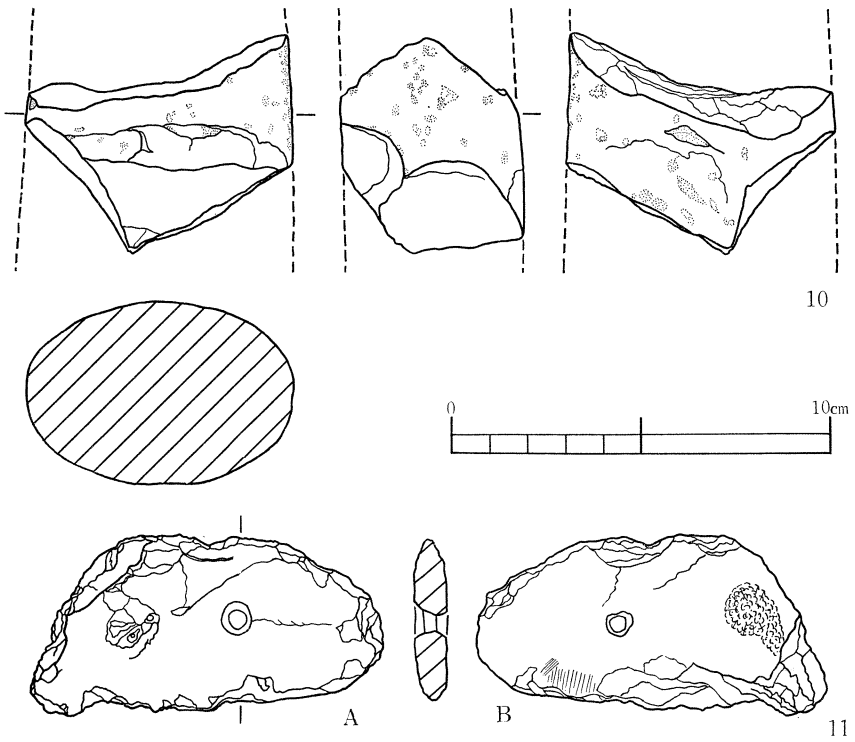
本溝から出土した石器は、土器の量に比べて少なく２点（上層１、中層１）で、その他フレークが数点出土している。

太型蛤刃石斧　（第55図、図版45—10）

⑽は基部上方でやや横方向に、基部下方で右上及び左上方から破損し、基部中央のみ残存したものである。全面に研磨が施されているが、二次使用痕は認められないので、破損後廃棄されたものであろう。断面は楕円形で、現存長5.7cm（整形面現存長3.4cm）、幅7.0cm、厚さ4.8cm、重量211ｇである。石材は閃緑岩である。中層出土である。

石包丁の未製品　（第55図、図版45—11）

⑾は側辺が約⅓欠損した半月形直線刃の未製品である。打ち欠き成形後に荒い研磨が施されているが、刃部は打ち欠きのみで成形及び研磨は施されていない。紐孔はＡ面右寄りに両面より穿孔された貫通孔が１ヶ所あり、さらにＡ面には打撃による凹みの中に２ヶ所の回転穿孔痕があり、Ｂ面にはこれと相対する位置に打撃による凹みが密集している。このように石包丁としての要素も未完成であり、石材も不適当であるため、製作段階で廃棄されたものではないだろうか。現存長8.8cm、幅4.5cm、厚さ0.8cm、重量53ｇである。石材は絹雲母片岩である。上層出土である。

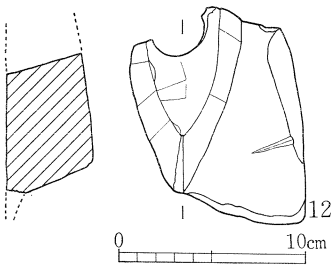


第55図　溝 — 27 出 土 の 石 器

4　木製品

本溝出土の木製品は、多種類にわたっており、鍬、臼、朱塗り板、高杯、容器、用途不明板材が、各１点づつ、合計６点であるが、用途不明板材は、残存状態が悪いため、観察不可能であった。

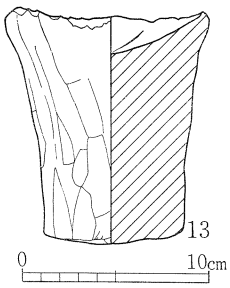
鍬　（第56図、図版49—12）



第56図　鍬

舟形突起を有し、平面形は長方形を呈する鍬と思われる。突起部の約半分と、右側平坦な部分のみ残存する。全長11.4cm、幅 8.9cm、頭部厚 4.6cmである（いずれも残存値）。突起は細身で、中央に柄孔が穿たれている。突起周辺は平坦である。突起部の側面に、加工痕が見られるが、表、裏面には見られない。着柄角度は、約75度。用材はカシである。

臼　（第57図、図版49—13）



第57図　臼

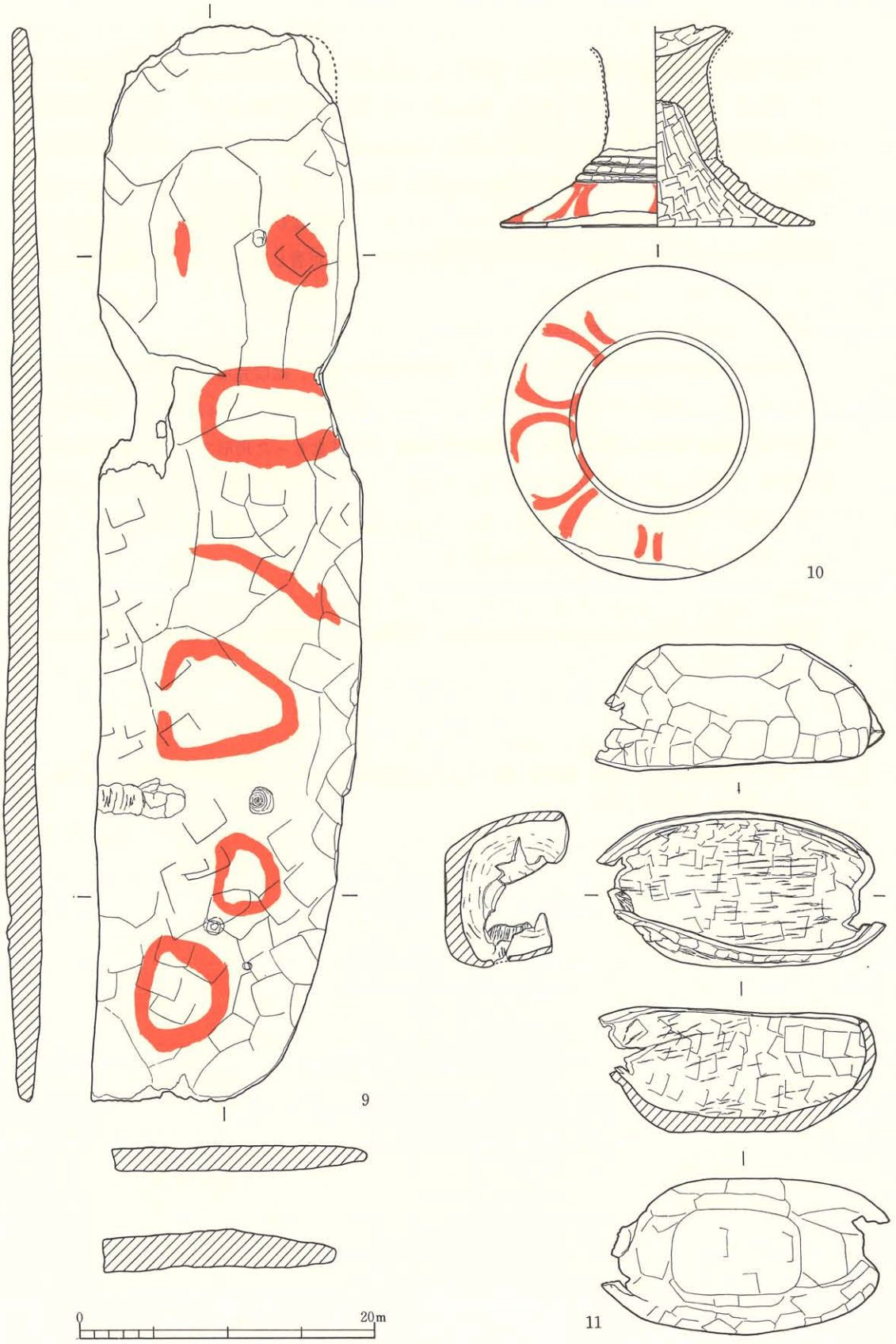
口縁端部を欠損しているが、完形品である。残存器高12.5cm、口縁径10cm、底部径7.5cm、内面の深さ1.9cmである。内面は、浅い半球状に刳り込まれ、相当使用されたのか、磨滅して滑らかである。外底面は、内側がわずかに高く、周囲もわずかに丸味をもつため、やや不安定である。側面に上下方向の削り痕、外底面にも加工痕が見られる。木取りは、縦木取りで、心材を用い、器の中心と木心とは、ほぼ一致する。用材はクスノキである。

朱塗り板　（第57図—９、図版47—９）

全体的に扁平な板状木製品である。全長72cm、残存幅16cm～17.4cm、厚さ1.4cm～2.4cmで右側端と下端部は、徐々に薄く仕上げられている。表面は、幅 2.5cmから３cm前後の工具で、あまり明確ではないが、不定方向に削られている。上部左側には、ふし穴なのか、それとも意図的に穿たれたものなのか不明であるが、一穴があいている。表面に赤色（ベンガラ）で、不定形な円や線、点のような文様が数個描かれている。左半分を欠損しているので不明であるが、同じ形のものが左側に復元されるとすれば、“楯”の可能性も強い、と考えられるし、表面に彩文されていることより、一般の生活用器ではなく、特殊な、例えば魔除けのような用途をもつ板とも考えられる。木取りは不明。用材はケヤキである。

高杯　（第58図—10、図版46—10）

杯部のほとんどを欠損。杯底部よりまっすぐに太い脚柱を有する。脚台は、外下方に広がり、端部は、やや角ばっている。器高13.3cm、脚柱径７cm、脚台径21.3cmである（いずれも残存値）。脚柱と脚台の区分部には、唐古第Ⅰ様式の壺などに見られる、削り出し突帯上に沈線文をめぐらす文様を模した装飾が施されており、残存する限りでは、緩い突帯上に４本の条線



第58図　溝－27出土の木製品

が刻まれている。脚台外面の突帯下と端部には、赤色（ベンガラ）で1条の彩線をめぐらせて、その間には、円弧文を連ねる。文様は、脚台部の約半分だけにしか残存していない。全体的に施されていた文様が、磨耗をうけて半分消滅してしまったのかも知れないが、痕跡がほとんど見あたらない事から、置いた時人目に触れる部分のみに文様が施された、という事も考えられるであろう。一木より作られ、非常に丁寧なつくりで、杯部および、脚部内面は、幅1cm前後の工具で、中心部に向って削られている。脚柱外面は、腐蝕が著しいために、加工痕は見られない。用材はヤマグワである。

容器　（第58図—11、図版46—11）

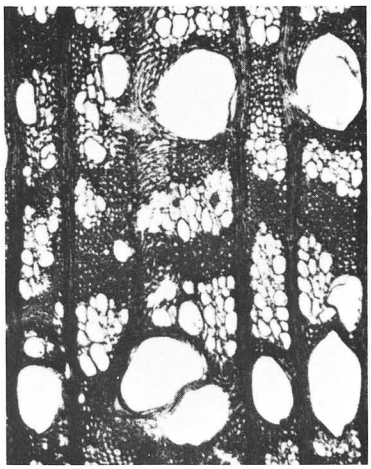
片口部の一部分を残した他の部分と、その対面を欠損するが、ほぼ完形品である。土圧のためであろうか、全体的にややひずんでいる。平面形は、楕円形を呈し、片口である。器高8cm残存口縁径18cm×8.5cm、器厚0.7cm（底部は約1cm）の丸味をもった舟形で、安定感のある平底を呈し、内部は、深く刳り込まれている。外面は、やや粗雑な削りであるが、内面は、木目と同一方向に丁寧に細かく調整しながら削っている。横木取りで、一木より作られており、木心は、器の真中心よりやや上にあると思われる。

〔参考〕

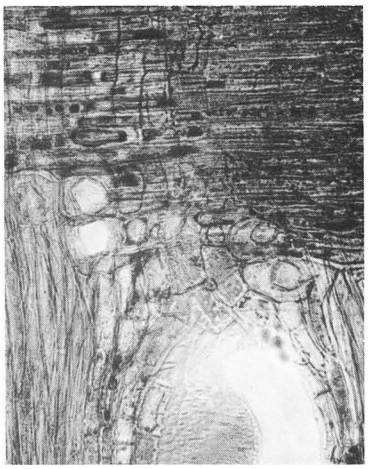
本溝出土の赤色彩文のある高杯の類例として、安満遺跡[註1)]、唐古遺跡[註2)]で出土している高杯が挙げられる。

註　1）　高槻市役所『高槻市史』　1973

2）　小林行雄、末永雅雄、藤岡謙二郎『大和唐古彌生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告　第16冊　1943

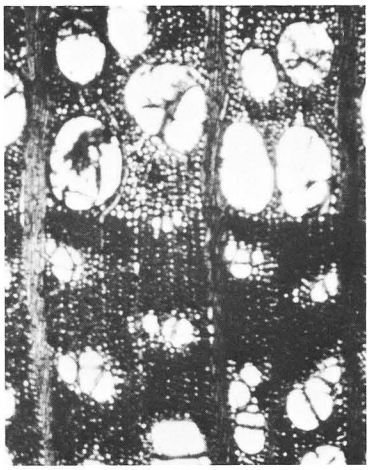


7．ケマキ（木口）

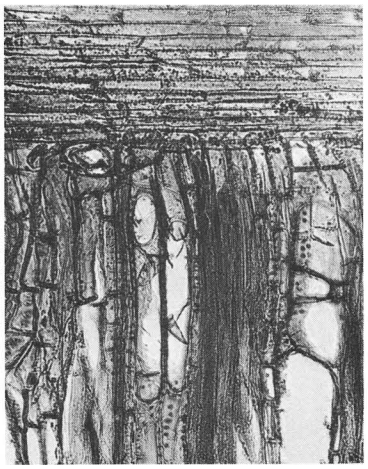


同左（柾目）

同左（板目）

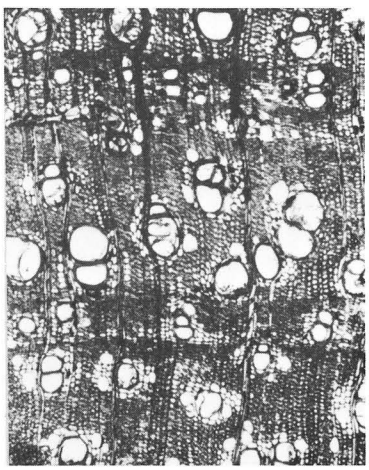


8．クワ（木口）

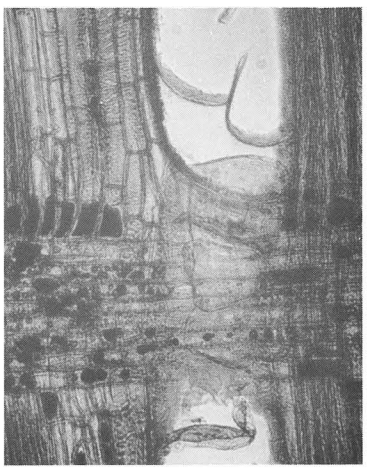


同左（柾目）

同左（板目）



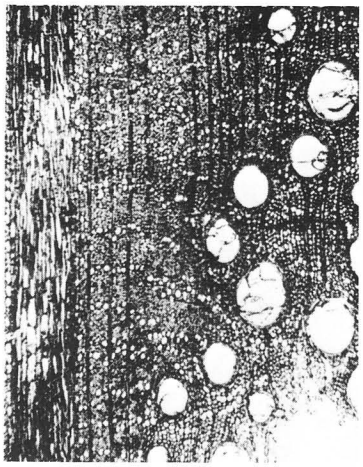
9．クスノキ（木口）



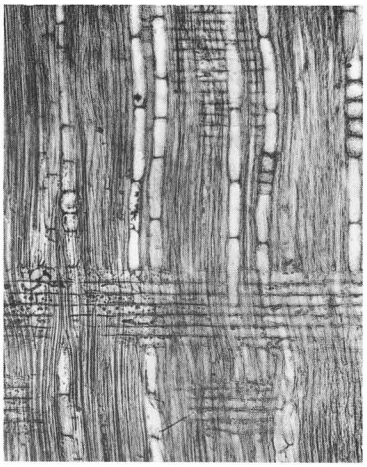
同左（柾目）

同左（板目）

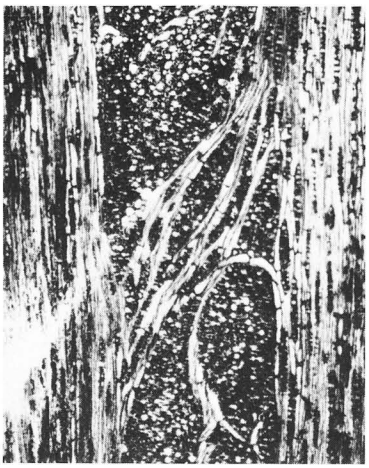
第59図　7．朱塗板　8．高杯　9．臼（溝－27）



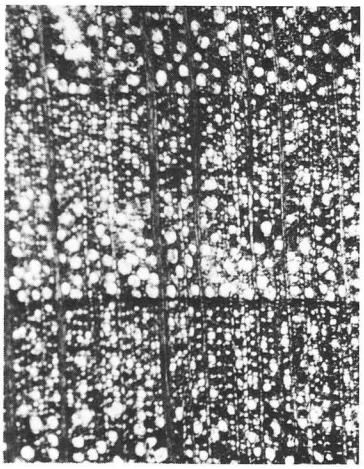
10．カシ（木口）



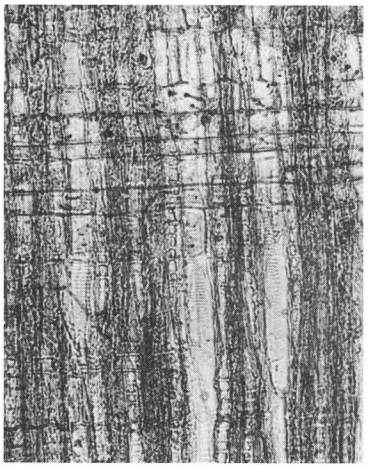
同左（柾目）



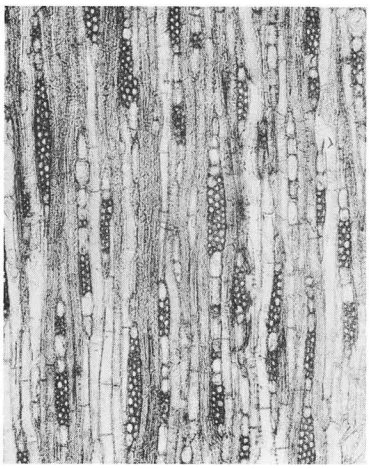
同左（板目）



11．ヤブツバキ（木口）

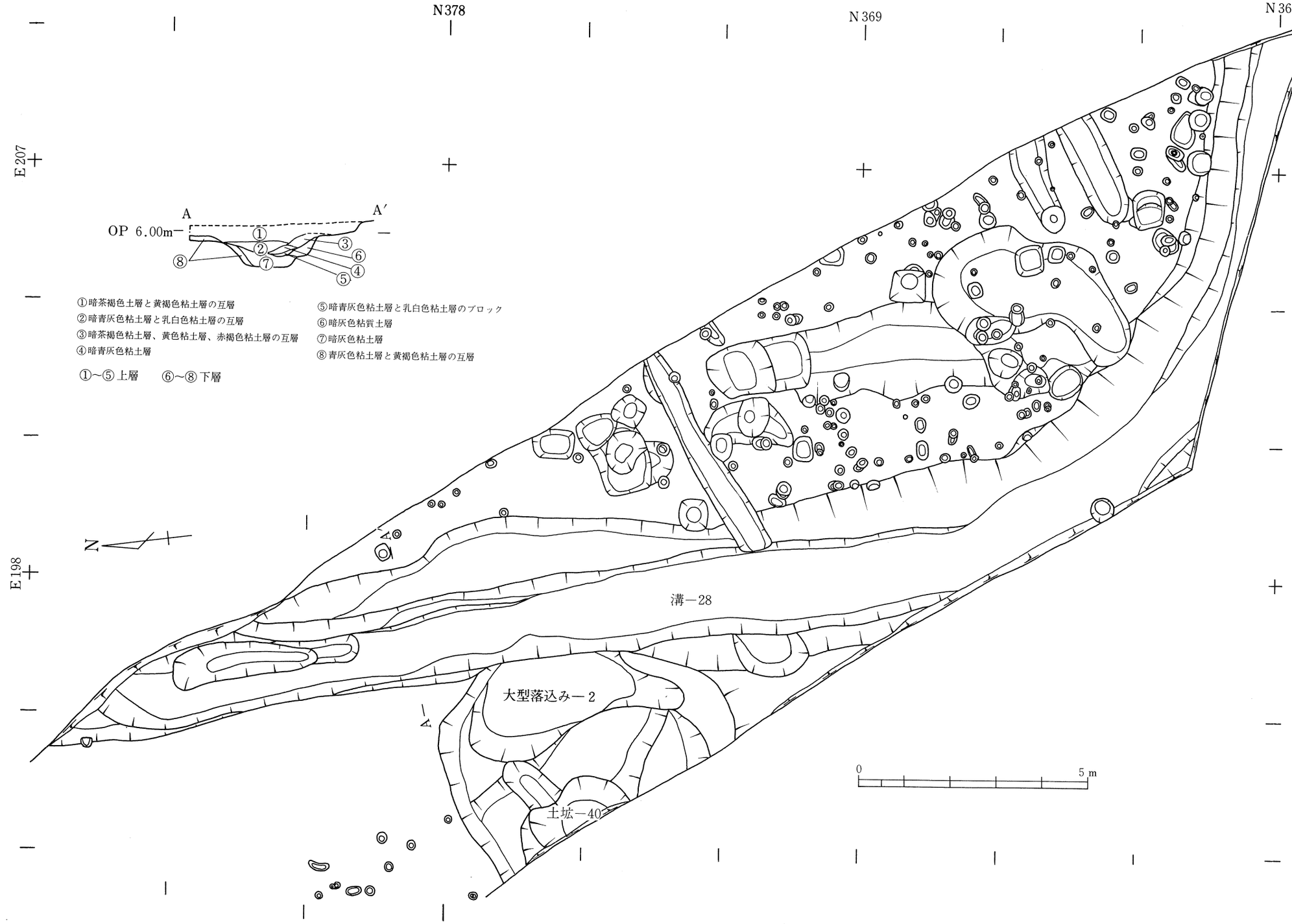


同左（柾目）



同左（板目）

第60図　10．鍬（溝－27）　11．腕輪型木製品（溝－28）



第61図　遺構実測図及び土層図

第5節　溝—28（Ⅱ—A区）

1　遺構

溝—28は、前述の溝—27の南約10m付近からⅡ—A区の南端にかけての、標高が 6.250mから 6.000mに下った所に位置する。調査は、他の溝と同じく、多くの弥生時代中期以降の遺構が溝と重複して検出されたために、まずこれらの重複する遺構を残して調査し、さらに取り除いた後にも調査を行なった。

溝—28は、調査地区内をN—3°—Wの方向に縦走し、南端でS—71°—Eの方向をとり東へ屈曲する。東肩に段をもち上口の大きく開くU字形溝である。上口の幅2.5～3.0m・深さ 1.0m（東肩より）・底幅1.0m・底部の平均標高5.400mを測る。また溝底は、平坦であるが、僅かに北から南へ低くなる。（第61図）

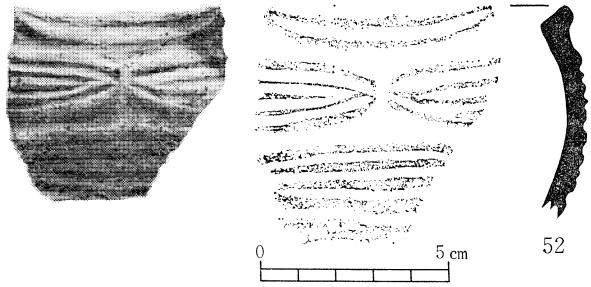
溝—28の層位は、検出した長さが長いため異なる箇所もあるが、溝中央部の堆積層では、9層以上に細分され、大きくは上・下の2層に分けられる。調査は、この層位に従って行ない、また遺物の取り上げも層位別に行なった。下層は溝肩を修正した際に落ち込んだと考えられる互層になった粘土層の堆積と、さらに自然に流れ込んで堆積したヘドロ状の粘質土である。上層は、意図的に埋められたと考えられる暗茶褐色・暗灰色・黄褐色・乳白色粘土の厚い互層となっている。出土遺物としては、上層から弥生時代前期（唐古第Ⅰ様式）の土器が多量に出土した。（図版75～78）また上層からは、重複する遺構から混入したと考えられる少量の弥生時代中期の土器が出土した。他に、上層からは、木製の腕輪（第68図）と石器（第67図）・獣骨（鹿・猪・犬）が出土した。（第61図）

溝—28の形成から廃絶の過程を、層位と出土土器から考えてみると、弥生時代前期中段階後半から新段階頃に、地形が周囲より0.3～0.4m高い微高地の西側から南側の裾に沿って築造された。その後、溝の西側の弥生時代前期の大型落ち込み—2（第Ⅲ章・第3節参照）は土砂の流入により埋まったが、溝—28は溝西肩の修正を行なって、溝としての機能を失わなかった。しかしそれ以後は、他の溝と同じく、周囲からの土砂の流入により自然堆積が続き埋まっていった。弥生時代中期前半頃になると、溝としての機能を失い、弥生時代前期の遺構の削平土と中期の遺構築造時の残土等に埋め固められ、他の溝と同じく新たな生活面として、かっての溝上面も利用され完全に廃絶された。

2　土器

溝—28の遺物数量は、コンテナバット（35×45cm）で約17箱である。破片数は多いが、完形に復元しうるものは殆んどない。遺物は、一括して取り上げられており、唐古第Ⅰ様式に帰属するが一片のみ縄文式土器（大洞A式併行[註1)]）が伴出している。（第62図—52）個々の土器に関しては、土器観察表を参照されたい。

壺形土器A$_1$　（図版75—1、図版76—15）



第62図　縄　文　式　土　器

口、頸部間、体部中位に段をもつものがある。（1）の段は、口縁部外面下半に粘土紐を薄く貼り、ヘラで押さえ頸部側を低くしたものである。

壺形土器A$_2$　（図版75—2～10、12～14、第64図—53、54）

体部中位の段上に沈線文を施すもの（16）、頸部に削り出し突帯を施すもの（2～4）、削り出し突帯上に沈線文を施すもの（5～8）があり、体部中位の幅広い突帯の上下に沈線文を施すもの（8）もみられる。さらに沈線文を施すもの（9、10）、貼り付け刻目突帯を施すもの（12、13、14）、貼り付け突帯と沈線文を併用したもの（53、54）もある。口縁部に紐孔を穿つものもある。

壺形土器A$_4$　（図版75—11）

沈線文を施すものがある。

これら壺形土器の頸胴部破片に重弧文（第64図—55）や、竹管文を施すもの（第64図—56）幾何学的な文様（第64図—57）などヘラ描き文様や変形木葉状文（第64図—58）、帯状沈線文間に平行斜線文と思われる彩色を施したもの（第64図—59）もある。

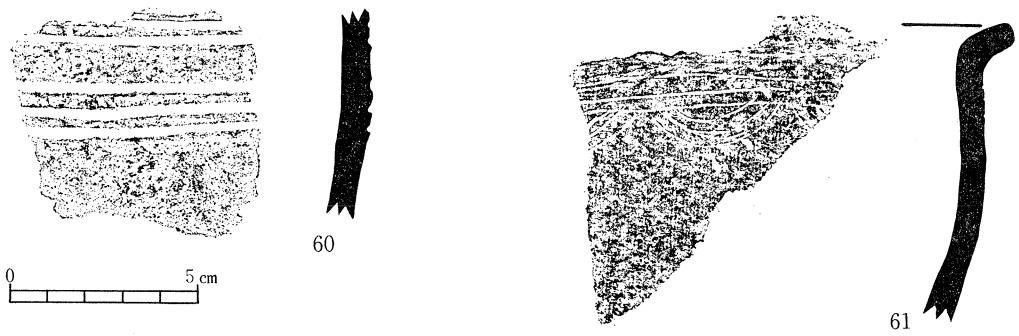
壺形土器B$_1$　（図版76—17）

無文で、口縁部に2個一組の紐孔を相対位置に穿つ。

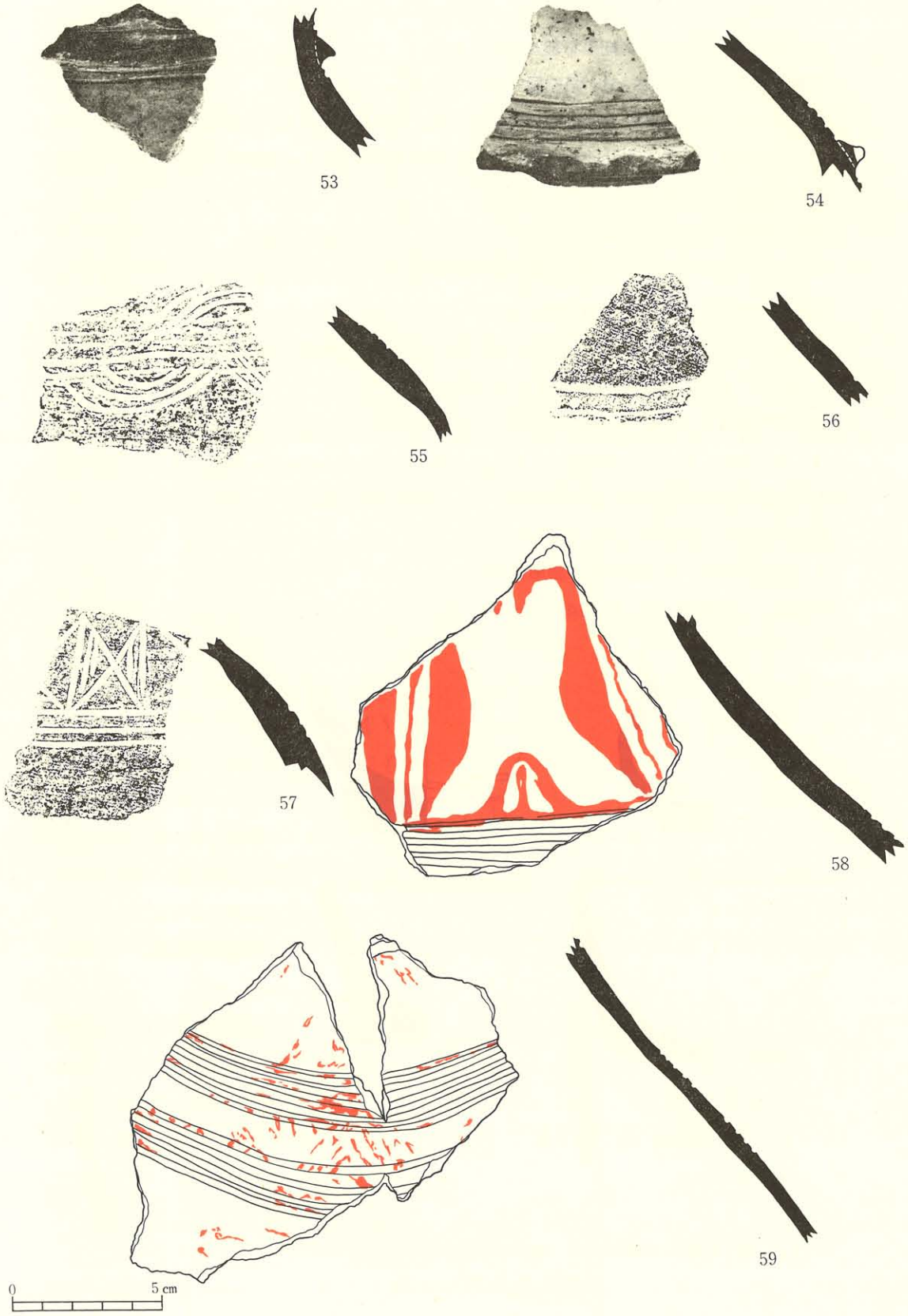
甕形土器A　（図版77—28～37、図版78—38～44、第63図—60）

口縁端部に刻目をもつものが圧倒的に多いが、沈線文をめぐらすものもみられる。頸部に施文されないもの（29）、段をもつものや、沈線文を施すもの（28、30～41）があり、条数は、2、3条のものが最も多く4条以上のものは少ない。帯状沈線文を施すもの（60）、沈線文間に刺突文を施すもの（35）もある。底部に焼成後穿孔したもの（36、42～44）もある。

甕形土器B　（図版76—27）



第63図　甕・鉢形土器の文様



第64図　壺形土器の文様

口縁部直下に横位の耳状把手を相対位置にもつ。

鉢形土器A　（図版78—51、第63図—61）

無文のものと頸部に段をもつもの、沈線文を施すものがみられる。口縁端面に沈線文と竹管文を、体部には、多条な帯状沈線文間に竹管文を施すもの（51）、沈線文下をヘラ描き重弧文（61）で飾るものもある。

鉢形土器B　（図版78—49、50）

無文のもの（49、50）と沈線文を施すものがある。

壺用蓋形土器　（図版76—20～25）

笠形を呈し、つまみをもたないもの（20、21、23、24）と環口状のつまみをもつもの（25）があり、ヘラ描き文様を施す（22、23）もある。

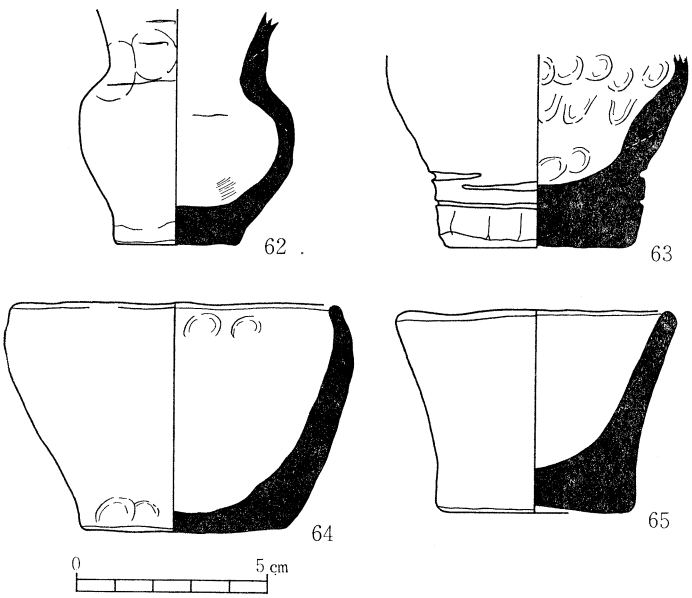
甕用蓋形土器　（図版78—45～48）

外下方に大きく開く笠形を呈し、つまみ部上面が凹むもの（45、46、48）がある。つまみ部に円孔1個を相対位置に穿つもの（46）、とヘラ描き文様を施すもの（48）もある。

高杯形土器　（図版76—26）

丸い椀状の杯部、外下方に開く脚部をもつ。

小型品　（図版76—19、第65図—62～65）



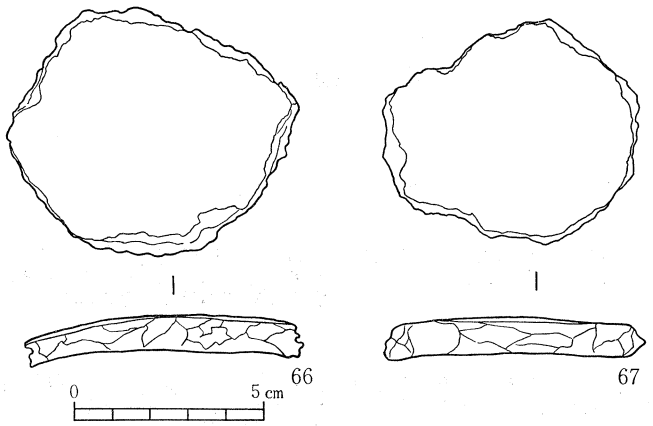
第65図　小　　型　　品

通常の壺形土器とかわりないつくりで無文のもの（62）、粗雑なつくりのもの（19）、底部に沈線文をめぐらすもの（63）と直口の鉢形土器（64、65）がある。（64）は、内弯ぎみの口縁部をもつ。

円板形土製品　（第66図—66、66）

壺形土器の破片を再利用したもので（67）は、不定形な破片から粗く打ち欠き不整円形にする段階の顕著なものである。

註　1）　泉　拓良氏、家根祥多氏、中村友博氏に御教示をえた。



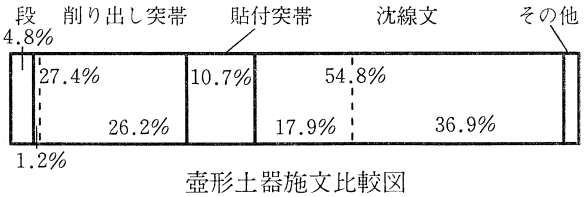
第66図　円　板　形　土　製　品

	遺構名 / 文様		溝 － 28
壺	沈線文	1条	4
		2条	7
		3条	20
		4条	5
		5条	6
		6条以上	4
	段＋沈線文	段のみ	1
		1条	0
		2条	2
		3条	1
	貼付突帯	刻目あり	9
		刻目なし	0
		布目圧痕	0
	貼付突帯＋沈線文	刻目あり	1
		刻目なし	1
		布目圧痕	0
	削り出し突帯段上沈線文	突帯のみ	0
		1条	5
		2条	7
		3条	10
		4条	1
		5条以上	0
	突帯上斜格子文		0
	木葉状文		0
	木葉状文＋沈線文＋平行斜線文		0
	沈線文間刺突文		0
	削り出し突帯＋段		0

壺形土器施文類別点数表

	文様 / 刻目		溝 － 28 有	溝 － 28 無
甕	沈線文	0条	6	6
		1条	6	1
		2条	13	1
		3条	21	1
		4条	7	0
		5条	2	0
		6条以上	0	0
	平行斜線文		0	0
	沈線文＋段		0	0
	沈線文間刺突文		1	0
	段のみ		0	0

甕形土器施文類別点数表



壺形土器施文比較図

壺形土器	甕形土器	鉢形土器	高杯形土器	壺用蓋形土器	甕用蓋形土器
90 38.1%	79 33.5%	39 16.5%	2 0.8%	14 5.9%	12点 5.1%

器種構成比率表

第7表　各器種と各施文の構成とその割り合い

土　器　観　察　表

（　）内は、現存値

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
75 — 42 1	12.3 — — (6.8)	頸部からゆるやかに外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁、頸部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に段をもち、段から下は特に丁寧にヘラミガキされる。	淡灰褐色 粗砂多く含 良好、堅緻
75 — 42 2	18.1 — — 9.9	頸部からゆるやかに外方へ開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁、頸部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に削り出し突帯1本を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面全体に黒褐色物質の塗布。
75 — 42 3	14.3 — — 8.4	頸部からゆるやかに外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁部内面は磨滅が著しく不明。外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、頸部にいたる。頸部に削り出し突帯1本を施す。	淡黄褐色 砂粒含 良好 頸部外面に薄く煤付着。
75 — 42 4	15.7 — — (11.7)	頸部から外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、ヘラナデ後横方向の粗なヘラミガキ。外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
75 — 42 5	21.4 — — 18.6	頸部からやや立ち上がり、さらに外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁、頸部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面に指頭圧痕残存。頸部に削り出し突帯上沈線文1条を施す。	淡黄灰色 粗砂含 良好
75 — 42 6	12.7 — — (6.8)	頸部からゆるく外方へ開く口縁部端部は、丸くおさめる。	口縁、頸部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に削り出し突帯上沈線文3条を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	淡茶褐色 粗砂含 良好
75 — 38 7	17.5 28.5 8.6 32.1	頸部から外反する口縁部。端部は丸くおさめる。内傾する頸部、胴の張った体部。平底。	口縁部内外面、頸部外面は磨滅が著しく不明。頸部内面はナデアゲ。胴部内面は横方向のヘラミガキ。外面は、縦斜方向のヘラミガキ。底面は、ヘラミガキ。頸部と胴部に削り出し突帯上沈線文2条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良、やや軟質
75 — 38 8	16.8 — — 14.8	頸部からゆるやかに外反する口縁部。端部は丸くおさめる。頸部から、なだらかに胴部へ続く。	口縁部内面、外面上半は、ナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。器壁が少し荒れている外面は、磨滅のため不明。頸部に削り出し突帯上沈線文3条、胴部に段をもち、段下に沈線文2条と1条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良、やや軟質
75 — 42 9	14.6 — — 10.9	頸部からゆるく外上方へ開く口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁端部内外面ともナデ。口縁、頸部内外面とも横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文3条を施す。	淡灰茶色 粗砂含 良好
75 — 42 10	18.2 — — 8.4	頸部からゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁、頸部内外面とも横方向のヘラミガキ。頸部に沈線文4条を施す。	淡黄褐色 砂粒含 良、やや軟質
75 — 42 11	34.6 — — 13.7	頸部からゆるやかに外上方へ開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。頸部内面は、斜方向のヘラミガキ外面は、横方向の丁寧なヘラミガキ。	淡黄褐色 粗砂含 良好

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
75 — 38 12	18.3 — — (8.9)	頸部からゆるやかに外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁部内面は、ナデ後横方向に丁寧に、外面は細かくヘラミガキ。頸部内面は、横方向の粗なヘラミガキ。外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に刻目貼り付け突帯1本を施す。口縁部に焼成前紐孔1個を穿つ。	乳褐色 粗砂含 良好
75 — 38 13	17.6 — — (8.5)	頸部からやや立ち上がり、さらにゆるく外反する口縁部。狭い端面をもつ。	口縁端部は内外面ともナデ。口縁、頸部内面はナデ後横方向のヘラミガキ。外面は、ナデ、ナデアゲ後横方向の雑なヘラミガキ。頸部に刻目貼り付け突帯を1本施す。口縁部に焼成前紐孔2個1組を穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
75 — 42 14	17.6 — — 22.4	頸部からゆるやかに外上方へ開く口縁部。端部は、丸くおさめる。	口縁端部は内外面ともナデ。口縁、頸部内面は、ヘラナデ後横方向のヘラミガキ。外面は、縦方向のヘラナデ後横方向のヘラミガキ。頸部に刻目貼り付け突帯1本を施す。	乳褐色 粗砂含 良好
76 — 38 15	— — 7.8 (14.8)	球形に近い胴部に内傾する頸部をもつ。平底。	頸、胴部内面、胴部外面は磨滅のため不明。頸部外面は、横方向の丁寧なヘラミガキ。底面は、磨滅のため不明。	乳褐色 粗砂含 良、やや軟質
76 — 38 16	— — 9.3 (16.8)	胴の張った扁平な体部。底部は、ややあげ底。	体部内面は、ナデ後横方向の粗なヘラミガキ。外面は、横方向の非常に丁寧なヘラミガキ。胴部に削り出したゆるい段をもち、段上に沈線文2条を施す。底面は、一方向のヘラミガキ。	赤茶褐色 砂粒、やや金雲母含 良好 外面全体に黒褐色物質の塗布
76 — 38 17	13.5 18.3 — 11.6	内弯する口縁部、狭い口縁端面をもつ。丸い体部。	口縁部内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。体部内面は、磨滅のため不明。恐らく横方向のヘラミガキと思われる。外面は、ナデ後斜方向のヘラミガキ。口縁部に紐孔2個1組を相対位置に穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
76 18	— 12.6 5.9 (10.4)	胴の張った球形に近い体部。平底。	体部内面上半はナデ、下半は指おさえ、ナデ。外面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。底部付近は、軽くヘラケズリ後横方向のヘラミガキ。底面は、ヘラケズリ後ナデ。	淡黄褐色 粗砂含 良、やや軟質 外面一部に二次的焼成による変色がある。
76 19	— 10.6 5.3 (8.0)	いびつで、つぶれたような体部。底部は、ややあげ底で器壁が厚い。	頸部内面はナデアゲ。外面は指おさえ。体部内面はナデ、ナデアゲ。外面はヘラナデ後わずかに横方向のヘラミガキ。内底面は指おさえ、外底面はヘラナデ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好 内外面とも非常につくりが悪くいびつである。
76 — 41 20	11.0 — — 2.3	笠形を呈し、狭い口端面をもつ。	口縁部内面は、ヘラケズリ後横方向のヘラミガキ。体部内面はヘラナデ。外面は全体に軽いヘラケズリ後横方向のヘラミガキ（四方向）。中心部に焼成前円孔1個を穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
76 — 41 21	11.1 — — 2.2	笠形を呈し、狭い端面をもつ。	内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。外面は指おさえ、ナデ後横方向のヘラミガキ。中心部に焼成前円孔1個を穿つ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
76 — 41 22	9.3 — — (1.1)	扁平な笠形であろう。端部は丸くおさめる。	口縁端部内外面ともナデ。体部内外面とも横方向のヘラミガキ。ヘラ描きの木葉状文を施す。（一部のみ残存。）	淡赤褐色 砂粒含 良好
76 — 41 23	— — — (3.1)	笠形を呈す。	内外面ともナデ後、横方向のヘラミガキ中心部に焼成前円孔1個を穿つ。円孔の周囲にいびつな沈線文3条と、沈線文3本がヘラ描きされる。	淡赤褐色 粗砂含 良好

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
76 — 41 24	13.4 — — 3.9	笠形を呈し、狭い端面をもつ。	体部内面はナデ、口縁部のみ横方向の雑なヘラミガキ。外面はヘラケズリ後、粗雑なヘラミガキ、口端面にいたる。	淡灰褐色 粗砂含 良好
76 — 41 25	13.9 — — 4.1	笠形で、中凹みの環口状のつまみをもつ。狭い端面をもつ。	口縁部は、内外面ともナデ後横方向のヘラミガキ。体部内面は、ナデ後横方向のヘラミガキ、外面は、ナデ後縦斜方向のヘラミガキ。つまみ部はナデ。つまみ部中心に焼成前円孔1個を穿つ。	淡褐色 粗砂含 良好 口縁部外面一部に煤付着。
76 — 40 26	— — 13.6 16.2	椀形の杯部をもち、脚部は、外下方へ開く。狭い脚端面をもつ。	杯部内面は、ナデ後横方向の丁寧なヘラミガキ。脚部内面上半は指おさえ、ナデ。下半は、強いヘラナデ後斜方向の雑なヘラミガキ。杯、脚部とも外面は、磨滅が著しく不明。	淡黄褐色 粗砂、クサレ含 良好
76 — 39 27	14.7 — 5.7 13.7	底部から外上方へ開き、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。 平底。	口縁端部内外面ともナデ。体部内面は不定方向にナデ、一部剝離する。外面は器表の荒れがひどく不明。口縁部下に、把手の痕跡が相対位置にある。底面はナデ。	淡茶褐色 粗砂含 良好 口縁内面、外面全体に煤付着。
77 — 43 28	19.4 — — (16.5)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、倒鐘形。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は斜方向のヘラナデ。外面は、横、斜方向にナデ。口縁端部に刻目、頸部に沈線文1条を施す。	淡灰褐色 粗砂含 良好 外面全体に煤付着、体部内面下半に付着物。
77 — 43 29	23.4 — — (12.8)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は、丸くおさめる。体部は、倒鐘形と思われる。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面は磨滅のため不明、外面はナデアゲ。口縁端部に刻目を施す。	淡赤茶褐色 砂粒含 良好 全体に煤付着。
77 — 43 30	21.8 — — (8.5)	外反する口縁部。端部は丸くおさめる。体部は丸味をもつと思われる。	口縁内外面、頸部外面はナデ。体部内面は荒れがひどく不明。外面は斜方向の刷毛目。口縁、頸部界に指頭圧痕残存。口端部に刻目、頸部に沈線文2条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好 口縁内面、外面全体に煤付着。
77 — 43 31	24.8 — — (8.4)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は丸くおさめる。体部は丸味をもつと思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は斜方向のヘラナデ、やや器壁が荒れている。外面は斜方向のヘラナデ。頸部に指頭圧痕残存。口縁端部に刻目。頸部に沈線文2条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好 体部内面に付着物、外面全体に煤付着。
77 — 39 32	20.9 — — (19.3)	外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。体部は丸味のある倒鐘形。	口縁部内外面、頸部外面はナデ。体部内面は、斜方向にナデアゲ、やや器壁が荒れている。外面はナデアゲ。口端面に刻目、頸部に沈線文3条を、ら旋状に施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好 体部内面下半に付着物、体部外面全体に煤付着。
77 — 43 33	21.4 — — (18.6)	ゆるく外反する口縁部。端部は丸くおさめる。体部は倒鐘形。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面はナデアゲ、外面は斜方向のヘラナデ。頸部に指頭圧痕残存。口縁端部に刻目。頸部に沈線文2条を施す。 (体部外面下半は、二次的焼成のため変色。)	淡茶褐色 粗砂含 良好 体部内面に付着物、口縁、体部上半に煤付着。
77 — 43 34	21.8 — — (15.0)	ゆるやかに短く外反する口縁部、端部は丸くおさめる。体部は丸味のある倒鐘形。	口縁部内外面ともナデ。体部内面上半は磨滅のため不明、下半は指おさえ、斜方向のヘラナデ。外面は斜方向のヘラナデ口縁端部に刻目、頸部に沈線文3条を施す。(体部下半一部に二次的焼成による変色。)	淡茶褐色 粗砂含 良好 体部内面に付着物、外面全体に煤付着。
77 — 43 35	25.0 — — (13.1)	ゆるやかに外反する口縁部、端部は丸くおさめる。体部は丸味のある倒鐘形。	口縁部内外面ともナデ。頸部外面は、斜方向の刷毛目後ナデ。体部内面は磨滅のため不明、外面は斜方向の刷毛目。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条をら旋状に施し、条間に楕円形の刺突文を施す。	淡黄褐色 粗砂、クサレ含 良好 外面全体に煤付着。

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
77 — 39 36	17.0 — 8.0 21.8	ゆるやかに外反する口縁部。端部は丸くおさめる。体部は倒鐘形。平底。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面はナデアゲ、外面は縦方向のヘラナデ。底面に焼成後円孔1個を両面から穿つ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。(体部内面は、剝離が著しい。)	乳茶褐色 粗砂含 良好 口縁、体部上半 底面に煤付着。 体部内面付着物。
77 — 39 37	25.9 — 7.7 28.4	外反する口縁部。端部は丸くおさめる。体部は倒鐘形。やや中凹みの底部。	口縁部内外面、頸部外面はナデ。体部内面はナデアゲ、やや器壁が荒れている。外面は縦方向のヘラナデ、下半部は器壁が荒れ、二次的焼成による変色。底部内面は指おさえ、ナデ。底面は器壁の荒れがひどく不明。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	茶褐色 粗砂含 良好
78 — 43 38	21.0 — — (10.5)	ゆるく外反する口縁部。端部は丸くおさめる。体部は丸味をもつ。	口縁部内外面、頸部外面はナデ。体部内面は磨滅のため不明、外面は縦方向のヘラナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文4条を施す。	茶褐色 粗砂含 良好 口縁、体部に煤付着。
78 — 43 39	24.1 — — (17.9)	外反する口縁部。端部はゆるくおさめる。体部はやや丸味のある倒鐘形。	口縁部内外面ともナデ。体部内面上半は磨滅のため不明、下半は斜方向のヘラナデ。外面は、縦、斜方向のナデアゲ。下半部は二次的焼成のため変色。頸部に指頭圧痕残存。口縁端部に刻目。頸部に沈線文4条を施す。	淡茶褐色 粗砂含 良好 体部内面下半に付着物、外面全体に煤付着。
78 — 43 40	24.9 — — (9.7)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は丸くおさめる。体部は丸味をもつと思われる。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ。外面は横方向のヘラナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文4条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
78 — 43 41	35.6 — — (12.3)	ゆるやかに外反する口縁部。丸味のある端面をもつ。	口縁部内外面、頸部外面はナデ。体部内外面とも斜方向のヘラナデ。口縁端部に刻目。頸部に沈線文3条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
78 — 39 42	— — 8.7 (3.2)	平底。	内面はナデ、やや磨滅する。外面はナデ後、斜方向のヘラミガキ。底面はナデ後ヘラミガキ。焼成後円孔1個を両面から穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
78 — 39 43	— — 7.1 (3.8)	平底。	内面は磨滅のため不明、外面はナデアゲ底面はヘラナデ後、軽いヘラミガキ。焼成後円孔1個を両面から穿つ。	淡黄灰色 粗砂含 良好
78 — 39 44	— — 7.4 (8.8)	平底。	内面は斜方向のヘラナデ、外面はナデアゲ。底面はナデ。焼成後円孔1個を内面から穿つ。	淡黄褐色 粗砂含 良好 外面に煤付着。
78 45	20.9 — — 9.4	大きく外下方へ開く笠形を呈す。口縁端部は丸くおさめる。つまみ部は、やや中凹みである。	口縁端部内外面ともナデ。体部内外面とも縦、斜方向のヘラナデ後、横方向のヘラミガキ。つまみ部外面は指おさえ、上面はヘラナデ後、横方向の雑なヘラミガキ。	淡茶褐色 粗砂、金雲母含 良好 口縁部内外面、外面の一部に煤付着。
78 — 40 46	— — — (9.1)	大きく外下方へ開く笠形を呈す。つまみ部は、平坦面をもち中凹みである。	内面は縦方向のヘラナデ、口縁部近くに軽いヘラミガキ。外面は斜方向のヘラナデ、一部に雑なヘラミガキ。つまみ部外面は、斜方向のヘラナデ、上面はナデ。つまみ部に焼成前円孔2個を相対位置に穿つ。	淡茶褐色 砂粒含 良好 内面全体に煤付着。
78 — 40 47	— — — 9.7	大きく外下方へ開く笠形を呈す。つまみ部は、わずかに中凹みである。	内面上半は斜方向のヘラナデ、下半は横斜方向の刷毛目。外面は斜方向の刷毛目後、ヘラナデ。つまみ部外面、上面ともヘラナデ。	乳褐色 粗砂含 良好

図版番号 実測図—写真 土器番号	法量(cm) 口径 腹径 底径 器高	形態	技法	備考
78 — 40 48	— — — (8.4)	大きく外下方へ開き、口縁部近くで、さらに拡がる笠形を呈す。つまみ部は、中凹みである。	内面はナデ後、横方向のヘラミガキ。外面はナデ後、斜方向のヘラミガキ。つまみ部外面は、指おさえ、ナデ。上面はナデ。体部にヘラで文様が施される。	淡黄褐色 粗砂含 良好、堅緻。
78 — 40 49	13.4 — 6.4 7.0	底部から外上方へ開き、口縁部にいたる。端部は、丸くおさめる。底部は、中凹みである。	口縁部内外面ともナデ。体部内面はナデ後、横方向の粗なヘラミガキ。外面は指おさえ、ナデ。底面はヘラケズリ後、雑なヘラミガキ。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
78 — 40 50	19.4 — 7.4 12.4	底部から外上方へ丸く開き、口縁部にいたる。丸味のある狭い端面をもつ。底部は、ややあげ底。	口縁部内外面ともナデ。体部内面は、斜方向のヘラナデ後、横方向の雑なヘラミガキ。外面は、縦方向の丁寧なヘラミガキ。底面は、ヘラナデ。	茶褐色 粗砂含 良好
78 — 40 51	19.1 — 6.4 15.6	外反する口縁部、狭い端面をもつ。体部は、倒鐘形を呈し、底部は、中凹みである。	口縁、頸部内外面ともナデ。体部内面上半は、横方向、下半は、斜方向のヘラナデ。外面は、斜方向の刷毛目後、横方向のヘラミガキ。底部外面、底面は、横方向のヘラケズリ後、横方向の雑なヘラミガキ。口縁端部に沈線文2条と条間に竹管文を施す。体部には、沈線文7条、9条、1条、その条帯間に竹管文を施す。	淡赤茶褐色 粗砂含 良好
第65図—41 62	— 5.7 3.2 (6.3)	ゆるく外反する口縁部、胴の張った丸い体部をもつ。底部は、平底。	口縁部内外面とも指おさえ後横方向のヘラミガキ。体部内面は、指おさえ後ナデ。外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。底面は、ヘラミガキ。	淡赤褐色 粗砂含 良好
第65図—41 63	— 7.9 4.2 (5.1)	底部。	外面は、縦方向のヘラナデ、内面は、指おさえ後ナデ、指頭圧痕残存。底面は、ナデ。底部にいびつな沈線文2条を施す。	淡黄褐色 粗砂含 良好
第65図 64	8.3 9.2 5.4 6.1	小さな底部から外上方に開き、内弯する口縁部をもつ。端部は、丸くおさめる。	内外面ともナデ。口縁部内面、底部外面に指頭圧痕残存。底部内面は、指おさえ。底面は、ナデ。	淡黄褐色 粗砂含 良好
第65図—41 65	7.0 — 4.9 5.4	ややあげ底の底部から外上方に開き、口縁部にいたる直口のもの、狭い口端面をもつ。	内面は、横、斜方向のヘラナデ。外面は、ナデ後横方向のヘラミガキ。	暗黒灰色 砂粒含 良好

	径(cm) 厚さ(cm) 重量(g)	特徴	備考
第66図—41 66	6.5 0.9 47.0	楕円形に近い不整形な形状を呈する。周縁は、細かい打ち欠きを施す。側面の破面は、未調整。表、裏面ともに丁寧なヘラミガキ。	淡黄褐色 砂粒含 良好 壺形土器の体部破片の再利用。
第66図—41 67	7.5 0.9 46.0	楕円形に近い不整形な形状を呈する。周縁は、粗く打ち欠きを施す。側面の破面は、未調整。表、裏面ともに丁寧なヘラミガキ。	淡灰褐色 粗砂含 良好 壺形土器の体部破片の再利用。

3　石器

本溝から出土した石器は４点ですべて上層出土である。

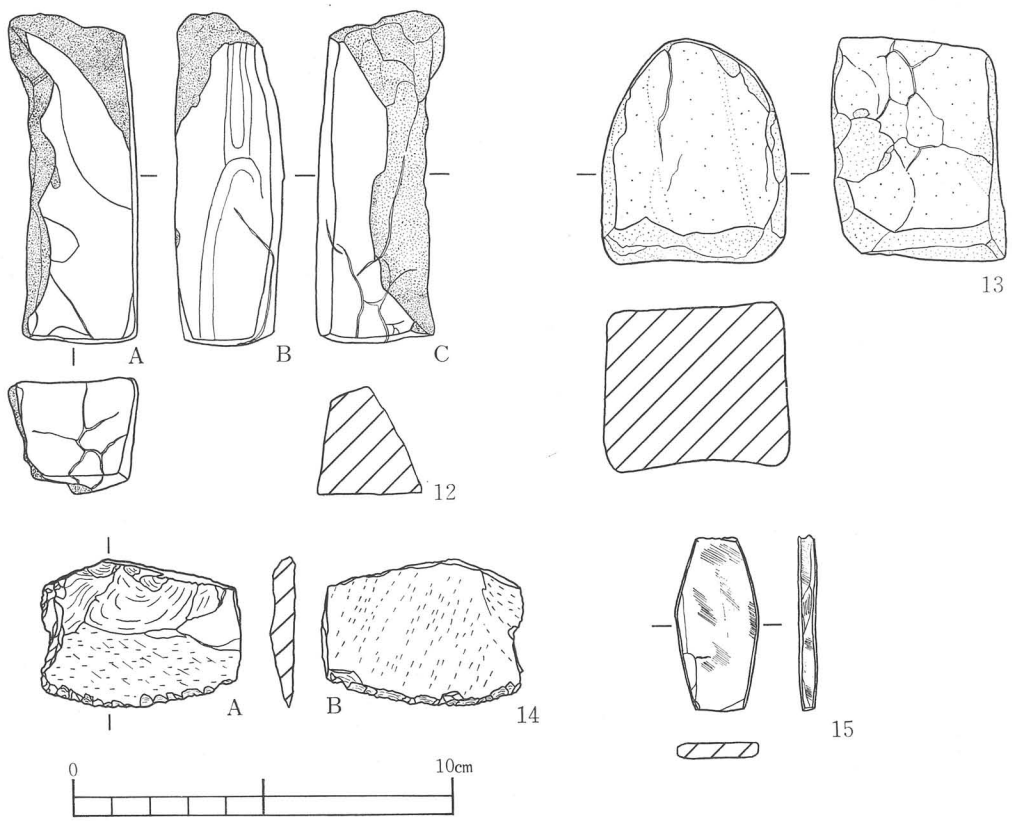
砥石　（第67図、図版45—12・13）

⑿は細粒の砂岩質の石材で、熱を受けて焼けた痕跡がみられる。平面形は細長く、断面は台形をした立方体のものである。６面のうち割れている２面は不明であるが、残り４面は砥石として使用されている。特にＢ面には幅0.7cm、長さ3.0cm、深さ0.1cmの凹みがあり、玉のようなものを砥いだのではないだろうか。現存長8.8cm、幅2.9cm、厚さ2.9cm、重量91ｇである。

⒀はやや荒い砂岩質の石材で、他の石器の破損後の転用品と思われ、熱を受けて焼けた痕跡が一部認められ、それによるひび割れの可能性をもったところもみられる。相対する２面に砥石としての使用痕がみられ凹んでいる。現存長5.9cm、幅4.9cm、厚さ4.4cm、重量220.8ｇである。

不定形刃器　（第67図、図版45—14）

⒁は剝片素材に調整加工をあまり施さず、剝片素材の形状をそのまま利用した刃器で、方形の横長剝片の薄くなる末端を利用して刃部をつくりだしている。刃部は外弯し両面から剝離調整が施されている。Ｂ面大剝離面にはポジティブバルブを残している。上端には自然面を残



第67図　溝 — 28 出 土 の 石 器

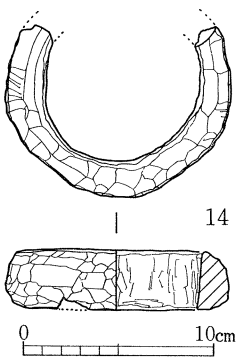
す。現存長5.2cm、幅3.95cm、厚さ0.65cm、重量16.2gである。石材はサヌカイトである。

用途不明磨製品　（第67図・図版45—15）

⑮は最大幅が中央にあり、全面に丁寧な研磨痕を残す磨製の未製品と思われるものである。石包丁のような石器の破片を再利用したものであり、その形状から磨製石鏃の未製品であろうか。断面は隅丸の薄い長方形で、現存長4.6cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm、重量8.2gである。石材は粘板岩である。

4　木製品

木製品の出土点数は、1点だけで、全体の形状からみて木製の腕輪ではないかと推定される。



第68図　腕　輪

腕輪型木製品　（第68図、図版49—14）

全体の約⅓を欠損するが、ほぼ円に近い環状を呈するものと思われる。断面形は、内側が平坦な蒲鉾形をなし、残存する限りでは、最大直径、外側11.7cm、内側7.8cm、幅3.1cmである。全体的にまだ調整の段階であると思われ、幅1cm前後の工具であろうか、非常に丁寧に削られ、外面は細かく面取りされて、丸味をもたせている。内面は腐蝕がすすみ、表面がややデコボコしている。扁平な柾目板を刳りぬいて作ったと思われる。用材はヤブツバキである。

第Ⅴ章　東奈良遺跡出土の動物遺体

大阪市立大学医学部第２解剖学教室
安　部　みき子

東奈良遺跡出土の動物遺体は、一部を除いて保存状態は良好で、骨の部位や種などの同定ができた骨片は、全骨片数（172片）の約90％であった。

出土した動物遺体の種数は少なく、すべてが哺乳類で、次に示す３種であった。

Artiodactyla	偶蹄目
Cervus nippon	ニホンジカ
Sus scrofa	ニホンイノシシ
Carnivora	食肉目
Canis familiaris	イヌ

大型哺乳類のシカ・イノシシに狩猟の対象が集中する傾向にあるのは弥生時代の特徴で、本遺跡もシカとイノシシが大半を占めている。また、弥生時代の遺跡でしばしばみられるイヌも出土している。

1.　出現頻度と最少個体数

同定できた骨の出現頻度と最少個体数とを第８表に示した。

シカは、各部位の出現頻度が平均しているが、なかでも最も多いのは角である。右側の角には脱落角が１片含まれるが、今回、最少個体数の推定には、これは除外した。また、すべての左側の角とは明らかに年令が異なる右側の角（いわゆるゴボウ角で１才のもの）が１片出土している。したがって、最少個体数は左の角の８個体に右側の幼体の１個体を加えた９個体である。しかし、シカの雌雄の判別は角以外の部位では困難なため、本遺跡の最少個体数は雄しか推定されていないことになる。

出土したすべての角には切痕や加工痕が認められ、尖角はすべて切り取られている。また、表面を磨かれた角もあり、骨角器の材料としてよく使われたものと思われる。角のほかでは、中足骨が縦に割られている。

下顎骨と歯の歯根部にまでおよぶ病変のある個体が１片出土している。

イノシシは下顎の出土が最も多く、ついで、四肢骨である。イノシシの下顎骨は、他の部位と比べると、丈夫で残りやすいと考えられる。下顎骨のうち臼歯を伴っているものについて、その磨滅の程度から年令の構成を推定した。第３大臼歯が未萌出の個体から第３大臼歯の磨滅の著しい個体（老令と思われる）まで、比較的一様に出土している。イノシシの雌雄の判別は

部位＼種名			シカ	イノシシ	イヌ
前頭骨		右	6		
		左	6	5	
頭頂骨		右	2	2	
		左	1	2	
側頭骨		右	1	1	
		左		4	
後頭骨			1	4	
戻骨		左		1	
頬骨		左		1	
角		右	**8*(1)		
		左	*8		
前上顎骨		左		1	
上顎骨		右	1	1	
		左		1	
	Pm¹	左		1	
	Pm²	右	1		
	Pm³	右	1		
		左		1	
	Pm⁴	右	1		
		左		1	
	M¹	右	1		
		左		1	
	M²	右	1	1	
		左		1	
	M³	右	1		
		左		1	
下顎骨		右	3	*18	
		左	4	17	*1
	I₁	右		4	
		左		2	
	I₂	右		2	
		左		1	
	I₃	右		1	
		左		1	
	C	右		4	
		左	1	2	
	Pm₁	右		2	
	Pm₂	右	1(1)	5	
		左	4	4	
	Pm₃	右	1(1)	6	
		左	4	5	
	Pm₄	右	1(1)	6	
		左	3	6	
	M₁	右	3	7	
		左	3	6	1

部位＼種名			シカ	イノシシ	イヌ
	M₂	右	3	9	
		左	3	8	1
	M₃	右	2	9	
		左	3	8	
環椎			1	2	
軸椎			1		
肩甲骨		右	3	1	
		左	3	5	
上腕骨		右 b	1	3	
		右 d	1	3	
		P		2	
		左 b	3	6	
		左 d	4	7	
尺骨		P		1	
		右 b	1	1	
		右 d	1		
		P	1	3	
		左 b		1	
		左 d		1	
橈骨		P	3	1	
		右 b	4	2	
		右 d	3	1	
		P	1	2	
		左 b		2	
		左 d		1	
中手骨		P	2		
		右 b	3		
		右 d	1		
寛骨		右	2	3	
		左	1	4	
大腿骨		左 P	1		
		左 b	1	2	
脛骨		P	2	1	
		右 b	4	2	
		右 d	2		
		P	2	1	
		左 b	3	5	
		左 d	2	4	
距骨		右	1	1	
踵骨		左		1	
中足骨		P	1		
		左 b	1		
		左 d	1		

Pは近位　bは体　dは遠位
＊は最少個体数
＊＊は脱落角を含む
（　）は幼体

第8表　動物遺体の出現頻度

永久犬歯で行なうが、この部位の出土が少ないため性比は不明である。イノシシの最少個体数は右下顎の18個体で、シカのそれと比べると、2倍の個体数となる。

病変と思われる脛骨が1片出土している。

イヌは下顎骨が1片出土している。その大きさから推定すると、小型犬と思われる。（第9表）

計測部位	計測値(mm)
下顎骨長 （Cmから犬歯の後縁）	92.30
下顎体高 Ⅰ （gov-Cr）	40.50
〃 Ⅱ （第1大臼歯の後縁）	17.55
〃 Ⅲ （第2・3前臼歯間）	16.15
下臼歯列全長	58.80
下前臼歯列全長	30.50
下後臼歯列全長	28.60
下裂歯長	18.10
〃 幅	7.65
第2大臼歯長	7.20
〃 幅	6.25

第9表　イヌの下顎骨の計測値

2.　出土骨片数による比較

本遺跡出土の骨片数（172片）のうち、シカは38.4%（66片）、イノシシ49.4%（85片）、イヌ0.6%（1片）、不明11.6%（20片）で、イノシシが全出土骨片数の約半数を占めている。

シカとイノシシの比は最少個体数では1：2であるが、骨片数では2：3になる。この結果は、骨角器の利用の程度や骨の残りやすさの問題等と関係するものと思われる。

3.　まとめ

出土した動物相はシカとイノシシが中心で、ほかに、イヌが1個体出土している。シカとイノシシの出土の割合は最少個体数と出土骨片数とでは多少異なるが、イノシシが最も多く、動物遺体の約半数を占めている。

シカの角には骨角器の製作と関係があると思われる切痕や加工痕があり、骨角器の出土はみられないが、これらを使用していたことは容易に推測できる。

第Ⅵ章　ま　と　め

東奈良遺跡では、昭和46年７月のＦ－７－Ｅ・Ｆ地区における寮建設に伴う最初の発掘調査以来、本年迄の10年の間に、種々の開発に伴って、遺跡の東西南北を問わず広範囲に調査を行ってきている。その結果、遺跡の範囲は地区割り図でみると、南北はＡ～Ｍまでの約 1.4㎞、東西は１～10までの約1.0㎞と推定されるようになり、その総面積は約1,400,000㎡の非常に広大なものとなる。総面積のうちすでに従来からの建造物等があり調査不可能な面積は約半分の700,000㎡で、 残りの半分が田畑や空地・荒地となっており、52年の国鉄貨物線関係の発掘調査に入るまでの既調査面積を数字でみると、このうちの約25,000㎡（第１表参照）の範囲しか調査をしていないことになり、その割合いは約５％にしかすぎないのである。

ここにまとめとするのは、現在も内業整理を続行中であり、また今後の発掘調査によって新たな事実も増えていくものと思われるので、今の段階で考えられる若干の遺跡の様相と出土遺物等から、今回の国鉄貨物線内発掘調査の結果をとおしてみていくことにし、最終的なものでないことを断っておきたい。

東奈良遺跡は、縄文時代の遺物も極く少量みられるが、弥生時代前期以降の遺構・遺物のまとまりなどから明確に集落としてとらえられるその始まりは弥生時代前期からと考えられる。その中心は、国鉄貨物線内調査区域（以下略す）Ⅰ－Ｂ区・Ⅱ－Ａ区に集中しており、今回の調査によって集落の始まりについて貴重な資料が得られたと考えている。

各遺構・遺物の詳細は各章で述べているので省くことにするが、Ⅰ－Ｂ区、溝－３とⅡ－Ａ区、溝－25・溝－27からの出土遺物は弥生時代前期のものであり、その形態や出土量の割り合いについては若干の差異は認められるものの、規模はほぼ同程度であり、同一時期の存在と考えられる。またこの３条の溝の方向は、溝－３は南へややカーブしながらＮ－14°－Ｅの方向、溝－25は北へややカーブしながらＮ－84°－Ｅの方向、溝－27も同様にカーブしながらＮ－81°－Ｅの方向に存在している。調査区域外の各溝の方向性を推定すると、西側で溝－25と溝－27が合流して１条の溝となり、さらに溝－３と結びつくと考えられ、東側では各溝ともその方向はやや広がりながらも楕円形を描いて結びつき前期の集落をめぐる環濠と考えられる。しかし各溝とも調査区に直交しているため検出した長さは短く、また環濠とする場合、その区内に前期の遺構が少ないこと等、決定的な資料に乏しいものである。

溝－28については、上記の各溝とは規模や方向性が違うものである。その方向はＮ－３°－Ｗで、やや東方へカーブしながら調査区域と平行に存在し、南端で弧を描きながらＳ－71°－Ｅの方向へのびていく。こうしたことからもう一つの環濠が考えられても良いのではないだろうか。出土遺物も前期からのものであり、同一時期に環濠をもつ二つの集落が存在したとするならば、集落内部における共同関係等の解明が進められるものであろう。

弥生時代前期の遺構としては、上記の中心地区より南西約 200mのG—4—G・K地区、東方約 150mのE—7—E・F地区の両地区に方形周溝墓が存在する。特にG—4—G・K地区のものは、削り出し突帯上に沈線を描く壺棺が検出され、またほぼ同一時期の方形周溝墓が5基以上連なった状況を示し、さらに中期（唐古第Ⅱ様式から第Ⅳ様式まで）の方形周溝墓も、すぐ近くで検出されていることなどから、この地域が弥生時代前期から中期へとかなり長い間続く、方形周溝墓群墓域と考えられるものである。その他貯蔵穴や加工過程の木製品を入れておく土坑等がみられることから、前期の集落の内部構造を多少なりとも知ることができる。

弥生時代中期になると集落の拡大化がみられ、遺物の散布は遺跡範囲内のほぼ全域にみられる。前期の各溝は、溝によって若干異なるが、その層位などから唐古第Ⅲ様式の前半にはすべて消滅したと考えられ、新たに中期の別の遺構が出現する。その大部分は前期の集落と同地区あるいはその周辺に数多くみられ、生活の場は位置的に前期と大差がみられない。このことは東奈良における共同体の構造に大きな変化のないことを示すものであろうか。しかしながらこの中心地域より東南、遺跡のほぼ東端部と考えられる地城から、工房跡の確認はされていないが、銅鐸の鎔笵の他、銅戈・勾玉の鎔笵・鞴口等が発見されており、銅鐸等の製造地であることが判明している。東奈良遺跡出土の銅鐸の鎔笵の時期は、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物を含む包含層中からの出土であるため確定し得ないものである。銅鐸の鎔笵のうち、第2号流水文鎔笵から鋳造された銅鐸として、香川県善通寺市我拝師山出土銅鐸と大阪府豊中市原田神社境内出土銅鐸の2鐸が確認されており、さらに第3号流水文鎔笵から鋳造された銅鐸が、兵庫県豊岡市気比出土3号鐸であることが判っている。これらのことは鎔笵の材料（石型）の供給地とも相まって、かなり広範囲に他地域との交流があったことを推定させる。また東奈良独自で銅鐸を鋳造していたのか、あるいは他の村との力関係上鋳造させられていたのか、さらにその配給方法等の問題も含め東奈良遺跡については今後解明しなければならない問題は多い。弥生時代中期には、検出される遺構や出土遺物の量は膨大なものであり、村の社会的地位も含め東奈良遺跡の集落は最盛期を迎えるのである。

しかし中期の最盛期に比べ、後期になると遺構・遺物ともに激減する。これまでの各地区の調査においてしばしばみられる砂の堆積層などから判断して、自然的条件等によって人々が村を一時離れた結果とも考えられる。しかしⅡ—B区やF—7—E地区では、この時期の貯蔵穴群が存在しており、さらに東奈良周辺地域においては遺跡の増加現象がみられることなどから、自然的条件のみによって集落が縮小したとは考えにくい。

次の古墳時代前期になると、弥生時代前期から続く集落の中心地域よりやや西寄りにその中心がみられる。しかしその広がりが全区域にまたがっていることは出土する土器等から明らかである。集落の具体的な様相については現在のところほとんど明らかになっていない。

この時期に東奈良では、幅約10m・深さ約3mの二段掘りされた人工の大溝（溝Ⅱ—3）が出現する[註1)]。現在この大溝は、地区毎に検出された部分を連接して、約 500m以上にわたること

が確認されているが、どの様にあるいはどこまでのびていくのかは不明である。溝内には水が流れた状況を示す砂層の堆積がみられ、高低差などからみて北から南へと流れていたものと推定される。さらに規模の大きさから十分舟を浮かべ得るものであることが伺える。東奈良遺跡では現在までに三槽の舟が出土している。うち二槽は方形周溝墓の主体部として転用されたもので大溝築造以前のものと考えられる。残りの一槽が弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものでクスノキをくりぬいた丸木舟である。これは大溝の支流と推定される溝の肩部附近から出土したものである。大溝が舟を使用して物資を一度に多量にしかもスピーディに運ぶ役割を持っていたことも充分考えられるところである。大溝の総長は不明であるが、かなり長いものと推定され、東奈良における画期的な土木事業として認識されるものである。大溝内からは多量の土器が出土しているが底辺付近の堆積土中にその全てがみられ、中間層や上層では遺物は全くみられない。堆積の状況からもわずかの期間に大溝が一気に埋没したと考えられることも無関係であるまい。出土した土器の中には、いわゆる河内産とされるものや、近江・東海・山陰地方のものまで含まれていることは、大溝築造にあたり他地方からの労働力援助があったのではないだろうか。

この大溝を界として外側と内側における遺構の検出度は極端に差が認められる。すなわち外側ではほとんど遺構が認められなくなり（調査区域の関連も考えられる）、内側では竪穴住居跡や井戸等が検出されているからである。ただしこの大溝の外側に、個々の大きさや出土遺物の量などに違いはみられるものの、ほぼ同一時期と考えられる三列縦帯で市松状に並ぶ29基の土坑墓が検出されたところもあって、その被葬者については、集落の成員なのかどうかも含めて今後検討すべき問題が残っている。

この様に古墳時代前期には、弥生時代中期の最盛期以降の新たな盛期を迎え、他地域との交流もより活発化している。集落内部の構成も大溝の出現によってより広く複雑なものとなっていると考えられるが、現在のところそのほとんどが不明である。

東奈良に人々が生活をする以前の基礎となる地形についてみると、遺跡全体の平均標高は、7m（O.P.）前後である。最も高いところで標高約8m、最も低いところでは、標高2.75mで、北から南へと徐々に低くなり、その高低差は約5mもある。したがって当時の各溝内に流れる水の方向が必然的に北から南であったことがわかる。全域にわたる調査が進んでいない現在の段階で、遺跡内の各地区における当時の標高をすべて知ることはできないため不明確であるが、浅い谷状となるところや微高地となるところが確認されており、低地上にありながらもやや起伏に富んだ地形であったことが伺える。谷にあたる部分では遺構が全く存在しないところと、後の時代に谷が埋まって平地になってから遺構の出現するところがあるが、弥生時代の遺構は皆無である。また当時の人々の生活面の地層は、標高7～8m前後の高いところでは黄色の粘質土層であり、標高5m前後のところでは多少砂を含んだ青灰色の粘質土層である。この様な低地であるため、当時から水捌けが悪いところであったと考えられ、必然的に幾条もの

溝を各時期にわたって造る必要が生じたのであろう。しかし単に水捌けのみでなく様々な用途に使われたことも推測されるのである。

東奈良遺跡では、いまだ水田跡が発見されていない。しかし農耕に要する鋤・鍬等の木製品の他、石包丁等も出土しており、農耕生活をしていたことは確実であり、遺跡の南の低地に水田の存在した可能性は充分考えられるところである。

追記

今回の報告は、昭和52年7月より、同53年12月迄の約1年半における国鉄貨物線内の調査結果である。縦長で狭幅の調査区域でありながらも遺跡の中心部を縦断するところから、遺構・遺物の量は非常に多大であった。したがって全調査区域の遺物整理を短期間で完了することは困難であるため、とりあえず弥生時代前期の溝のみに限定して整理を行ない概報としてまとめたものである。他の遺構との関連性等については今後の整理の完了をまって報告する計画であり、今回はとりあえず調査区域全体の遺構実測図を附すにとどめた。

註　1）　「東奈良」　発掘調査概報 I　参照

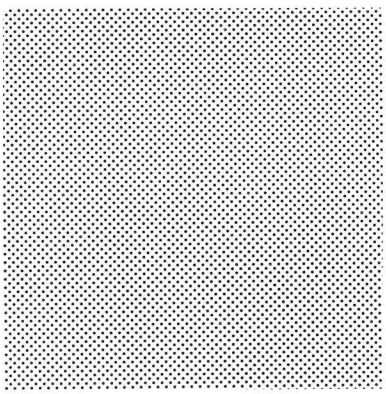
東奈良遺跡発掘調査概報 II

発行日　昭和56年2月20日

発　行　東奈良遺跡調査会
住　所　〒567 大阪府茨木市天王2丁目1－8
TEL (0726) 27 － 3037

印　刷　株式会社 中島弘文堂印刷所

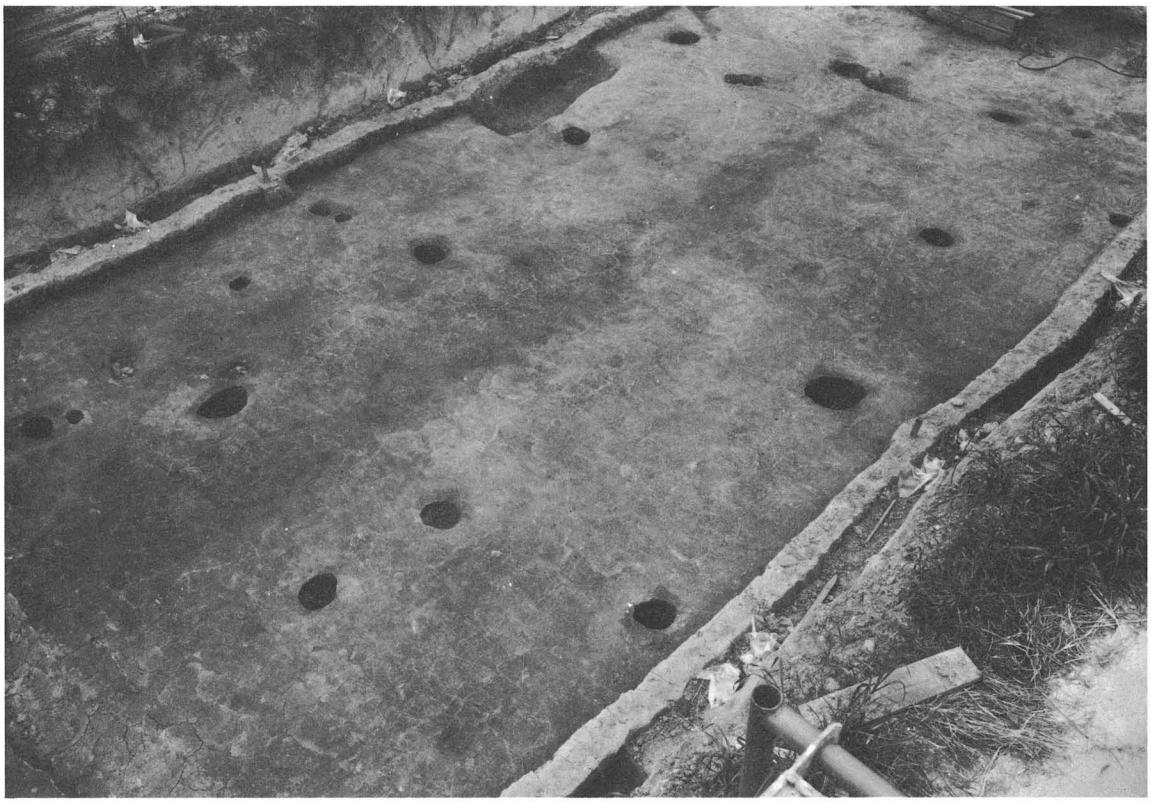
図　　版



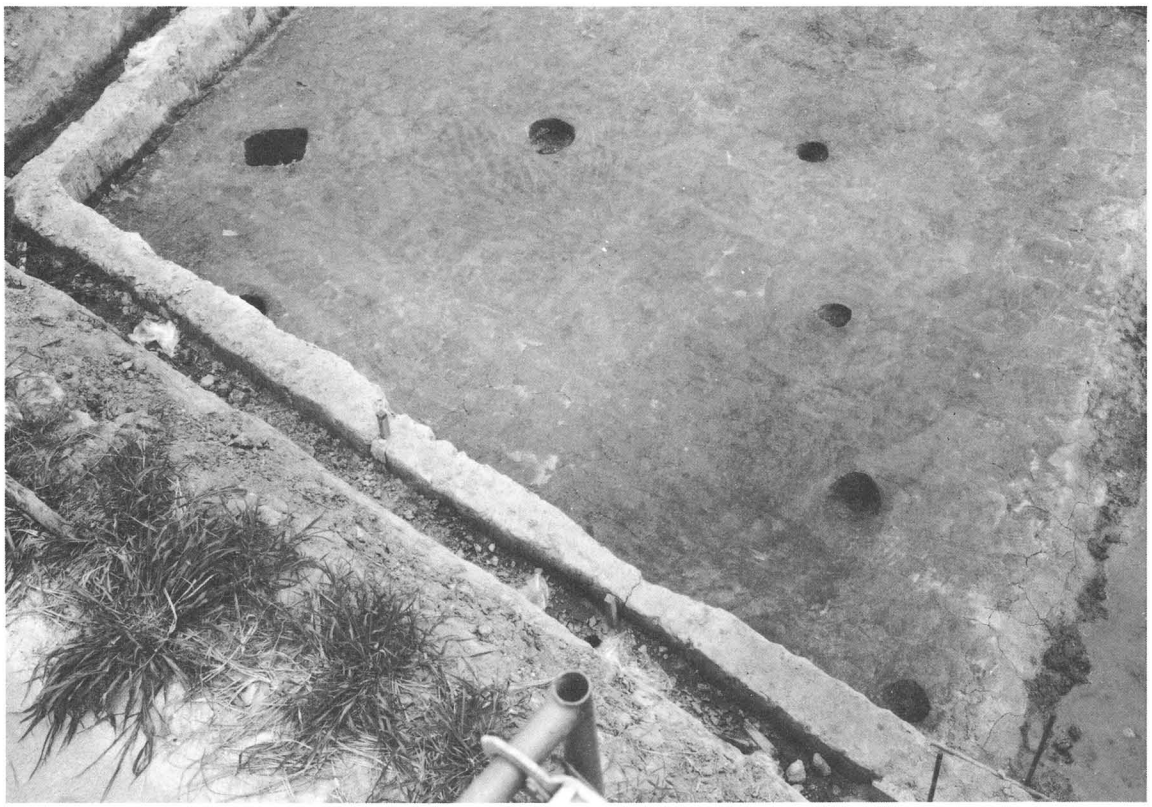
凡例・スクリーントーン
は、黒斑である。

Ⅰ－A₁区東より（第Ⅱ遺構面）

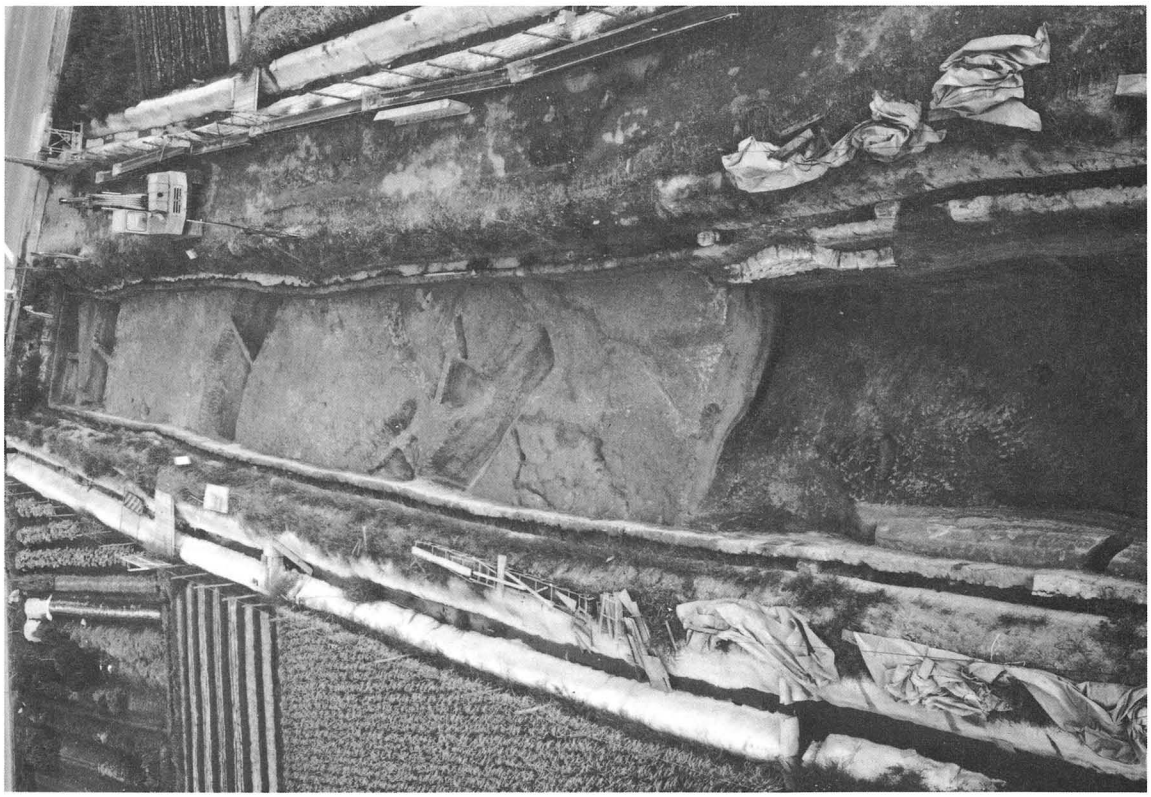
Ⅰ－A₁区西端（第Ⅰ遺構面）



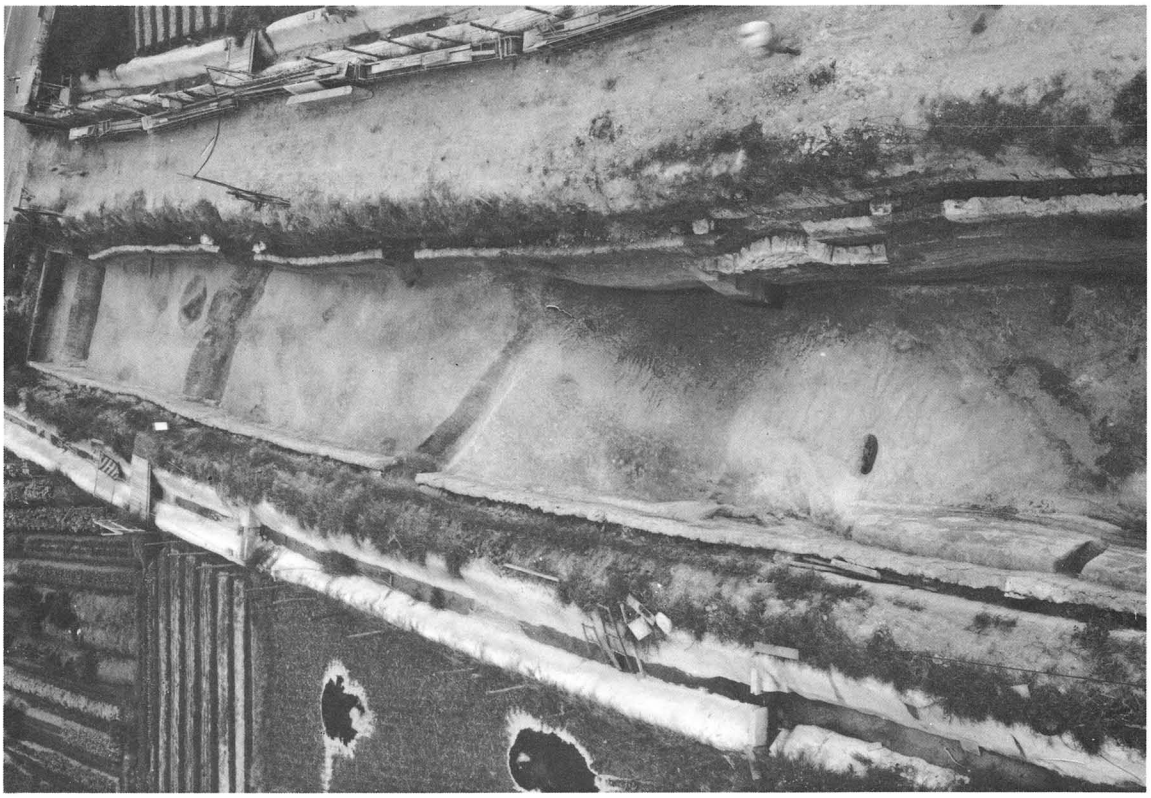
Ⅰ－A₁区掘立柱建物跡－1



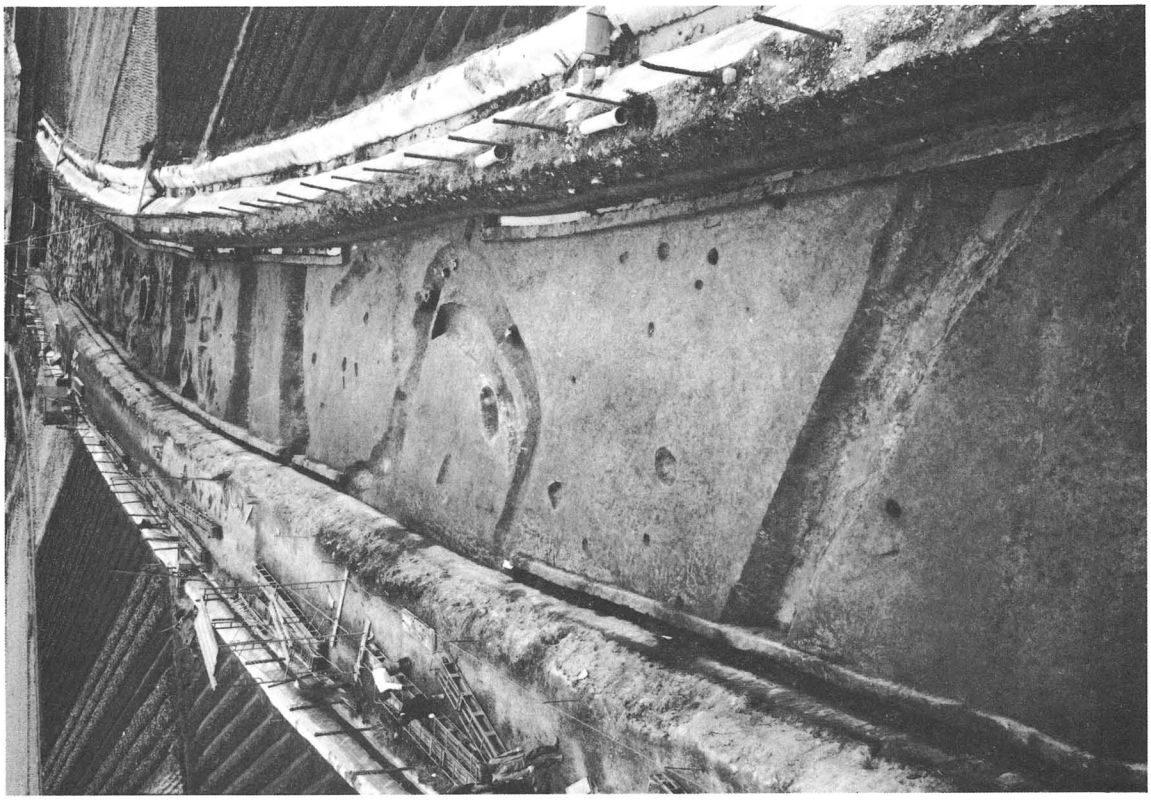
Ⅰ－A₁区掘立柱建物跡－2



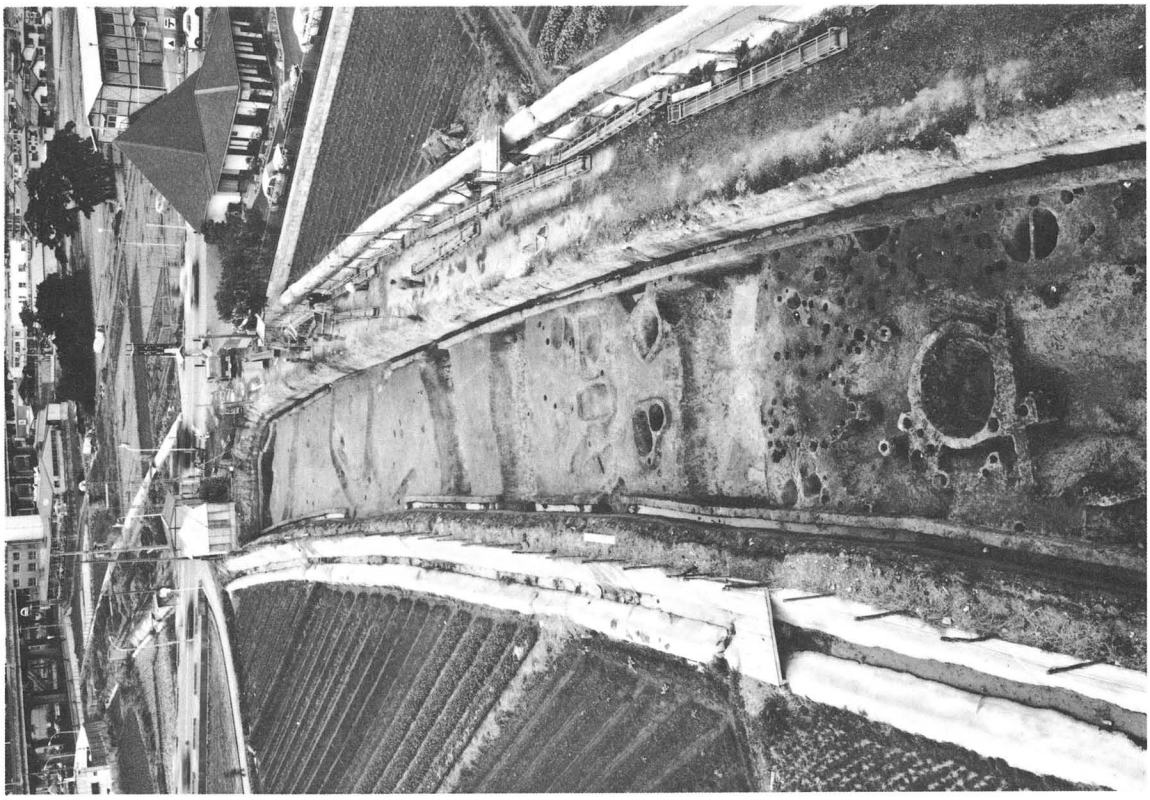
Ⅰ－A₂区西より（第Ⅱ遺構面）



Ⅰ－A₂区西より（第Ⅲ遺構面）

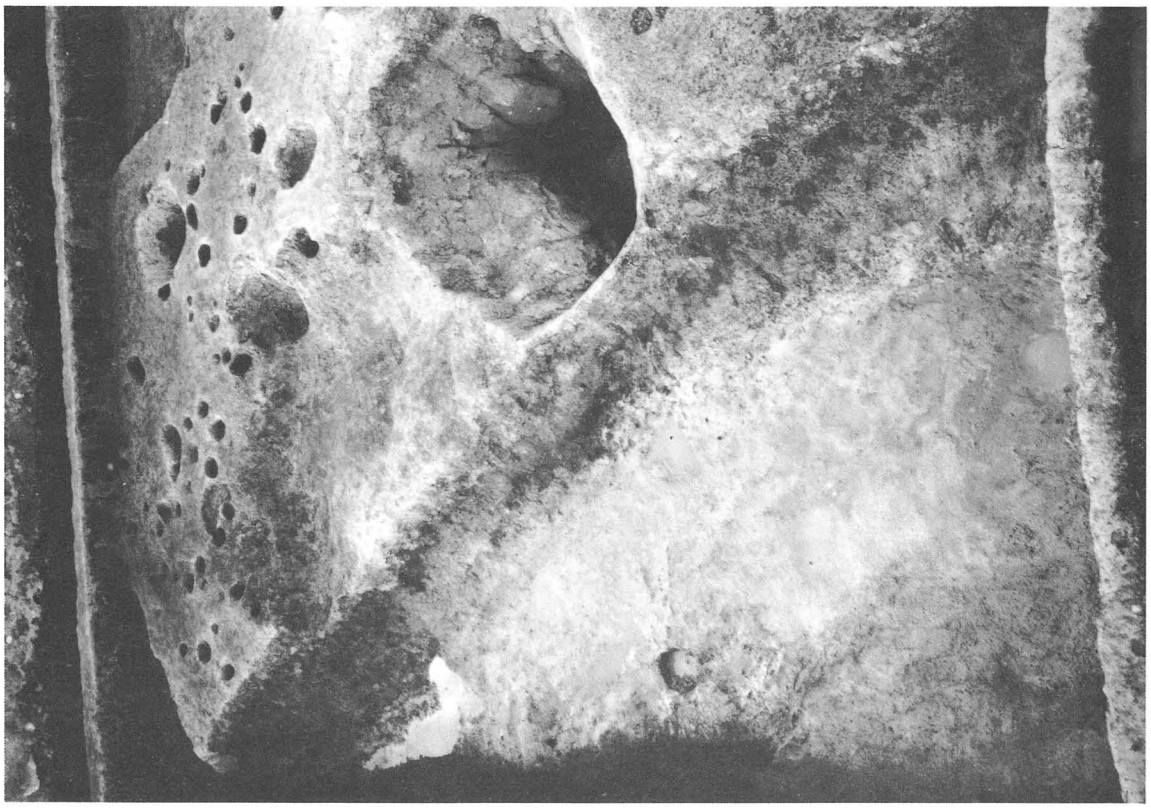


Ⅰ－B区西より

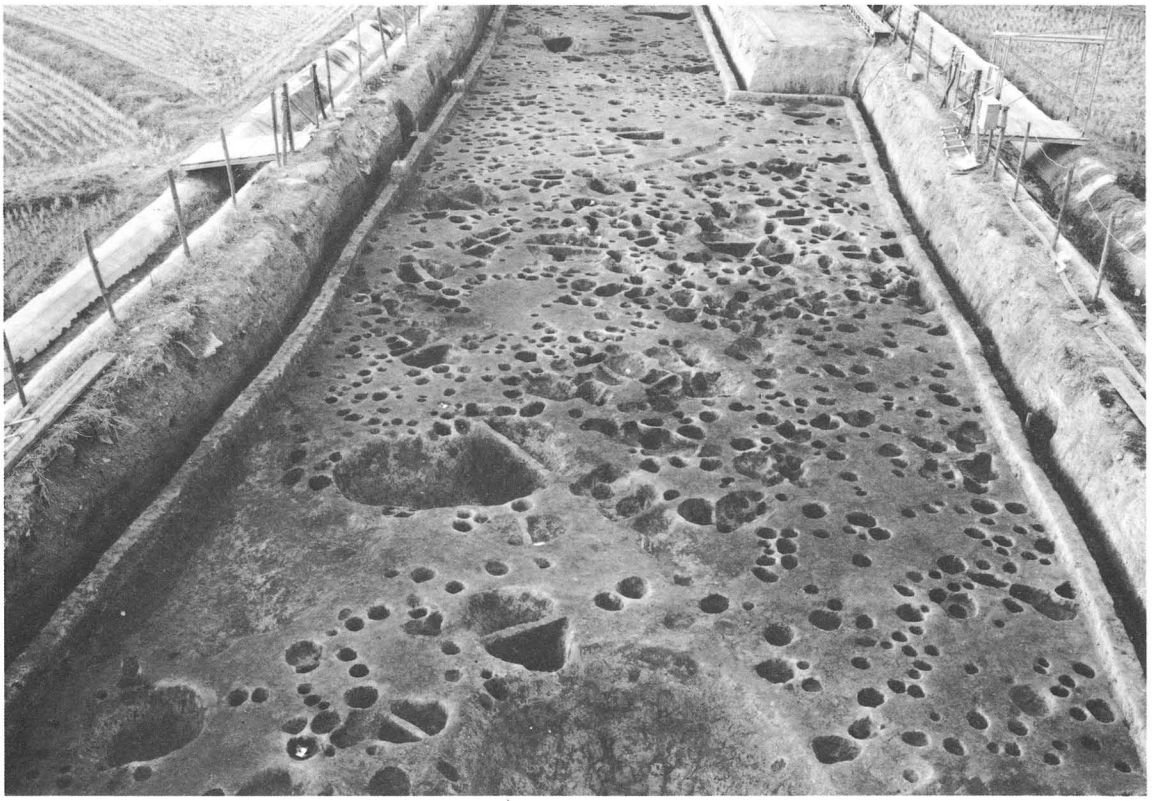


Ⅰ－B区西半

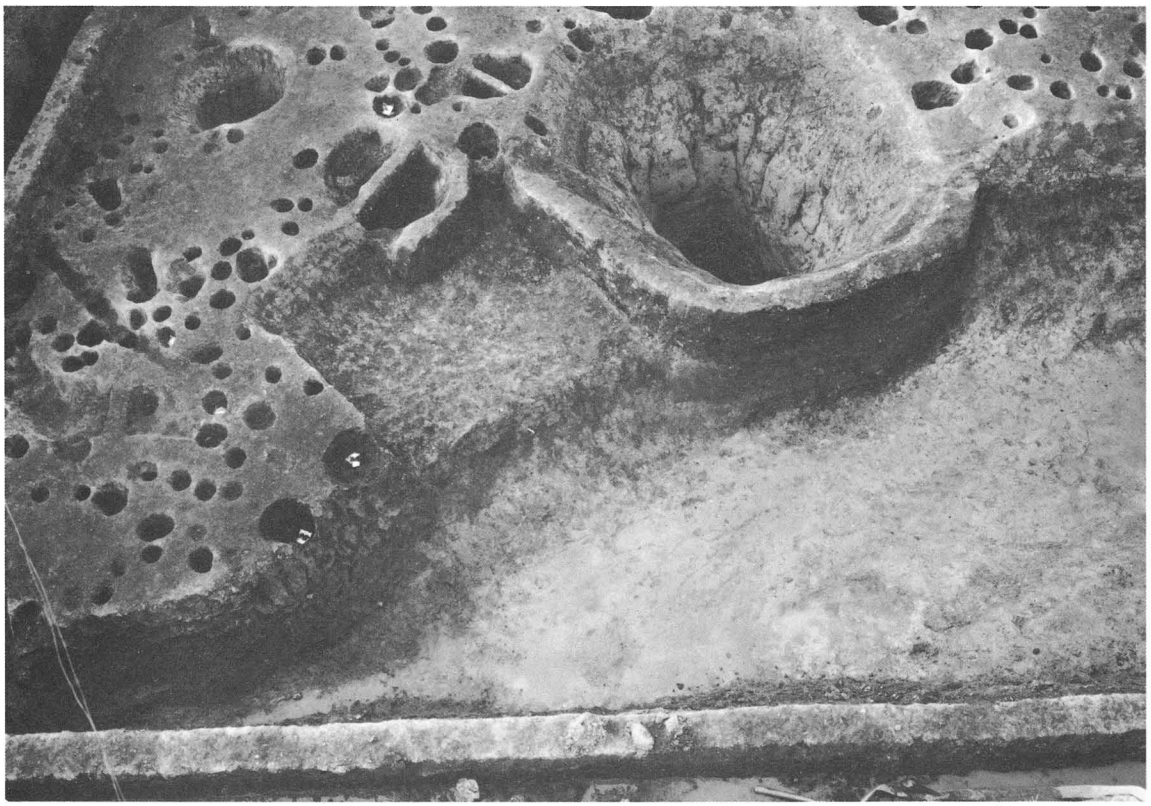
Ⅰ－B区東半（第Ⅰ遺構面）



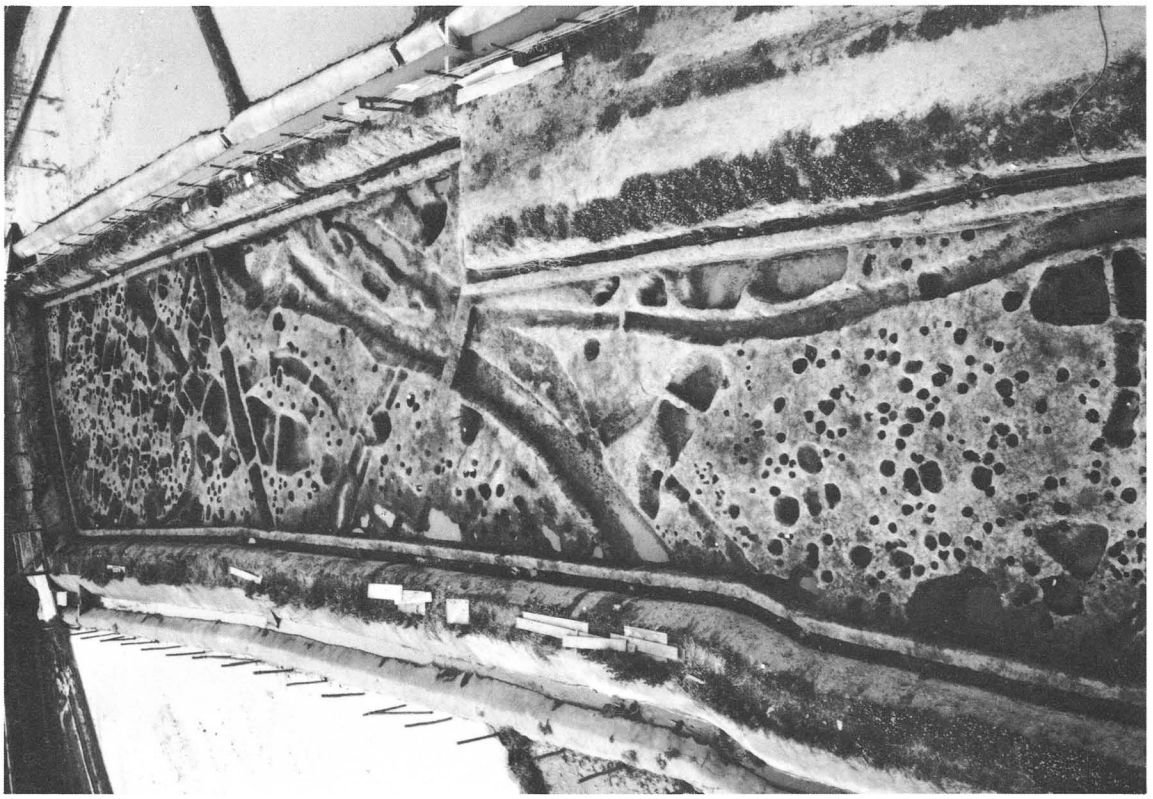
Ⅰ－B区溝－3



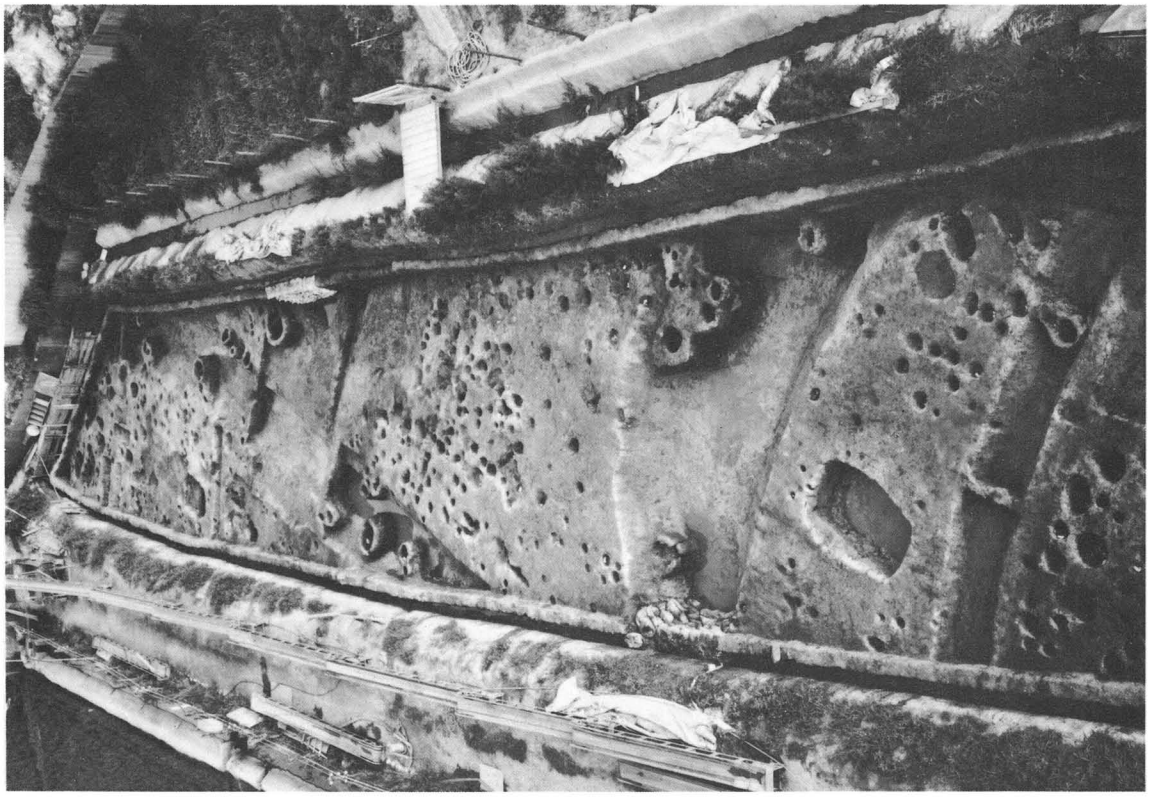
Ⅰ－B区東より（第Ⅰ遺構面）



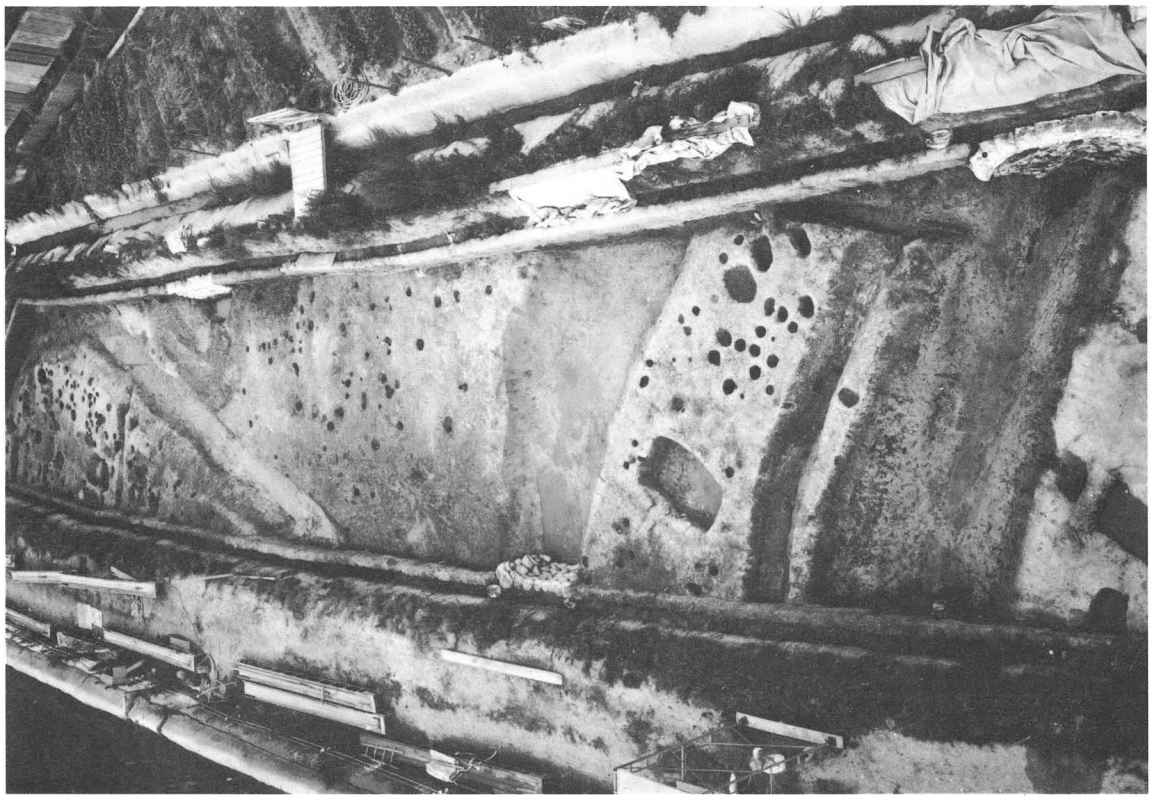
Ⅰ－B区東端（第Ⅰ遺構面）



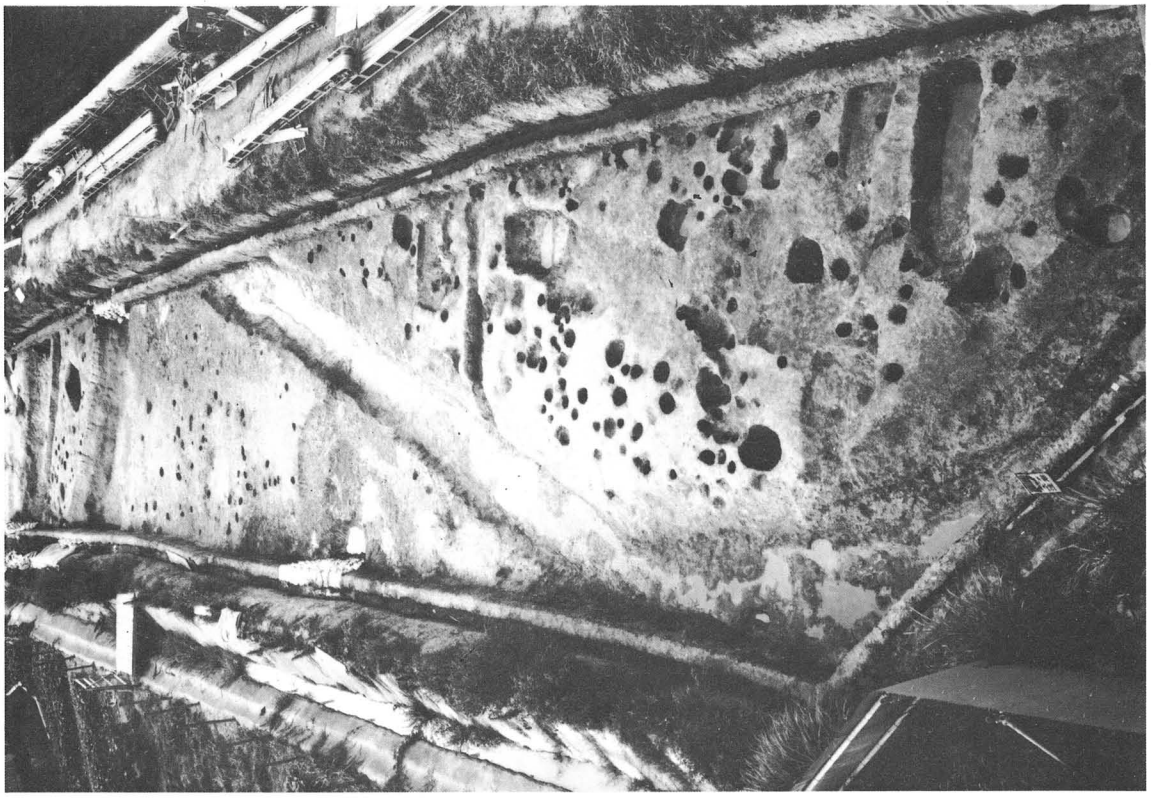
Ⅱ－A区北半



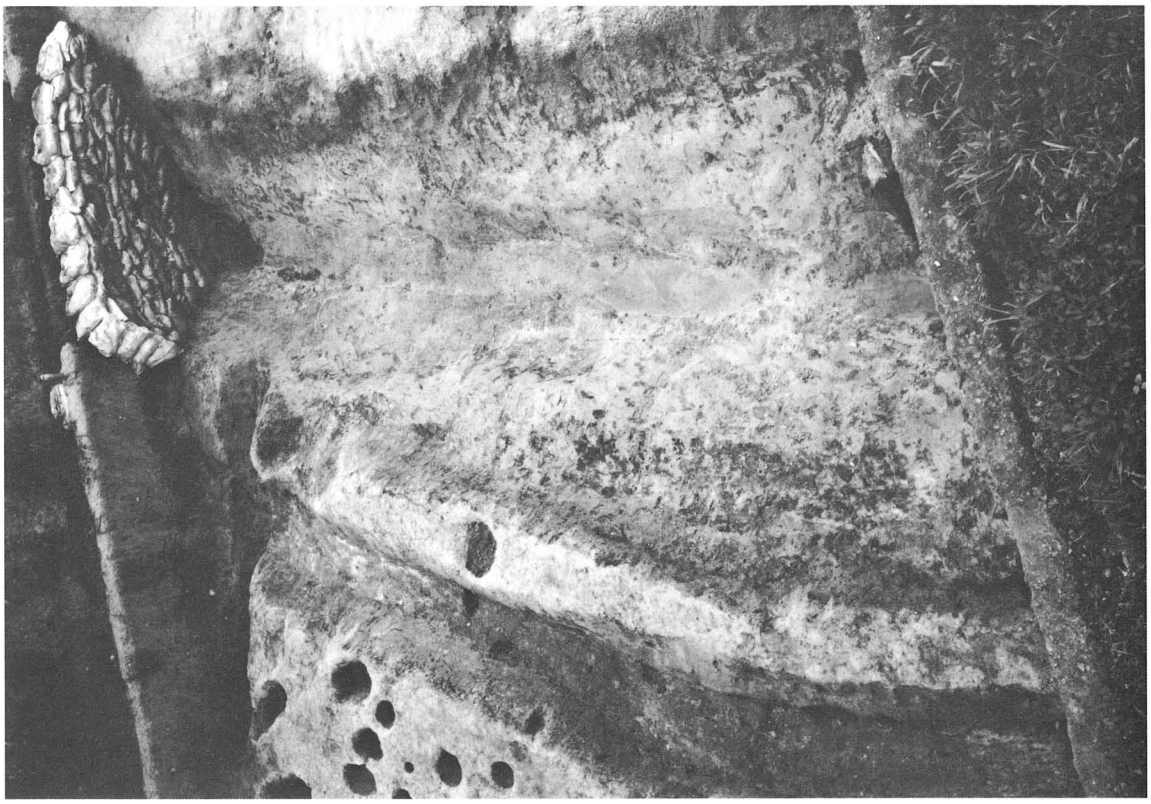
Ⅱ－A区南半（第Ⅰ遺構面）



Ⅱ－A区南半（第Ⅱ遺構面）



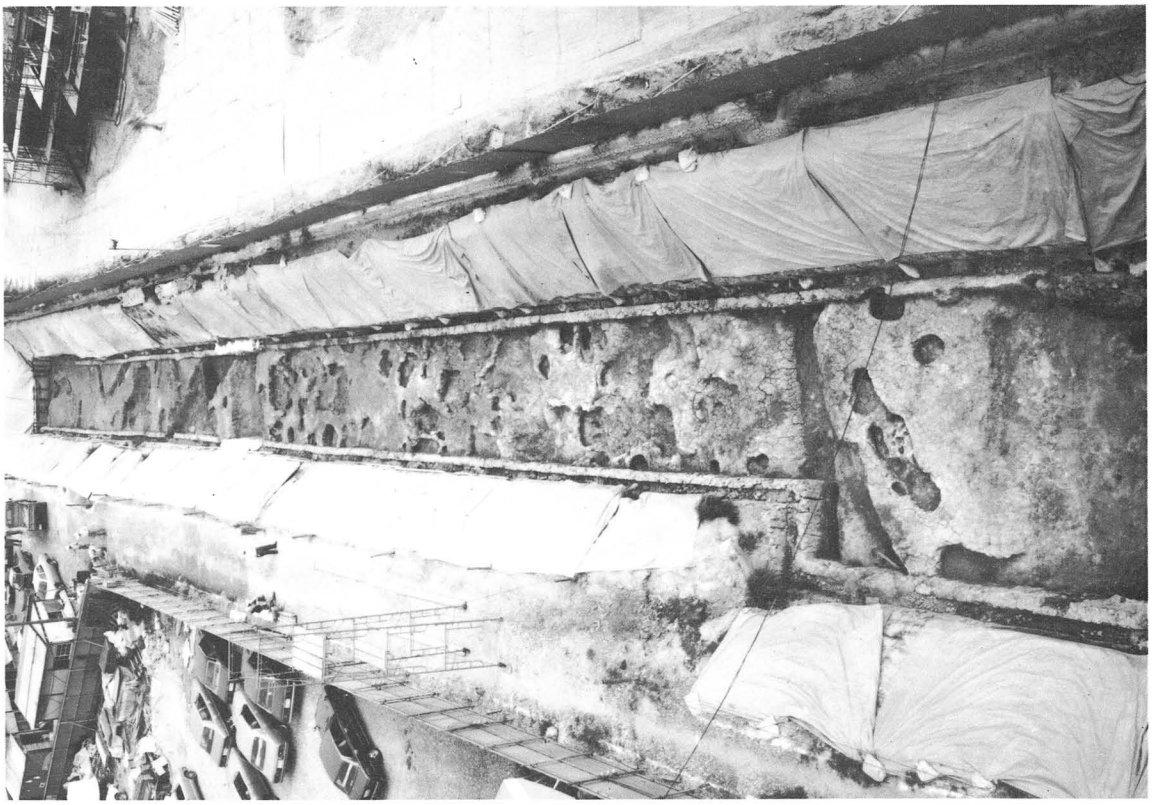
Ⅱ－A区溝－28



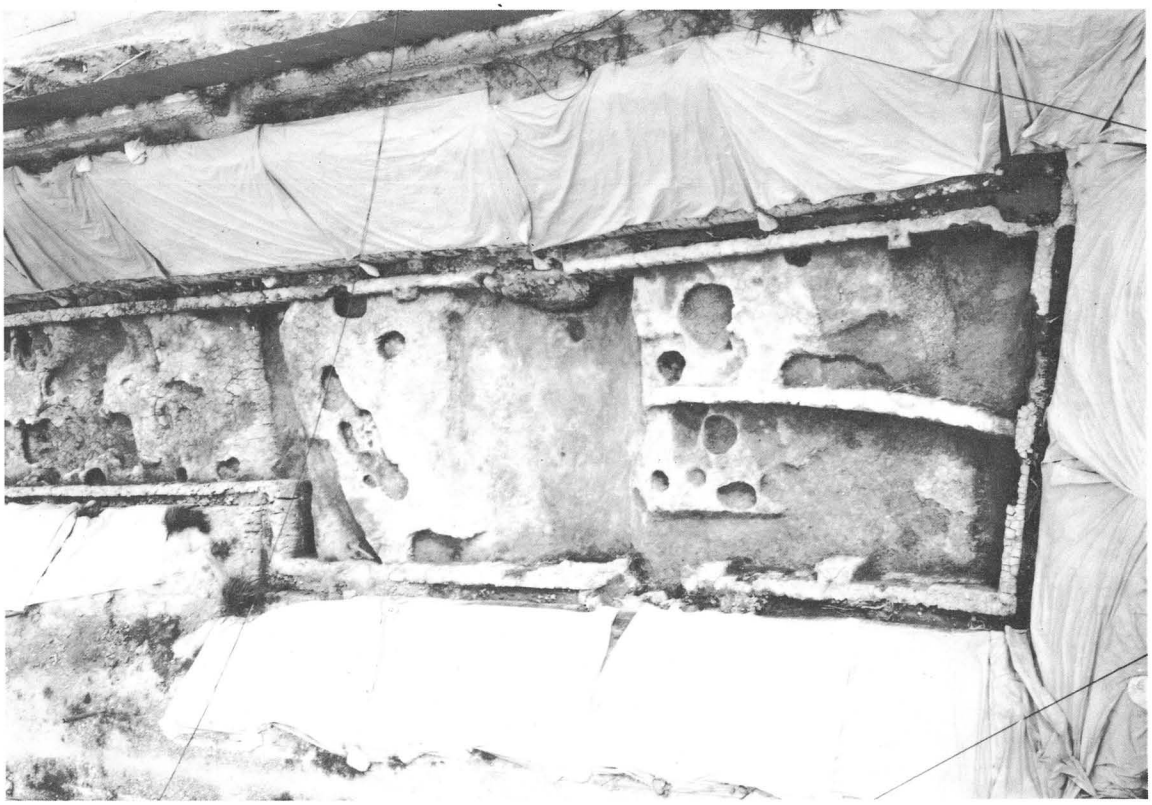
Ⅱ－A区溝－25・溝－26

Ⅱ－A区溝－27

Ⅱ－A区溝－25b竪杵出土状況



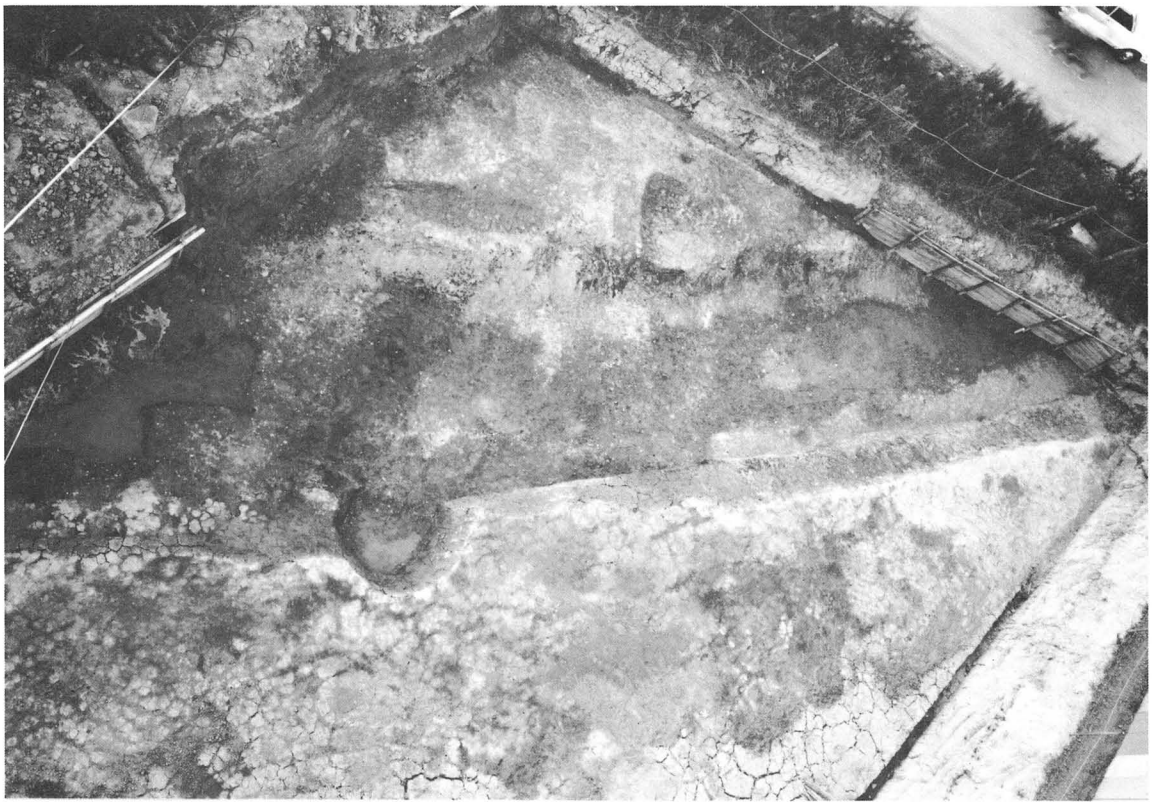
Ⅱ－B区北より



Ⅱ－B区北端

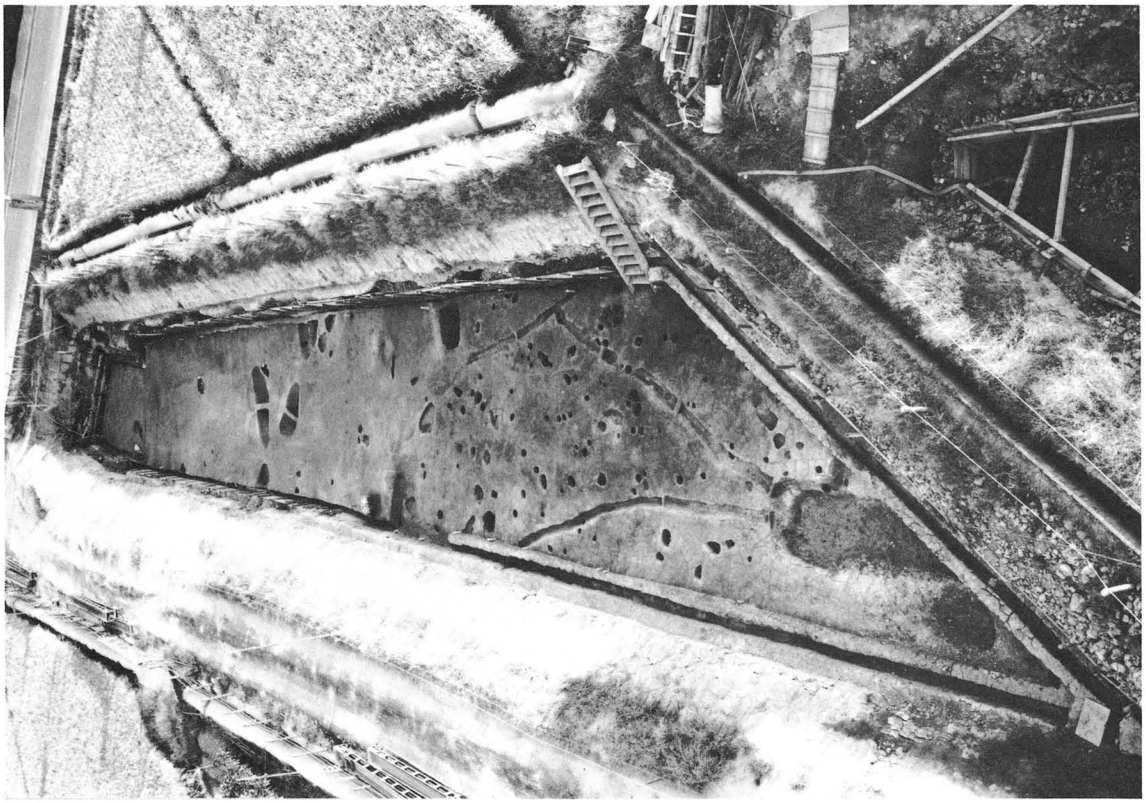
Ⅱ－B区南より

Ⅱ－B区南端

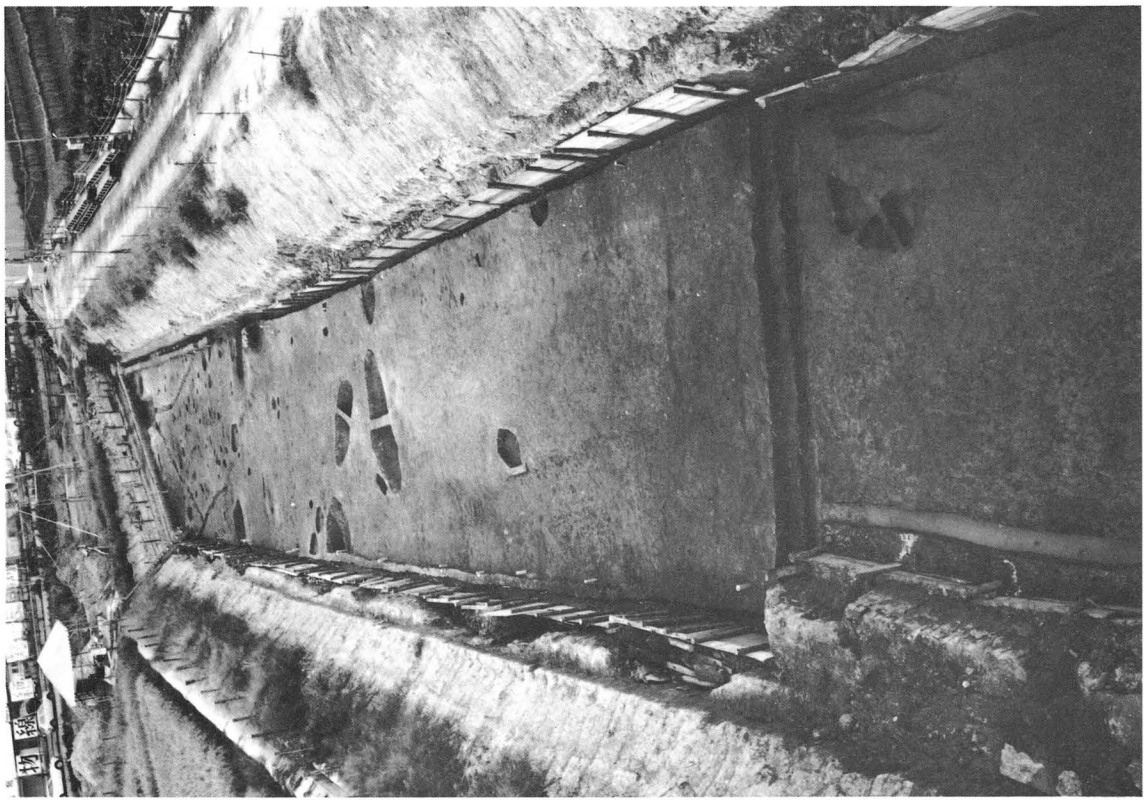


Ⅲ－A₁区近・現代の溝

Ⅲ－A₁区南より



Ⅲ－A₂区北より



Ⅲ－A₂区南より

Ⅲ－B₁区北より

Ⅲ－B₂区南より

8

5

4

45

63

7

66

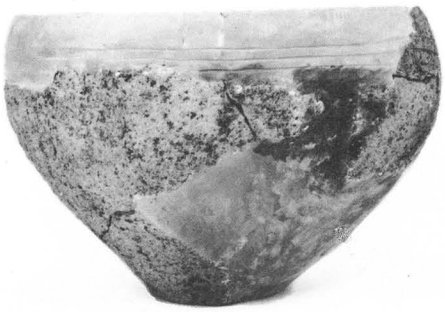
65

溝－３出土の土器

124

9

125



10

59

溝－3出土の土器

76

87

83

84

36

70

103

溝－３出土の土器

102

41

38

110

152

109

37

111

107

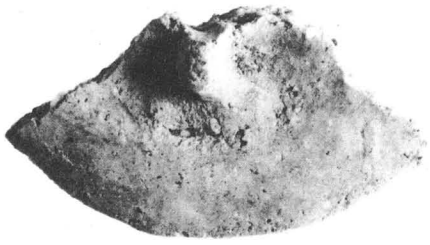
溝－３出土の土器

60

61

128

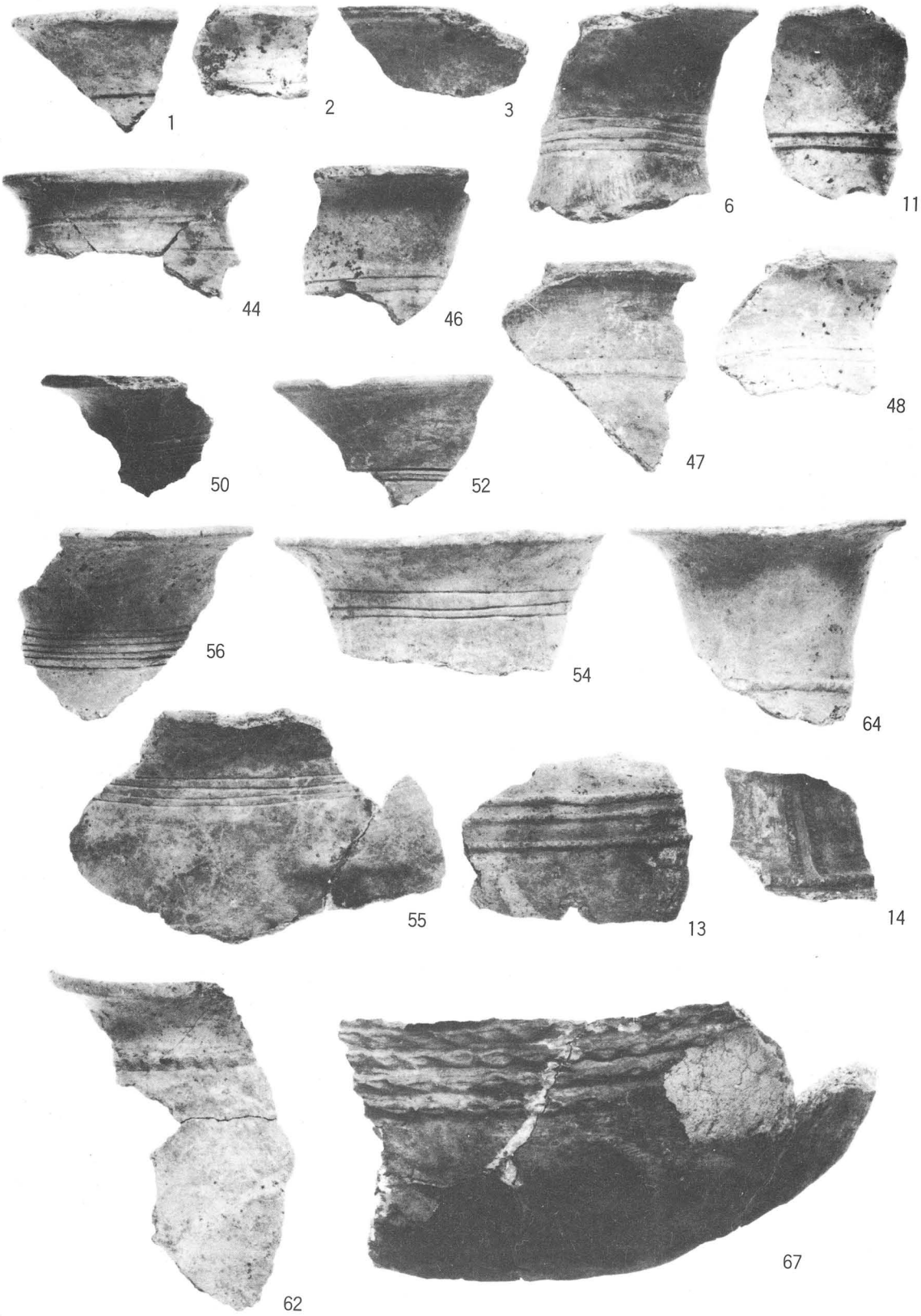
126



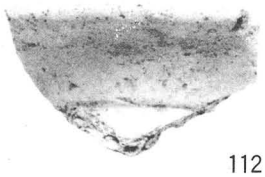
174

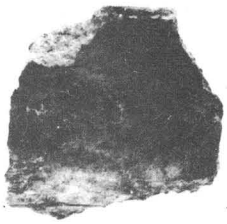
172

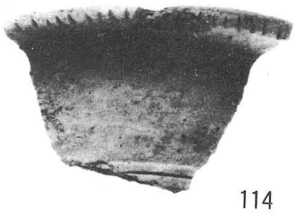
溝－３出土の土器

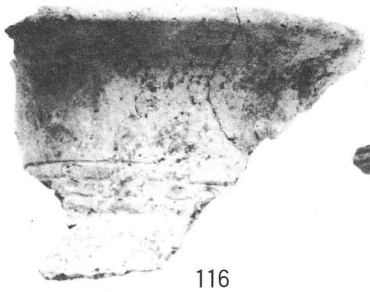


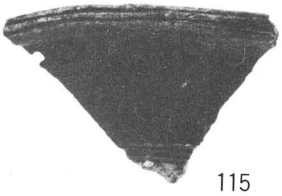
溝－３出土の土器

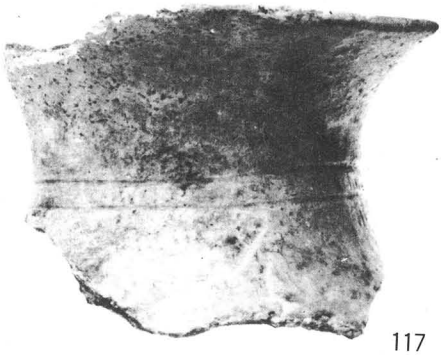

112

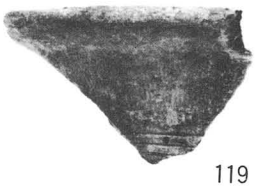

113

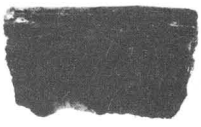

114

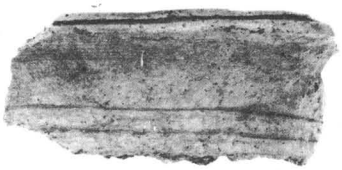

116

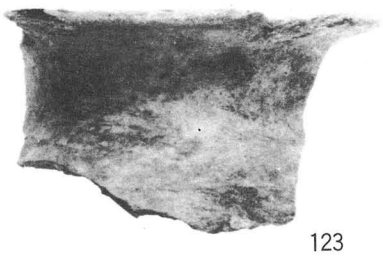

115

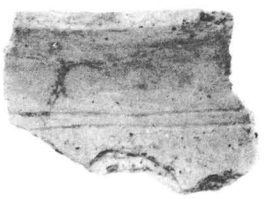

117


119


121




123

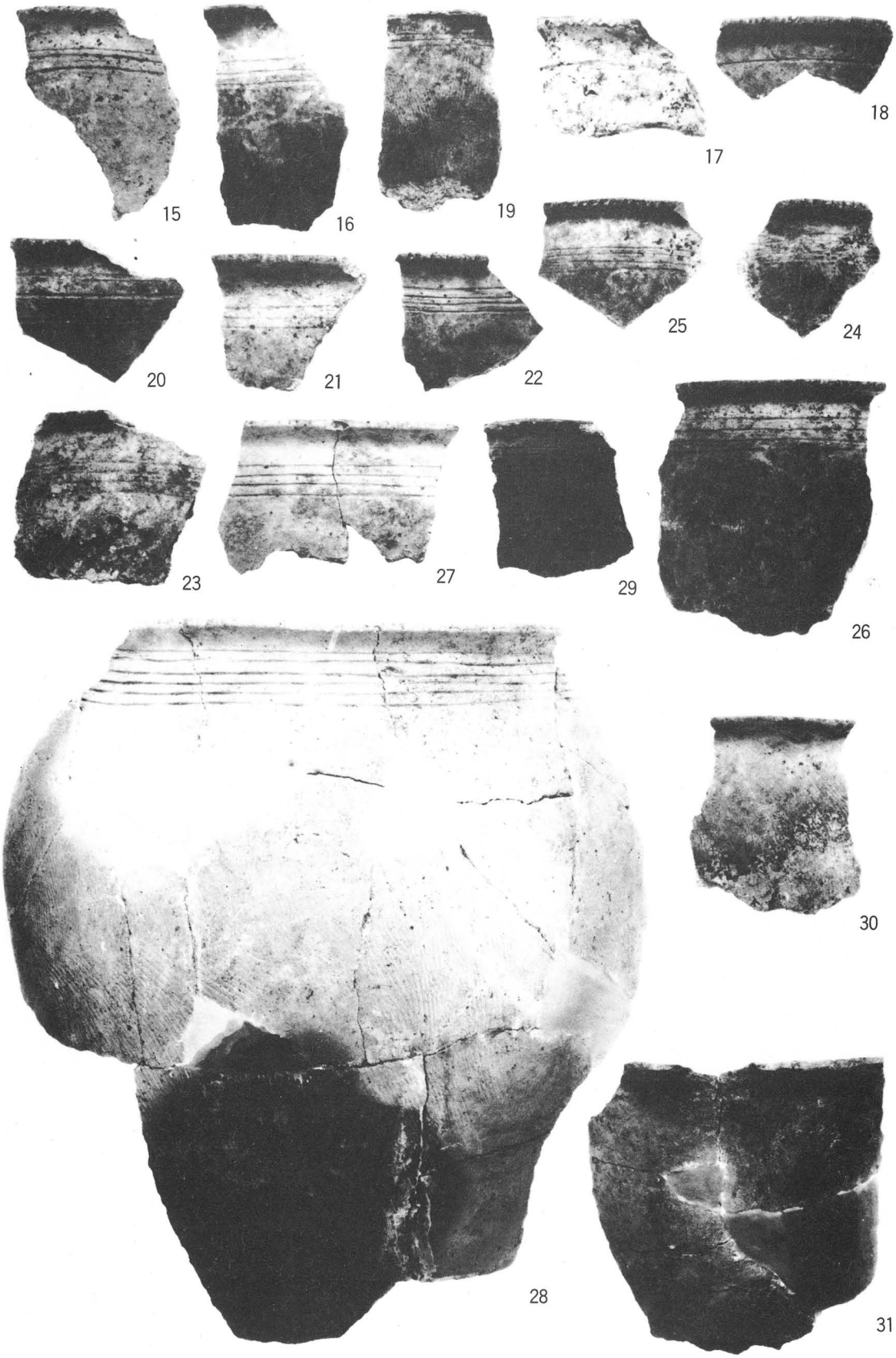

118

120

122

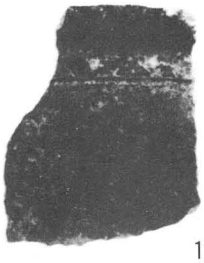
127

溝－３出土の土器



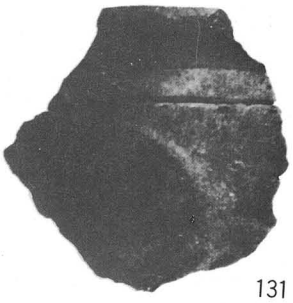
溝－3出土の土器

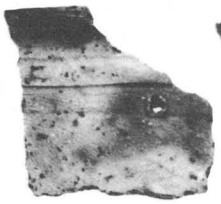
溝－３出土の土器

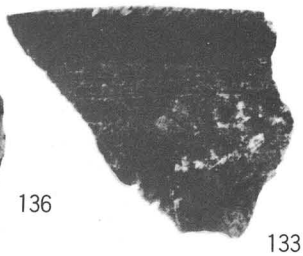

129

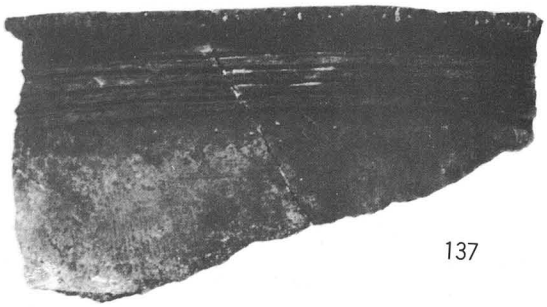
130

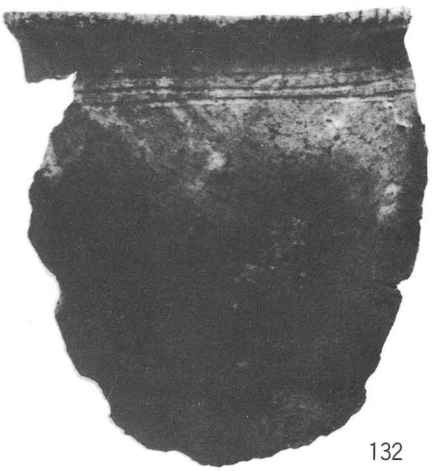
135

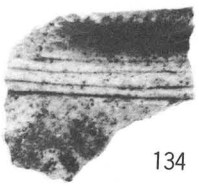

131

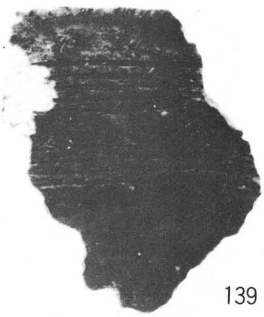

136

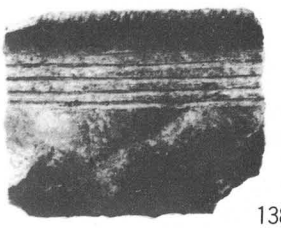

133

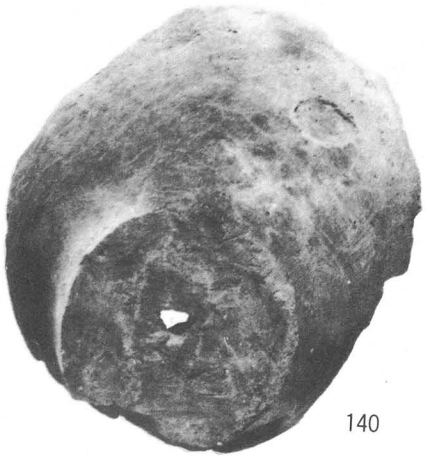

137

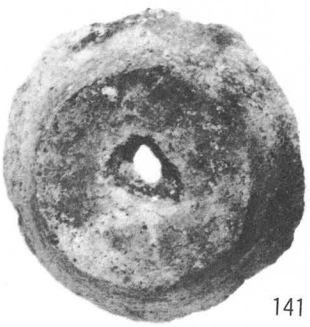

132


134


139

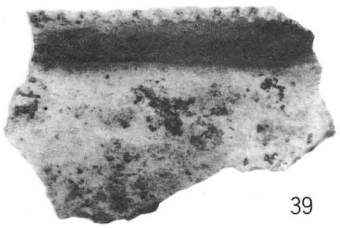

138


140

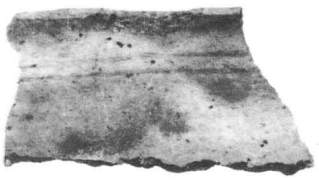

141

142

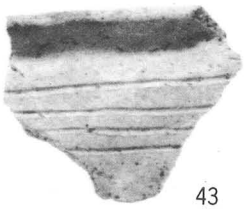
溝－３出土の土器



39

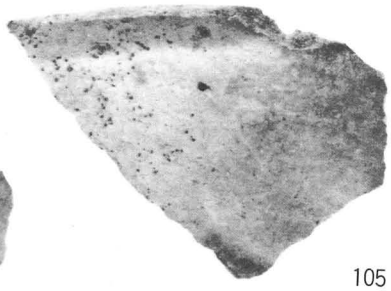


40

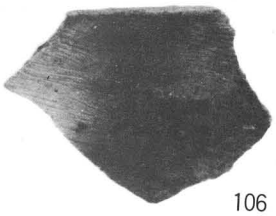


43

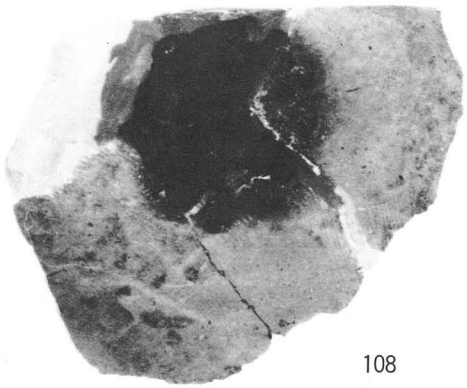
104



105

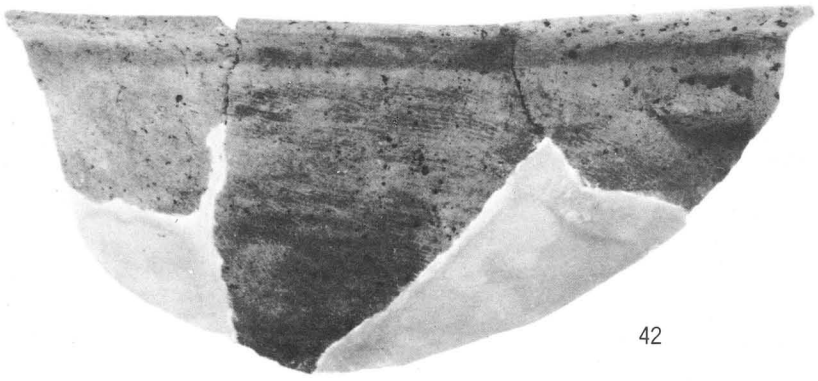


106



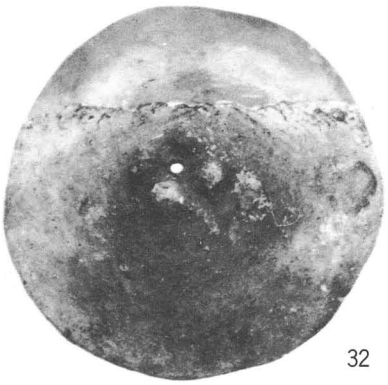
108

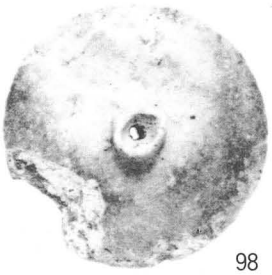
153

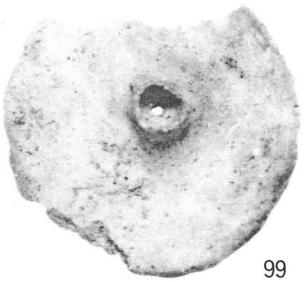


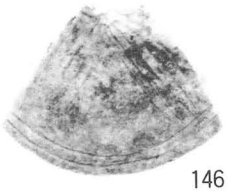
42

溝－３出土の土器


32


98

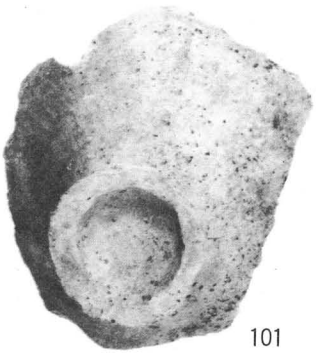

99


146

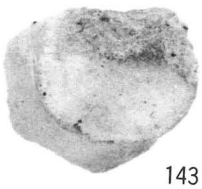
147

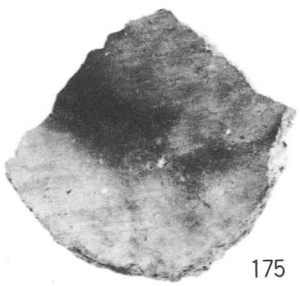
148

100

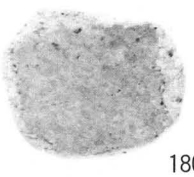

101

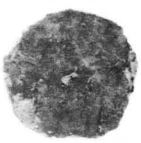
144

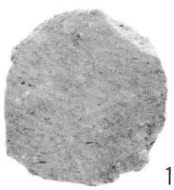

143

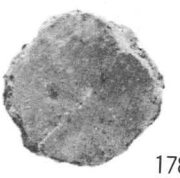

175

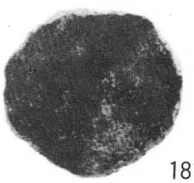
176


180


179

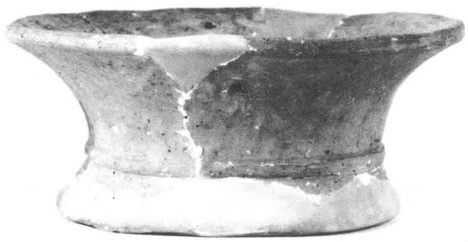

177


178

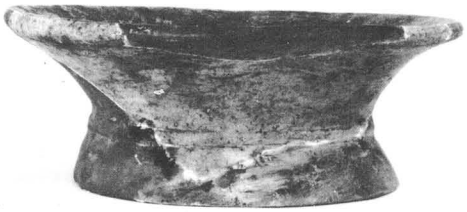

181

182

溝－３出土の土器



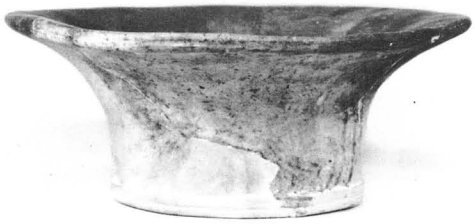
1



4

39

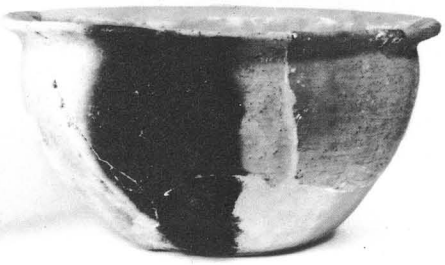
9



38

12

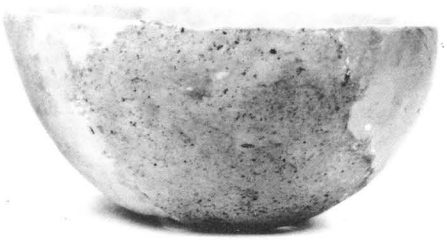
14



48

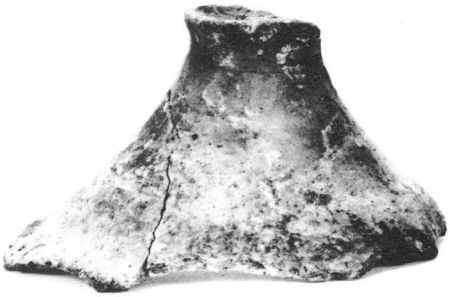
溝－25出土の土器

31



46

16



17

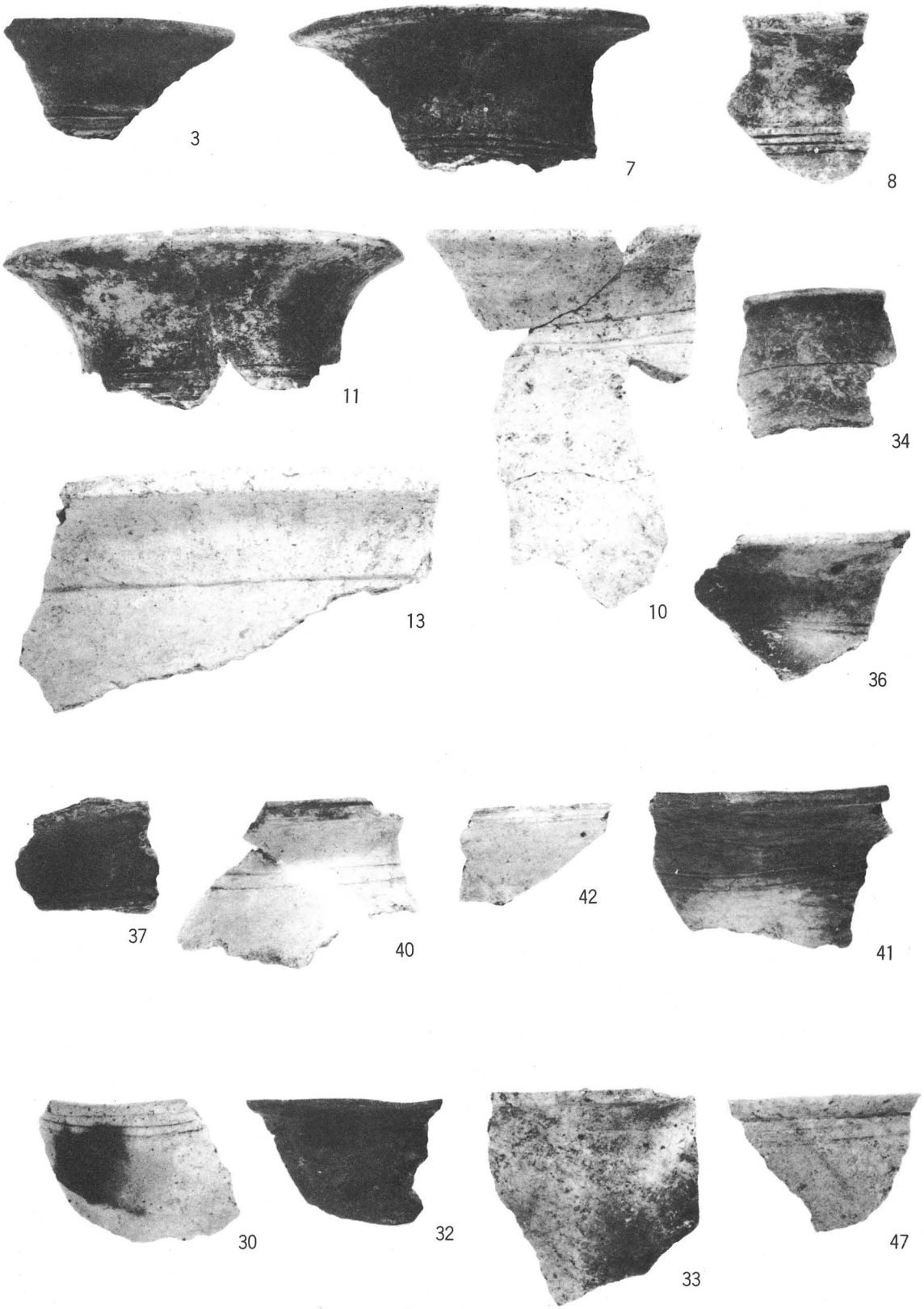
45

15

58

59

溝－25出土の土器



溝－25出土の土器